

柏屋郡柏屋町
戸原麦尾遺跡(III)

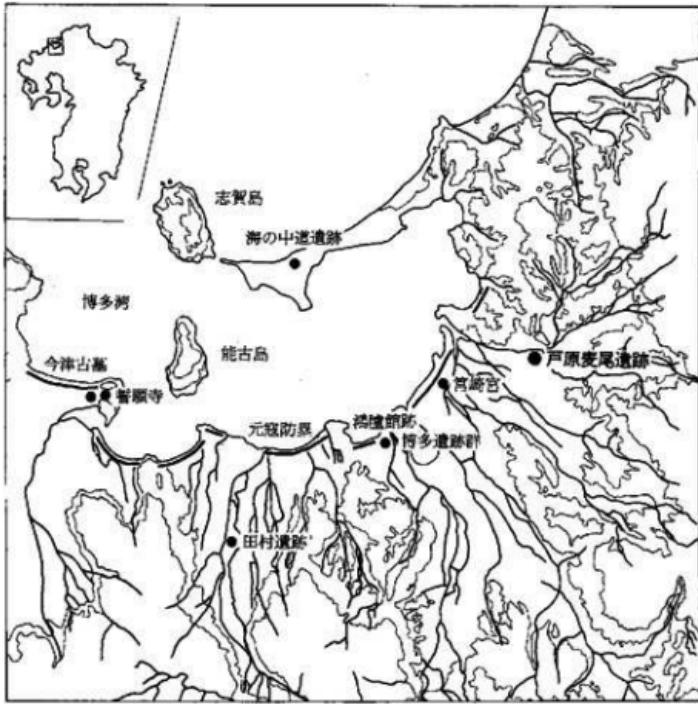
—福岡市多々良浄水場建設に伴う緊急調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第217集

1990

福岡市教育委員会

柏屋郡柏屋町
戸原麦尾遺跡(Ⅲ)



遺跡調査番号 8403

遺跡略号 KTM

1990

福岡市教育委員会



KTMIII c 区SD61出土鞍馬



KTMIII c 区SD61
下部大湊鞍馬出土状況



KTMIII c 区SD61内
机列西端部（南から）

序

福岡市では、昭和53年の大渇水の経験以来、水資源の安定的確保と供給を目指して、各種の渇水対策事業を進めてきております。その一貫として粕屋郡粕屋町内において多々良浄水場の建設を計画し、昭和59年度に着工、63年度に完成の運びとなりました。

この建設工事に並行して、あしかけ4年にわたる埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。

本報告書は、昨年度刊行の第I区の調査報告に引き続いて、第II～IV区の調査の成果について報告するものであります。

この4年間の調査において、鎌倉～室町時代にかけての館跡や集落跡が確認され、また当時の対外的な交易の一端を窺い知ることのできる貴重な輸入陶磁器や青銅製の鏡、また平安時代まで遡る絵馬などが出土し、たいへん重要な成果を得ることができました。

本報告書が、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるために、広く活用されることを願いますとともに、発掘調査から資料の整理にいたるまでの、多くの方々のご協力に対しまして、心から感謝の意を表します。

平成2年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は、多々良浄水場建設に伴い昭和59年度から62年度にかけ、福岡市教育委員会が調査を行った、福岡県柏原郡柏原町大字戸原に所在する戸原麦尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の発掘調査は、福岡市水道局が事業主体として計画した多々良浄水場の建設とともに実施されたものである。
3. 調査報告は、昭和62年度に第I～IV区全般の概要報告である「戸原麦尾遺跡（I）」を刊行し、昭和63年度に第I区に関する報告「戸原麦尾遺跡（II）」を刊行した。本報告書は、第II～IV区についての調査報告（III）であり、本書をもって、昭和59年度から62年度にかけて実施された発掘調査の報告は完了する。
4. 本書に使用した地図は、Fig. 2に国土地理院発行の「福岡」・「篠栗」（1/25000）を用いた。
5. 本書に使用した方位はすべて磁北である。真北との偏値は、西偏6°40'である。
6. 掲載した遺構の呼称には下記の略号を便宜的に用いた。通し番号は、調査時の番号を再整理し、通し番号順に掲載した。調査時の番号との対比は各遺構毎の一覧表で、対比が可能である。

SA○○	：杭列・櫛列	SK○○	：土壤・木棺墓
SBO○	：掘立柱建物	SP○○	：柱穴
SD○○	：溝状遺構	SR○○	：旧河川
SE○○	：井戸	SX○○	：性格不明の堅穴遺構

7. 掲載した遺物には遺物の種類・材質・出土遺構の別を問わず通し番号を付した。
8. 本書に収録した遺構の写真・実測図等の記録は、池崎謙二、田中壽夫、荒牧宏行、白石公高、竹下弘美、が分担して撮影・実測等を行った。製図にあたっては田中克子・田崎博之・入江のり子・眞養久美子・久保寿一郎・浜石正子各氏の協力を得た。
9. 出土遺物の実測および写真撮影は田中が行なった。
10. 本書は、田中が編集・執筆した。
11. 付論として、福岡大学助教授佐伯弘次氏と、糸島高校講師久保寿一郎氏に玉稿をいただき、巻末に掲載した。
12. 戸原麦尾遺跡に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

調査番号	遺跡名	遺跡略号	調査地地籍	開発面積	調査面積
8403	戸原麦尾	K T M	福岡県柏原郡柏原町戸原麦尾他	80000m ²	32670m ²

本文目次

	頁
I.はじめに	1~2
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の体制	2
II. 戸原麦尾遺跡の位置と歴史的環境	3
III. 調査の概要	9
(1) 調査の経過	9
(2) 各調査区の概要	10
IV. 第II区の調査	13~130
(1) 遺構各説	13
1) 棚列・杭列 (SA03・04・11)	13
2) 掘立柱建物 (SB51~100・121~134)	15
3) 溝状遺構 (SD01~04・11~18・22~60・68)	40
4) 井戸 (SE01~30・32)	45
5) 土壙 (SK01~09)	55
6) 穫穴遺構 (SX01~100)	58
7) 水田址	76
8) 旧河川	76
(2) 遺物各説	78
V. 第III区の調査	131~161
(1) 遺構各説	131
1) 杭列 (SA10)	131
2) 掘立柱建物 (SB101~120)	131
3) 溝状遺構 (SD05~10・19~21・61~67)	140
4) 井戸 (SE31)	142
5) 土壙 (SK10~28)	142
6) 穫穴遺構 (SX101~155)	144
(2) 遺物各説	155
VI. 第IV区の調査	162~166
(1) 遺構各説	162
1) 棚列・杭列 (SA10)	162
2) 穫穴遺構 (SX156~158)	165
(2) 遺物各説	166
VII. おわりに	168
付論1. 佐伯弘次 「中世の糟屋郡と宮崎官領」	179
付論2. 久保寿一郎 「古代の絵馬小考」	187

挿図目次

頁

Fig. 1	船屋平野を臨む(西から)	1
Fig. 2	船屋平野における緊急調査された道路分布図(1/40000)	折り込み
Fig. 3	戸原夷尾遺跡調査区設定位置図(1/3000)	8
Fig. 4	戸原夷尾遺跡遺景(北東から)	10
Fig. 5	第Ib区調査風景(南から)	10
Fig. 6	第I区出土青銅製鳳凰文柄鏡(左)と六花鏡	10
Fig. 7	第II区調査風景(東から)	11
Fig. 8	第II区調査風景(西から)	11
Fig. 9	第IIIa区調査風景(南北から)	12
Fig. 10	第IV区調査風景(東から)	12
Fig. 11	第II区遺構分布全体図(方形区域溝内部部分・1/300)	折り込み
Fig. 12	溝状遺構(SD11・12)土層断面図(1/40)	14
Fig. 13	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB51~53・56)(1/100)その1	25
Fig. 14	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB57・59・62・65)(1/100)その2	26
Fig. 15	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB63・67・68)(1/100)その3	27
Fig. 16	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB69~72)(1/100)その4	28
Fig. 17	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB73・74・76・77)(1/100)その5	29
Fig. 18	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB78・79・81・82)(1/100)その6	30
Fig. 19	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB84~87)(1/100)その7	31
Fig. 20	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB88~90)(1/100)その8	32
Fig. 21	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB91~94)(1/100)その9	33
Fig. 22	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB95~97(99))(1/100)その10	34
Fig. 23	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB100(98)・121・122)(1/100)その11	35
Fig. 24	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB124(123)・126)(1/100)その12	36
Fig. 25	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB125・127~129)(1/100)その13	37
Fig. 26	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB130・131・133)(1/100)その14	38
Fig. 27	第II区掘立柱建物平面および断面図(SB55(132)・134)(1/100)その15	39
Fig. 28	第II区溝状遺構土層断面図(SD22・41・59)(1/20)	40
Fig. 29	第II区溝状遺構(SD11・12・22)部分平面図(1/100)	41
Fig. 30	第II区溝状遺構・純粋土層断面図(1/40)	43
Fig. 31	第II区井戸平面および断面図(SE01~03)(1/40)その1	46
Fig. 32	第II区井戸平面および断面図(SE04~08・17)(1/40)その2	48
Fig. 33	第II区井戸平面および断面図(SE09~13)(1/40)その3	49
Fig. 34	第II区井戸(SE14~16・18~20)、堅穴道構(SX80)平面および断面図(1/40)その4	51
Fig. 35	第II区井戸平面および断面図(SE21・22・24~28・30)(1/40)その5	52
Fig. 36	第II区井戸平面および断面図(SE29・32)(1/40)その6	53
Fig. 37	第II区土壤平面および断面図(SK01・02)(1/40)その1	56
Fig. 38	第II区土壤平面および断面図(SK03~09)(1/40)その2	57
Fig. 39	第II区堅穴道構平面および断面図(SX01)(1/60)その1	59
Fig. 40	第II区堅穴道構平面および断面図(SX03~06・09~11)(1/40)その2	60
Fig. 41	第II区堅穴道構平面および断面図(SX12~19・21)(1/40)その3	62
Fig. 42	第II区堅穴道構平面および断面図(SX20・23~27・48)(1/40)その4	64
Fig. 43	第II区堅穴道構平面および断面図(SX28~35)(1/40)その5	65
Fig. 44	第II区堅穴道構平面および断面図(SX36~41・43・49)(1/40)その6	66

Fig. 45	第II区竪穴造構平面および断面図(SX44~47・50・51・55・56)(1/40)その7	67
Fig. 46	第II区竪穴造構平面および断面図(SX52・53)(1/60)その8	68
Fig. 47	第II区竪穴造構平面および断面図(SX58・59・61~65)(1/40)その9	69
Fig. 48	第II区竪穴造構平面および断面図(SX66~69・71・72)(1/40)その10	70
Fig. 49	第II区竪穴造構平面および断面図(SX75・76・78・79・81・84・89・90)(1/40)その11	71
Fig. 50	第II区竪穴造構平面および断面図(SX86~88・92・94・98~100、SF23)(1/40)その12	72
Fig. 51	戸原東尾遺跡旧河川分布概要模式図(1/5000)	76
Fig. 52	旧河川(第IIc・d区)内土層断面図(1/80)および第IIB区南壁土層断面図(1/20)	77
Fig. 53	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その1	79
Fig. 54	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その2	80
Fig. 55	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その3	80
Fig. 56	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その4	81
Fig. 57	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3・1/2)その5	83
Fig. 58	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その6	84
Fig. 59	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3・1/2)その7	86
Fig. 60	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その8	87
Fig. 61	第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その9	88
Fig. 62	第II区柱穴および溝状遺構出土遺物実測図(SD01・18・19)(1/3)	89
Fig. 63	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD04・11)(1/3・1/2)その1	90
Fig. 64	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その2	91
Fig. 65	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その3	92
Fig. 66	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その4	93
Fig. 67	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その5	95
Fig. 68	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その6	96
Fig. 69	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD12・13・16・22)(1/3)その7	98
Fig. 70	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD22)(1/3)その8	99
Fig. 71	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD22・25・33)(1/3)その9	100
Fig. 72	第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD47・52・53・55・58・59)(1/3・1/4)その10	101
Fig. 73	第II区井戸出土遺物実測図(SE03・07・09)(1/3)その1	102
Fig. 74	第II区井戸出土遺物実測図(SE05・06・09)(1/3)その2	104
Fig. 75	第II区井戸出土遺物実測図(SE09・11~13)(1/3)その3	105
Fig. 76	第II区井戸出土遺物実測図(SE12~15・17・19)(1/3)その4	106
Fig. 77	第II区井戸出土遺物実測図(SE17・21・28・32)(1/3)その5	107
Fig. 78	第II区土壤出土遺物実測図(SK02・06)(1/3)	108
Fig. 79	第II区竪穴造構出土遺物実測図(SX01・03・06・08・18・23・26・33・37・38)その1	110
Fig. 80	第II区竪穴造構出土遺物実測図(SX40・52・53)(1/3)その2	112
Fig. 81	第II区竪穴造構出土遺物実測図(SX54~56・58・62・66~68・71~73・78・84) (1/3・1/2)その3	114
Fig. 82	第II区竪穴造構出土遺物実測図(SX78・84・92)(1/3)その4	115
Fig. 83	第II区旧河川出土遺物実測図(SR03)(1/3)	117
Fig. 84	第IIB区堺地層出土遺物実測図(1/3・1/2)	117
Fig. 85	第II区包含層出土遺物実測図(1/3・1/2)その1	120
Fig. 86	第II区包含層出土遺物実測図(1/3)その2	122
Fig. 87	第II区包含層出土遺物実測図(1/3)その3	123
Fig. 88	第II区包含層出土遺物実測図(1/3・1/2)その4	124
Fig. 89	第II区表土出土遺物実測図(1/3・1/2)	125
Fig. 90	第IIIa・c区造構分布全体図(1/200)	折り込み
Fig. 91	第IIB区造構分布全体図(1/200)	折り込み

Fig. 92	第III区掘立柱建物平面および断面図(SB101～104)(1/100)その1	135
Fig. 93	第III区掘立柱建物平面および断面図(SB105～108)(1/100)その2	136
Fig. 94	第III区掘立柱建物平面および断面図(SB109～112)(1/100)その3	137
Fig. 95	第III区掘立柱建物平面および断面図(SB113～117)(1/100)その4	138
Fig. 96	第III区掘立柱建物平面および断面図(SB118～120)(1/100)その5	139
Fig. 97	第III区溝状遺構(SD61・62)土層断面図(1/40・1/60)	140
Fig. 98	第III区溝状遺構(SD19)、石組遺構(SX118)平面および断面図(1/40)	142
Fig. 99	第III区井戸平面および断面図(SE31)(1/40)	143
Fig. 100	第IV区土壤平面および断面図(SK10～17)(1/40)その1	146
Fig. 101	第IV区土壤平面および断面図(SK18～21)(1/40)その2	147
Fig. 102	第IV区堅穴遺構平面および断面図(SX101～110・117)(1/40)その1	148
Fig. 103	第IV区堅穴遺構平面および断面図(SX111～116・119・122・124)(1/40)その2	149
Fig. 104	第IV区堅穴遺構平面および断面図(SX120・121・125～127)(1/40)その3	150
Fig. 105	第IV区堅穴遺構平面および断面図(SX128・132～137)(1/40)その4	151
Fig. 106	第IV区堅穴遺構平面および断面図(SX138・142・146・155)(1/40)その5	152
Fig. 107	第IV区溝状遺構出土遺物実測図(SD61)(2/3)	155
Fig. 108	第IV区柱穴・溝状遺構(SD07)、井戸(SE31)、土壤(SK12)出土遺物実測図(1/3)	156
Fig. 109	第IV区堅穴遺構出土遺物実測図(SX102・103・105・110・120～123・126)(1/3)	157
Fig. 110	第IV区堅穴遺構出土遺物実測図(SX106・107・111)(1/4・1/3)	159
Fig. 111	第IV区表土出土遺物実測図(1/3)	160
Fig. 112	第IV区遺構分布全体図(1/200)	163
Fig. 113	第IV区堅穴遺構平面および断面図(SX156～158)(1/40)(その1)	164
Fig. 114	第IV区堅穴遺構平面および断面図(1/40)(その2)	165
Fig. 115	第IV区溝状遺構断面図(1/20)	165
Fig. 116	第IV区表土・溝状遺構(SD71)、堅穴遺構(SX157)出土遺物実測図(1/4・1/3)	166
Fig. 117	戸原支尾遺跡掘立柱遺物分類図	173
Fig. 118	多々良川下流域の条里の復元	175
Fig. 119	遺跡周辺の字名と条里的推定復元	175

写真図版目次

図版群	調査作業風景	
PL. 1	戸原支尾遺跡とその周辺遺跡(航空写真)	(2) 第IIa区完掘状況部分拡大(掘立柱建物群)
PL. 2	(1) 戸原支尾遺跡遠景および耕作平野を臨む (西から)	PL. 7 (1) 溝状遺構(SD02-03-16-17)完掘状況(南から)
	(2) 戸原支尾遺跡遠景および多々良川河口を 臨む(東南東から)	(2) 溝状遺構(SD20)完掘状況(南東から)
PL. 3	(1) 第I b区完掘状況(東から)	PL. 8 (1) 第IIa区西側溝状遺構(SD02-03-16-17) 完掘状況(北から)
	(2) 第I b区掘立柱建物検出状況(東から)	(2) 第IIa区北側溝状遺構完掘状況(西から)
	(3) 第I a区遠景(西から)	(3) 溝状遺構(SD20)遺物出土状況(西から)
PL. 4	(1) 第IIa区完掘状況全景(北から)	(4) 溝状遺構(SD16)遺物出土状況(西から)
	(2) 第IIa区完掘状況東側部分(北から)	PL. 9 (1) 杭列(SA03)検出状況(北西から)
PL. 5	(1) 第IIa区完掘状況西側部分(北から)	(2) 杭列(SA04)検出状況(東から)
	(2) 第IIa区部分拡大(掘立柱建物・柱穴群)	(3) 杭列(SA04)取り上げ作業風景(東から)
PL. 6	(1) 第IIa区完掘状況部分拡大(掘立柱建物 群)	PL. 10 (1) 堅穴遺構(SX01)完掘状況(南から) (2) 井戸(SE01)遺物出土状況(北東から)

(3) 井戸(SE01)基底面遺物出土状況(北東から)	PL, 20	(1) 井戸(SE07・17)完掘状況(南から)
(4) 井戸(SE02・03)完掘状況(西から)		(2) 井戸(SE07)床面複合子出土状況(東から)
(5) 井戸(SE04)完掘状況(北から)		(3) 井戸(SE08)石組状況(東から)
(6) 井戸(SE04)井筒内遺物出土状況(北から)	PL, 21	(1) 井戸(SE08)石組・および井側(曲物)(南から)
(7) 井戸(SE05)完掘状況(北から)		(2) 井戸(SE09)土層堆積状況(東から)
(8) 井戸(SE15)完掘状況		(3) 井戸(SE11)完掘状況(東から)
PL, 11 (1) 井戸(SE16)完掘状況(北から)	PL, 22	(1) 井戸(SE12)遺物出土状況(南東から)
(2) 井戸(SE32)完掘状況(北から)		(2) 井戸(SE12)完掘状況(西から)
(3) 壊穴造構(SX03)完掘状況(南から)		(3) 井戸(SE13)完掘状況(西から)
(4) 壊穴造構(SX11)完掘状況(北から)	PL, 23	(1) 壊穴造構(SX52)検出状況(西から)
(5) 壊穴造構(SX12)完掘状況(西から)		(2) 壊穴造構(SX52)完掘状況(南から)
(6) 壊穴造構(SX13)完掘状況(南から)	PL, 24	(1) 壊穴造構(SX53)検出状況(南から)
(7) 壊穴造構(SX16)完掘状況(南から)		(2) 壊穴造構(SX53)遺物出土状況(南から)
(8) 壊穴造構(SX18)完掘状況(北から)	PL, 25	(1) 壊穴造構(SX53)西北部炭化木出土状況(南から)
PL, 12 (1) 壊穴造構(SX19)完掘状況(北から)		(2) 壊穴造構(SX53)完掘状況(南から)
(2) 壊穴造構(SX23)完掘状況(西から)	PL, 26	(1) 第IIc区完掘状況(西から)
(3) 壊穴造構(SX28)完掘状況(西から)		(2) 第IIc区完掘状況(南東から)
(4) 壊穴造構(SX32)完掘状況(西から)	PL, 27	(1) 第IIc区北側部完掘状況(西から)
(5) 壊穴造構(SX34)完掘状況		(2) 第IIc区中央・東部分完掘状況(南から)
(6) 壊穴造構(SX36)完掘状況(北から)	PL, 28	(1) 條列(SA01)完掘状況(南から)
(7) 壊穴造構(SX37)完掘状況(西から)		(2) 溝状造構(SD39)完掘状況(北から)
(8) 壊穴造構(SX37)完掘状況(東から)	PL, 29	(1) 溝状造構(SD46)完掘状況(西から)
PL, 13 (1) 壊穴造構(SX37)遺物出土状況		(2) 溝状造構(SD25)完掘状況(西から)
(2) 壊穴造構(SX38)遺物出土状況(北から)		(3) 旧河川露呈状況(南から)
(3) 壊穴造構(SX38)完掘状況	PL, 30	(1) 井戸・壊穴造構完掘状況(南東から)
(4) 壊穴造構(SX39)完掘状況(北から)		(2) 井戸(SE18)土層堆積状況(南南西から)
(5) 壊穴造構(SX40)完掘状況(北西から)		(3) 井戸(SE19)完掘状況(北から)
(6) 壊穴造構(SX41)完掘状況(北から)	PL, 31	(1) 壊穴造構(SX83)・土壤(SK06)完掘状況(南から)
PL, 14 (1) 第IIb区光掘状況(北から)		(2) 土壙(SK07)完掘状況(南から)
(2) 第IIb区完掘状況(北から)		(3) 土壙(SK08)遺物出土状況(北から)
PL, 15 (1) 第IIb区西側完掘状況(北から)	PL, 32	(1) 壊穴造構(SX65)完掘状況(北から)
(2) 第IIb区完掘状況(西北西から)		(2) 壊穴造構(SX66)遺物出土状況(西から)
PL, 16 (1) 第IIb区完掘状況(北側部分・西北西から)		(3) 壊穴造構(SX68)完掘状況(西から)
(2) 第IIb区西側部分遺構検出状況(東から)	PL, 33	(1) 壊穴造構(SX66・67)完掘状況(西から)
PL, 17 (1) 第IIb区中央西側部分孤立性建物(東から)		(2) 壊穴造構(SX69)遺物出土状況(南から)
(2) 第IIb区中央部遺構分布状況(南東から)		(3) 壊穴造構(SX70)完掘状況(南から)
(3) 第IIb区北東部遺構分布状況(南から)	PL, 34	(1) 壊穴造構(SX71)遺物出土状況(西から)
PL, 18 (1) 第IIb区南側孤立柱建物(北から)		(2) 壊穴造構(SX75)完掘状況(南から)
(2) 溝状造構(SD11・22)遺物出土状況(北から)		(3) 壊穴造構(SX78)完掘状況(東から)
PL, 19 (1) 溝状造構(SD22)完掘状況(南南東から)	PL, 35	(4) 壊穴造構(SX79)完掘状況(西から)
(2) 第IIb区東側部分遺構分布状況(東から)		(1) 壊穴造構(SX81)完掘状況(東から)
		(2) 壊穴造構(SX82)完掘状況(南西から)

	(3) 穴状遺構(SX84)遺物出土状況(北から)	PL.49 (1) 溝状遺構(SD61)完掘状況(東から)
PL.36 (1)	第IId区完掘状況(南から)	(2) 溝状遺構(SD61)振り下げ作業風景(東から)
(2)	第IId区完掘状況(東から)	(3) 溝状遺構(SD61)内土層堆積状況(東から)
PL.37 (1)	第IId区畦畔検出状況	PL.50 (1) 溝状遺構(SD61)内杭列(SA11)検出状況(東から)
(2)	第IId区遺構検出面下部旧河川露呈状況(東から)	(2) 溝状遺構(SD61)内杭列(SA11)検出状況(南から)
PL.38 (1)	旧河川内土層堆積状況(西から)	(3) 溝状遺構(SD61)内板塗出土状況
(2)	溝状遺構(SD73)完掘状況(南から)	PL.51 (1) 溝状遺構完掘状況(北西から)
(3)	窓穴遺構(SX92)完掘状況(南から)	(2) 溝状遺構(SD63~65)完掘状況(南東から)
PL.39 (1)	杭列(SA11)検出状況(東から)	PL.52 (1) 窓穴遺構(SX135)完掘状況(南から)
(2)	杭列(SA11)部分拡大(北東から)	(2) 穴状遺構(SX138・153・154)完掘状況(北東から)
(3)	杭列(SA11)中央部直交軸の土層堆積状況(北から)	(3) 穴状遺構(SX155)完掘状況(北東から)
PL.40 (1)	井戸(SE21)土層堆積状況(南から)	PL.53 (1) 第IVb区完掘状況(東から)
(2)	井戸(SE28)井側検出状況(南から)	(2) 溝状遺構(SD70・71)完掘状況(南東から)
(3)	井戸(SE29)振り下げ状況(南から)	PL.54 (1) 第IVb区西南部窓穴遺構分布状況(西から)
PL.41 (1)	第IId区西南部遺構分布状況(南から)	(2) 穴状遺構(SX156・157)検出状況(西から)
(2)	第IId区北東部遺構分布状況(南から)	(3) 穴状遺構(SX157)遺物出土状況(西から)
PL.42 (1)	第IIIc区完掘状況(西から)	(4) 穴状遺構(SX158)完掘状況(北東から)
(2)	第IIIb区完掘状況(東北東から)	PL.55 (1) Aトレーナー完掘状況(南から)
PL.43 (1)	第IIIb区南側部分完掘状況(東から)	(2) Aトレーナー西壁土層断面(東から)
(2)	第IIIb区中央部分完掘状況(東から)	(3) Bトレーナー完掘状況(南から)
PL.44 (1)	溝状遺構(SD19)完掘状況(東から)	PL.56 (1) Bトレーナー西壁上層断面(東から)
(2)	井戸(SE31)完掘状況(東から)	(2) Cトレーナー完掘状況(南から)
(3)	井戸(SE31)石組み状況(東から)	(3) Dトレーナー西壁土層断面(西から)
PL.45 (1)	土壤(SK10)完掘状況(北から)	PL.57 出土遺物写真(その1)
(2)	土壤(SK14)完掘状況(東から)	PL.58 出土遺物写真(その2)
(3)	土壤(SK45)完掘状況(南から)	PL.59 出土遺物写真(その3)
PL.46 (1)	窓穴遺構(SX102)完掘状況(北から)	PL.60 出土遺物写真(その4)
(2)	窓穴遺構(SX104)完掘状況(北から)	PL.61 出土遺物写真(その5)
(3)	埋甕(SX106)完掘状況(西から)	PL.62 出土遺物写真(その6)
PL.47 (1)	埋甕(SX107)完掘状況(南から)	
(2)	埋甕(SX111)遺物出土状況(北から)	
(3)	窓穴遺構(SX126)遺物出土状況	
PL.48 (1)	第IIIc区完掘状況(南から)	
(2)	第IIIc区中央部分完掘状況(東から)	

表 目 次

Tab.1	戸原支尾遺跡調査経過表	9
Tab.2	第II区掘立柱建物計測値表(その1)	23
Tab.3	第II区掘立柱建物計測値表(その2)	24
Tab.4	第II区溝状遺構所見表 その1	44
Tab.5	第II区溝状遺構所見表 その2	45
Tab.6	第II・III区井戸所見一覧表	54

Tab.7	第II区土壤所見一覧表	56
Tab.8	第II区堅穴遺構所見一覧表 その1	73
Tab.9	第II区堅穴遺構所見一覧表 その2	74
Tab.10	第II区堅穴遺構所見一覧表 その3	75
Tab.11	第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表 その1	127
Tab.12	第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表 その2	128
Tab.13	第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表 その3	129
Tab.14	第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表 その4	130
Tab.15	第III区掘立柱建物計測値表	134
Tab.16	第III・IV区溝状遺構所見一覧表	141
Tab.17	第III区土壤所見一覧表	145
Tab.18	第III区堅穴遺構所見一覧表その1	153
Tab.19	第III区堅穴遺構所見一覧表その2	154
Tab.20	戸原史尾遺跡出土遺物種類別出土状況表	169
Tab.21	掘立柱建物棟方位グラフ	174
Tab.22	検出遺構の時期区分表	178

付 図 目 次

- 付図 1 戸原史尾遺跡第I～IV区遺構分布全体図 (1/1000)
 付図 2 戸原史尾遺跡第I b 区遺構分布全体図 (1/300)
 付図 3 戸原史尾遺跡第II区遺構分布全体図 (1/200)
 付図 4 戸原史尾遺跡第II区旧河川および杭列 (S A11) (1/100)
 付図 5 戸原史尾遺跡第III区溝状遺構 (S D61) および杭列 (S A10)

I はじめに

(1) 調査に至る経過

福岡市においては、近年の都市化の進展と人口の急激な増加に対して水資源の安定的な確保と供給が緊急の課題とされて来た。特に昭和53年の異常気象による大渇水の経験以来、行政施策上の重要な懸案の一つとなっている。この施策の一環として、東区香椎字長谷に貯水ダムの建設が予定されるとともに、浄水施設として多々良浄水場が日々良川左岸の船屋町内に建設されることとなり、昭和59年度から着工される運びとなった。

一方、福岡市教育委員会では、公共事業および民間開発の各種開発行為に対しては、開発予定地内における埋蔵文化財の有無の面面審査、現地踏査、試掘調査などの事前審査を行ない、埋蔵文化財の保護に努めているところである。今回の長谷ダムと多々良浄水場の建設計画事業についても、福岡市域外ではあるが本市の主体事業であるということから事前審査の対象となつた。

多々良浄水場建設予定地は、事業の計画段階では、周知の遺跡としては未だ認知されておらず、分布地図にも記載はなかった地点である。しかし建設予定地の周辺には、日々良川の左岸に展開する古代条里を始めとして、日々良遺跡、日々良込田遺跡、内橋廃寺推定地などの、古代から中世にかかる遺跡が点在しており、これらと関連する何らかの遺跡が存在することが予想された。また古代官道である西海道の推定線上にも位置するということから、十分な現地踏査を要すると面面上で判断された。

埋蔵文化財課では昭和59年7月上旬に現地踏査を行い、建設予定地内において古代から中世にかかる遺物の散布を確認した。これに基づいて、建設予定地内における遺跡の範囲、遺構・遺物の遺存状況などを明らかにするために、同年7月24日から8月10日にかけて試掘調査を行った。調査の結果、建設予定地内には開発面積(約80000m²)の約30~35%にあたる25000m²前後の広さにわたって、鎌倉時代を中心とした時期の遺構・遺物が認められ、浄水場建設工事に先立つて発掘調査等のなんらかの保存上の措置を要すると判断された。

これらの事前審査の成果を踏まえて、教育委員会と水道局間とで遺跡の保存上の問題も含めて協議を重ねたが、工事着工の時期、建設工事計画の内容がすでに実施段階であることから、やむを得ず発掘調査を行い記録保存に代えるということになった。

発掘調査は昭和59年10月16日から緊急に実施することとなり、以下の調査体制で行うことになった。なお発掘調査にあたっては地元の方々からの多くのご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

(2) 調査の体制

多々良浄水場建設主体	福岡市水道局	前事業管理者	出口未人
		現事業管理者	小田一郎
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	佐藤善郎
調査總括		埋蔵文化財課長	柳田純孝
		埋蔵文化財第一係長	折尾 学
事前審査		文化財主事	山崎純男
調査事務担当		埋蔵文化財第一係	松延好文
調査担当		(昭和59年度)	池崎謙二
		(昭和59～62年度)	田中壽夫
		(昭和60～62年度)	荒牧宏行

調査補助員(昭和59年度)	白石公高 竹下弘美
調査整理 (昭和59～62年度)	柳田歎子 花井祝子 大坂静子 田鍋町子 戸崎喜久美 森本満里子 山田スミ代 出口三千代
(昭和63年～	池見恭子 安部国恵 田中聖子 馬場イツ子 酒井紀子
平成元年度)	田村妙子
調査作業 (昭和59～62年度)	入江英美 松永茂 長 勝伸 森山恭介 高浪信夫 熊本義徳 山本一夫 三留清馬 長 義人 長孝一 神尾順次 黒木伸一 岩隈史郎 伊藤末 本田直裕 千種 務 河野裕之 安部国恵 安部サエ子 因 弘子 池見恭子 尾畠信江 黒木良子 黒木澄子 離野弥恵子 長 武子 長とし子 西村康子 田村妙子 田鍋勝代 松永一枝 大歯ミツ子 長 サト 高木京子 長 福代 藤スエ子(故人) 松尾フタエ 長トモエ 森山タツエ 萩嶽道子 長嘉鶴子 長 紗子 柴田スマ子 田鍋ヤサノ 山野キヨカ 西村きくえ 安増綾子 田中聖子 馬場イツ子 川添佳子

II 戸原麦尾遺跡の位置と歴史的環境

当遺跡の位置および周辺の歴史的環境については、既刊の戸原麦尾遺跡(I)・(II)において述べているので、重複をさけるためここでは割愛する。巻末に佐伯弘次氏の付論1を掲載しているので、既刊の歴史的環境の項と合わせて参照されたい。この項においては、多々良川流域を中心とした柏屋平野における、最近の埋蔵文化財の緊急調査の状況を概観する。

柏屋平野における緊急発掘調査

柏屋郡は南北に長いことから、黒田長政入国以来、表裏の2つに分けて呼ばれてきた。その南にあたる表柏屋は、柏屋平野を中心とした多々良川流域にあたり、広義の福岡平野の最も東北端に位置している。この地域は、福岡都市圏に含まれ、都市近郊型農業と住宅供給地域として、また都市型工業地域などとして位置づけられ、各種の開発が盛んに行なわれており、福岡市近郊における流通拠点化、あるいはベッドタウン化がここ数年来急速に進行している。

この地域での緊急調査の端緒は、昭和40年代半ばの、九州縦貫自動車道の建設に伴う調査であり(25)、それと平行して計画された、流通センターの整備に伴う調査である(2・10)。九州縦貫道関連の調査のピークは昭和47年度で、調査件数は51ヶ所、延調査面積は52,512m²にも及んだ(26)。さらに山陽新幹線の建設に伴う調査(3~6・22)も実施される。こういった大規模な公共事業の後を追って、宅地造成を主とした民間開発や、これらに連動して需要が高まった真砂土採取が各地で盛んに行なわれ、これが原因で消滅してしまった遺跡は数多い(柏屋町大隈井山古墳群・福岡市博多区桜ヶ丘古墳・東区湯ヶ浦古墳群などの月隈丘陵周辺の古墳)。

昭和50年代にはいると、福岡市では地下鉄工事に伴う調査が始まり、さらに数年遅れて早良平野部の開発の増加を見るようになる。特に地下鉄沿線からその周辺の交通網の発達した西部地域(早良区～糸島郡)が顕著であり、それは現在も継続している。一方、柏屋平野の場合幸いなことに、基幹道路の整備が立ち遅れたため、結果としては開発の急増は西部ほどではない。しかし、規模の差はあれ各種開発は継続して行なわれており、それに伴う調査が散発的に行なわれている(16・17・40・41など)。

最近では、特に福岡市の人口増加に伴い、宅地供給の促進と、道路整



Fig. 1 柏屋平野を臨む（西から）

備が急務の課題とされており、それに伴う調査(20・21)や上下水道の処理等に伴う調査(31)なども行なわれている。しかし、調査件数は早良平野や糸島平野における件数と比べるとかなり低い状況である。その原因に立ち入るゆとりはないが、基本的には、保護に立つ主体側の対応がどれほど整備されているか、ということに帰結すると思われる。道路や、上下水道等の社会基盤の整備が進む中で、これから柏原平野は、開発のスプロール化が現在以上に進むことが予想され、それとともに遺跡が虫食い穴状に消滅していくことが懸念される。早急な保存体制の充実が望まれるところである。

柏原平野調査遺跡一覧 (遺跡NOは、Fig.2の分布図NOと同一)

(1989年12月末現在)

No	遺跡名	所在地	調査年月	遺跡の時代・性格	文献番号
(福岡市域)					
1	名了道遺跡	東区大字土井名子道	1970年11月	弥生終末～古墳前期墳墓	9
2	多々良遺跡	東区多々良宗原	1971年7月～9月	中世集落	10
(山陽新幹線関係)					
3	多々良地区	東区多々良込出	弥生終末～古墳前期		
	多々良城ヶ元遺跡	多々良城ヶ元	1972年11月～1973年5月	奈良～平安時代	
	多々良古川遺跡	多々良古川	聖火式住居・官衙の建物群		
(津屋地区)					
	津屋井田遺跡	東区津屋井田	1972年11月～1973年5月	奈良時代多里遺跡	
	津屋方田遺跡	津屋方田			
	津屋鶴田遺跡	津屋鶴田			
(箱崎地区)					
	箱崎2地点の調査	東区箱崎大坪他	1972年12月	遺構は未検出	
(名子地区)					
6	名子4地点の調査	東区上井字名子	1972年9月～10月	近世以降の杭列など	
(蒲田遺跡)					
	蒲田古墳群(1・3号墳)	東区蒲田字北堀他	1972年4月～1973年8月	旧石器～中世の墳墓・集落	15
	蒲田A・B・D～F				
8	湯ヶ瀬古墳群	東区上井湯ヶ瀬	1974年10月～11月	古墳4基の調査(日本大学調査)	未
9	蒲田水ヶ元遺跡	東区蒲田水ヶ元他	1976年1月～5月	旧石器～奈良の集落、墓地	23
	多々良蒲田遺跡	東区多々良字蒲田1627	1978年7月		
	多々良込田遺跡2次	東区多々良字込田1151-1他	1978年2月		
10	多々良込田遺跡3次	東区多々良字込田2丁目	1979年3月～6月	古墳前期 聖火式住居跡	30
	多々良込田遺跡4次	東区多々良字込田2丁目	1979年9月	奈良～平安 官衙の建物群	
	多々良込田遺跡5次	東区多々良字込田2丁目	1980年6月	瓦・磁器・ガラス・跨帶など	
11	箱崎遺跡群第1次	東区馬出5丁目地内	1982年4月～9月	古代末～中世	48
12	多々良込田遺跡6次	東区多々良字込田2丁目	1983年9月～1984年2月	古墳集落跡・古代官衙跡	41
13	蒲田部木原遺跡	東区蒲田部木地区	1984年11月～1985年1月	古墳時代集落跡	42
14	名島古墳1次	東区名島4丁目970-1他	(1981年3月)	前期前方後円墳・三角縁	51・70
	名島古墳2次	東区名島4丁目970-1他	1986年11月～12月	神獣鏡出土	
15	二留池1次	東区土井字奥二留	1986年7月～9月	後期古墳(詳細不明)	未
16	箱崎遺跡群第2次	東区箱崎1丁目18 32他	1986年11月～1987年1月	古代末～中世	45
17	箱崎遺跡群第3次	東区箱崎1丁目273他	1989年1月～2月	古代末～中世	未
(柳原町域)					
18	和田部木原遺跡	柏原郡柳原町和田部木原	1974年10月～1975年3月	弥生～奈良時代の集落建物群	24
19	製糸跡	柳原町乙大字張	1980年7月～8月	後期古墳3基	33
20	津波黒頭の尾遺跡	柳原町津波黒・高田	1985年7月～1986年3月	弥生時代集落跡	未
21	高田・原元遺跡		1987年		未



Fig. 2 柏原平野における緊急調査された遺跡分布図 (1/40000)

(久山町域)					
22 久山条里確認調査	柏原郡久山町山田	1972年5月～6月	条里造構は未確認	11・16	
(柏原町域)					
23 平塚古墳	柏原郡柏原町大殿	1951年6月	箱式石棺墓、内行花文鏡	58・64	
24 酒殿遺跡	柏原郡柏原町酒殿字宮崎	1953年	弥生時代箱式石棺墓2基	77	
25 芝賀丁遺跡	柏原郡柏原町大字仲原991	1969年11月	芝賀丁商寺関連遺構・遺物	7	
26 西尾山古墳群	柏原郡柏原町大殿西尾	1972年8月～12月	後期古墳2基の調査	29	
27 塚畠遺跡	柏原郡柏原町大殿塚畠	1972年10月～11月	弥生時代墳塁・土塹墓	29	
28 藤山古墳	柏原郡柏原町大殿字藤山	1974年	後期古墳1基の調査	12	
29 古大間玉造跡	柏原郡柏原町大殿字大間	1976年3月～4月		25	
30 古大間池遺跡	柏原郡柏原町大殿字大間	1976年8月～9月	弥生時代集落址	25	
31 戸原麦尾遺跡	柏原郡柏原町戸原字麦尾他	1984年10月～1987年10月	中世集落址 梶原城 鰐馬(古代)	47・50	
(須恵町域)					
32 雜塚遺跡	柏原郡須恵町大字旅石	1970年8月	弥生時代集落址(内容不詳)	17	
33 一の浦遺跡	柏原郡須恵町大字一の浦	1970年8月	古墳～奈良時代集落址	17	
34 乙船古墳群	柏原郡須恵町乙船字山城ノ	1972年6月～8月	後期古墳4基の調査	26・44	
35 ラシガ瀬古墳	柏原郡須恵町乙船字ラシガ瀬	1981年8月	後期古墳(門墳)	36	
(宇美町域)					
36 鋸音浦遺跡群	柏原郡宇美町井野字鋸音浦 岩長浦	1978年12月～1979年10月	弥生時代窓穴式住居(3軒) 後期群集墳(49基)	31	
37 [神鍋古墳群(1次)]	柏原郡宇美町宇美字西明寺	1978年	後期古墳・箱式石棺墓	37	
[神鍋古墳群(2次)]	柏原郡宇美町宇美字西明寺	1987年1月～2月		46	
38 塔ノ尾遺跡	柏原郡宇美町塔の尾1502番地	1980年11月～12月	古代～中世墓址	32	
39 潟瀬古墳群	柏原郡宇美町炭島字瀧瀬	1984年2月～5月	後期古墳2基の調査	38	
40 ウソフキ遺跡	柏原郡宇美町井野ウソフキ	1986年7月～11月	後期古墳4基	43	
41 川原田・供田遺跡群	柏原郡宇美町井野供田・川原田	1988年5月～6月	弥生時代中期集落址	49	
(志免町域)					
42 七夕池遺跡	柏原郡志免町田原七夕谷505 1	1973年11月～1974年1月	後期古墳(49基)1基の調査	13・61	
43 豊葉古墳群	柏原郡志免町志免字豊葉	1981年2月～4月	中期古墳(方墳・帆立貝式、 円墳)、四脚鏡	39	
(その他採集、確認など)					
44 天神森古墳	東区蒲田字大津	1970年4月～8月	前期前方後円墳、三角錐神獣鏡	62	
45 那木八幡古墳	東区蒲田字坂本762	1971年2月	前方後方墳の測量調査	8・60	
46 八田	東区八田		銅鏡鑄型の採集	62・63・71～75	
47 稲崎宮遺跡	當崎宮境内(東区当崎1丁目)	1989年7月頃	古代瓦砾の採集	未	

柏原平野関係文献一覧

文献については、遺跡・遺物に関する一次資料としての各自治体、大学、研究機関、個人などが行なった発掘調査、資料調査の報告に限定して取り上げた。また調査されたもので未報告の遺跡については、資料館などで刊行された図録等の紹介、関連する報告書中で取り上げられたなどを、参考資料として載せた。

対象とした地域は、柏原郡志免町・宇美町・須恵町・柏原町・福岡市東区のうち、須恵川流域以西～多々良川下流域に限定し、今回は志賀島は含んでいない。

1、調査報告書関係（刊行年代順）

1 島田寅次郎	「築造年代の明らかな城跡」	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 2	1924
2 長沼賢海	「大野城及四王寺遺蹟」	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 6	1931
3 川上市太郎	「昭和七年是見の四王寺經筒写經と四王瓦」	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 8	1933
4 島田寅次郎	「筑前に於ける鎌倉時代の遺跡遺物について」	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 8	1933
5 島田寅次郎	「福岡県に於ける中世の據城」	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 12	1937
6 島田寅次郎	「石器と土器、古墳と割薪品」	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 13	1939
7 福岡市教育委員会	「第4.柏原地城關係遺跡、翼与「遺跡」」	九州歴史自動車道關係埋蔵文化財調査報告 1	1970
8 福岡市教育委員会	「福岡市埋蔵文化財調査地名表（統集編）」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集	1971
9 四田美代子他編	「名子道遺跡—福岡市大字土井名子道所在古式墳墓の調査」	岡崎工業株式会社刊行	1972
10 福岡市教育委員会	「多く良遺跡調査報告書」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集	1972
11 福岡市教育委員会	「X、第8地点（久山条里遺構）の調査」 昭和47年度	山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報	1973
12 福岡市教育委員会	「佐谷・福岡山古墳・調査報告」		1974
13 志免町教育委員会	「七夕池遺跡群発掘調査概報」	志免町文化財調査報告書第1集	1974
14 福岡市教育委員会	「多く良・津屋地区の遺跡、祐祐・名子地区的調査」		
15 福岡市教育委員会	「山陽新幹線關係埋蔵文化財調査報告」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集	1975
16 福岡県教育委員会	「蒲田遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集	1975
17 福岡県教育委員会	「IX、久山町下山田地区的調查」	山陽新幹線關係埋蔵文化財調査報告第1集	1976
	「昭和45年度調査概報 稲垣遺跡・一の浦遺跡」	九州歴史自動車道關係埋蔵文化財調査概報	1977
18 二島格	「70 名子道遺跡」	九州歴史自動車道關係埋蔵文化財調査報告書第1集	1977
19 後藤宣	「71 天神森古墳」		
20 塩屋勝利	「57 山陽新幹線關係調査、津屋地区・多く良地区・名子地区」		
21 山崎純男	「66 多く良遺跡」		
22 二宮忠司	「67 蒲田遺跡」		
23 斎尾学	「68 蒲田水ヶ元遺跡」		
24 横沢一男	「69 和田部木原遺跡」	18~24は特政史図録「緊急発掘された道路と遺物」所収	
		福岡市立歴史資料館刊行	1977
25 和泉町教育委員会	「古人間遺跡」	和泉町文化財調査報告書第1集	1977
26 福岡県教育委員会	「柏原郡須恵町所在遺跡群の調査 「乙根木」~4号墳の調査」		
		「九州歴史自動車道關係埋蔵文化財調査報告」第10集	1977
27 福岡県教育委員会	九州歴史自動車道關係埋蔵文化財調査概報（統編）		
28 福岡県教育委員会	福岡県遺跡群等分布地図（柏原郡編）		1978
29 福岡県教育委員会	柏原郡柏原町所在社辻遺跡・西尾山古墳群の調査		
		「九州歴史自動車道關係埋蔵文化財調査報告」第30集	1979
30 福岡市教育委員会	「多く良込山遺跡II」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集	1980
31 宇美町教育委員会	「宇美觀音浦 福岡県宇美町井野所在の觀音浦岩長浦遺跡群の調査」	宇美町文化財調査報告書第1集	1981
32 宇美町教育委員会	「塔ノ尾遺跡 福岡保宇美町障子店所在遺跡の調査報告」	宇美町文化財調査報告書第2集	1981
33 霧深町教育委員会	「開造跡」	霧深町文化財調査報告書第1集	1981
34 三島格	「名子道遺跡」	日本考古学年報21・22・23	1981
35 福岡市教育委員会	「海の中道遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集	1982
36 須恵町教育委員会	「ヲシガ浦古墳 福岡県柏原郡須恵町所在古墳の調査」	須恵町文化財調査報告書第1集	1982
37 宇美町教育委員会	「神領古墳群 柏原郡宇美町西明寺所在、神領2号墳の調査」	宇美町文化財調査報告書第3集	1984
38 宇美町教育委員会	「湯湧古墳群 福岡県柏原郡宇美町大字炭樂字湯湧所在古墳の調査報告」	宇美町文化財調査報告書第4集	1984
39 志免町教育委員会	「笠置古墳群 福岡県柏原郡志免町人字所在古墳群の調査」	志免町文化財調査報告書第2集	1984
40 宇美町教育委員会	「湯湧古墳群について」	宇美町立歴史民俗資料館No6	1985
41 福岡市教育委員会	「多く良込山遺跡III」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集	1985

- 42 柏原町教育委員会 「蒲山郡木原遺跡 福岡市東区大字蒲山所在遺跡の調査」 柏原町文化財調査報告書第2集 1985
 43 宇美町教育委員会 「ウソフキ遺跡 著岡系柏原郡宇美町大字井野字ウソフキ所在遺跡の調査」 宇美町文化財調査報告書第5集 1986
 44 須恵町教育委員会 「乙楠木古墳群II 福岡県柏原郡須恵町大字楠木所在遺跡の調査」 須恵町文化財調査報告書第2集 1986
 45 福岡県教育委員会 「楠崎遺跡」 福岡県福岡市東区1丁目所在遺跡の調査 福岡県文化財調査報告書第79集 1987
 46 宇美町教育委員会 「神領古墳群II 柏原郡宇美町宇西明寺所在の神領1号墳・神領遺跡の調査報告」 宇美町文化財調査報告書第6集 1987
 47 福岡市教育委員会 「戸原支尾遺跡II」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第189集 1988
 48 福岡市教育委員会 「博多・高速鉄道関係調査(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集 1988
 49 宇美町教育委員会 「川原田・供田遺跡群 福岡県柏原郡宇美町大字井野字供田所在遺跡の調査」 宇美町文化財調査報告書第7集 1989
 50 福岡市教育委員会 「戸原支尾遺跡II」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第201集 1989
 51 池崎義二、後藤直樹 「名島古墳の調査報告」 福岡市立歴史資料館研究報告14 1990

2. 遺跡・遺物関係論文

- 51 高岡鉄馬 「福岡県下に於ける貝塚について」 筑紫史談第1集 1914
 52 武谷水城 「多々良以東に於ける元寇防堤の有無について」 筑紫史談第24集 1920
 53 武谷水城 「多々良以東に於ける元寇防堤の有無についての補足」 筑紫史談第25集 1921
 54 中山平次郎 「九州北部に於ける先史原始同時代中間期間の遺物に就いて2」 考古学雑誌7 11 1917
 55 犬山猛 「福岡県下の条里遺跡、福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第12号」 福岡県教育委員会 1935
 56 犬山猛 「高原古墳の調査」 史跡5-8 1953
 57 中原志外斯・渡辺正氣 「福岡県柏原郡那珂与丁浦沿岸の石器文化」 九州考古学5・6 1958
 58 森久次郎 「福岡県柏原町上大原平塚古墳」 九州考古学11・12 1961
 59 房山 崇 「越原城」 ミュージアム181 1966
 60 国平健三・井上直樹 「福岡県都木遺跡出土の石器」 考古学ジャーナル70 1972
 61 上野精志 「七夕池遺跡群の調査」 ふるさとの自然と歴史33 1974
 62 下條信行 「考古学・柏原平野一新発見の鉄型と鏡の紹介をかねてー」 福岡市立歴史資料館研究報告第1集 1977
 63 後藤真 「福岡市八田出七の銅劍鋒型—資料の収集」 福岡市立歴史資料館研究報告第6集 1982
 64 斎藤次郎・西健一郎・高倉洋影 「上大原平塚古墳出土の編幅座紐内行花文鏡」 九州考古学No.58 1983
 65 西村達三 「佐谷鐵器谷経験と埋蔵について」 須恵町立歴史民俗資料館報第1号 1984
 66 横田義章 「正中二年(一三二五)銘の銅鏡記念石碑」 緯理略記 須恵町立歴史民俗資料館報第1号 1984
 67 九州歴史資料館編 「筑前柏原岩杉山の仏教遺跡」 九州の寺社シリーズ8 1986
 68 八尋和泉 「岩杉山の仏教遺品」 「氣前柏原岩杉山の仏教遺跡」 九州の寺社シリーズ8 1986
 69 八尋和泉 「延慶九代作文明七年銅人日如米像・氣前柏原寺大口堂」 九州歴史資料館研究論集13 1988
 70 柳沢一男 「福岡県の古墳時代」 福岡県地域史研究第8号 1988
 71 柏原正也 「本郷郡の鋼戈鋒型について—鉄型の郷里を訪ねてー」
 72 下條信行 「鋼戈鋒型の変遷—伝福岡市八田山上明治大学成蔵戈鋒型についてー」
 73 岩水省二 「伝福岡県福岡市東区八田出十鋼戈鋒型をめぐってー」
 74 近藤壽一 「明治大学博物館購入の鋼戈鋒型」
 75 乙益重蔵 「伝福岡県柏原郡柏原町山上の鋼戈鋒型」 71~75は明治大学考古学博物館報No.5 1989
 76 平ノ内幸治 「福岡県柏原郡柏原町戸原遺跡出土の鉄石器」 福岡考古第14号 1989
 77 「酒井遺跡」、「大原平原古墳」、「古人物遺跡」、「佐谷縄塚」、「罵与」遺跡」
 「四王寺山巣塚」、「多々良遺跡」、「長者原塚寺」、「名子道遺跡」、「和田部木原」、「更葉古墳群」、「光正寺古墳」、「七夕池古墳」等の記載あり。



Fig. 3 戸原麦尾遺跡調査区設定位置図 (1/3000)

III 調査の概要

(1) 調査の経過

発掘調査は、昭和59年(1984)10月11日から同62年10月15日までの約3年間にわたって実施した。この間には、建設工事区域との調整や埋蔵文化財の調査体制の組み直し、あるいは他の開発事業に係る緊急調査の実施のために中断せざるを得ない期間があった。したがって実質的には約1年10ヶ月ほどの期間を要したことになる。調査経過の大まかな流れについてはTab.1を参照されたい。

調査区の設定

試掘調査の結果により、浄水場建設予定地内(80000m²)における遺構・遺物の分布状況は、大きく4つの地点にまとまって分布していることが確認された。遺構・遺物の遺存の程度、現況地形などからみて、必要とされる発掘調査面積は全体で約23600m²と予想された。4つの遺構のまとまりの範囲をもとに設定された調査区は、北東部から南側へ向かって便宜上第I～IV区と呼称した。調査の進展によって当初予想されたよりも遺構の分布が広がり、実際の調査面積は第I区が約18000m²、第II区が約10700m²、第III区が約2700m²、第IV区が約1300m²で、総面積は約32600m²である。

調査は、建設予定地内の建造物の位置、建設工事と調査工程との競合を調整して、第I～IV

調査区	調査実施面積(m ²)				総面積 (m ²)	調査期間	備考
	59年度	60年度	61年度	62年度			
I 区	a 7,000				18,000	S59.10.18～60.3.1	(調査着手)
	b 2,000		6,000			S61.1.27～61.8.12	
	c 1,000					S61.7.15～61.8.12	
	d 2,000					S62.7.13～62.9.30	
II 区	a 2,000	2,500			10,700	S60.2.5～60.4.30	(調査終了)
	b 2,000					S60.4.9～60.6.27	
	c 2,000					S60.8.22～60.10.30	
	d 2,200					S62.4.23～62.8.30	
III 区	a 200				2,650	S59.10.16～59.10.22	(A～C トレンチを設定)
	b 1,500	150				S60.2.15～60.4.5	
	c 800					S61.8.25～61.11.22	
IV 区	a 70				1,320	S59.10.19～59.10.29	(A～C トレンチを設定)
	b 1,250					S61.9.3～61.11.22	
総面積m ²	10,770	8,650	9,050	4,200	32,670		

Tab.1 戸原麦尾遺跡調査経過表

区を調査年度ごとにさらに細分して行った。昭和59年度は第IIIa区と第IVa区から着手し、第Ia区・第IIIb区の調査へ移り、第IIa区で終了した。各年度ごとに数地点で同時に工事が進められたために、それに先行してそれらの地点の調査を実施したが、結果的にはまとまりのある遺構群を寸断しながらの調査となってしまった。特に第II区においては一つの屋敷地を4つに分割し調査したために孤立した建物の復元や屋敷地全体の遺構間の関連は図面上でしか出来ない部分があるなど、若干の支障が生じた。

(2) 各調査区の概要

ここでは日々良浄水場敷地内における発掘調査の成果について、各調査区(第I区～第IV区)毎にその概要を述べる。なお第I区の詳細については、昭和63年(1988年)度および平成元年(1989)度刊行の報告書を参照されたい。



Fig. 4 戸原麦尾遺跡遠景(北東から)



Fig. 5 第I b区調査風景(南から)

第I区の概要

第I区は浄水場敷地の北東部にあたり、日々良川左岸に近接する地点に位置している。調査区の面積は約18000m²である。調査はa～dの4つの小調査区に分けて昭和59・60・62年度にかけて実施した。

調査の結果では、第I区のほぼ中央に、日々良川の氾濫によって形成された、砂礫層を基盤とする沖積微高地があり、標高5.7～5.9mほどの高さで北東から南西へ緩やかに弧を描きながら続いていることが確認された。またこの微高地をはさんで、北側(第I b区)と東南側(第I a区)に、形成時期および埋没時期が異なると思われる2本の旧河川(SR01・02、SR3723)が検出された。

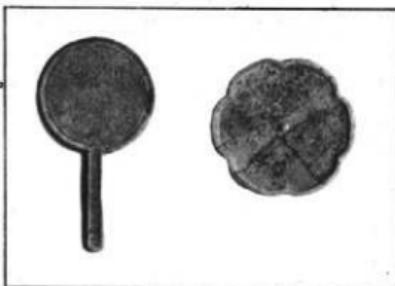


Fig. 6 第I区出土青銅製柄鏡(左)と六花鏡

第Ⅰ区における遺構の分布状況はおおまかに3つの群に分かれます。旧河川SR01・02の東側(第Ⅰa区東側)の微高地、先述した調査区中央に位置する微高地の北東部(第Ⅰb区中央から東南部)および同微高地の西南側(第Ⅰa区西側～第Ⅰd区中央から北東部)である。これらのうち最も遺構の分布密度が高い地点は、中央に位置する微高地の北東部(第Ⅰb区)の遺構群である。特にこの地点では掘立柱建物や井戸、竪穴遺構などがみられ、さらにそれらの回りを2条の溝状遺構が、一辺約50mの長さで三方に巡ることが確認された。また第Ⅰb区では湖州六花鏡、ガラス製小玉、白磁碗・皿を副葬した墓址(SK10)なども検出された。旧河川SR01・02の東側(第Ⅰa区東側)の遺構は、第Ⅰb区比較して、やや少ないが、掘立柱建物が一定のまとまりをもって分布し、調査区域の外へさらに広がっていることが認められた。なおこの地点では、出土例が極めて少ない青銅製鳳凰柄鏡と青磁碗を副葬した墓址(SK36)なども検出されている。

これらの遺構の遺存状況は各地点で少しずつ異なる状況であるが、おおまかにいえば東側から西側にかけて残りの程度が悪くなっている。柱穴などは5～10cmほどの遺跡状況のものが多い。また第Ⅰd区西南に見られる溝状遺構は、後世の営田による削平が顕著でわずか5cmほどしか残っていない。

第Ⅰ区の調査で出土した遺物は、土師器(皿・壺・碗)、土師質土器(土鍋・擂鉢)須恵質土器(壺・片口鉢)、瓦器(碗・皿)、瓦質土器(釜・三足釜・鉢)、輸入陶磁器(白磁碗・皿、青磁碗・皿、青白磁皿・合子)、陶器甕・壺・鉢、天目碗)、滑石製品(石鍋)、鉄製品(釘・刀子・紡錘車・鉄津など)、土製品(土鍤)、銅鏡、青銅製鏡(柄鏡・六花鏡)などである。主体を占めてるのは、やはり土師器、土師質土器などの供膳、調理形態のもので、出土土器の約2/3～4/5の量を占めている。輸入陶磁器は約8%弱(破片の占める割合)の量である(Tab. 20)。

第Ⅱ区の概要

第Ⅱ区は浄水場建設地の中央部に位置する。浄水場施設の管理本館棟の前庭部にあたる。多々良川左岸から250mほど離れた地点で、周辺の標高は約5.6～5.80mを測る。調査面積は約10700m²である。調査はa～d区の4つの小調査区に分けて、昭和59・60・62年度にかけて実施した。出土した遺構・遺物は掘立柱建物、井戸、土壙、木棺墓、竪穴遺構、杭列、溝状遺構などで、生活関連の遺構が主である。遺構の組み合わせは第Ⅰ区とほとんど変わらないが、墓址と思われる土壙の数は、第Ⅰ区と比べて少ない。第Ⅱ区の特徴



Fig. 7 第Ⅱ区調査風景から(東から)



Fig. 8 第Ⅱ区調査風景(西から)

あげられるのは、上記の遺構群を取り囲んで長方形の区画の溝状遺構が巡る点である。ただし第I区の屋敷地が2条の溝であったのに対し、ここでは1条である。溝状遺構は東南隅部が削平のため消滅しており、やや不正確であるが、一辺の長さが東西に約100m、南北に約50mの長さを測る規模のものである。またこの区画は多々良川左岸に展開している条里の坪並に合致するものであり、中世鎌倉期の集落の営みと条理との関連について考える上で貴重な事例となつた。

第三区の概要

第三区は浄水場敷地の最も西側に位置し、広田の集落の東側に隣接している地点である。多々良川左岸からは南へ約300m離れた冲積微高地上に位置している。標高は約5.50mを測る。調査はa-c区の3つの小調査区と、3ヶ所のトレンチを設定し、昭和59年から61年にかけて実施した。調査面積は約2700m²である。検出された遺構・遺物は第I・II区と同様に掘立柱建物、井戸、溝状遺構などである。第I・II区で検出されなかった遺構として、埋甕や、廐跡とも思える竪穴などが挙げられる。これらは中世鎌倉時代のものと、江戸時代のものがある。第IIIc区の北端では少なくとも幅が5m以上はあると思われる大溝が確認された。この溝の位置と方向性は復元条理と一致しており、出土遺物からみて、少なくとも古代末には当該地周辺には条理地

割りが施行されていたことを物語っているものとして注意された

出土遺物は少ない。土師器や瓦器の日常雑器を中心とした土器が出土している。先述の大溝からは馬の描かれた板繪が出土している。平安時代後期のものと思われ、古代祭祀の一端を知る上で貴重な出土例である。



Fig. 9 第III a区調査風景（南西から）

第四区の概要

第四区は浄水場敷地の西南部に位置する。多々良川左岸からは南へ約400mほど離れた地点に位置する。調査面積は1320m²で、a-b区の2つの調査区に分けて調査を行った。検出された遺構・遺物は少ない。南西隅に性格不明の竪穴が確認された以外は水田に伴う溝状遺構が4～5条認められた。



Fig. 10 第IV区調査風景（東から）



Fig. 11 第II区造構分布全体図 (方形区画内部分 1/300)

IV 第II区の調査

(1) 遺構各説

概要 第II区は浄水場建設地の中央部に位置する。字名「麦尾」の範囲にほとんど含まれる。東側は一部が「五寸田」にかかっている。多々良川左岸から250mほど離れた地点で、周辺の標高は約5.6~5.80mを測る。地形傾斜は東南から北西へ緩やかに傾斜している。

調査は西からa~d区の4つの小調査区に分けて、実施した。検出した遺構は据立柱建物、井戸、土壤、木棺墓、竪穴造構、杭列、溝状造構などである。遺構の組み合わせは第I区とほとんど変わらないが、墓址と思われる土壤の数は、第I区と比べて少ない。第II区の特徴としてあげられるのは、上記の遺構群を取り囲んで長方形の区画の溝状造構が巡る点である。ただし東南隅については溝状造構は未確認である。第I区の屋敷地が2条の溝であったのに対して、ここでは1条である。また第I区では土壙があったことが推定されたが、第II区ではその痕跡は認められなかった。溝状造構が取り囲む範囲は、一辺の長さが東西に約100m、南北に約50mの長さを測る規模のものである。またこの区画は多々良川左岸に展開している条里の坪並に合致するものである。

1) 横列・杭列

第II区では、調査区北側を東西に流れている溝状造構（SD11・12）に平行に、杭列SA03を、また旧河川を横断する形で、SA04・05・SA11を検出した。この他に旧河川の中に杭列があったと思われる痕跡が数箇所あったが、旧河川内の堆積物中に杭の残片が見られたのみである。列をなして確認されたのは以上の4つの杭列であった。

SA03 この杭列は近世以降の、もしくは近代以降の杭列と思われる新しい時期のもので、溝状造構（SD11・12）を切っている。また現代のコンクリート製三面側溝の真下に位置している。用途としては灌漑用水路の護岸のための杭と思われる。残りは悪く、現代の水路建設時にかなり削平されており、杭先が10~25cmほど残っていた。（図示していない）

SA04 第II a区の南側に検出されたもので、方形区画外に位置している地点である。旧河川内土層を掘り下げる過程で確認した杭列である。出土した杭は11本である。杭先は基盤の砂礫層に届いてはおらず、最も古くみて旧河川がほとんど埋没した段階以降から後に打たれたものと判断された。杭の遺存状況はあまり良くない。長さが30~40cmほどである。杭としての有効深度を、杭の全長の少なくとも3分の1から2分の1と考え、杭先のレベルから判断すると、現水田面の高さあたりに杭の頭がくる。新しい時期の所産のものと考えられた。

SA05 この杭列は、第II c 区の東側に検出された旧河川内で確認されたものである。第I 区から延びる旧河川 (SR01・02) の南側延長部に位置しており、SA01とは約30m離れている。方向はこの旧河川を横断している。検出された杭は5本のみである。本来は河幅全体にわたっていた井堰とも思われるがその痕跡はない。時期的にはSA01・02と同様に、旧河川 (SR01・02) が、埋没して行く過程の時期 (平安時代後期) に打たれたものと考えられる。

SA11 この杭列は、第II d 区の中央から南西にかけて確認された旧河川を掘り下げて行く過程で確認されたものである。この旧河川は、SR01・02のさらに南側にあたっており、この第II d 区の中央付近で流路を西へ大きく変えている。SA11はこの流路変換点から南西へ30mほどいった地点に位置している。打ち込まれている杭は、全部で33本である。杭と杭間は、長さ2~3mほどで、径が3~5cm前後の横木を組んで造わしている。杭は、残りの良いものは杭頭が残っている。杭の長さのおよそ2分の1が、基盤層である砂礫に打ち込まれている。杭列の平面形は、アーチ式ダム状に弓なりになっており、流れの方向 (北東から西) に向かって孕んでいる特徴がある。また完全に塞き止めるのではなく、南側～西側へ行くにつれて杭の方向は、旧河川の南岸に徐々に平行となっており、ある程度流れを塞き止め、水位を高くし、水を供給するためのものであったことが考えられる。杭列の時期は、黒色土器 (Fig. 83) が、杭列の間から出土していることから、SA01・02・05などと同じ時期のもの (平安時代後期、11世紀代) と考えられる。埋没したのは中世の遺構検出面である明褐色粘質土が堆積する以前と考えられる。遺物などの積極的な根拠はないが、12世紀前半ごろまでには旧河川とともに埋没したものと思われる。

SA13 杭は検出していないが、杭列状に第II c ~ d 区にかけて5~10cm大の柱穴が南北に連なっていることが確認された。旧河川が埋没した後の打ち込みである。第II d 区では溝状遺構に伴って見られたことより、これもSA05同様護岸用の杭列と思われる。近世以降のものか。

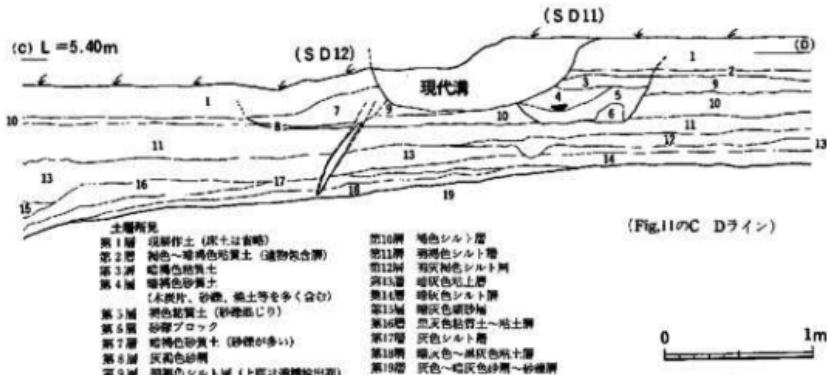


Fig. 12 溝状遺構 (SD 11-12) 土層断面図 (1/40)

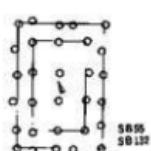
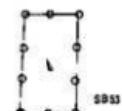
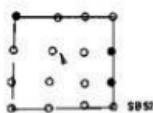
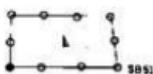
2) 挖立柱建物 (Fig.11・13~27, PL.5・6・17・18・26・27, Tab.2・3, 付図3)

概要 第II区では、溝状遺構によって方形に区画されている屋敷地内に、多数の柱穴が検出された。調査現場、および図上の操作によって確認された掘立柱建物は60棟である。建物の柱間取からみた種類は、 2×2 間が1棟、 2×3 間が50棟(うち庇付建物が7棟)、 2×4 間が4棟、 3×3 間が3棟、 3×4 間が1棟、 4×5 間が1棟である。

これらの掘立柱建物の分布は、方形区画内においては、特に7ヶ所にまとまって分布しており、さらにこれらの地点において、掘立柱建物の建替えが数回にわたって行なわれている。最も建替えが複雑な地点は、第IIa区のSB87などが位置する地点で、5回ほど、またSB67・SB74などが位置する地点で3~4回ほどの建替えが認められた。

これらの建物の時期は、柱穴からの出土遺物からみると鎌倉時代にあたる13世紀の半ばから後半を中心とする時期で、14世紀に一部がかかるものもある。

●は柱根痕跡
○は柱穴掘り方
△は未確認



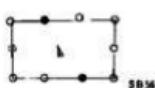
SB51 2×3 間の東西棟。北桁行長が南側に比べて短いために、東北角がややいびつである。棟方向はN-77°-W。柱穴は25~48cm。柱穴埋土は焼土を含む。深さはいずれも25~30cm。東西の両妻の棟柱、桁行の便柱の柱間隔は均等。西側妻に間仕切柱と思われる径15cmの小さな柱がある。

SB52 西もしくは、南側に庇が付く 2×3 間の純柱の東西棟。平面形は端正な長方形。棟方向はN-77°-W。柱の大きさは底部が20~25cmで、身舎の側柱が30~45cmである。深さは20~35cm。柱穴埋土はわずかに焼土・木炭を含む。柱の配置は比較的均等な間隔で配されているが、北西隅の柱間をやや広く取っている。柱根痕跡が見られたのはSP1278・1624・1483である。

SB53 2×3 間の南北棟である。棟方向はN-16°-E。柱穴は径25~45cm。深さは25~35cm。柱根痕跡が見られたのはSP1297のみ。柱はほぼ均等な間隔で配されている。南妻側に間仕切柱と思われる柱がある。柱の切り合いから、3回ほどの建替えがあった可能性がある。

SB54 2×3 間の東西棟である。南東隅の柱は未確認である。復元では、北側の側柱は均等な配列であるが、東西の妻側の柱は不均等である。柱は径30~35cmで、深さは25cmほど。

SB55・132 2×3 間の純柱の建物(SB55)を身舎とする、4面庇付の建物である。南北棟で、棟方向はN-16°-E。庇部の側柱の配列は主体部の柱筋にほぼ正確に合わせて配列している。ただし北側の庇部



の北西隅柱は未確認。また北東と南西角部の柱の配列は、身舎の柱筋からずれている。主体部と庇間は約110cmの幅を取っている。柱根痕跡は約20cm前後。

SB56 2×3間の東西棟である。西側妻の棟柱は未確認。桁行中央からやや北寄りに位置する柱穴が棟柱に該当するか。柱穴は径30~40cm。北東隅の柱と北側柱に根石がみられた。柱根痕跡は径15cm。

SB57 2×3間の南北棟。北側妻側に間仕切柱がある。東西の側柱のうち南妻側の柱は東西が対称的に柱1本分の幅で内側に入っている。棟方向はN-17°30'-W。柱穴は径30cm。柱根痕跡は20cmほどでやや小さい。

SB58 2×3間の東西棟である。平面形は北側桁行がやや長い、ややいびつな長方形である。棟方向はN-72°-W。南北の桁行の柱の配置は東西両妻側に寄っている。柱穴は、四隅の柱が40cm前後で大きい。他の柱は25~30cm。柱根痕跡は径15cm前後である。SB59と重複している。

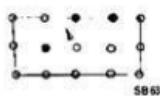
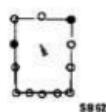
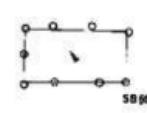
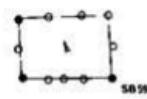
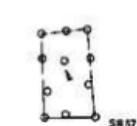
SB59 2×3間の東西棟。平面形は端正な長方形。SB58と重複しているが、切合い関係は不明。棟方向はN-74°-W。柱穴は30~40cm。柱間は均等に配されている。東西両妻の棟柱は柱穴1本分の幅で外に張り出する。

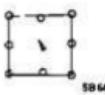
SB60 2×3間の東棟である。棟方向はN-68°30'-E。柱の配列は西側妻の棟柱が1本であるのに対して、南側は2本である。南北の側柱は対称的に中央の柱間を広く取り配されている。柱穴は径20~40cm。

SB61 2×3間の東西棟である。平面形はややいびつである。西側妻には、棟柱は確認できていない。南側柱はSP1036 1本のみの可能性がある。北側柱は2本が中央に寄った配列である。棟方向はN-21°30'-E。柱穴は30~50cm、深さ25~35cm。

SB62 SB62・63・64はまとめて重複しているが、切合い関係は不明。2×3間の南北棟である。棟の方向はN-21°30'-E。南側妻は、棟柱と隅柱間に1本づつ補助的な柱を配している。

SB63 SB62・63・64に対して直交に重複。2×4間の東西棟である。総柱の建物である。桁行が南の方がわずかに短い。柱の配列から見て、東側に庇が付く2×3間の建物の可能性もある。柱穴は35~50cm。柱根痕跡は20cm。

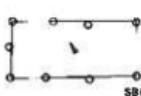




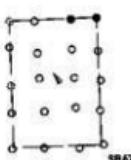
SB64 2×2間の東西棟である。平面形は正方形。西南隅柱と西側妻の柱柱は未確認。棟方向はN-67°30'-W。南北両側柱は、柱1本分内側に配されている。柱穴は25~40cm前後。深さ20cm。柱根痕跡は15cm弱。



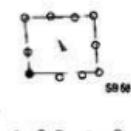
SB65 2×3間の南北棟である。東西の側柱は中央に3本の柱が寄る配列である。また、南側妻の柱配列は隅柱と棟柱間に1本の補助柱を配している。棟筋の床中央に柱が1本配されている。棟の方向はN-21°30'-E。柱は径20~30cm。柱根痕跡は10~15cm。



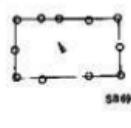
SB66 2×3間の東西棟。棟方向はN-21°30'-E。北東隅柱は未確認。柱の配列からみて復元にやや無理があるかもしれない。柱穴は径30~40cm、深さ20~30cm。



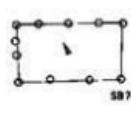
SB67 3×4間の総柱の建物である。柱の配列は整然としており、建物平面形は長方形である。桁行の間隔が一定であるのに対して、梁行の間隔が不定である。西側もしくは東側が底部になる可能性がある。SX52から西側側柱を切られている。柱穴は径35~50cm、柱根痕跡は15~20cm。他の建物でこの間取りに類似するものはない。



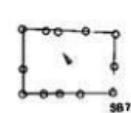
SB68 2×3間の東西棟である。西側妻には2本の柱を棟筋に寄せて配している。南北側柱は非対称で、北側が比較的整然としているのに対し、南側は統一性がない。柱穴は25~45cm、深さ25~30cm。柱根痕跡は15~20cm弱。



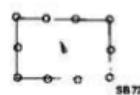
SB69 2×3間の東西棟である。SB70と重複しているが、切り合ひ関係は不明。SB70から切られている可能性がある。柱穴が密集しているため柱穴の抽出が難しい。東西妻の柱は対称的に整然としているが、南北側柱は、特に南側の配列、柱間隔が不均等である。棟方向はN-65'-W。柱穴の大きさはバラつきがある。径20~50cm。柱根痕跡は15cm前後。



SB70 2×3間の東西棟である。SB69と重複している。SB69を切っている可能性がある。平面形は端正な長方形。西側妻には2本の棟柱、また北側の桁行は4間の側柱を取っている。柱根痕跡は15~20cm。

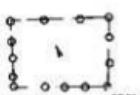


SB71 SX53の南側に位置する。2×3間の東西棟である。棟の方向はN-68'-W。ほとんど同じ規模のSB71・72・73が少しづつ位置を変ながら重複している。SB71の位置から、SB72、SB73へと展開していくことが予想される。平面形は端正な長方形であるが、西側の梁

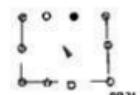


行が長い。西側妻の棟柱はもう一本あった可能性があるが、未確認。

SB72 2×3 間の東西棟である。棟方向は N-70°-W。柱の配列は整然としており、柱間隔も均等である。平面形は端正な長方形である。棟柱は東西とともに、妻の中央に位置しているが、梁筋からやや内側に入っている。南北の側柱のうち東妻側は確認できていない。



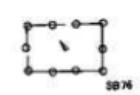
SB73 3×3 間の東西棟。棟方向は N-69°-W。南東隅柱は未確認である。平面形は南東隅がやや歪んだ長方形。基本形は 2×3 間の間取りであるが、向妻には 2 本づつの棟柱を配している。南北の側柱はそれぞれ平行の中央に補助的な柱がある。柱穴は径 35~45cm。柱根痕跡は 15~20cm。



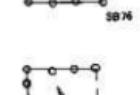
SB74 SB71~73 と重複している 2×3 間の東西棟である。棟方向は N-70°-W。南側側柱は東西隅柱を除いて 1 本しか確認していない。棟柱は小さい。柱根痕跡は北東と南西隅柱で確認。径は 13cm。



SB75 SB70~74 とは棟方向が直交して西側に隣接している。 2×3 間の南北棟である。柱の配列は西側側柱は均等な間隔で配されているが、他は規格性に欠ける。南側妻の棟柱は 2 本が中央に寄せて配されている。



SB76 第 II a 区の北東部に位置する。 2×3 間の東西棟である。棟方向は N-66°30'-W。柱の配置は対称的に、ほぼ均等な間隔で配されている。平面形は長方形で、床面積の狭い建物である。西側妻の棟柱は未確認。



SB77 2×3 間の東西棟である。床面積は SB76 と同様狭く、規模は小さい。柱の配列は対称的で間隔も均等。西側妻の棟柱は 1 本であるが、中央から西北隅柱へ寄っている。柱穴は径 25~46cm。深さ 20~36cm。



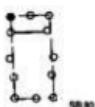
SB78 2×3 間の南北棟である。棟方向は N-23°-E。北側妻は 2 本の、南側には妻中央に 1 本の棟柱が配されている。東南隅柱は未確認。東北隅柱には根石がみられる。



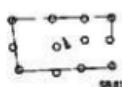
SB79 北側に狭い庇のつく 2×3 間の南北棟。柱の配列は対称的で、柱間隔も均等である。庇の幅は 90cm で、梁行に平行に柱を配している。柱根痕跡は 15~20cm。南西隅柱には根石がみられる。SB80 と重複しているが、切り合い関係は不明。



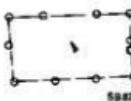
SB80 SB79 と同様に、北側に狭い庇のつく 2×3 間の南北棟である。棟方向は N-24°-E。柱の配列は対称的で、柱間隔もほぼ均等で



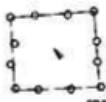
ある。庇の幅は70cmで、SB79と比べやや狭い。SB80と重複している。柱穴は径20~40cm、深さ20~35cm。柱根痕跡は13~18cm。



SB81 総柱の2×3間の南北棟である。平面形は北西隅柱が張り出し、やや歪んだ長方形。棟方向はN-68°-W。柱の配列は対称的であるが、桁行の長さは、西側妻へ行くほど長い。棟筋上の間仕切柱の並びはやや雑。



SB82 2×3間の東西棟である。棟方向はN-65°-W。東側妻は2本、西側には妻中央近くに1本の棟柱が配されている。南側柱には小さな柱が補助的に配されている。



SB83 3×3間の東西棟である。棟方向はN-68°-W。平面形はわずかに歪んだ正方形。床には間仕切りと思われる柱が東側妻寄りに1本見られる。柱の配列は規則性に欠けるが妻間に対称的な配置。柱根痕跡は14cm。



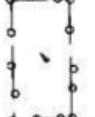
SB84 2×3間の南北棟である。棟方向はN-27°-E。平面形は端正な長方形である。東南隅柱は近接する2つの柱穴があり何れか決めかねるが、同時に2本の柱が使われていたことも考えられよう。東側柱には根石がみられる。柱穴は径15~30cm、深さ15~30cm。



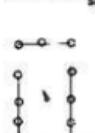
SB85 2×3間の南北棟である。棟方向はN-25°-E。西側柱は、隅柱間に2つの補助柱が配されている。東側柱は、桁行の中央に1本あるのみである。西北隅柱には根石がみられる。柱穴は径20~30cm。



SB86 2×3間の南北棟。棟方向はN-25°-E。北東隅柱と、東側柱のうち、南妻に近い柱は未確認である。北側妻の隅柱が図示したものであるとすると、北側妻の長さは68cmほど短くなり、かなり歪んだ平面形となっている。柱穴は18~61cm、深さ35cm前後。

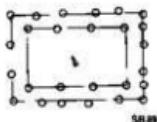


SB87 2×4間を基本形とする南北棟である。棟方向はN-25°-E。柱は整然と対称的に配列されている。西側柱はSB84と同様、補助的な小さな柱がある。柱穴の大きさは25~45cm。



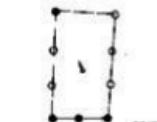
SB88 2×3間の東西棟である。SB84~87、SX01等と重複している。これらの遺構との切り合い関係はSB84→SB87→SB88→SX01、SB85→SX01となる。柱の配列は対称的である。東西側柱には、小さな補助柱が配されている。柱穴は径10~60cm。柱根痕跡は東南隅柱で確認。径14cm。

SB89 四面庇がつく、2×3間の東西棟。東側妻は棟柱が2本、西



側妻は西南隅にかなり寄ったところに配されている。南・北側柱はともに対称的に配されている。底は幅が平均100cmで、身舎の桁・梁行の長さの約2分の1である。底部中央は間取りが長い。底部の柱穴は径20~40cm。身舎の柱は、径28~60cm。根石は南西・北東隅柱のほか2つの柱で検出。SB95を切っている。

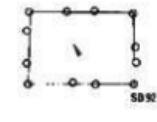
SB90 2×3 間の南北棟である。棟方向はN-22°-E。平面形は南東隅柱がわずかに内側に入った長方形である。柱の配列は対称的で均等な間隔で配されている。北妻側の長さは南妻側よりもわずかに長い。棟柱は未確認。桁行の中央に1本あるのみである。北東隅柱以外の隅柱には根石。



SB91 2×3 間の東西棟である。棟方向はN-65°30'-W。平面形は細長い長方形である。西妻側の棟柱は未確認。また南側柱は東西の隅柱以外は未確認である。柱穴の大きさはバラツキがあり、径20~65cm。



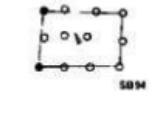
SB92 2×3 間を基本形とする 3×3 間の東西棟である。棟方向はN-67°-W。平面形は端正な長方形。柱の配列は対称的で、四隅の柱間に側柱が、西妻側以外は中央にそれぞれ寄って配されるという特徴をもっている。SB95を切っている。



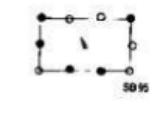
SB93 2×3 間の東西棟である。棟方向はN-68°-W。平面形は東南隅柱がわずかに張りだした長方形である。東西両妻の棟柱はほぼ中央に配されている。柱穴の大きさはほぼ一定で、径30~45cm、深さ35cm前後。



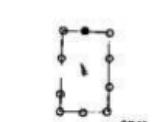
SB94 2×3 間の東西棟である。西南隅柱はやや張り出している。柱の配列は、南側柱が西隅柱側に1本しか検出されていない。棟筋に沿って、2本の間仕切柱がある。ただしSP551は仕切柱かどうかは不明。柱穴は径25~45cm。深さ15~35cm。

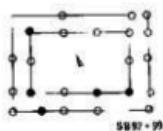


SB95 2×3 間の東西棟である。棟方向はN-65°-W。平面形は東側妻がやや短いが端正な長方形。柱の配列は対称的で、柱間隔は均等。西妻側の棟柱には根石がみられる。北東隅柱と棟柱がSB92から切られている。

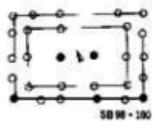


SB96 2×3 間の南北棟である。棟方向はN-20°-E。平面形はやや細長い端正な長方形である。柱の配列は南北妻側と東側柱は柱間隔も均等に配されているが、西側柱は西南隅柱側に大きく幅を持たせ配されている。棟筋に沿って、北妻側に1本の仕切柱が配されている。

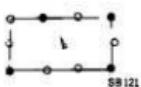




SB97・99 四面に庇がつくと思われる、 2×3 間の東西棟。柱の配列は対称的で、柱間隔は均等に配されている。底部(SB99)のは北西隅柱は未確認。身舎との幅は平均150cmで、SB89と比べると長い。底部の柱穴は径25~45cm。身舎の柱は、径28~61cm。



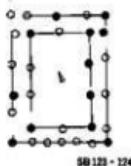
SB98・100 四面に庇がつく、 2×3 間の東西棟である。身舎は総柱である。棟方向はN-68°-W。柱の配列は対称的に均等な柱間隔で配されている。南西隅柱は未確認。竪穴造構SX38によって切られている。北側柱のうち、北東隅柱側の1本は確認されていない。庇はSB89と同様に、幅が平均100cmで、身舎の桁・梁行の長さの約2分の1である。底部の柱穴は径20~40cm。身舎の柱は径28~60cm。根石は西側仕切柱で検出された。



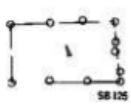
SB121 2×3 間の東西棟である。平面形は西南隅柱がわずかに張り出した端正な長方形。柱の配列は対称的。西側妻の棟柱は未確認。東側棟柱は柱1本分幅外に出ている。柱穴は径35~45cm、深さ20~30cm。



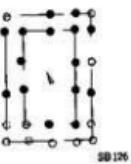
SB122 2×3 間の南北棟である。棟方向はN-10°-E。平面形はやや細長く端正な長方形である。南東隅柱がわずかに張りだしている。柱の配列は、南北妻側と東側柱は柱間隔も均等に配されているが、西側柱は中央に寄せて配されている。棟筋に沿って北妻側に1本の間仕切柱がある。



SB123・124 四面庇がつく、 2×3 間の南北棟。身舎は北妻側に間仕切柱がある。庇の幅は約110~120cmで、身舎の桁・梁行の長さの約2分の1である。底部の柱の配列は、身舎の柱に対応している。底部の柱穴は径20~40cm。身舎の柱は径28~60cm。柱根痕跡は20~23cm。



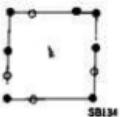
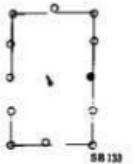
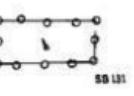
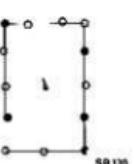
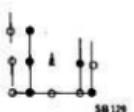
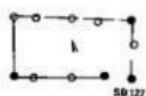
SB125 2×3 間の東西棟。棟方向はN-68°30'-W。柱の配列は対称的。西妻側の棟柱は未確認。西側の桁行がわずかに長い。西側棟柱は未確認。柱穴は径35~55cm、深さ22~34m。



SB126 四面に庇がつく 2×3 間の南北棟。身舎は南妻側に間仕切柱がある。棟方向はN-18°-E。柱の配列は対称的で、均等な柱間隔。庇の幅は約110~120cmで、身舎の桁・梁行の長さの約2分の1である。底部の柱の配列は、身舎の柱に対応している。底部の柱穴は径20~40cm、深さ15~35cm。身舎の柱は、径28~60cm。根石は身舎のすべての側柱でみられた。柱根痕跡は20~23cm。



SB127 2×4 間の東西棟である。柱の配列は、南側柱がほぼ均等



な配列であるのに対して、北側柱はやや不規則である。柱穴は径35~55cm、深さ22~34m。豊穴遺構SX53から切られている。

SB128 2×3間の南北棟である。平面形は長方形。棟方向はN-24°-E。柱の配置は、全体的にやや不規則である。北妻側の棟柱は2本である。柱の間取りの基本形は、隅柱に寄せて側柱を配するものと思われる。

SB129 東西に庇を持つ、おそらく2×3間の南北棟である。平面形は長方形。棟方向はN-3°-E。確認された建物の中ではもっとも棟方向が磁北に近い。東側庇の幅は80cmで、西側の幅は118cm程度である。身舎の側柱は大きく、掘り方は径30~55cm。底部の柱穴の径は25~30cm。

SB130 2×4間の南北棟である。棟方向はN-15'30'-E。平面形は端正な長方形。柱の配置は、対称的で、柱間隔も均等であり、非常に整然としている。北妻側の棟柱は2本、南妻側は中央に1本の柱が配されている。

SB131 2×4間の東西棟である。柱の配置は対称的である。柱間隔は均等であり、整然としているが、南北の側柱は並びがやや乱れている。東西の棟柱は中央に1本づつ配されている。柱根痕跡は径16cm。

SB133 床面積の大きな2×4間の南北棟である。棟方向はN-28°-E。平面形は端正な長方形。柱の配置は対称的である。柱間隔は均等で、整然としている。東側柱の東隅柱側の柱は未確認。柱穴は径23~45cm。

SB134 3×4間の東西棟である。棟方向はN-70°-E。平面形は桁行がやや短い正方形。北側柱は豊穴遺構SX52の壁に平行してほぼ等間隔で配されている。南側柱のうち東南隅柱側の柱は未確認。柱穴は径30~45cm。

建物番号 (SB)	周 長 (m) (×)	高さ (m) (壁厚)	床 面 (cm) (面積)	長軸 (幅) の方位	床 面 横 (m ²)	柱穴数	柱 号
SB 51	2 × 3	北 677 南 730	25 367 363 370	N 77° - W	25.83	10	SP 1252, 1426, 1512, 1643
52	2 × 3	北 658 南 684	25 440 616 634	N 77° - W	43.14	12(16)	SP 1215, 1264, 1305, 1483, 1473, 1401, 1495, 1551, 1528, 1554, 1458, 1352,
53	2 × 3	北 693 南 680	25 386 397 386	N 16° - E	25.84	10	SP 1315, 1426, 1529, 1404, 1471, 1472, 1473, 1280, 1414, 1438, 1473, 1500
54	2 × 3	北 607 南 522	25 432 563 444	N 74° - W	25.84	12(14)	SP 1782, 1854, 1154, 1213, 1283, 1206
55-132	2 × 3	北 630 南 628	25 360 364 362	N 16° - E	22.53	10	SP 784, 1001, 975, 1186, 1208, 1190, 660, 782, 1183
56	4 × 5	北 584 南 666	25 583 582 583	N 16° - E	50.83	17(18)	SP 1181, 1182, 1183, 1203, 1178, 1024, 124, 1308, 1211, 1061
57	2 × 3	北 710 南 688	25 405 306 408	N 78° - W	26.95	10	SP 1192, 1210, 1211
58	2 × 3	北 668 南 545	25 324 380 366	N 17° 30' - E	20.10	10	SP 1227, 1233, 1229, 1231, 1664
59	2 × 3	北 622 南 696	25 418 408 428	N 74° 30' - W	25.98	11	SP 4334, 4326, 4324, 4327, 4403, 5315
60	2 × 3	北 706 南 659	25 388 380 395	N 21° 30' - K	27.04	10(11)	SP 1093, 1095
61	2 × 3	北 578 南 606	25 367 376 358	N 64° - W	26.83	9	SP 1041, 1044, 1049, 1036, 1130
62	2 × 3	北 300 南 486	25 375 368 354	N 20° - E	18.60	10	SP 1066, 1051, 1108, 1080
63	2 × 3	北 882 南 856	25 392 394 390	N 71° - W	33.89	12	SP 1094, 1091, 1100, 1101, 1106, 1081
64	2 × 3	北 432 南 1432	25 432 (406) 414	N 67° 30' - W	17.50	6(7)	SP 1079, 1071, (1093)
65	2 × 3	北 611 南 618	25 336 (664) 336	N 25° - E	(20.53)	9(10)	SP 807, 805, 1141, 812, 1112, 817, 1119, 822, 1068
66	2 × 3	北 868 南 868	25 336 (868) 336	N 69° - W	(50.39)	6(8)	SP 1110, 1161, 819, 824, 1221
67	3 × 4	北 (604) 南 878	25 604 878 878	N 24° 30' - K	52.77	12(14)	SP 892, 880(881), 879 867, 878, 1067, 860, 876, 1065
68	2 × 3	北 482 南 478	25 389 386 392	N 62° 30' - W	18.45	10	SP 823, 939, 826, 825, 479, 478, 428
69	2 × 3	北 706 南 718	25 410 420 424	N 65° - W	29.24	10	SP 892, 867, 462, 890, 874, 878, 885, 1151, 1135
70	2 × 3 (4)	北 722 南 608	25 490 404 396	N 65° 30' - W	38.55	10	SP 866, 834, 877, 876, 893, 863
71	2 × 3	北 632 南 622	25 428 444 412	N 68° - W	28.73	10	SP 892, 849, 903, 902
72	2 × 3	北 640 南 643	25 408 416 400	N 70° - W	25.20	9(10)	SP 808, 808, 1124
73	3 × 3	北 638 南 572	25 475 468 461	N 69° - W	29.00	11(12)	SP 901, 905, 906
74	2 × 3	北 587 南 602	25 386 464 462	N 68° 30' - W	27.30	9	SP 1123, 861, 906
75	2 × 3	北 683 南 674	25 395 404 395	N 30° - E	26.96	9	SP 920, 936, 912, 915, 944, 933
76	2 × 3	北 510 南 502	25 326 326 322	N 66° 30' - W	16.30	10	SP 484, 488, 527, 528, 483, 485, 492, 478, 490
77	3 × 3	北 478 南 473	25 311 312 310	N 63° - W	14.08	11	SP 845, 859, 931, 512, 928, 931, 932
78	2 × 3	北 414 (611) 386 612 (610) 388	25 406 388 386	N 23° - E	25.04	10(11)	SP 922, 936, 838
79	2 × 3	北 400 南 402	25 378 401 401	N 23° - E	31.42	13	SP 785, 509, 508, 473, 472, 471, 893, 490
80	2 × 3	北 770 南 770	25 378 379 379	N 24° - K	29.27	8(9)	SP 743, 502, 692, 510, 494, 779
81	2 × 3	北 688 南 644	25 361 364 358	N 68° - W	23.80	9	SP 427, 431, 691, 563

(() 内の数値は推定値)

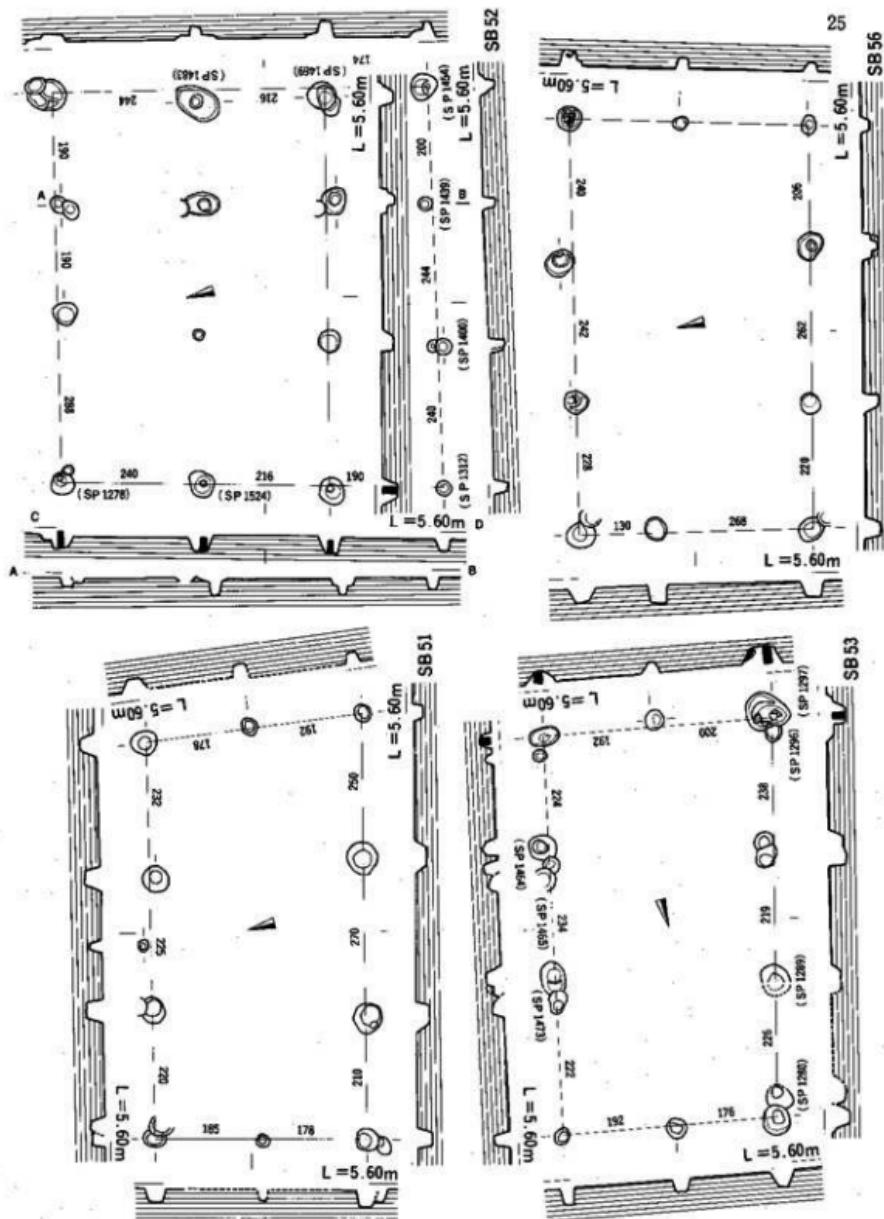
Tab. 2 第Ⅱ区振立柱建物計測値表 (その1)

建物番号 (SB)	規格 (×)	長軸 (m)	短 軸 (m)	面積 (m ²)	長軸(棟)の方位	床面積 (m ²)	柱穴数	柱番号
SB 82	2 × 3	北 826	南 826	442 432	N - 65° - W	35.79	10	SP 747, 529
83	3 × 3	西 815	東 820	450 450	N - 65° - W	29.64	11	SP 418, 423
84	2 × 3	西 597	東 601	498 520	N - 27° - E	22.66	9	SP 627, 452
85	2 × 3	北 656	南 642	478 472	N - 25° - E	26.21	9	SP 723, 450, 422,
86	2 × 3	西 727	東 723	416 (417)	N - 25° - E	30.82	9(10)	SP 629, 433
87	3 × 4	西 828	東 819	406 399	N - 29° 30' - E	32.75	14	SP 736, 653, 274,
88	2 × 3	西 663	東 662	360 362	N - 27° - E	23.90	10	SP 756, 714, 625,
89	2 × 3	北 866	南 866	601 600	N - 64° 30' - W	63.19	18	SP 852, 905, 569, 338, 034,
90	2 × 3	西 732	東 718	404 394	N - 22° - E	28.91	9	SP 729, 751, 567, 701,
91	2 × 3	北 640	南 641	314 318	N - 65° 30' - W	20.24	7	SP 610, 656, 762,
92	3 × 3	北 706	南 718	487 482	N - 67° - W	35.66	12	SP 580, 543, 545,
93	2 × 3	北 608	南 610	385 390	N - 68° - W	23.58	10	SP 546, 555, 559
94	2 × 3	北 631	南 641	381 381	N - 70° - W	20.47	9(10)	SP 541, 548, 554,
95	2 × 3	北 610	南 610	390 372	N - 65° - W	22.18	10	SP 560, 564, 539,
96	2 × 3	西 618	東 618	362 356	N - 65° - W	22.18	10	SP 571, 572, 578
97+99	2 × 3	北 670	南 669	356 422	N - 67° - W	28.27	9(10)	SP 629, 637, 644, 671,
98+100	2 × 3	北 920	南 922	609 609	N - 67° - W	61.67	10(12)	SP 643, 699, 706, 650,
121	2 × 3	北 709	南 709	672 666	N - 67° - W	61.67	10(12)	SP 677, 673, 669,
122	2 × 3	西 879	東 874	332 344	N - 10° - E	19.96	10	SP 1504, 1589, 1710, 1600,
123+124	3 × 3	西 892	東 892	644 642	N - 16° - E	57.33	?	SP 1522, 1587, 1589, 1973,
125	2 × 3	西 660	東 662	420 415	N - 16° - E	27.53	10	SP 1505, 1589, 1513, 1581,
126	2 × 3	北 706	南 719	417 428	N - 68° 30' - W	30.03	9	SP 1527, 1282, 1420, 1705,
127	2 × 4	西 856	東 856	548 583	N - 18° - E	77.76	15(18)	SP 1454, 1459, 1455,
128	2 × 3	西 546	東 546	426 408	N - 69° - W	33.60	12	SP 1528, 1587, 1513, 1581,
129	2 × 3	西 540	東 552	302 302	N - 24° - E	17.01	10	SP 1529, 1587, 1513,
130	2 × 4	西 876	東 878	543 541	N - 15° 30' - N	59.80	13	SP 1511, 1286, 1272, 1418,
131	2 × 4	北 665	南 662	310 303	N - 70° - W	20.04	12	SP 1466, 1519, 1715, 1447,
132	2 × 4	西 908	東 908	558 560	N - 28° - K	60.58	11(12)	SP 1228, 1232, 1240,
133	2 × 4	西 602	東 602	588 588	N - 70° - E	35.35	11	SP 1229, 1230, 1666,
134	3 × 4	西 604	東 600	544 540	N - 28° - K	60.58	11(12)	SP 630, 723, 447,

Tab. 3 第Ⅱ区掘立柱建物計測表(その2)

() 内の数値は推定値

Fig. 13 第Ⅱ区埋立地盤物平面および断面図 (SB51~53・56) (1/100) その1



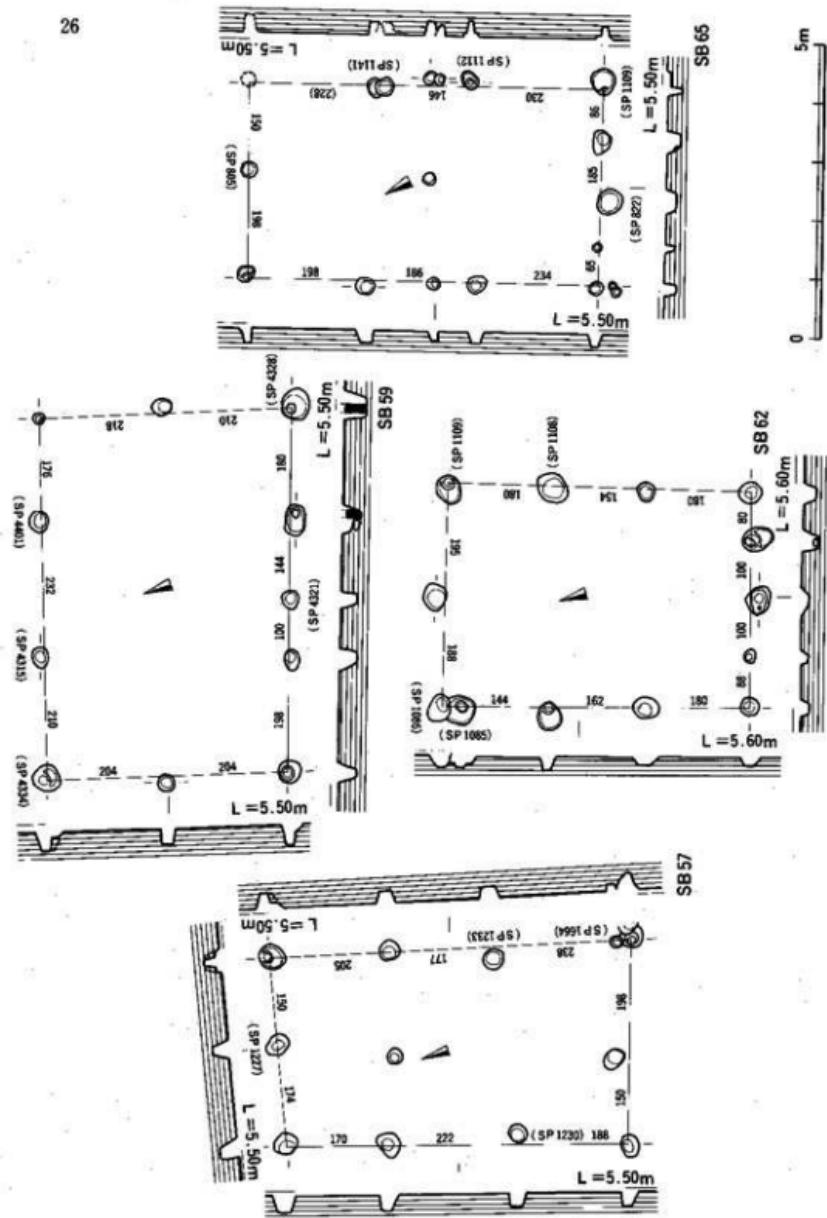


Fig. 14 第II区掘立柱壁平面および断面図(SB57-59-62-65) (1/100) その2

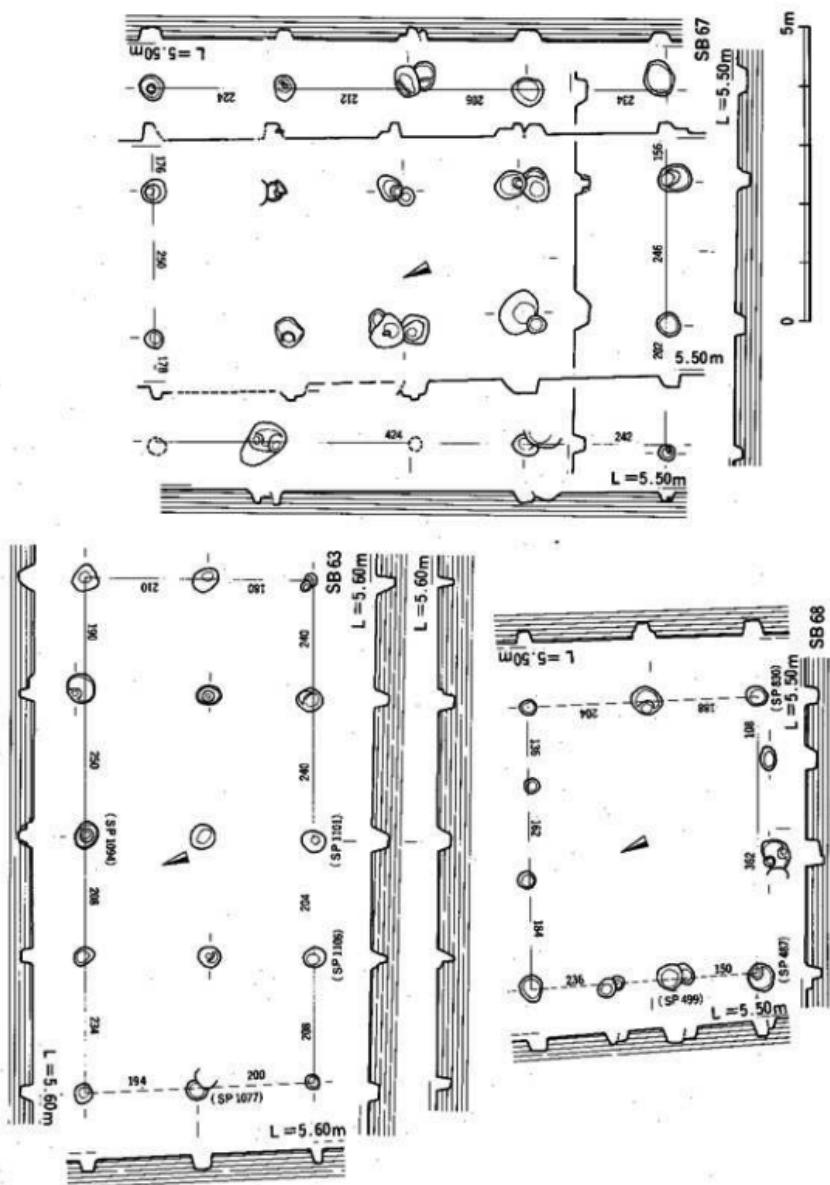


Fig.15 第II区掘立柱建物平面および断面図(SB63・67・68) (1/100) その3

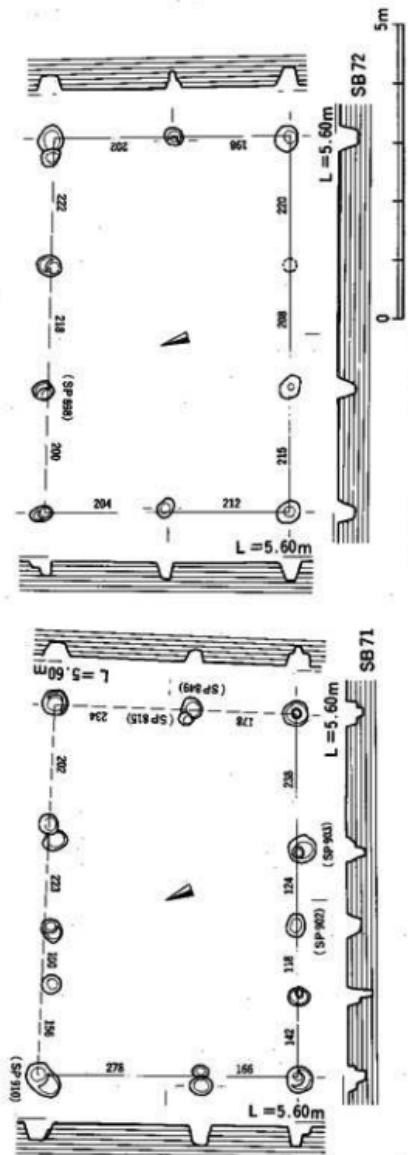
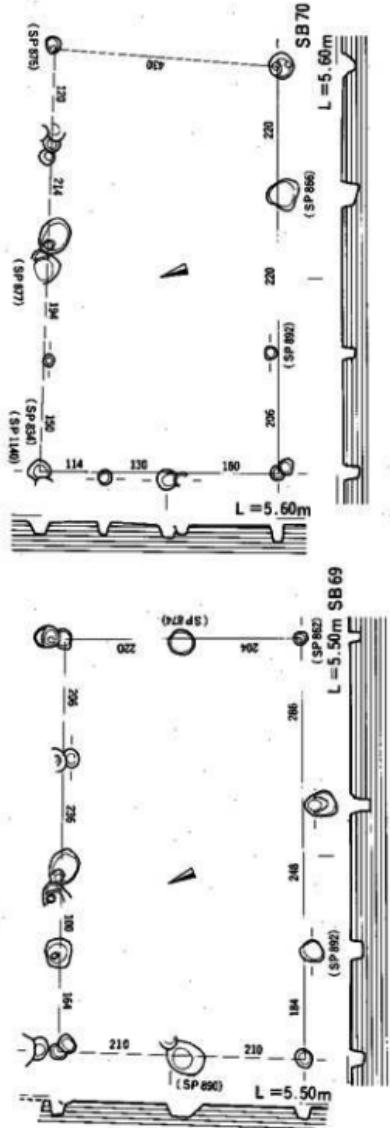


Fig.16 第II区掘立柱建物平面および断面図(SB69~72) (1/100) その4

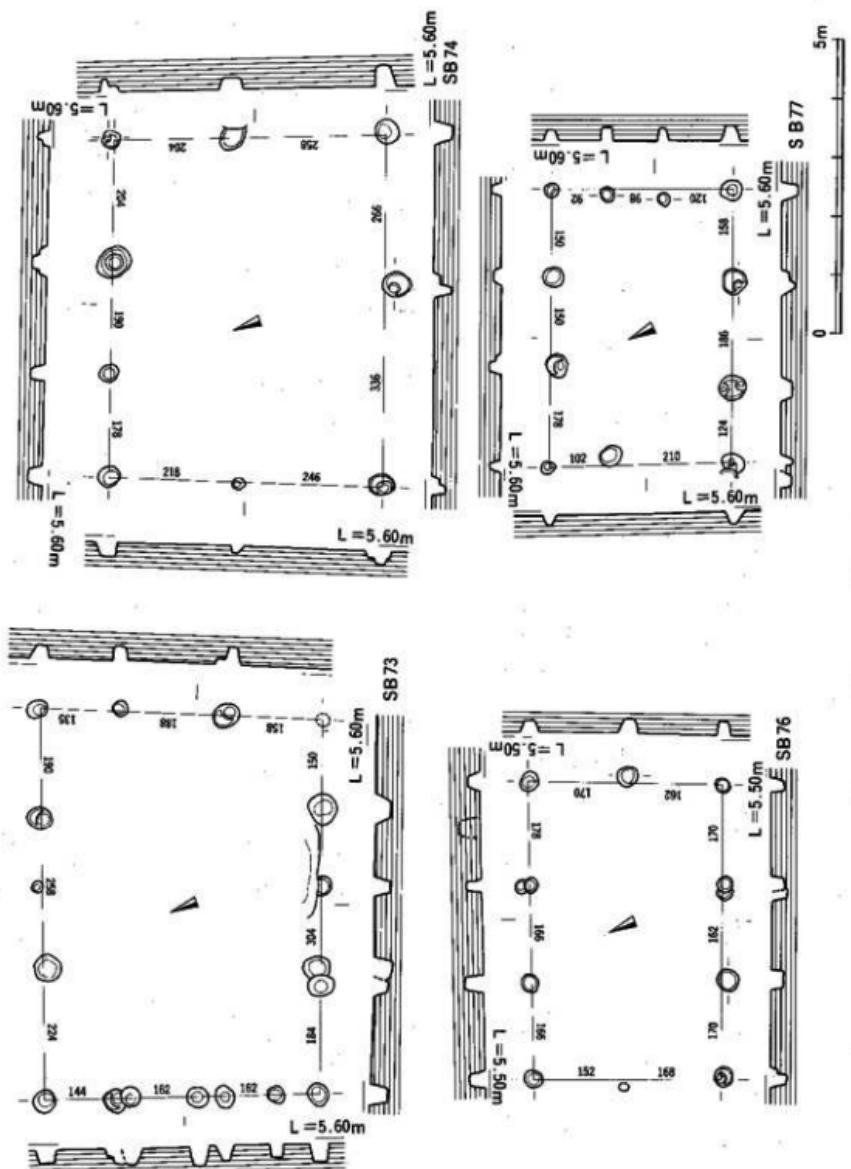
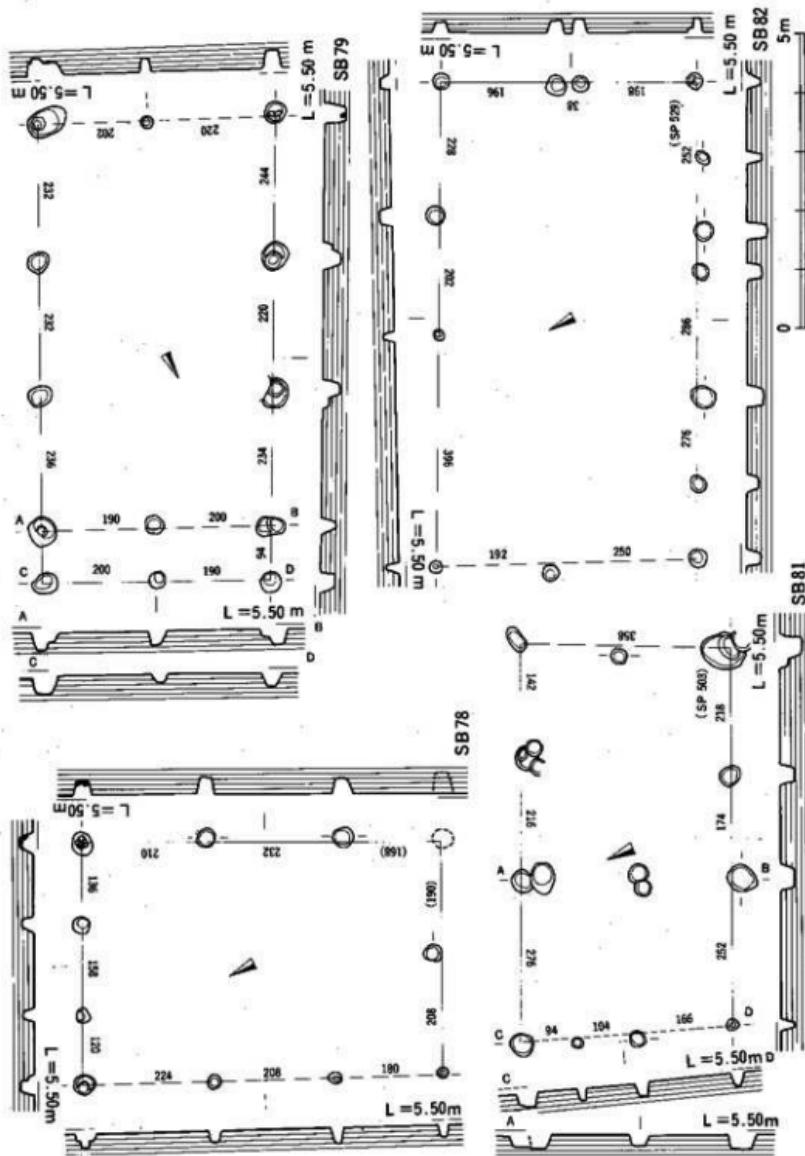


Fig. 17 第II区鉄立柱建物平面および断面図 (SB73・74・76・77) (1/100) の



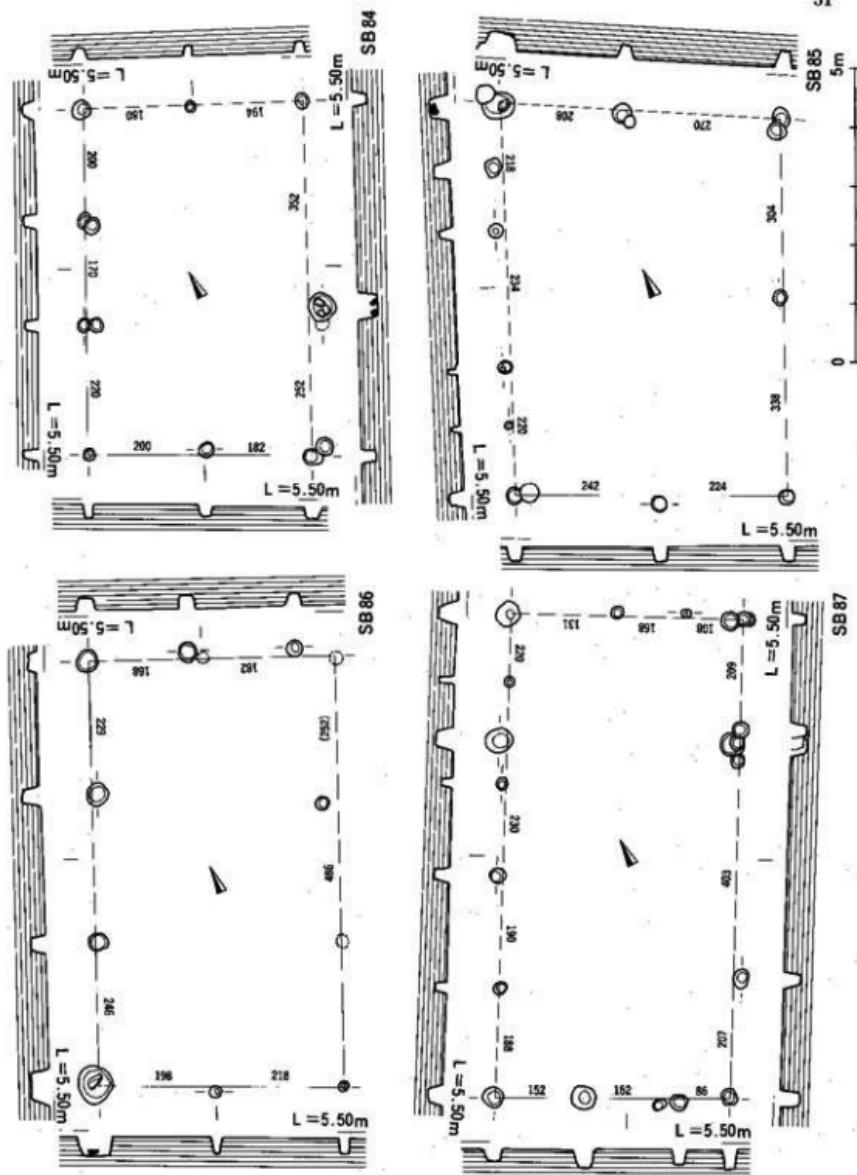


Fig. 19 第II区掘立柱建物平面および断面図 (SB84~87) (1/100) その7

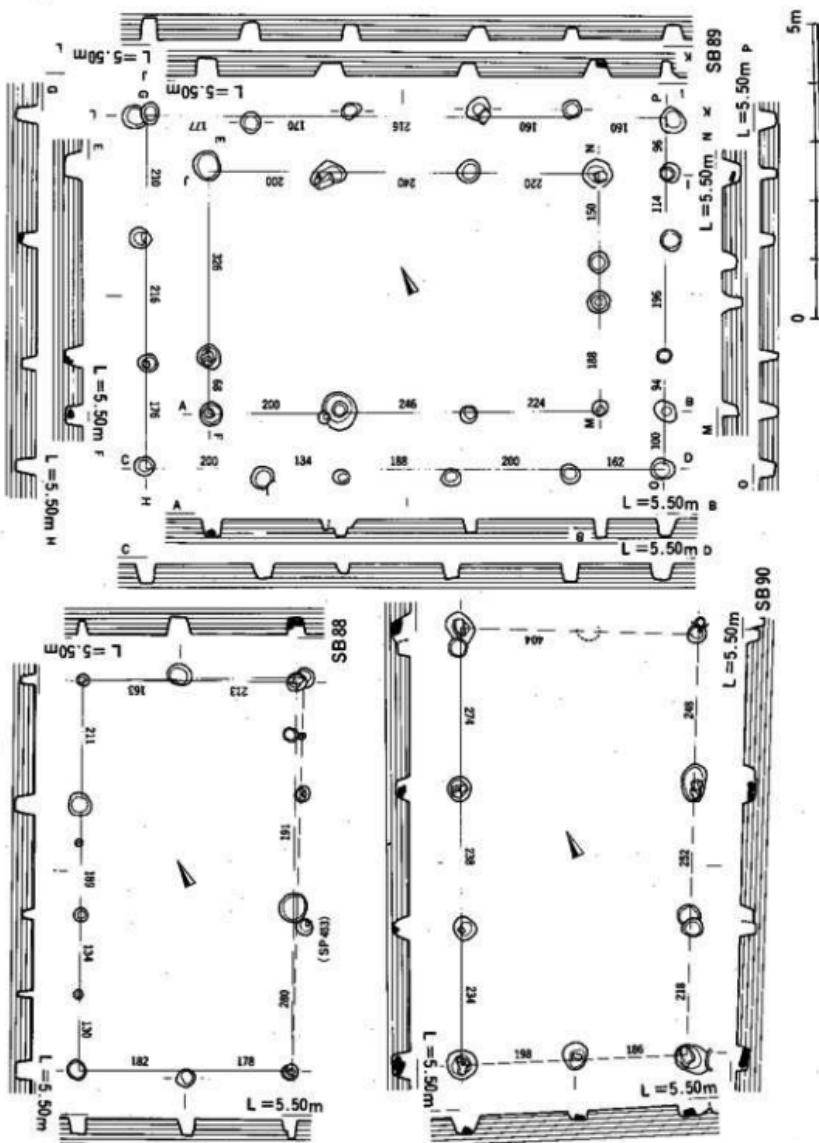
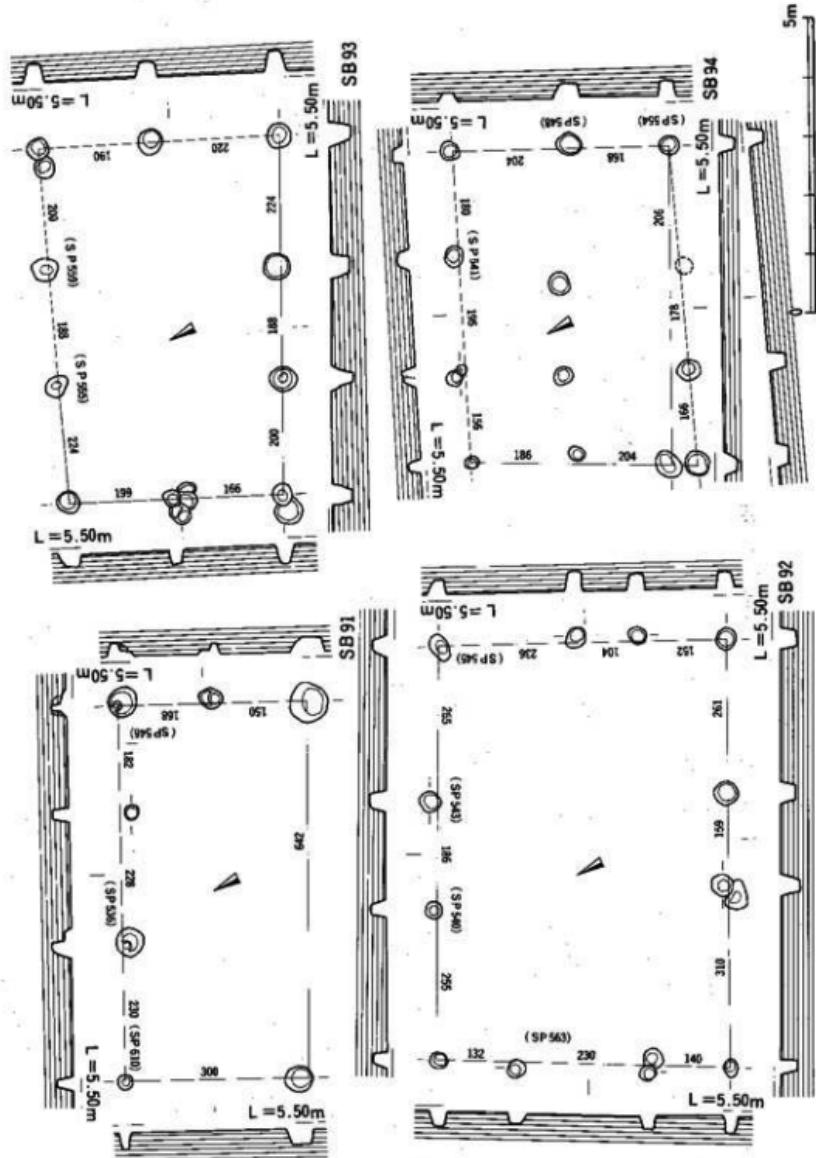


Fig. 20 第II区櫛立柱物平面および断面図(SB88~90) (1/100) その8



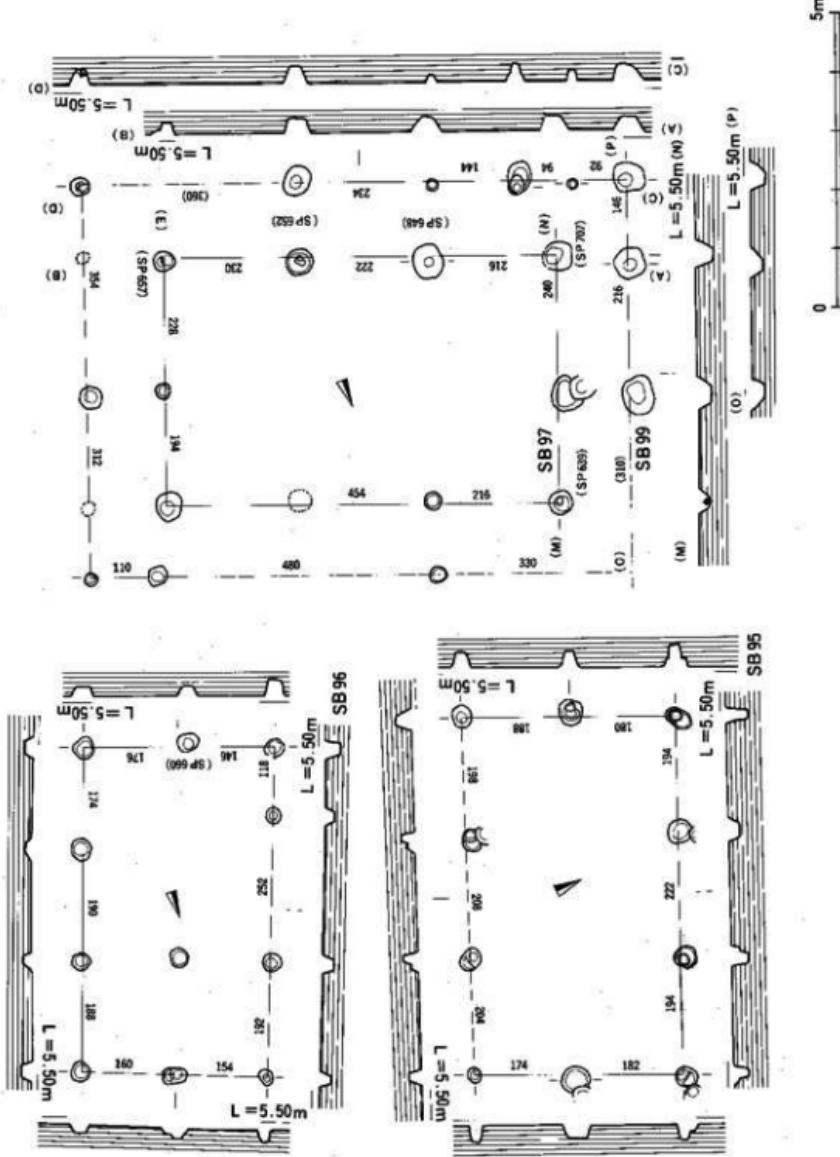


Fig.22 第II区掘立柱建物平面および断面図(SB 95・97・(99)) (1/100) その10

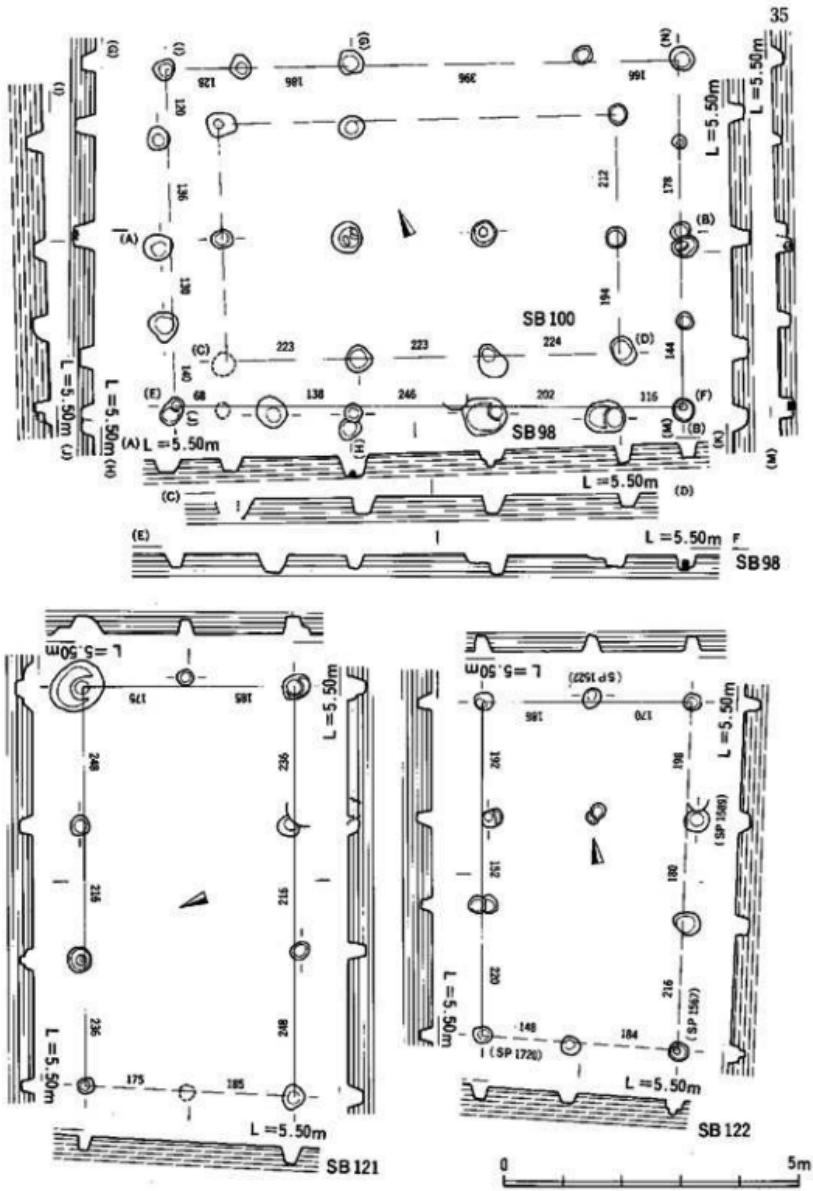


Fig.23 第II区掘立柱建物平面および断面図(SB100(98)・121・122) (1/100) その11

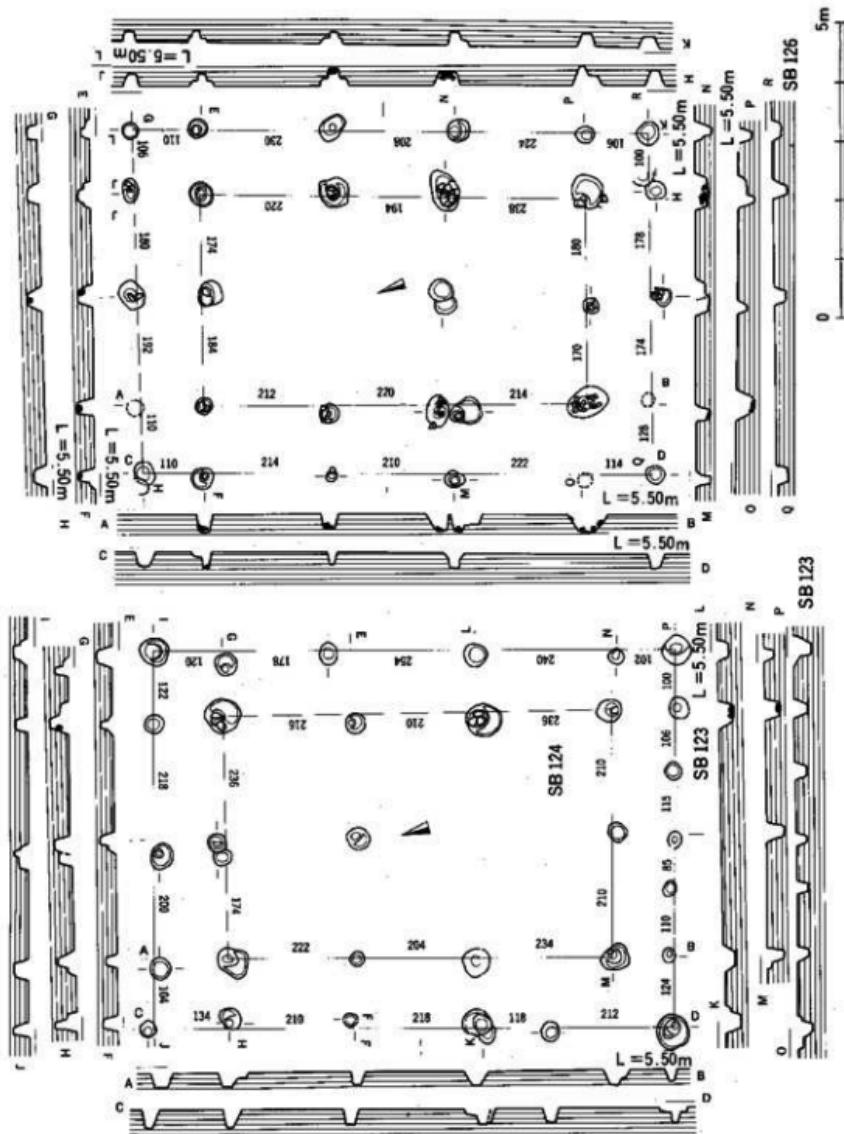


Fig. 24 第II区埋立柱建物平面および断面図(SB 124(123)・126) (1/100) その12

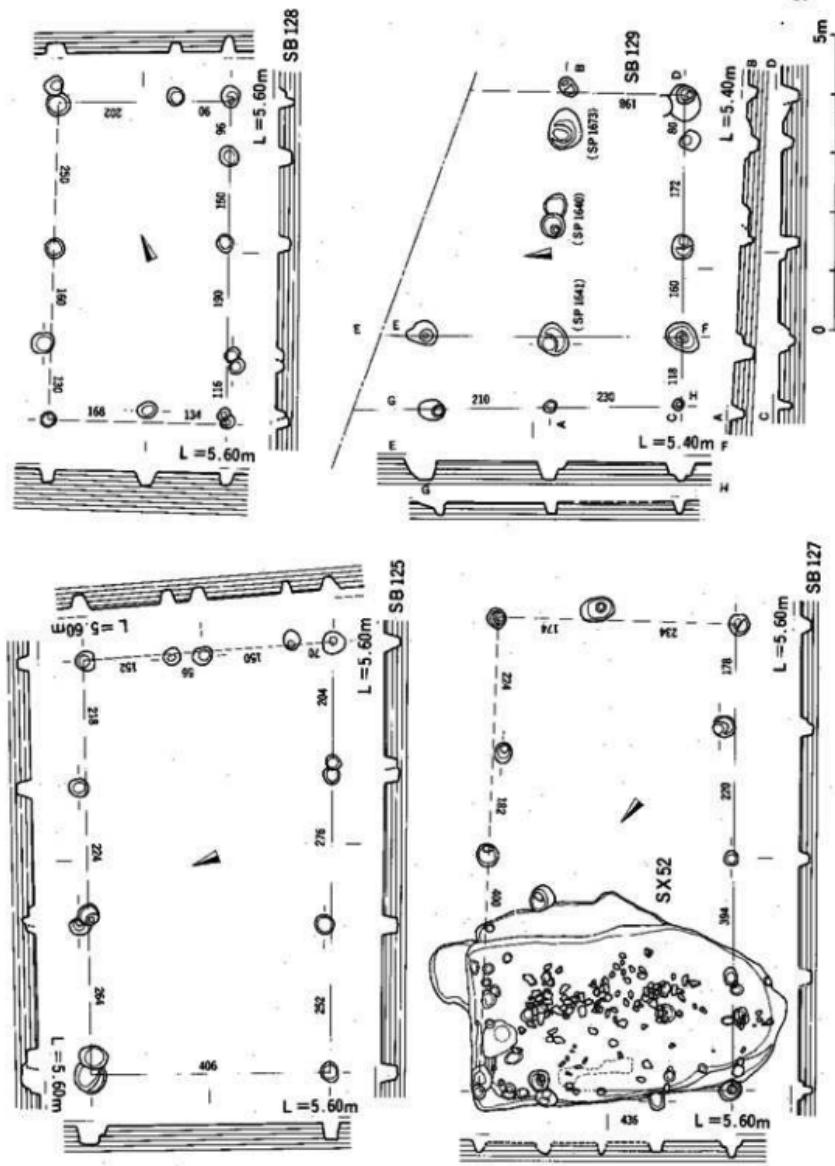


Fig. 25 第II区掘立柱建物平面および断面図(SB125.127~129) (1/100) その13

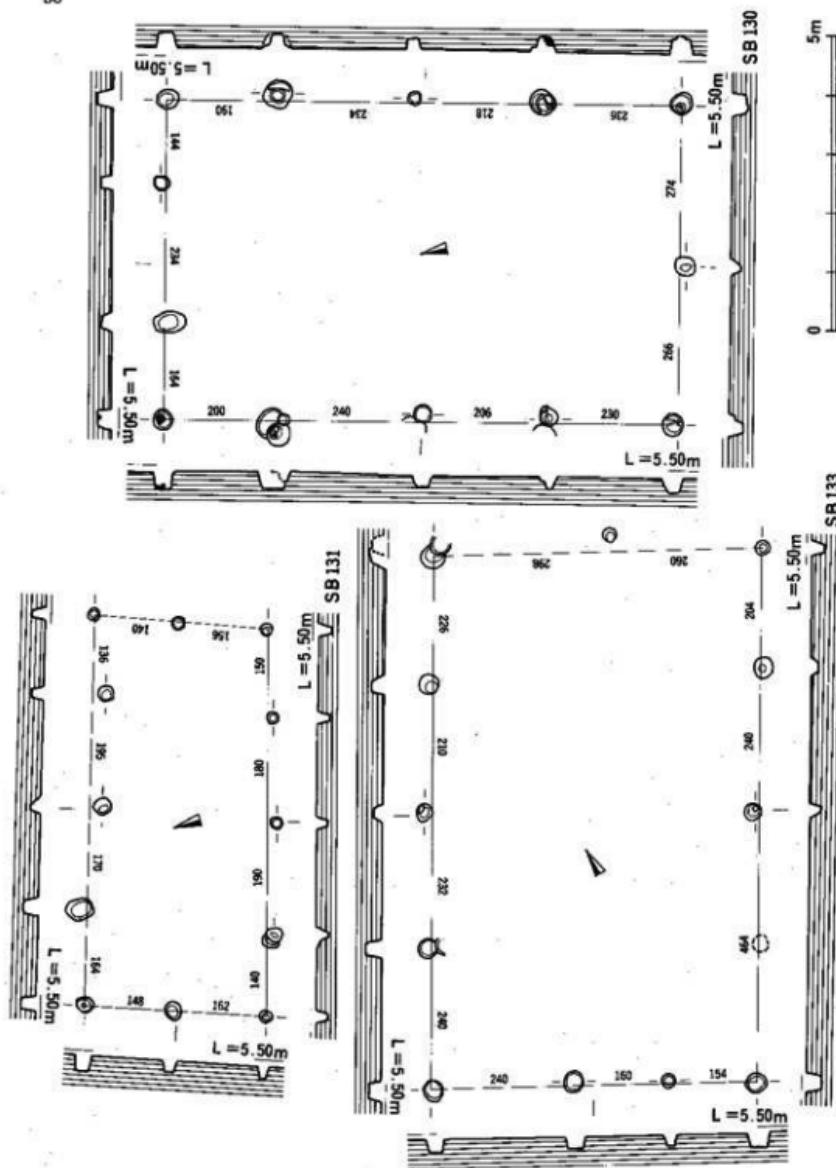


Fig.26 第Ⅱ区橋立柱等物平面および断面図 (SB 130・131・133) (1/100) その14

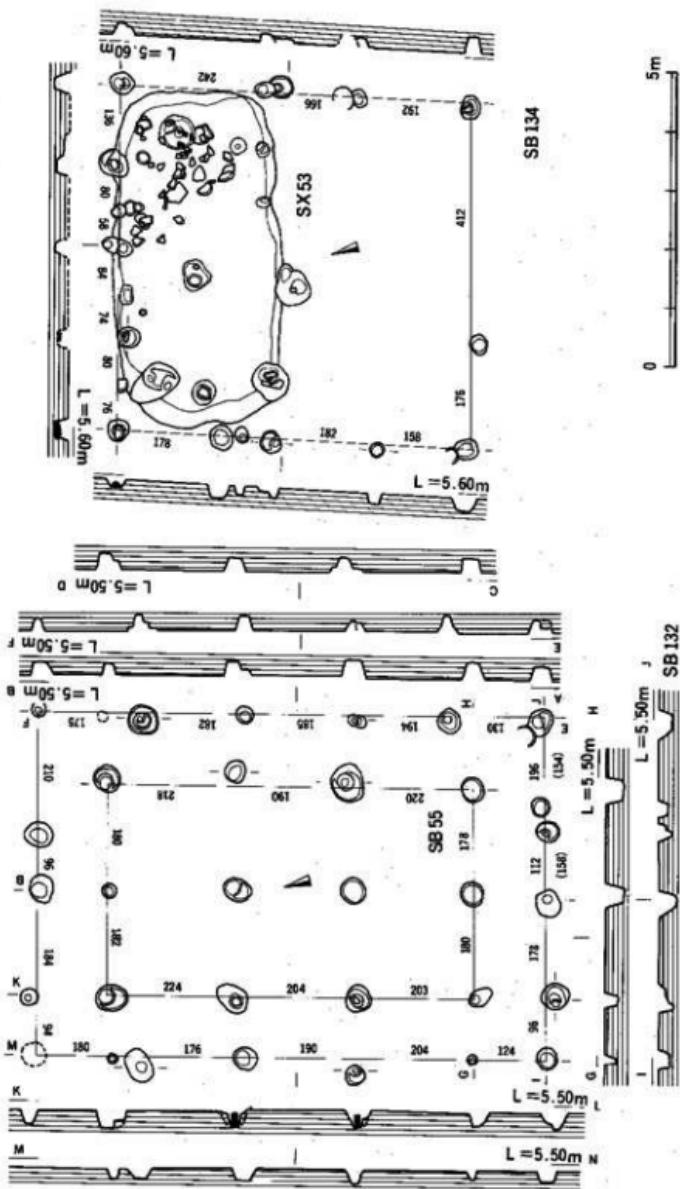


Fig. 27 第II区塊立柱建物平面および断面図 (SB55 (132)・134) (1/100) その15

3) 溝状遺構 (Fig. 11-28-29, Tab. 4-5, 付図 3)

概要 第II区では、溝状遺構はSD01~04・11~18・20・22~60・68の53条が検出された。これらのうち、近現代の溝状遺構は、SD01・02・17・18・29の4条である。他は第II区を構成する主要な遺構である掘立柱建物群・井戸などと同時期もしくは相前後する時期のもので、おおよそ13世紀を中心とした鎌倉時代に含まれる。

他の遺構との関係では、まず掘立柱建物群・井戸等を取り囲んでいるものは、SD11・16・22・23・75である。またSD22・23・24・25・33なども建物群を区画する溝状遺構と考えられるもので、時期的には先のSD11・16・22などとほぼ同じ時期のものである。また建物に付属する雨落ち溝や、排水用溝と考えられるものは、SD04・13・14・31・46・49などがある。これらの遺構よりも後出のものと思われるものは、SD28・29・39・41・42・43・56~59などで、水田に伴う畦溝と思われるものである。時期は明確でないが水田に伴うこれらの溝状遺構は、時期的には掘立柱建物などの時期とはそう離れていないものと思われる。

なお溝状遺構と他の遺構との分布上の関係で注意されるのは、SD11~16に沿って3~6m幅の遺構の空白帯があることである。明確ではないが土壙状の高まりが、溝に沿ってあった可能性もある。以下、主な溝状遺構について個別に説明するが、遺物の出土状況などの詳細はTab. 4-5を参照されたい。

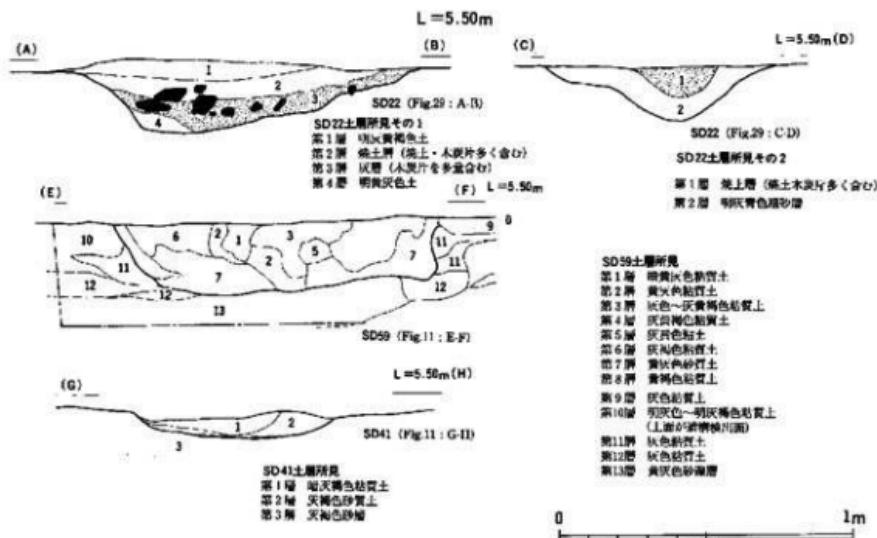


Fig. 28 第II区溝状遺構土層断面図 (SD22・41・59) (1/20)

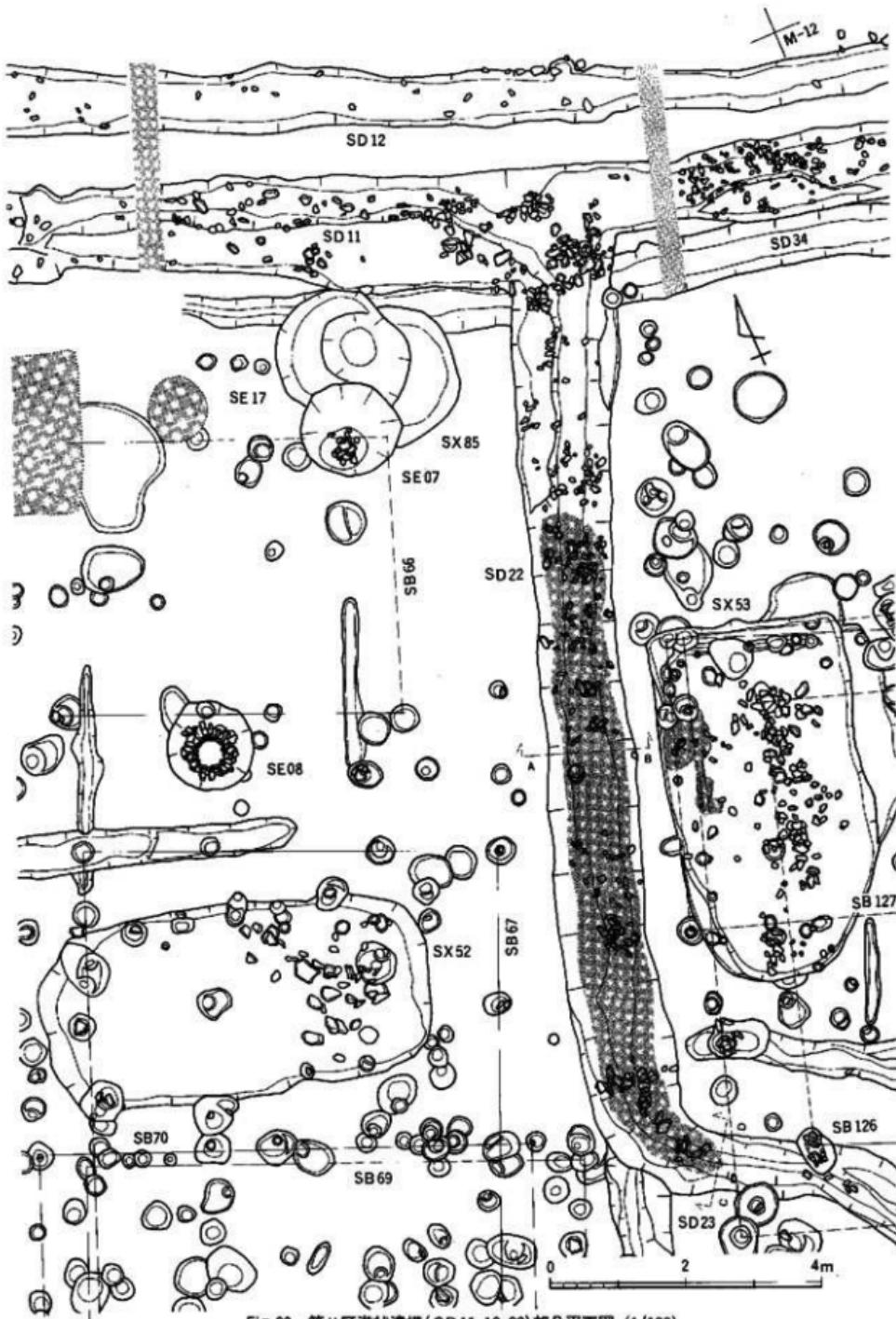


Fig. 29 第II区溝状遺構(SD 11・12・22)部分平面図 (1/100)

SD03 現代の溝状遺構であるSD01に切られている。SX02の東に弧を描くように位置している。長さ6m、幅20~25cm。断面形はU字状である。埋土は暗褐色粘質土で、焼土片を若干含む。

SD04・52 ふたつは同一の溝と思われる。SD13を切っている。SB82・83の間に位置する。南端はSB89まで延びている。断面形は浅皿状。埋土は焼土・木炭片を含む暗褐色粘質土。

SD11、SD12とともに調査区の北側にかかる検出された。現代の灌漑用水路によって上半分以上を削平されている。また近代の杭列SA03によって切られている。SD12との切り合ひ関係は不明。出土遺物からは、時期的な差はほとんどないが、SD12はやや新しいものと思われる。しかしいずれも13世紀後半以降のものである。SD15・16・20などとは一連のものであり、これらの溝とともに、SD11は、建物群の北側を画している溝である。底部の幅は最も広いところで1.5m。深さは20~30cm。溝状遺構の本来の幅は約2~2.5m、深さは1mほどはあったものと思われる。

SD12 SD11と平行して調査区の北側に検出された。出土遺物はSD11と比べて少ない。SD11の埋土が粘質土を主としていたのに対して、SD12は砂質土が主である。

SD13 非常に残りが悪い。SD04に切られている。幅50cm前後で、深さ15~20cmである。この溝は、SD11、SD12と平行しながら、東側から断続的に続いている、SD20・34・68とは同一の溝状遺構の可能性がある。時期の把握できる遺物が出土していないために明確ではないが、北辺のSD11~13などの溝状遺構の在り方を見ると、少なくとも3回から4回にわたって、屋敷地を囲う溝の位置の変更があったことがわかるが、最も古い時期の溝の可能性がある。

SD14 屋敷地の南西側に位置している。SD15に平行して約9mの長さで検出された。幅は60~80cmほどで、断面形はU字形である。深さは30cmほど。建物SB98・99に隣接しており、何らかの関係を持っていたことが考えられる。SB99、SX34から切られている。

SD15 調査区の南側に位置している。SD11・16とは一連のものであり、屋敷地の南側を画する溝状遺構である。長さは約40mにわたって確認された。幅は基底面で0.6~1.6mを測る。現存の深さは最深部で20cmほどで残りは悪い。本来の溝の幅は少なくとも1.5~2mほどはあったと思われる。削平の状況からみて本来の深さは0.7~1mほどか。

SD16 この溝状遺構は、残存条里の坪境に合うもので、また、既に述べたように、古代官道の推定線上に位置しているものである。SD11・15などとともに屋敷地の西側はこの溝状遺構によって画されている。SD11の場合と同様に砂礫、焼土がや日立つ暗灰褐色粘質土を埋土として、小砾や遺物が床面から多く出土しているが、小片が多く、磨耗している。最大幅1.5m。

SD22 第Ⅱ区の中央に位置している溝状遺構で、コの字型に張りだしている。幅は

1.4~1.8mほどで、深さは0.4~0.5ほどで遺存していた。比較的残りは良好である。大量の遺物が溝の床面から中位ほどの深さに堆積しており、また焼土・木炭層などが層をなして見られた。この溝状遺構周辺での切り合い関係は特に顕著で、SD24→SD22、SD23→SD22→SD33→SE13、SD33→SE09、SD22→SB126、SD30→SE12、といった先後関係となっており、屋敷地が東側に徐々に拡大していった過程がわかる。なおSD22のコの字形に張り出した中に、2×3間の掘立柱建物SB128が建てられている。この溝状遺構の張り出し（長さ10m、幅4m）と、建物の機能については、屋敷地全体の平面的な構造の中で考察する必要があると思われる。

SD27~29・39・43~44・56~59 先述したようにこれらは、おそらく水田に伴う畦溝、あるいは畠状遺構と思われるもので、南北に遺存しているものが多い。SD43・44・49以外は、いずれも屋敷地に伴う遺構を切っており、屋敷が放棄された後の土地利用が、水田もしくは畑だったことを物語っている。また逆にSD43・44・49などは掘立柱建物によって切られており、水田ないし畑を整地して居住区を西に拡げたことが予想される。なおこれらの溝で区画されている田園の形状は、条里の一坪の北半分に、南北に長い6列の水田で構成されている。条里における屋敷地の配置と水田の構成が、一定の計画性の下で行なわれたことは否めないであろう。

SD31 SB67・SD27から切られている。掘立柱建物SB134と竪穴遺構SX52の主軸とは平行している。幅は40cm、深さ20cm。埋土は暗褐色粘質土で焼土・木炭片を含む。

SD46・48・53・55 これらはいずれも、掘立柱建物の側柱に平行に隣接して位置する溝状遺構である。壁の立ち上がりは弱く、掘り方も明確ではない。溝内からの遺物は少なく二次的な堆積である。

SD42 この溝状遺構はS X70と同一の可能性がある。沖積地特有の微地形の窪みとも思われる。

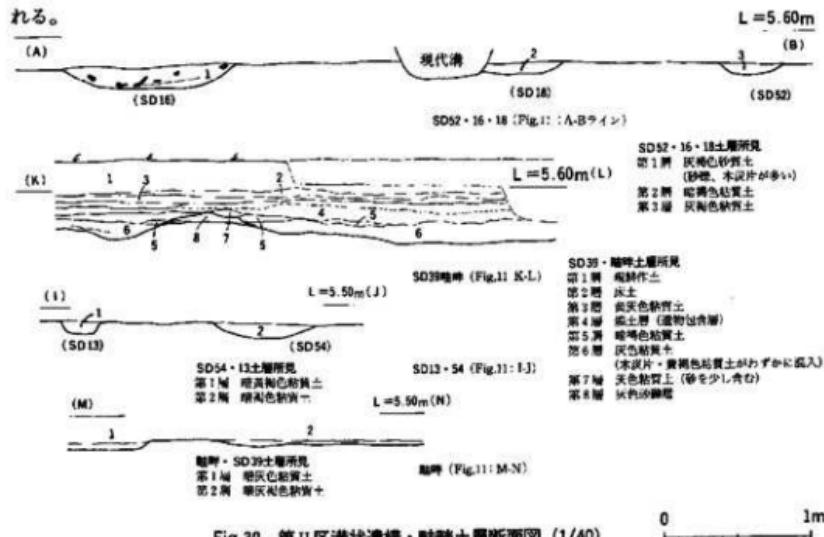


Fig.30 第II区溝状遺構・畦畔土層断面図 (1/40)

Tab.4 第Ⅱ区溝状遺構所見表（その1）

Fig.No	PL.No	地質区分	測量No	測量時No	出土地點	出土遺物	出土遺物 Fig.No	備考
II 付圖3	II b	S D31	S D45	白堊—直(49) 青緑—(同安)第II (後期)第I 上部層—灰、瓦等—鰐	上部層上部 供送層—埋藏、灰 粘土層—縫隙、並 鰐土層、灰			
#	#	S D32	S D46	遺物なし				
#	#	S D33	S D47	土師器—灰、灰 青緑—(後期)第I		71-363-385		
#	#	S D34	S D48	陶器片 土層基—小片	灰牛土層			
#	#	S D35	S D49	遺物なし				
#	#	S D36	S D50	遺物なし				
#	#	S D37	S D51	遺物なし				
#	#	S D38	S D52	土師器—灰、瓦、不明小片 青緑—(同安)第II (後期)第I	土師器—小片 灰牛土層—縫隙、小片		柱穴、遺物を切っている。砂浜。	
#	#	S D39	S D53	青緑—(後期)第II (同安)第I	土師器—灰、瓦、小片 灰牛土層—縫隙			
#	#	S D40	S D54	青緑—(後期)第II (同安)第I	土師器—灰、瓦、小片 灰牛土層—縫隙			
#	#	S D41	S D55	青緑—(同安)第II 土師器—灰、瓦、小片 灰牛土層—縫隙	土師器—第I—小片 粘土層			
#	#	S D42	S D56	土師器—灰 青緑—(同安)第II				
#	#	S D43	S D57	遺物なし				
#	#	S D44	S D58	遺物なし				
#	#	S D45	S D59	土師器—灰 土師器—灰、小片	土師器—小片 土師器—小片			
#	#	S D46	S D60	土師器—灰 土師器—灰、小片				
#	#	S D47	S X120	遺物なし		72-386		
#	#	S D48	S D61	遺物なし				
#	#	S D49	S D63	青緑—(同安)第II 土師器—小片	土師器—小片 粘土層			
#	#	S D50	S D64	土師器—小片	土師器—小片			
#	II c	S D51	S D65					
#	#	S D52	S X41	青緑—(同安)第II 土師器—灰、瓦 土師器—灰、瓦 瓦器—灰	土師器—小片 灰牛土層—縫隙 土師器—灰、瓦 瓦器—灰	瓦器—縫隙 灰牛土層 瓦器—灰	72-386, 391, 394	
#	#	S D53	S X117		上部層—灰 土師器—灰、瓦 瓦器—灰	上部層—灰 土師器—灰、瓦 瓦器—灰	72-386, 392	SD64と平行。 古いまりか?
#	#	S D54	S X118	遺物なし				
#	#	S D55	S X182	青緑—(同安)第II 土師器—灰、瓦 瓦器—灰	土師器—灰 土師器—灰、瓦 瓦器—灰	粘土層 上部層—灰 土師器—灰、瓦 瓦器—灰	72-387	古いまりか? 同じなし。
#	II d	S D56	S D484	土師器—灰、瓦 青緑—(後期)第II	土師器—灰、瓦 瓦器—灰	土師器—小片 瓦器—灰		
#	#	S D57	S D425	青緑—(後期)第II				
#	#	S D58	S D430	青緑—(後期)第II 土師器—灰、瓦 黑色土器—灰	瓦器—灰	土師器—小片		
#	#	S D59	S D4284	黑色土器—灰 先生その他の	瓦器—灰	土師器—小片 土師器—小片	72-393	
#	#	S D60	4365	遺物なし				
#	II c	S D66	S D61	遺物なし				SD11-39から切られる。

Tab.5 第II区溝状遺構所見表（その2）

4) 井戸 (Fig. 31~36)

概要 第II区では、井戸、石組などが遺存していることから、井戸と明確に判断されたのは、6基である (SE 01・04・08・19・22・29)。また井戸側に用いられたと思われる桶のタガや、曲物の破片や石組の一部が出土し、井戸と考えられるものは11基である (SE 07・09・11・12・13・16・17・21・27・28・32)。この他、掘り方の形状、土層堆積の在り方などからみて井戸と推定されるものは、19基である (SE 02・03・05・06・10・14・15・18・20・23・24・25・26・30、SX03・13・23・25・71)。

井戸側に曲物を用いているのはSE 01・04・08・19・22・29、曲物の可能性があるものはSE 07・09・17・21・27・28である。桶を使ったと推定されるものは、SE 32である。残りのも

のについては、井戸の種類は不明である。

これらの井戸は分布地点が3つに大きく分けられる。またそれらの分布の在り方と異なり、星敷地内において、他の遺構に隣接して散発的に点在するものがある。

SE01 (Fig. 31, PL. 10) 埋土上層は明灰褐色シルト層で、一時的に埋まった感がある。井戸基底部は、直径30~40cm程の浅い窪みとなっており、この部分に井戸があったと考えられる。基底面から約5cmほど浮いて、籠と思われるワラ灰が薄く一面にみられ、またその上面に小枝、土師器皿片、木製品がみられた。井戸を埋め戻す際の、なんらかの祭祀行為の証左と思われる。基底面の標高は4.63m。

SE02・03 (Fig. 31, PL. 10) SE02と03との切り合い関係は隣接しているものの不明。埋土はいずれも木炭片を若干含む、灰~暗灰褐色シルトで徐々に埋没した状況である。SE02の基底面には井戸跡と思われる直径30cmほどの浅い掘り込みがある。SE03は井戸と断定する積極的な証左はないが掘り方の形状から井戸と考えた。基底面の標高は4.95m。SE03の標高は4.8m。

SE04 (Fig. 32, PL. 10) 曲物が2段組の井戸。井戸基底面から約10cm浮いた状況で横櫛、土師器皿(糸切り底)、木杭の先端部、竹管、石4点が出土した。井戸を埋め戻すにあたって

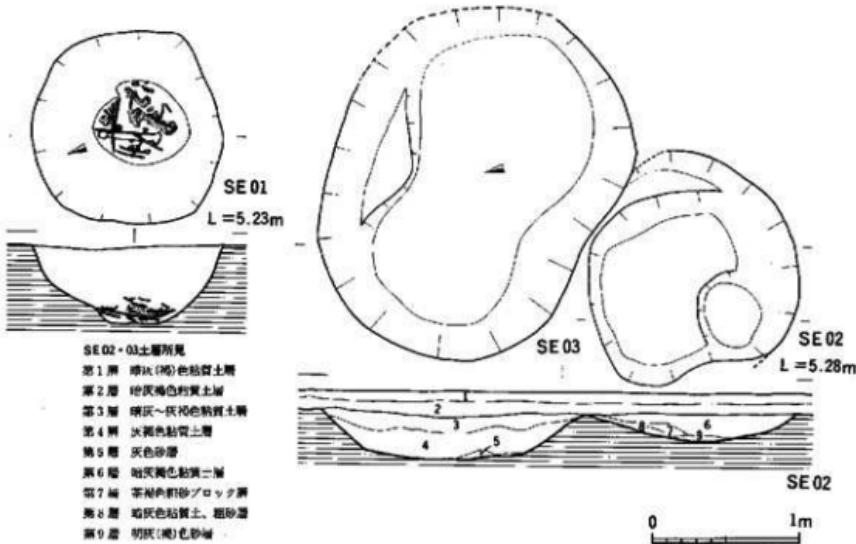


Fig.31 第Ⅱ区井戸平面および断面図 (SE01~03) (1/40) その1

何らかの祭祀が行われた可能性がある。曲物については現場で出土した状況で取り上げた。基底面の標高は4.42m。

SE05 (Fig.32、PL.10) 井戸かどうか明確でないが、掘り方の形状から井戸と判断した。石組井であった可能性がある。井側は何を用いたかは不明。基底面の標高は4.354m。

SE06 (Fig.32) SE01の南東側に位置する。暗褐色シルトを埋土とする。井戸かどうか明確ではないが、掘り方の形状からみて、井戸と考えた。井側は曲物の可能性がある。基底面の標高は4.89m。

SE07 (Fig. 32、PL.20) 遺構の切り合いからみた先後関係はSX131→SE17→SE 07である。埋土は石組に用いていたと思われる自然礫を多く含む。規模はSE08とほぼ同じ。井側は遺存していないが、曲物の可能性がある。基底面の標高は4.50m。

SE08 (Fig.22、PL.20・21) 第II区でもっとも残りの良い井戸である。井側は二段組の曲物で、直径は35cm、高さは35~40cmを測る。井側の裏込めには灰色粗砂、礫を用いて曲物の固定を図っている。井側の中には本来石組に用いたと思われる自然礫が、基底面直上から検出面まで埋没していたことから、石組を破壊して埋め戻したと考えられる。基底面の標高は4.52m。

SE09 (Fig.33、PL.21) 埋土は灰青色シルトが主である。8層に細分でき、層の変化が明確で、漸移的でないことから一時的に埋め戻されたものと考えられる。基底面の中央から東南側に井側の痕跡と思われる直径40~45cmの浅い窪みがある。埋土下部および、基底面から土師器皿(ヘラ切り、糸切り)・木片が出土している。井側は不明。基底面の標高は4.73m。

SE10 (Fig. 33、PL.21) 先後関係はSE10→11→12である。かなり削平を受け、本来の形状は不明。規模はSE07・08と同じ程か。基底面の標高は5.03m。埋土は砂疊層。

SE11 (Fig. 33、PL.21) SE11はSE12から切られている。埋土は木炭片を多く含む灰青色シルトが主となる。カケヤ状の木材片や小枝が井戸基底面から出土している。井側に何を用いたかは不明。基底面の標高は4.85m。

SE12 (Fig. 33、PL.22) SE12はSE10・11を切っている。平面形はやや不定形であるが、曲物の破片が基底面にみられたため、井戸と考えた。SE13と同様に埋土上層に焼土・木炭を多く含む層がみられる。焼土(27層)がSE12を覆っている。基底面の標高は4.89m。

SE13 (Fig. 33、PL.22) 砂疊、焼土、木炭片を多量に含む粘質土を埋土とする。桶の底板と思われる板材が基底部にみられた。石組に用いられたと思われる自然礫が埋土中位に多量にみられた。桶を井側とする石組井だった可能性がある。基底面の標高は4.83m。

SE14 (Fig.34) SE11の北側に隣接する。上部をかなり削平されており遺存状況はあまり良くない。木炭を多く含む暗灰褐色土を埋土とする。曲物片が出土している。基底面の標高

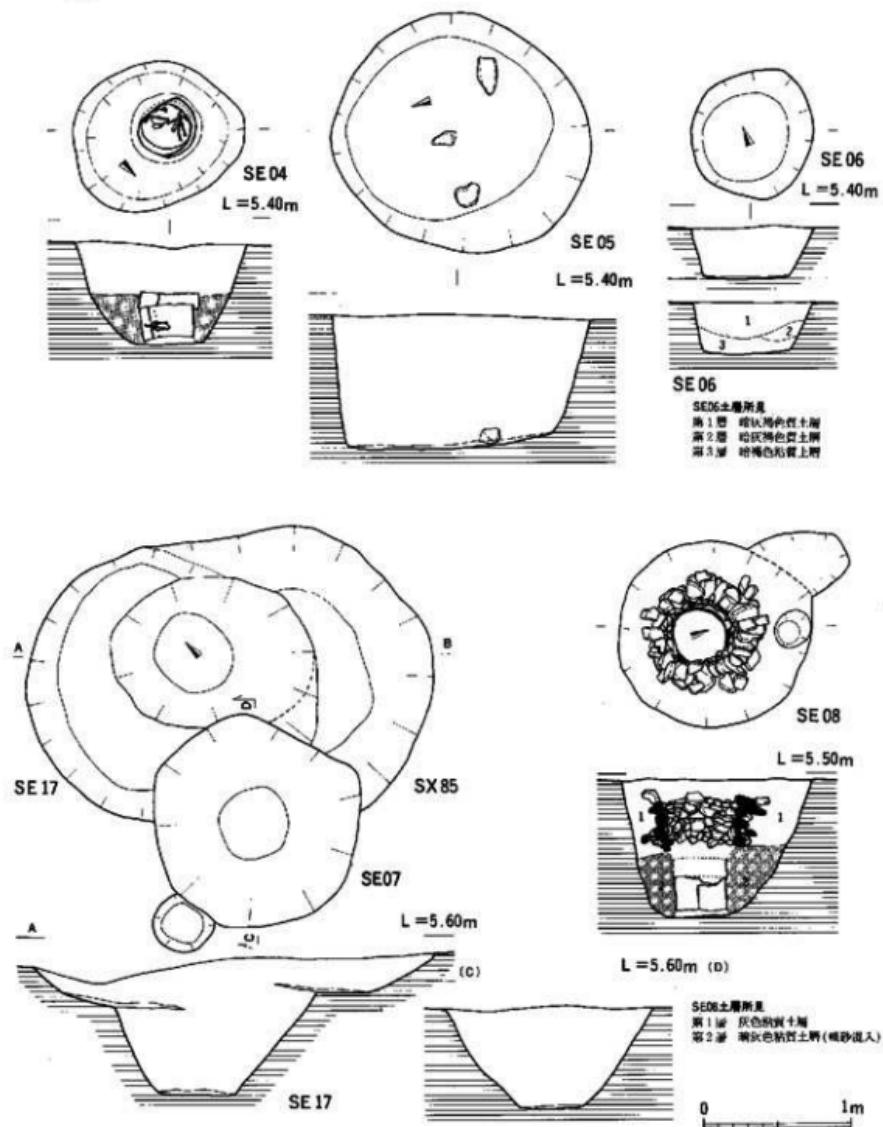
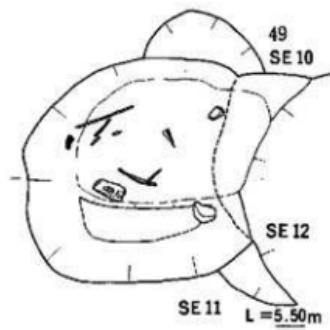
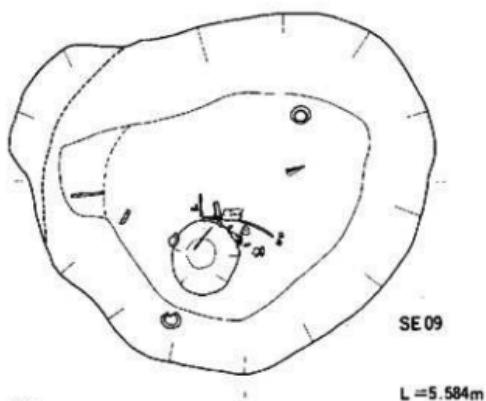


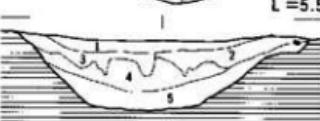
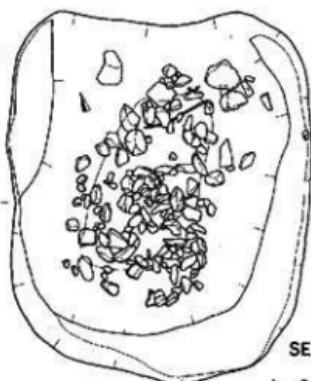
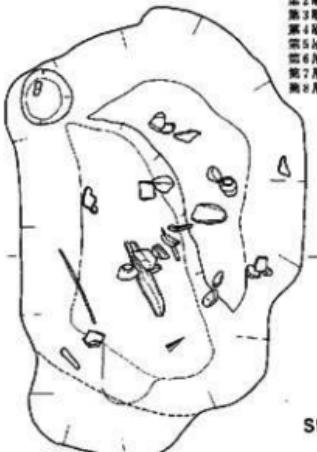
Fig.32 第Ⅲ区井戸平面および断面図 (SE 04~08・17) (1/40) その2



SE 11 土層所見

第1層 細土塊と灰の層
第2層 灰
第3層 灰青色粘質土層
第4層 灰を含む灰青色粘質土層

第5層 灰灰青色粘質土層
第6層 灰青色砂質粘質土層
第7層 灰青色砂質粘質土層
第8層 粘土



SE 12 土層所見

第1層 淡褐色燒土層
第2層 明灰青色土層
第3層 灰青色強烈土層
第4層 灰灰青色強烈土層
第5層 粘土層

SE 13 土層所見

第1層 淡褐色燒土層
第2層 灰青色粘土層
第3層 粘土層
第4層 水帶層
第5層 灰青色砂質粘質土層
第6層 砂層



Fig.33 第Ⅱ区井戸平面および断面図 (SE 09~13) (1/40) その3

は5.08m。

SE15 (Fig.34) SE02の南西部に位置する。井戸掘り方は二段掘りだった可能性がある。井側は何を用いたかは不明。井戸基底面から約10cmほど浮いた状況で土師器(壺・碗)の破片、木枝片が出土。基底面の標高は4.54m。

SE16 (Fig.34) 掘り方の規模は比較的大きい。埋土は青灰色シルトが主である。一時的に埋まった可能性がある。掘り方中央に井側部分と思われる直径70~80cm、深さ10cmの窪みがある。井側は何を使ったかは不明。基底面の標高は4.25m。

SE17 (Fig. 32, PL, 20) SE07からその南半分を切られている。SD34を切る。掘り方は二段掘り。規模はSE07よりやや大きい。埋土は自然縛を多量に含む灰色砂質土。縛の堆積の仕方から、破壊されて埋め戻された可能性がある。基底面の標高4.53m。

SE18 (Fig. 34, PL, 30) 第IIc区の南東部に位置。屋敷地全体の位置関係では、もっとも東に分布するグループに属する。掘り方は二段掘り。梢円形の大きな掘り方の中に、大小2つの井側部分と思われる掘り方がある。大きい掘り方は直径100cm前後、深さ34cmで、SE01と同様にワラ灰が薄い層でみられる。木杭が出土。井側は不明。基底面の標高4.70m。

SE19 (Fig. 34, PL, 30) 切り合い関係はSX80→SE19。埋土は暗灰~暗灰褐色粘質土で、木炭を多く含む。一時に埋没したもの。井戸基底面からほぼ直立させて、直径3cm程の1本の竹管が立ててあるのが確認できた。また笹竹・曲げ物・焼けた自然縛などが投棄された状況で埋土中位に出土。これらは、井戸の埋め戻しに伴う祭祀行為の痕跡と思われる。基底面の標高4.47m。

SE20 (Fig.34) 埋土は暗灰褐色粘質土。木炭を若干含む。一時に埋もれたと思われる。比較的掘り方は大きい。基底面には中央部にわずかな窪みがみられ井側の存在が考えられる。基底面の標高4.82m。

SE21 (Fig.35, PL, 40) 27層下面で検出。埋土は10層に細分できる。4~7層にワラ灰が薄く堆積している。一時に埋め戻されたもの。井側は曲物の可能性がある。7~10層に遺物が多く見られる。SX4289(水田土壤)を切っている。基底面の標高は4.85m。

SE22 (Fig.35) 検出面は木炭層(27層)下に薄く(4cm厚)堆積している暗褐色粘質土下面。掘り方上面はかなり崩落。原形を止めていない。基底部には曲物が二段に組んでいた痕跡が見られた。井側の直径は28~35cmほどで、高さは20cm以上はあったと思われる。岡の12層から上層は一時に埋め戻されたと思われる。基底面の標高は4.71m。遺物は二次堆積。

SE23 (Fig.50) SE22と同様検出面は木炭層(27層)下に薄く(4cm厚)堆積している暗褐色粘質土下面。平面形は円形。基盤は粗砂層上。切り合い関係はSX97→SX88→SX87→SE23。埋土は8層に細分される。一時に埋没したものか。基底面の標高は4.98m。

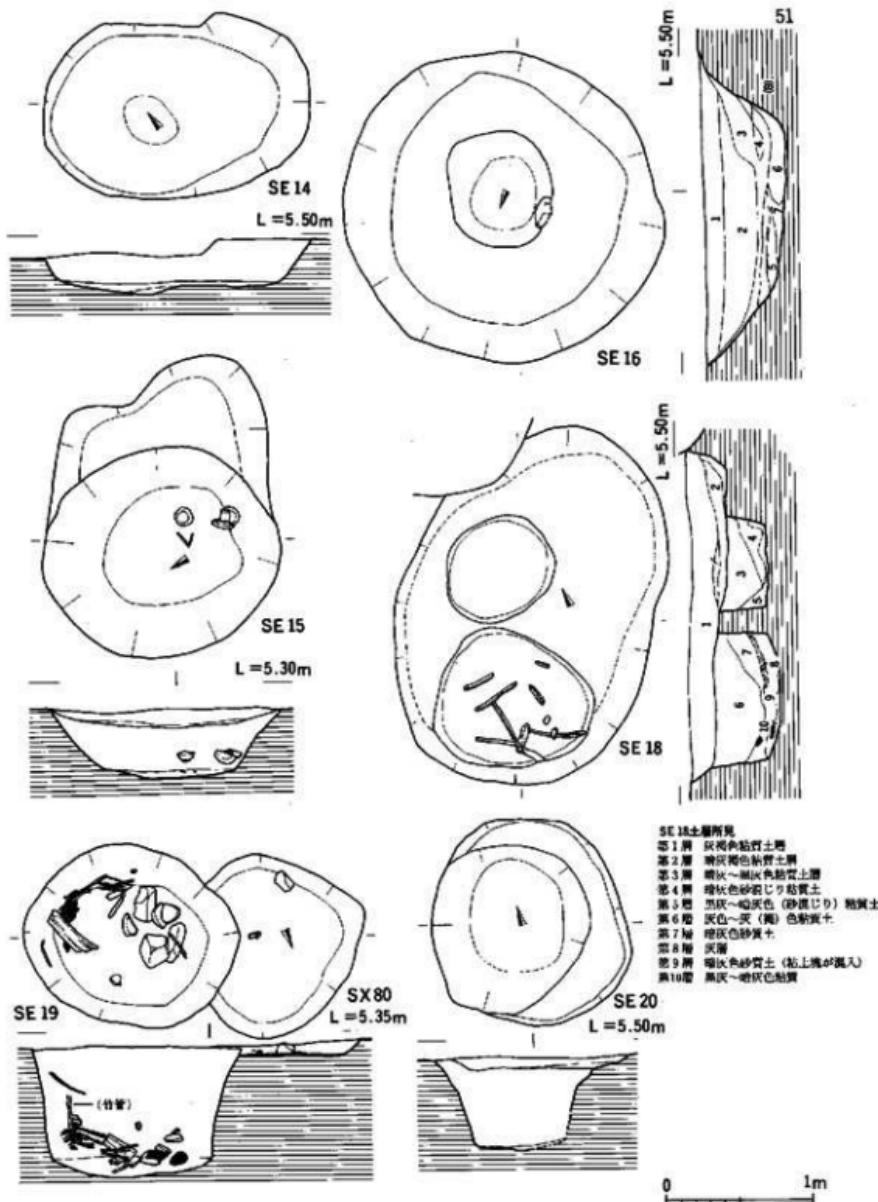


Fig.34 第Ⅲ区井戸(SE 14~16・18~20)、堅穴遺構(SX 80)平面および断面図(1/40)その4

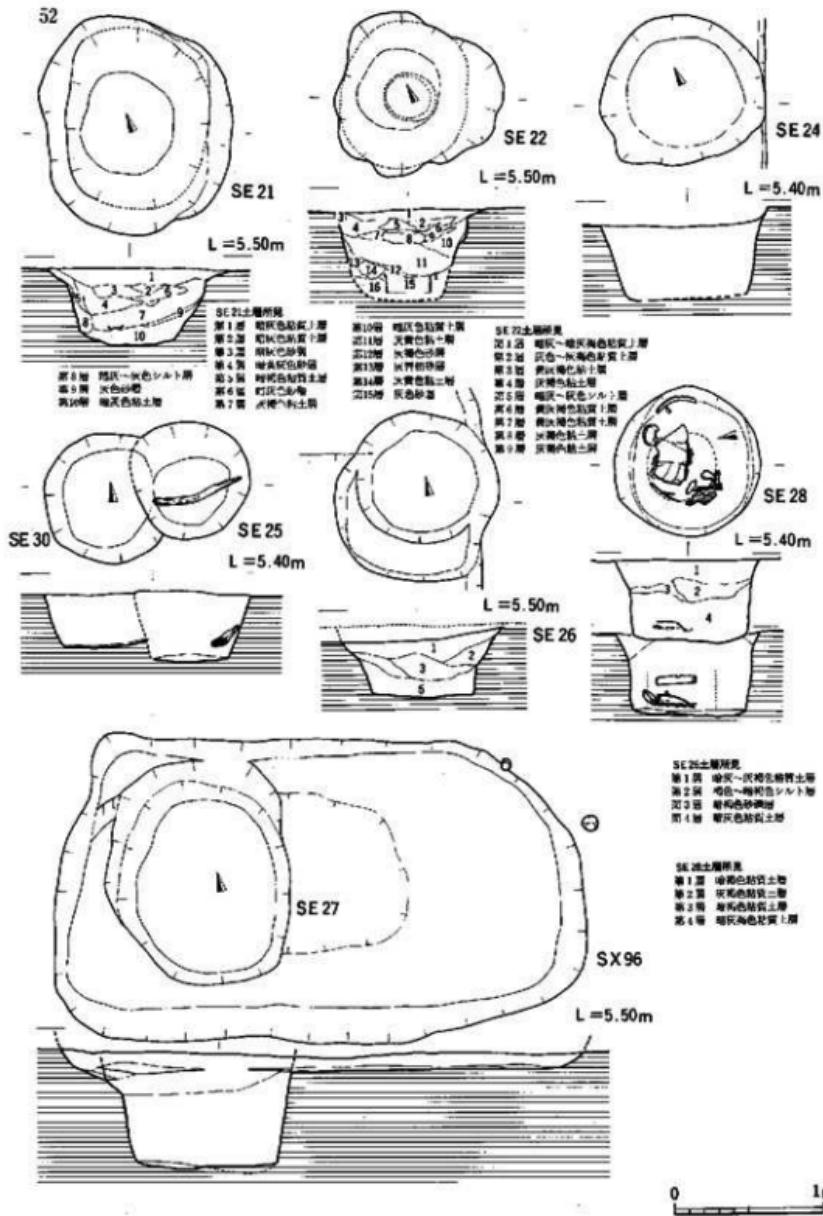


Fig.35 第Ⅱ区井戸平面および断面図 (SE 21・22・24~28・30) (1/40) その5

SE24 (Fig. 35) 平面形は円形。埋土は暗灰色シルトの単純層。一時的に埋没した可能性がある。井側は不明。現湧水面は4.87m。基底面の標高は4.98m。

SE25 (Fig. 35) 切り合い関係はSE30 → SE25。井戸と考えられる中では最小のものである。平面形は円形。埋土はSE23・24と同じ暗灰色層で一時的に埋没した可能性がある。井側は不明。杭が掘り方内に1本山上。基底面の標高は4.86m。

SE26 (Fig. 35) SE26はII b～d区に広がっている水田よりも後の時期のものか検出時の上面は砂礫を多く含む暗灰褐色土で、水田と同じレベルで下げているうちに輪郭がはっきりしてきた。平面形は円形。現湧水面は5.05m。基底面の標高は4.90m。

SE27 (Fig. 35) SE27はSX96 (SX4349)との切り合い関係は不明。同一の遺構の可能性がある。床面まで掘り下げた段階で平面形を確認できた。埋土は軟質の青灰色粘質土。基底面の標高は4.57m。

SE28 (Fig. 35, PL. 40) 埋土は4層に細分されるが、ほとんど同質の灰褐色土。床面から5cmほど浮いた面に土師皿・甕・ワラ灰・木片などが層をなしてまとまって出土した。埋め戻しに伴う祭祀の跡か。井側は曲げ物。基底面の標高は4.75m。

SE29 (Fig. 36, PL. 40) 平面形は円形。埋土は6層に分かれる。井側内にある程度土が堆積し、使用されなくなった段階で一時的に埋没している。井側の直径は38～40cmで、二段組である。井側の底には竹製の編物が敷かれ、1本の杭が17～20cmほど浮いて出土。現湧水面4.96m。基底面の標高は4.78m。

SE30 (Fig. 35) SE30はSE25に切られている。平面形・規模とともにSE25とよく似る。埋土は灰褐色粘質土で砂がやや目立つ。一時的に埋没したもの。基底面の標高は4.91m。

SE32 (Fig. 35) 掘り方は比較的大きい。砂礫層を掘り廻めている。桶組井の可能性がある。井戸基底面に桶のタガが残る。基底面の標高は4.34m。埋土は砂礫が多く混入する灰色シルト層。一時的に埋没した状況を示している。

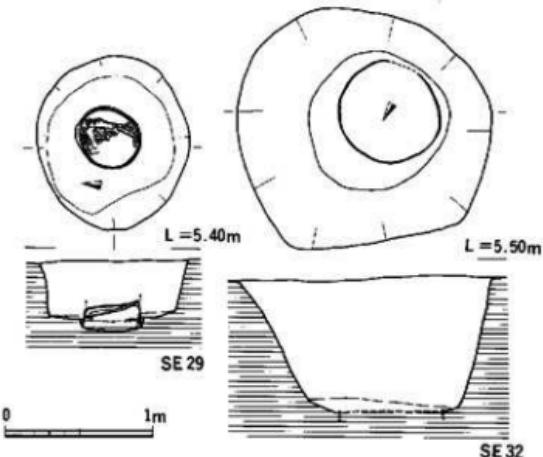


Fig. 36 第Ⅱ区井戸平面および断面図 (SE 29・32) (1/40) その6

Fig No.	Pl. No.	東北区	南側No.	南北幅(長×幅×高さ)	出土遺物		出土地点No.	図
					横段	寸法(長×幅×高さ)		
31	10	II b	S E01	S X81 1.32×1.30×0.28 (N 1) 1.23×1.13×0.19 (N 2)	土壌一环 小片		73-395	645
31	10	"	S E02	S X85 1.44×1.59×0.23	青磁一柄 (平安1)、頭面骨一箇跡、土壌質土器 土壌器一小片、陶生土器一小片			647
31	10	"	S E03	S X86 2.34×2.18×0.47	白磁一柄 (IV, VI)、青磁一柄 (平安1) (底扁 1)・底 (平安1)、頭面骨一箇跡、土壌質 土器、瓦器一箇跡、土壌質土器、頭面骨跡、青磁 土器		73-396~398	647
32	10	"	S E04	S E04 1.17×1.62×0.70	青磁なし		73-281	654
32	10	"	S E05	S X92 1.78×1.63×0.91	青磁一柄 (平安1) (底扁1)、土壌器一环、土壌 質土器、頭面骨一箇跡、輸入陶器一箇、小片、白磁 一箇、小片、陶生土器		74-402	638
32		"	S E06	S X 150 ↓ 185	青磁十指輪、青磁一箇 (平安1)			644
32	20	II b	S E07	S E07 1.41×1.40×9.50	白磁一柄 (V)、平底五、青磁一柄 (平安1)、 环 (横1, II)、土壌器一环、瓦、土壌質土器、 瓦器一箇跡、环、輸入陶器一箇、小片、合子、 青磁十指輪	73-399 74-403	652 653	
32	20~21	"	S E08	S E08 1.31×1.27×0.94	二段第二、三、四、小片、青磁、碗 (歌鹿)、白磁 一小片、陶生土器一小片、粘土層			654
33	21	"	S E09	S E09 2.68×2.47×0.83	白磁一柄 (IV)、青磁一柄 (平安1) (底扁1, II)・底 (同上)、土壌器一环、瓦、小片、瓦器 一箇、陶生土器、石碗、十指輪十指、頭面骨跡 瓦器一箇、盆、押切、輸入陶器一箇、近世給付、 駄馬	73-400~404 75-530	655	
33	21	"	S E10	S E10 0.82×0.83×0.15	青磁なし			657
33	21	"	S E11	S E11 1.57×1.52×0.50	土壌器一环、瓦、瓦器一箇、青磁一箇 (平安1)、 土壌質土器、頭面骨一箇跡、瓦器一箇、輸入陶器 一箇、青磁	75-431	656	
33	22	"	S E12	S E12 3.09×2.93×0.57	青磁一柄 (同上) (歌鹿)、瓦 (平安1)、土壌器 一箇、环、瓦、土壌器一环、土壌質土器、合子、青 磁、頭面骨跡、瓦器一箇、輸入陶器一箇、近 世給付、駄馬	75-432~450 76-457, 467	657	
33	22	"	S E13	S E13 2.53×2.05×0.54	青磁一柄 (平安1)、土壌器一环、青磁一箇 (歌鹿)、 土壌質土器、青磁	75-456 76-458~465	658	
34		"	S E14	S E14 1.80×1.46×0.28	青磁一箇 (平安1)、土壌器一环、瓦器一箇、 环、瓦器一箇、青磁	76-466	193	
34	II a	S E15	S X75	1.44×1.59×0.23	青磁一箇 (平安1)、土壌器一环、白磁一箇、 环、瓦器一箇、青磁	77-472~475	655	
34	"	S E16	S X87	2.19×2.12×0.57	青磁なし		648	
35	20	II b	S E17	S X130 ↓	土壌器一环、瓦、土壌質土器、瓦器一箇、南朝一 环、頭面骨一箇跡、青磁十指輪、土壌質土器、青 磁一箇 (平安1)	76-470 77-478	191	
34	30	II c	S E18	S X138 ↓	青磁一箇 (歌鹿)、瓦 (平安1)、小片、 青磁一箇 (平安1)、土壌器一环、瓦器一箇、青 磁一箇、青磁十指輪、木片		679	
34	30	"	S E19	S X138 ↓	頭面骨一箇、土壌質土器、土壌器一环、环、小片、 青磁十指輪、青磁	75-469 76-470 77-478	164 173	
34		II d	S E20	428(S)	土壌器一环、瓦、环、瓦器一箇、小片			684
35		II d	S E21	428 (S)	青磁一箇 (平安1)、土壌器一环、环、瓦、 小片、土壌質土器、輸入陶器、青磁土器、粘土塊	77-477~483	686	
35	49	"	S E22	428(S)D	瓦器一箇、土壌器一环、小片			686
50	"	S E23	428(S)D	1.05×1.09×0.34	土壌器一环、青磁一箇 (歌鹿)			689
35	"	S E24	4313540	1.12×1.03×0.63	青磁なし			691
35	"	S E25	4313545	0.82×0.79×0.48	土壌器一环、瓦、十指輪十指			693
35	"	S E26	4313550	1.15×1.12×0.56	土壌器			694
35	"	S E27	4346635	1.17×1.39×0.54	青磁なし			695
35	"	S E28	4346635	1.03×0.99×0.52	土壌器一环	77-484	696	
35	"	S E29	4346635	1.20×1.04×0.49	土壌器一环、瓦、瓦器一箇、土壌質土器、合子			697
35	"	S E30	4414525	0.89×0.86×0.36	土壌器一环			698
36		III	S E31	S X47 ↓	土壌器一环、瓦、小片、先生十指、近世陶器、そ の他の白磁 (S X37と兼内)	104-701, 702 715 717	271	
36		II d	S E32	S X59 ↓	青磁一箇 (平安1)、瓦、先生土器、十指輪一环 瓦器、土壌質土器、輸入陶器、先生十指、石碗、粘 土塊、瓦	77-485	637	

Tab. 6 第Ⅲ・Ⅳ区井戸所見一覧表

(備考欄の数字は原図番号)

5) 土壙 (Fig.37・38, Tab.7)

第II区では、堅穴遺構が109基確認された。その内、出土遺物や形態的な特徴から、墓址または地鎮などに関する掘り方と思われるものについては土壙 (SK) として類別した。109基に関する分類については、6) 堅穴遺跡(58頁)を参照されたい。ここでは土壙とした9基について説明する。第I区では副葬または供獻と思われる遺物の出上があったが第II区でみられなかつた。これらはいずれも鎌倉時代の所産である。なお法量や遺物の出土状況についてはTab.7を参照のこと。

SK01 屋敷地の南西隅で検出された。平面形は端正な長方形で、明確な掘り方をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で北東隅近くに扁平な自然縫が見られた。出土遺物は土師器破片などが二次混入で出土。埋土は暗褐色粘質土。墓址の可能性がある。

SK02 同じく屋敷地の南西部に位置する。平面形は北東部が少し張り出した長方形である。掘り方は明確で、壁の立ち上がりは垂直に近い。床面は平坦である。北東部は柱穴によって切られている。遺物は二次混入によるもので土師器破片が主である。埋土は暗灰褐色土。

SK03 屋敷地の南西部に形態的によく類似した堅穴が比較的集中している。SK01～03はその分布に含まれる。平面形は長めの不整な長方形。SP743・735から切られる。釘の破片が出土している。断面形は台形である。床面は平坦。

SK04 屋敷地の北西部で検出。掘立柱建物SB80の西側倒柱の柱筋中央に位置している。遺存状況は良くない。平面形は隅丸の不整な長方形である。埋土は暗褐色粘質土。SB80から切られている。

SK05 SK04の北西に隣接する。掘立柱建物SB81の北東隅部に位置している。平面形は不整な隅丸の矩形。掘り方は比較的明瞭。埋土は木炭片を多く含む暗褐色粘質土。遺物は二次的混入による。床面は平坦。

SK06 屋敷地の東端に位置する。この周辺は堅穴遺構を始め、遺構が集中している地点である。平面形はやや大きな隅丸長方形である。床面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。遺物は土師器小片が二次堆積で出土。埋土は暗灰褐色粘質土。

SK07 SK06よりやや小さい。掘立柱建物SB52の北西隅部に位置している。端正な長方形である。SB53を切る。埋土は3層に分かれる。第2層は木炭層である。床面は平坦である。

SK08 掘立柱建物SB55・132の南東部にかかっており、SB132を切っている。平面形はやや歪んだ長方形。断面形は逆台形。床面は平坦。砂礫がやや目立った。埋土は暗灰褐色。

SK09 屋敷地の南東部に位置する。堅穴遺構SX93の南側に隣接している。平面形は南東部がかなり張りだした矩形である。残りは悪く、深さは約8cmほどしか残っていない。埋土は暗灰褐色粘質土で、木炭片を多く含んでいる。遺物は二次的混入である。

Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	測定No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土物Fig.No	備考
37		II a	SK01	SX102	1.82×0.36×0.19 楕円長方形	青磁一輪(切安II)、白磁片、上部唇一环、土 器底質土器		248
37		x	SK02	SX108	1.46×1.17×0.17 不整な方形	白磁一輪(切安)、瓦器底、青磁一輪(切安)、土 器底唇一环、土器底質土器、瓦器底、陶器、粘土 瓶	78-486, 488	236
38		x	SK03	SX111	1.46×1.17×0.17 小整な長方形	遺物なし		27
38		x	SK04	SX153	1.46×1.17×0.17	遺物なし		30
38		x	SK05	SX14	1.46×1.17×0.17	遺物なし		223
38	31	II c	SK06	SX155	1.46×1.17×0.17	青磁一輪(切安I, II)、土器底一环、环、上部 唇土器、朱生土器片	78-487	681
38	31	x	SK07	SX156	1.46×1.17×0.17 楕円長方形	土器底一环、环、环又は瓶、瓦器一小片、土器底 土器、劣性上器、粘土瓶		675
38	31	x	SK08	SX180	1.46×1.17×0.17 内 环	青磁一輪(切安I)、朱生土器		182
38		II d	SK09	4331SB	1.46×1.17×0.17 不整矩形	瓦器一輪		189

Tab. 7 第II区土壤所見一覧表

(括弧内の数値は原図番号)

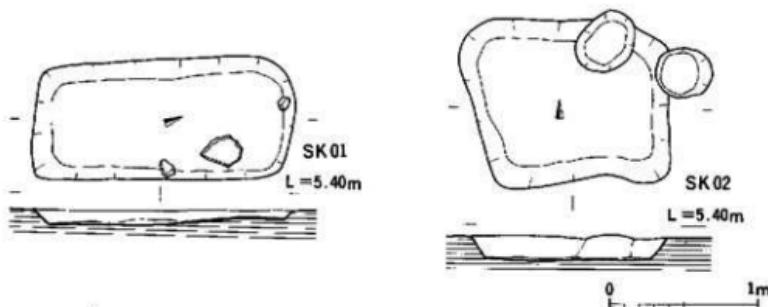


Fig.37 第II区土壤平面および断面図 (SK01・02) (1/40) その1

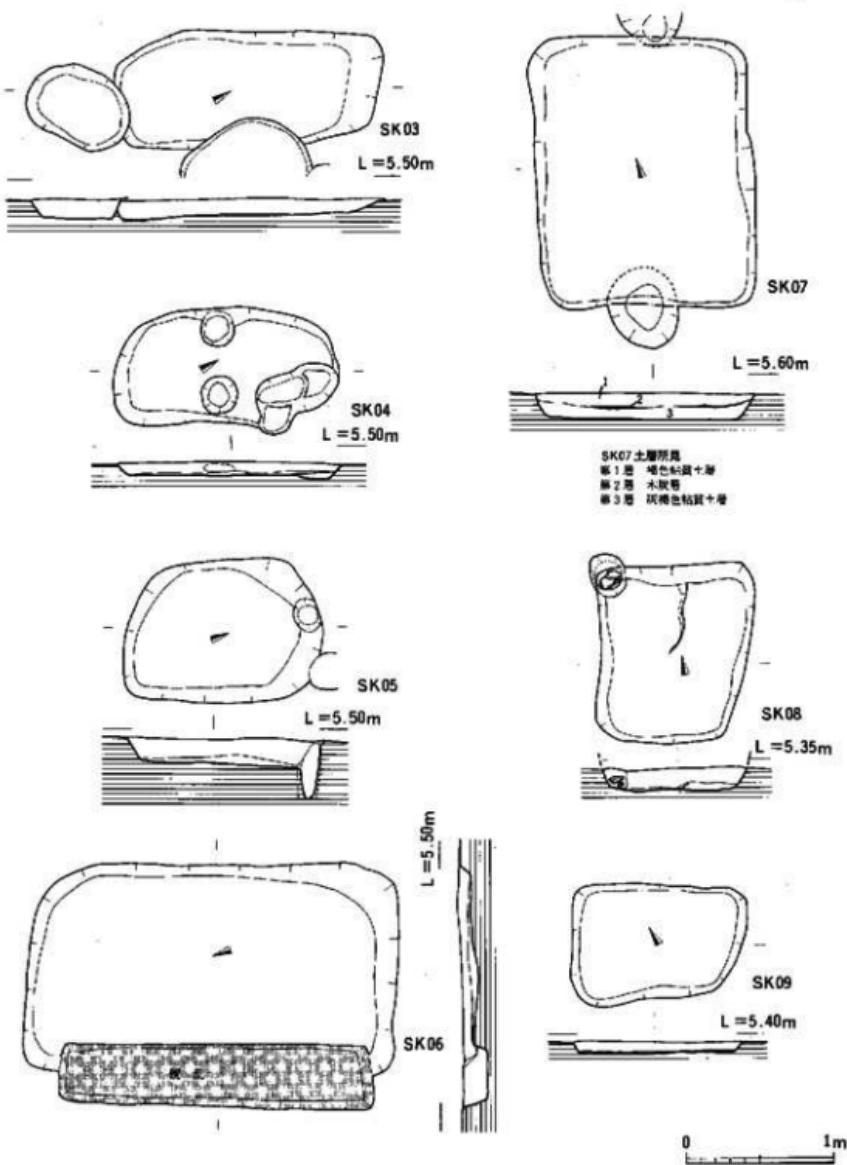


Fig.38 第Ⅲ区土壤平面および断面図 (SK03~09) (1/40) その2

6) 壓穴遺構 (SX) (Fig. 37~50, PL. 11~13, 23~25, 31~38, 46・47, Tab. 8~10,
付図1・3)

概要 第II区からは大小様々な壓穴遺構が140基検出された。そのうち、すでに述べた井戸31基、土壤9基以外の100基については、その性格・機能が明確でないものである。これらは形態、規模において多様であり、平面形は方形、長方形、円形、梢円形、あるいは不定形で、掘り方の断面形は浅皿状、船底状、逆台形状などとなる。また規模はおおよそ長さが1m前後から約5mほど、幅が0.5mほどから3m前後ほどを測る。

これらの壓穴遺構の分布は先に述べた建物群を囲う方形区画の溝の内にあるものと、外に分布するものがある。区画溝の内側では、どちらかといふと建物群の周辺に、溝に沿って分布する傾向がある。分布上の偏りは特に際立ってはいないが、区画内の南西部と東北部にまとまっている。

形態的な種類の違いによって若干の分布上の異なりがある。建物に隣接して、建物の一部、もしくは建物と何らかの関係を持っていると考えられるもの(SX01・53・53など)や、また畦間に沿っている長大な壓穴遺構もある。これらの分布の形成過程、壓穴遺構間、および他の遺構との関連については項を改めて述べる。

ここでは100基の壓穴の形態的な特徴や遺物の出土状況等から第I区の報告時に行なった分類基準に沿って以下のように分類を行い、性格づけにあたっての目安とし、遺構所見については種類ごとに概略的に述べてゆく。なお個別の遺構所見、遺物の出土状況、他の遺構との切り合い関係などの詳細についてはTab. 8~10を参照されたい。

1類 (Fig. 47・50)

SX 64・100の2例がある。

平面形は長梢円形で、断面形は逆台形や浅皿状のもの。長さは1.5~2m前後で幅は狭い。第I区と比べて検出例は少ない。第I区では遺物が多量に出土するものと、少ないものとがあったが、第II区ではいずれも遺物の出土は少なく、出土状況は二次的な流れ込みによるものである。溝状遺構が部分的に残存したものとも考えられる。特にSX100は、SD41もしくはSD49の南側延長部の可能性がある。

2類 (Fig. 41・42・43・45・47・49・50)

SX 15・17・19・22・24・31・32・34・45・46・47・62・63・89・90の15例がある。

平面形は隅丸長方形、もしくは不整梢円形で、掘り方の規模は小さく、法量は長さ0.7~1.0m、幅0.5mほどである。柱穴よりも一回り大きい掘り方である。木炭片・焼石・焼土を多く含むもの(SX19・24・62)、壓穴内壁が火を受け赤く変色し、固くしまっているもの(SX40)などが特徴的なものとしてあげられる。他はほとんどが焼土・木炭片をわずかに含む暗褐色を

埋土とするもので、遺物も二次的な流れ込みによる堆積のものが多い。第Ⅰ区では、焼土・木炭片を多量に含むもの、鉄製刀子を納めているもの、土師器の壊ないし皿の完成品や青磁碗が埋置されるものなどの例がみられたが、第Ⅱ区では、意図的な遺物の埋置が窺われる検出例はない。

この2類のうち溝状遺構の区画外のものは、SX15・17・19・22・31の5例で、その他は区内に分布している。区画外のもののうち、SX31以外は、井戸等の他の遺構とともに西側にまとまっている。区内のものは散発的であり、分布的なまとまりはない。SX45～47・62・63などは掘立柱建物の側柱の柱筋に位置しており、建物に伴っている可能性がある。ただし構造物として建物の付属施設のような大きさのものでないために、その性格は不明である。建物の建設や解体に伴う地鎮などの祭祀行為の証左とも思われる。また、図示していないが、柱穴と見なした中で、同じ規模のものがあり、数的に多かったことが考えられる。

3類 (Fig.37・38・44・45・50)

SK 01～09の9例と、SX37・38・41・50・(82)・94の6例がある。(())内の番号の豊穴は図示していない。以下同じ)

平面形は、長辺がやや短な寸ばかりの長方形、もしくはやや長めの長方形である。いずれも

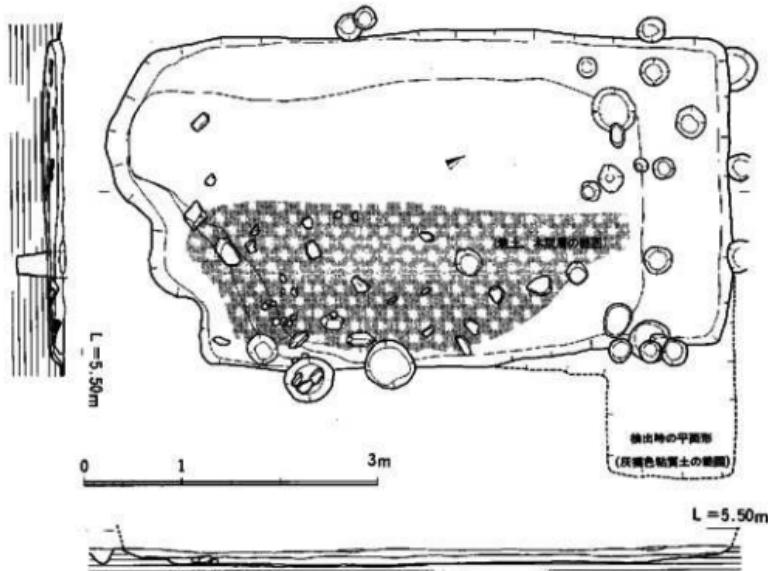


Fig.39 第Ⅱ区豊穴遺構平面および断面図 (SX01) (1/60) その1

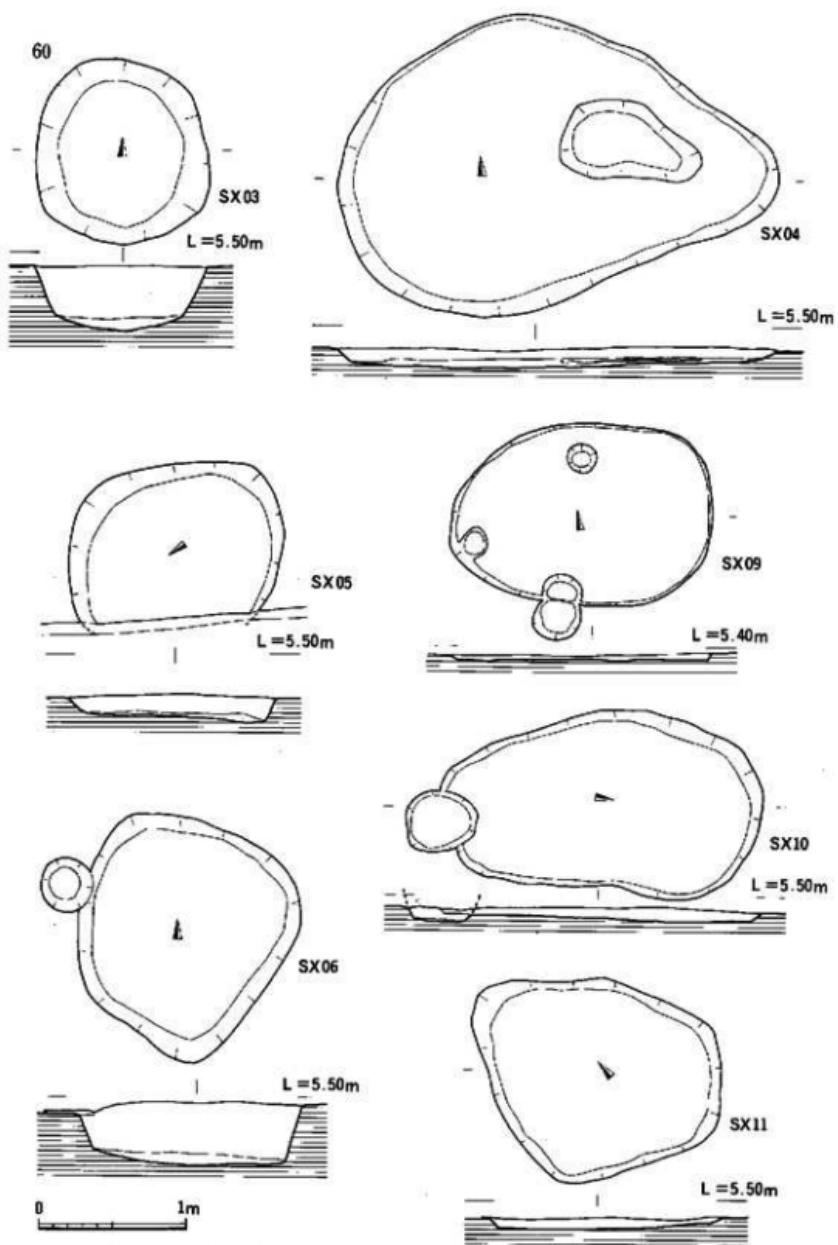


Fig.40 第II区整穴造構平面および断面図 (SX03~06・09~11) (1/40) その2

明確なきちっとした掘り方を持ち、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。長さが1.2~1.7m前後、幅が0.7~1.0mを測る一群と、長さが1.8~2.3m前後、幅が1.2~1.5mほどのやや大きなものがある。

第I区では、土師器皿・壺や青磁碗、青銅製鏡などを埋置しているものはほとんどがこの種類のものである。すなわち木棺墓または土塙墓などの墓址、あるいは地鎮などの祭祀用竖穴と推定されるものである。しかし第II区では、副葬品もしくは供獻と考えられるような遺物の出土例がないために、土塙墓・木棺墓などの墓址かどうか積極的に断定できない面がある。また、釘が出土したことにより、木棺墓と予想された中には、平面形がやや不整な長方形のものもあり（SK53など）、竖穴の形態のみでは、当然ながら性格を判断できない面がある。しかしこれに述べる4類などとは、総じて掘り方、遺物の出土状況などが異なっていることが指摘でき、この種の竖穴造構のもつ特性と考えられる。

区画内のものは、SX37・38・82・94で、先に述べた土塙も併せてその分布をみると、区画内の南西部に多く集まっており、密度が高いが、掘立柱建物と重複しながら散発的に、区画内全体にみられる。埋土は木炭片、焼土を含む暗褐色粘質土のものが多い。

4類 (Fig. 41~43・45・47・49・50)

SX 02・03・05・12・13・14・23・25・27・29・30・33・35・36・39・40・(42)・40・44・48・49・51・65・66・67・68・69・71・76・78・79・80・81・84・86・99の35例がある。

これらは平面形が不整な円形または梢円形になるものである。

また同じく平面形が不整な円形または梢円形で、やや大きなものは、以下の11例ある。

SX 06・09・10・11・26・75・85・87・88・97・98。

これらはいずれも、生活残滓物の廐棄用の穴として掘られたものと考えられるもので、埋土中には炭化した木片、焼けた礫石、焼土等が投棄された状態で出土する例が多い。ただしこれらの出土量は多量ではないが、土器類は土師器の皿、壺の破片が主である。陶磁器は概して少なく、出土した場合でも、二次的な流れ込みによる出土例がほとんどである。また礫のみが多量に出土しているものもある。

なお4類とした中で、掘り方の形態から考え、井戸と考えられるものが数例ある（SX03・13・23・25・71）。井戸の項で述べたように、これらは、井戸と確定できるものではないが、平面および断面形態や、土層断面などの共通性から井戸と推定できるものである。いずれも埋土は一時的に埋め戻されたものと考えられる。

分布をみると、区画内の北東部～東部、南西～西部と、区画内の西隣に比較的まとまっている。建物群との重複はあまりなく、むしろ意識的に距離を保ち分布している点は、遺物の出土

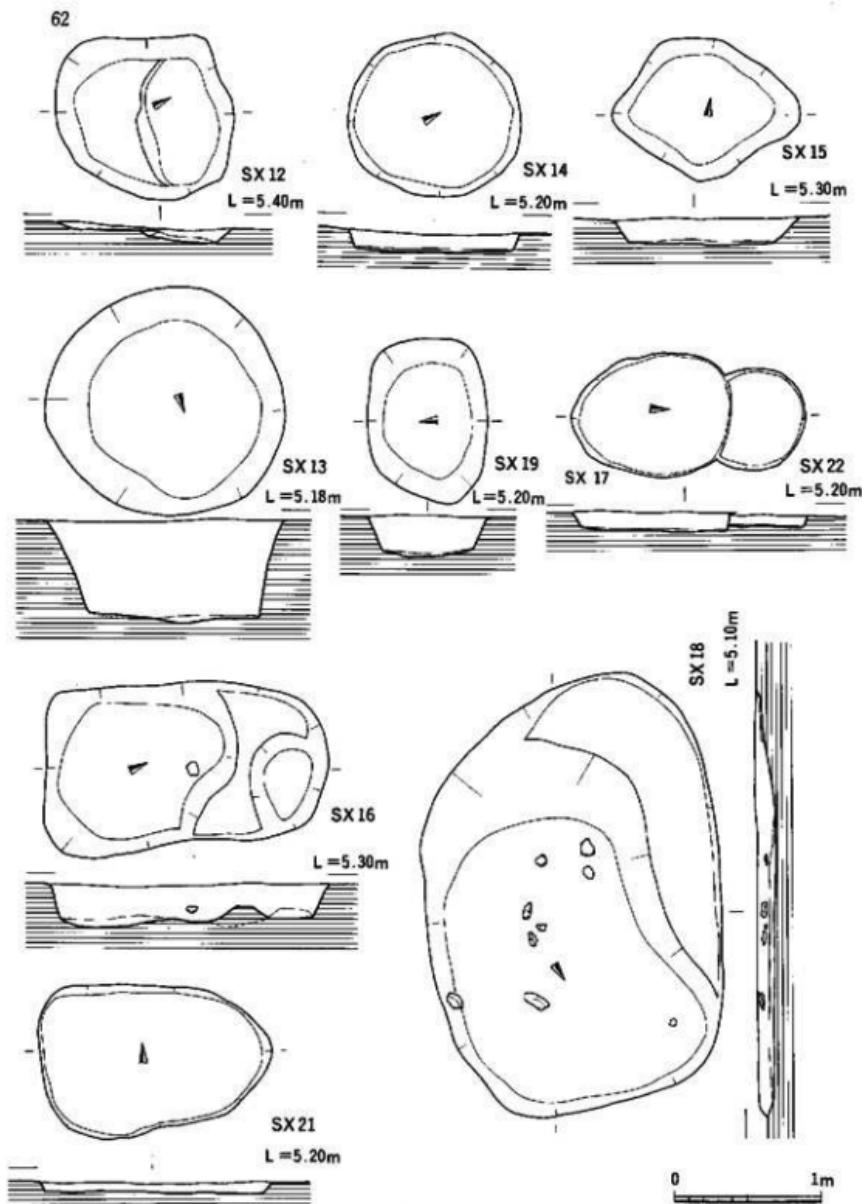


Fig. 41 第II区豊穴造構平面および断面図 (SX 12~19・21・22) (1/40) その3

状況もあいまって、この種の堅穴遺構を生活残滓物の廃棄用堅穴と推定する根拠の1つである。また、こういった在り方は3類と異なっている点である。

5類 (Fig. 41~43・45・47・49・50)

SX (08)・16・21・43・55・(57)・58・59・61の9例がある。

平面形は不整な方形や長方形が主で、やや不整な梢円形のものもある。規模はやや大きく長さが2~3m、幅は1.7~2.5mを測る。比較的しっかりした掘り方を持ち、床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は量的にやや多いものと無遺物のものとがある。出土遺物はいずれも二次的な堆積のものである。

第I区では、遺物の出土の在り方で、拳大から人頭大ほどの礫石を床面に敷きつめたものや木炭が層をなしているものがあったが、第II区では見られない。埋土で特徴的な遺物の出土をみたのは、焼土・木炭層がブロック状に見られたSX43と、SX58ぐらいである。

第II区の場合、分布的なまとまりではなく、形態的にもやや画一性がない。第I区においてはこの種類のものは、第Ib区の屋敷地の南側に位置するやや高くなった地点や、調査区の東側などに、比較的整然とした配列で、まとまっていることが確認された。形態的には似るが、遺構の性格は異なっているかもしれない。

6類 (Fig. 40~42・45・47・49・50)

SX 04・07・18・20・28・54・56・70・72・73・74・77・83・93・96の16例がある。

平面形は不定形で、比較的大きな堅穴である。断面形は浅皿状で床面は平坦なものと、凹凸が顕著なものとがある。遺物は投棄もしくは二次的な混入の状況で出土する。

この種のものは、必ずしも人為的に掘りこまれた遺構と断定できない要素がある。凹凸に富む微地形を水平的に掘り下げていった場合に、平面形が不定形の掘り方様になる場合がありうるからである。特にSX04・20などは、壁の立ち上がりが非常に弱く、形状も一定でない。第I区でもこれに類するものがあったが、傾向としては、沖積地における凹凸面の微堆積土の可能性があるものがほとんどである。

しかしSX72の場合は壁の立ち上がりも比較的明瞭で、遺物もまとまって出土するという傾向があり、人為的な遺構の可能性が高いようである。また、SX28は、遺構の検出確認の当初は平面形が矩形となっており、削平等によって上部が削られ、本来の形状をほとんど留めていないものもあることが考えられる。

7類 (Fig. 42・46・45・47・49・50)

SX 01・52・53・(60)の4例がある。

平面形は隅丸の長方形で、長さは4~5m、幅は2.5~4mの長大な堅穴である。床面は平坦で、断面形は逆台形。遺物は比較的多く出土するが、ほとんどが破片で投棄または二次的な混入によるものである。

64

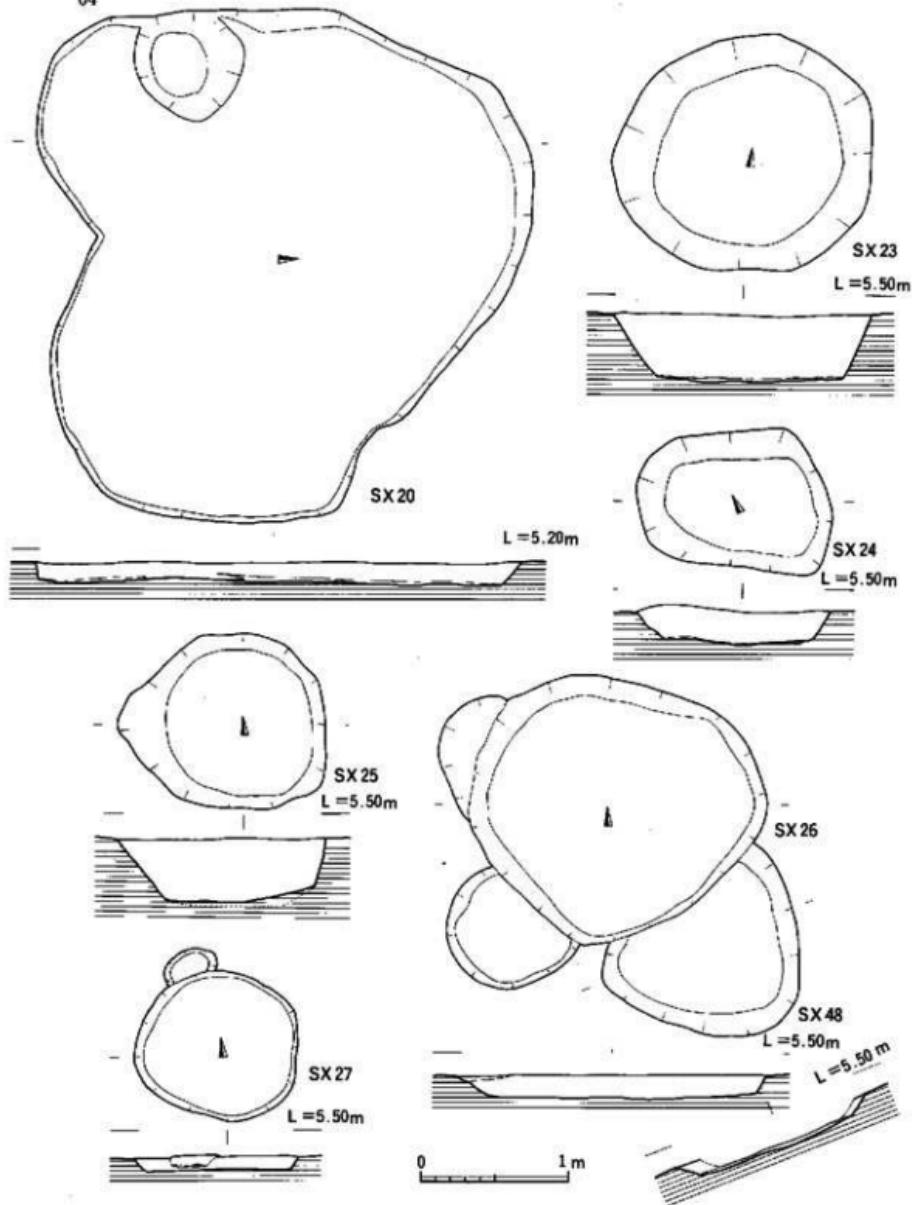


Fig.42 第Ⅱ区堅穴遺構平面および断面図 (SX 20・23~27・48) (1/40) その4

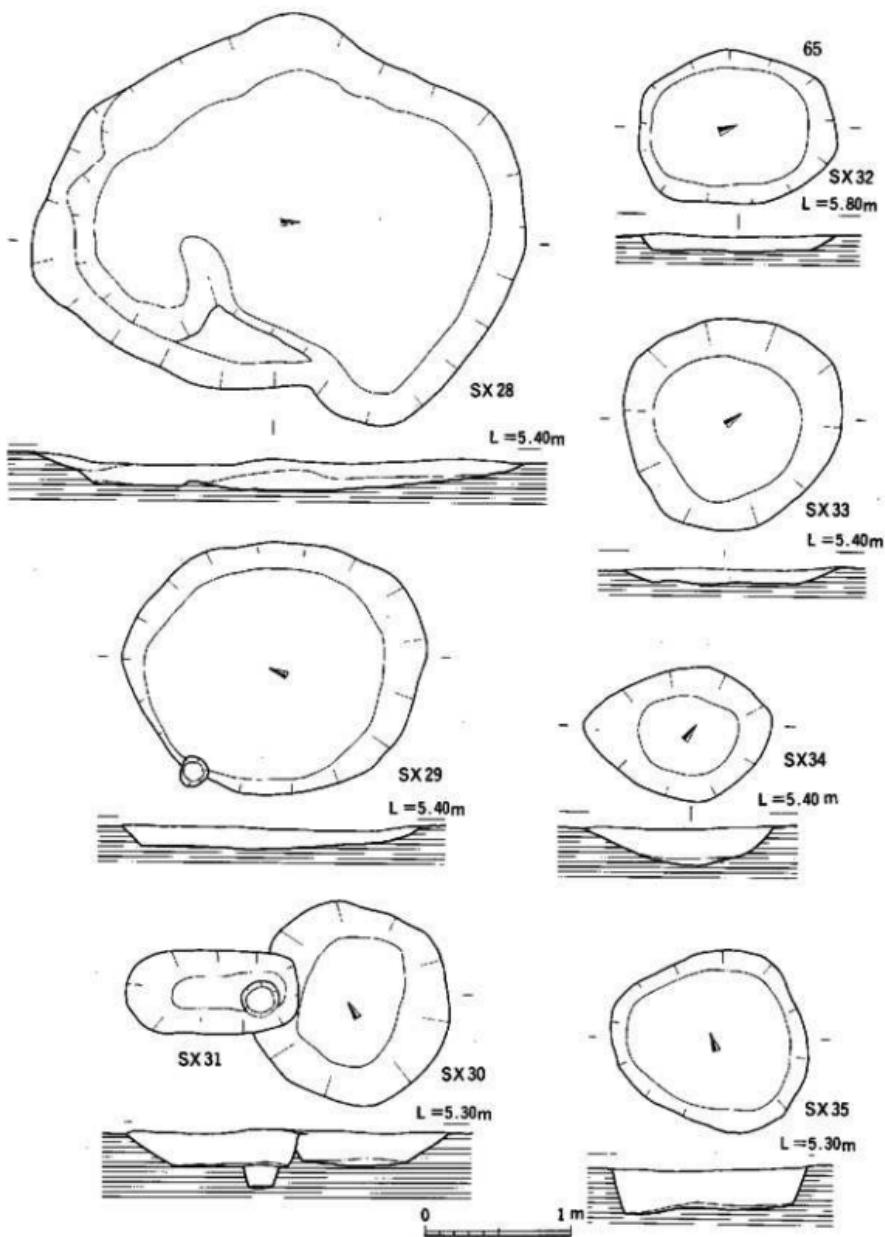


Fig. 43 第Ⅱ区堅穴遺構平面および断面図 (SX28~35) (1/40) その5

これらの他に、遺構検出の当初に確認されたものを屋敷地の西側からあげると、遺構番号を付していないが、SB95とSB98の間と、SB82とSB91の間の矩形の土層の割りがある。これらは非常に残りが悪く、平面形や他の遺構との関連などについて、十分な調査ができないまま消滅してしまったが、建物の「土間」もしくは7類とした堅穴遺構の床面部分だった可能性

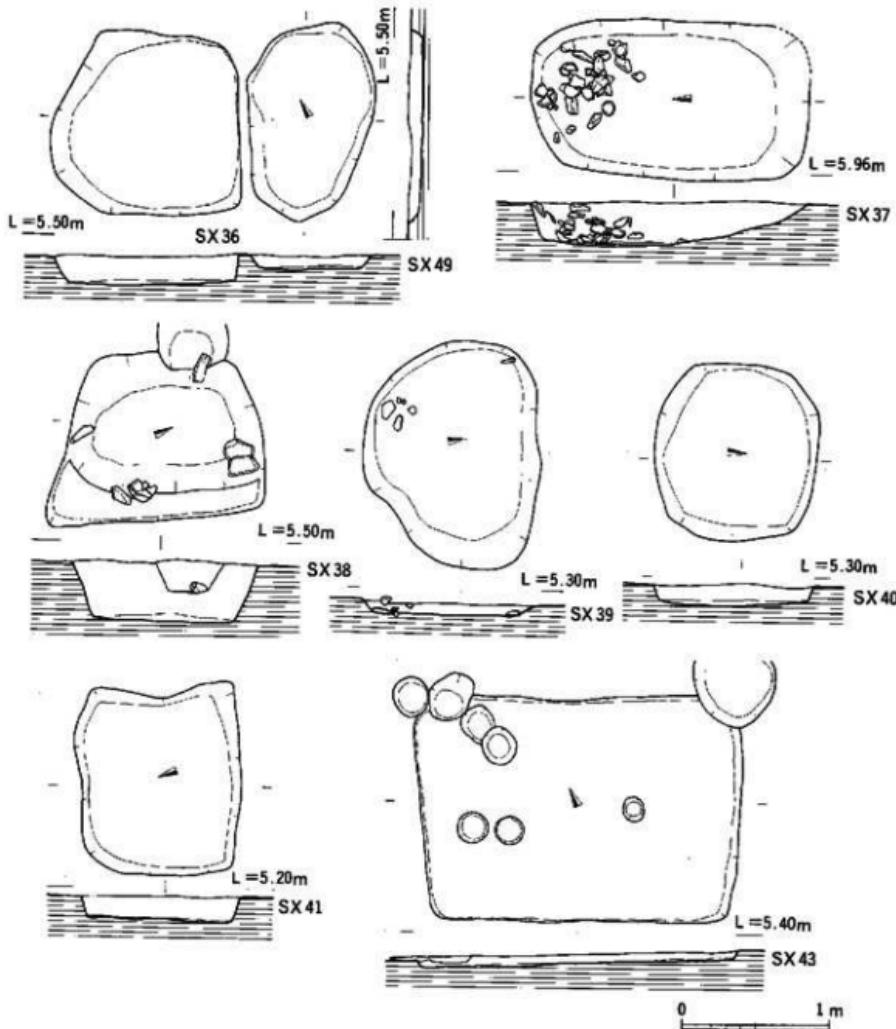


Fig. 44 第Ⅱ区堅穴遺構平面および断面図 (SX36~41・43・49) (1/40) その6

が十分ある。広がっていた土層は木炭・焼土を含む暗灰褐色土で1~2cmほどの厚さであった。

ところで掘り方が確認できた4例についてみると、上部構造として、上屋があった可能性を遺構として留めるものはSX53である。北西部床面直上に、直径が10cmほどの丸太材が、竪穴西壁にはほぼ平行に炭化して倒れた状態で出土した。その周囲には赤黄褐色の焼土や木炭片が層をなして、北西部から中央にかけてみられた。焼土は粘土状のキメの細かな素地土に砂・小石・スサ等を混入したものであり、やや短絡的であるが、竪体もしくは壁に用いられていた可

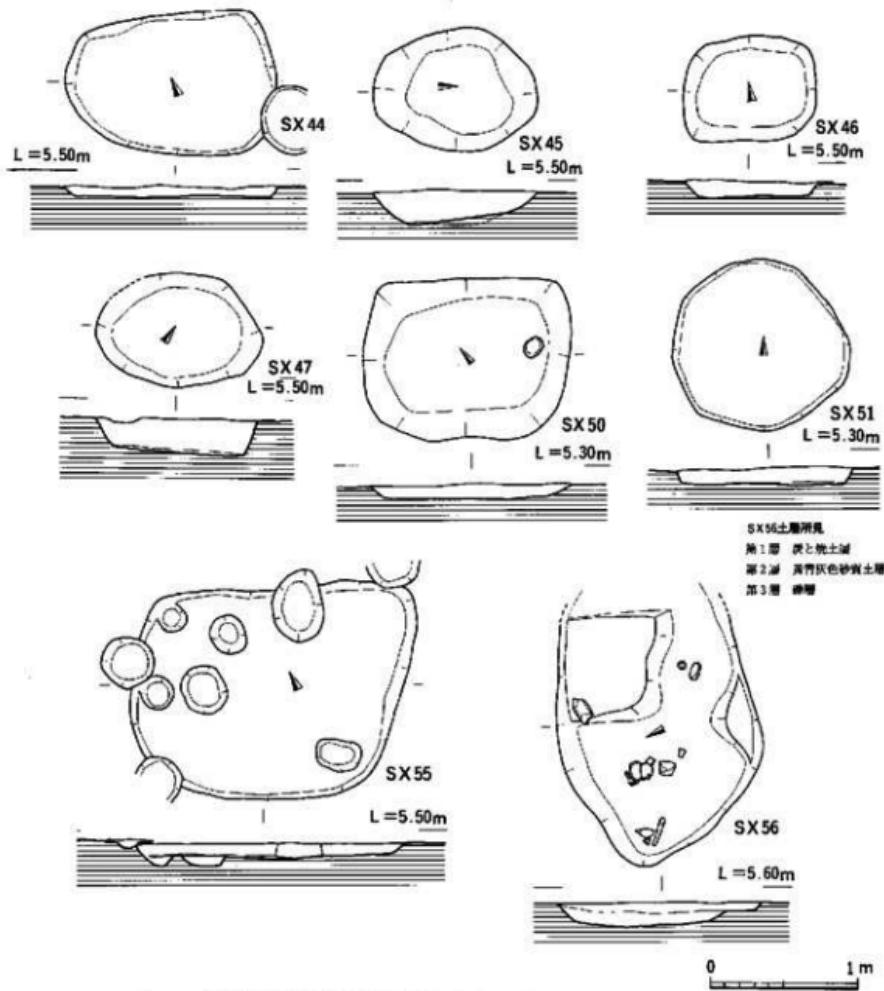


Fig. 45 第II区竪穴遺構平面および断面図 (SX 44~47・50・51・55・56) (1/40) その7

能性がある。またSX53の西壁と北壁に平行に、幅5cm、深さ3~7cmほどの溝状遺構が付設されている点は注意される。これは、弥生~古墳時代の竪穴式住居によく見られるような壁溝と同様な性格のものと思われるもので、おそらく竪穴の壁部分の補強板帶の痕跡か、排水用の溝かと思われる。柱が伴う可能性はあるが、明確にわかるものはない。可能性として、SX52の場合には、掘立柱建物SB67もしくはSB134との関係が、またSX53の場合は、SB127との関係が、さらにSX01の場合は、SB88を始めとする建物群との関係が注意される。

すなわちこの種の竪穴が、上層構造を持って単独でなんらかの機能をもつものであったか、あるいはなんらかの建物の付属施設としての半地下式の構造物なのかといった問題があるようである。これについては他の竪穴遺構と建物との関係をも含めて検討を要する。

8類 (Fig.50)

SX 91・92・95の3例がある。平面形は長大な長方形で、長さ4~5m、幅2m前後のものである。断面形は浅皿~逆台形である。あまり深くない。上記以外にはSB61の南側によく似た溝状遺構が見られた。遺物の出土量は多くない。SX91はワラ灰と思われる灰層と焼土層が北側に見られた。SX91と92は直交している。またSX95は畦畔と平行している点は注意される。

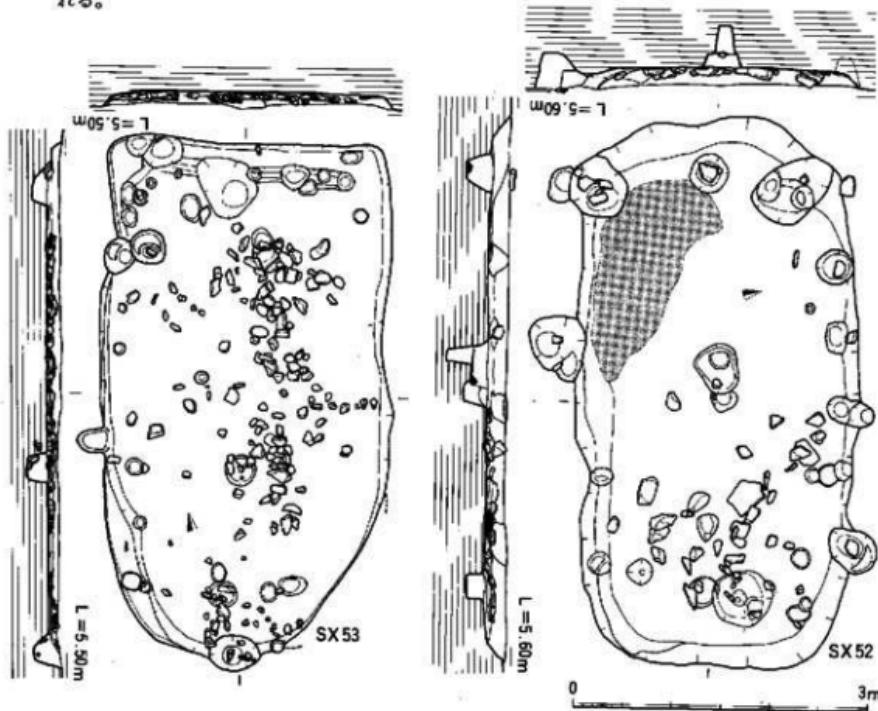


Fig.46 第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図 (SX52・53) (1/60) その8

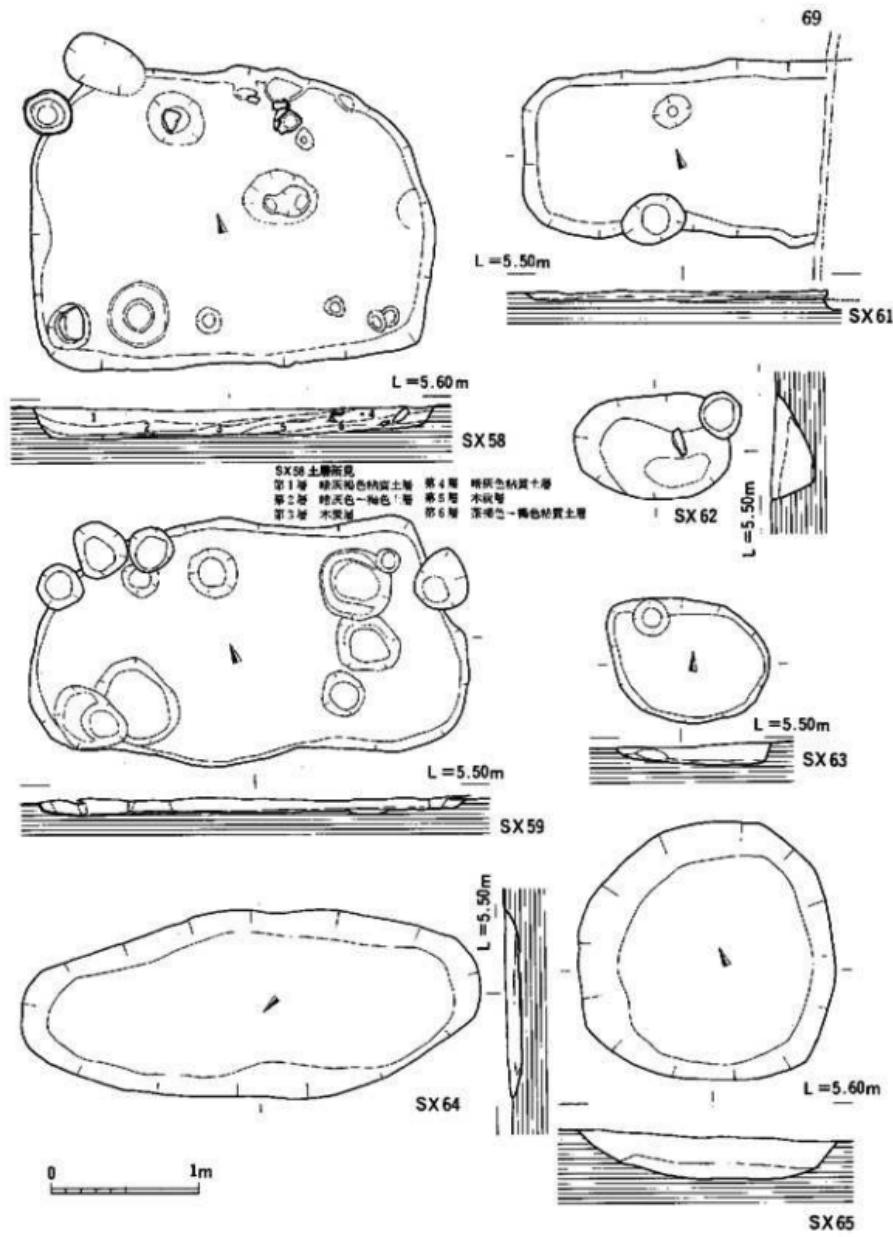


Fig. 47 第Ⅱ区竪穴造構平面および断面図 (SX58・59・61~65) (1/40) その 9

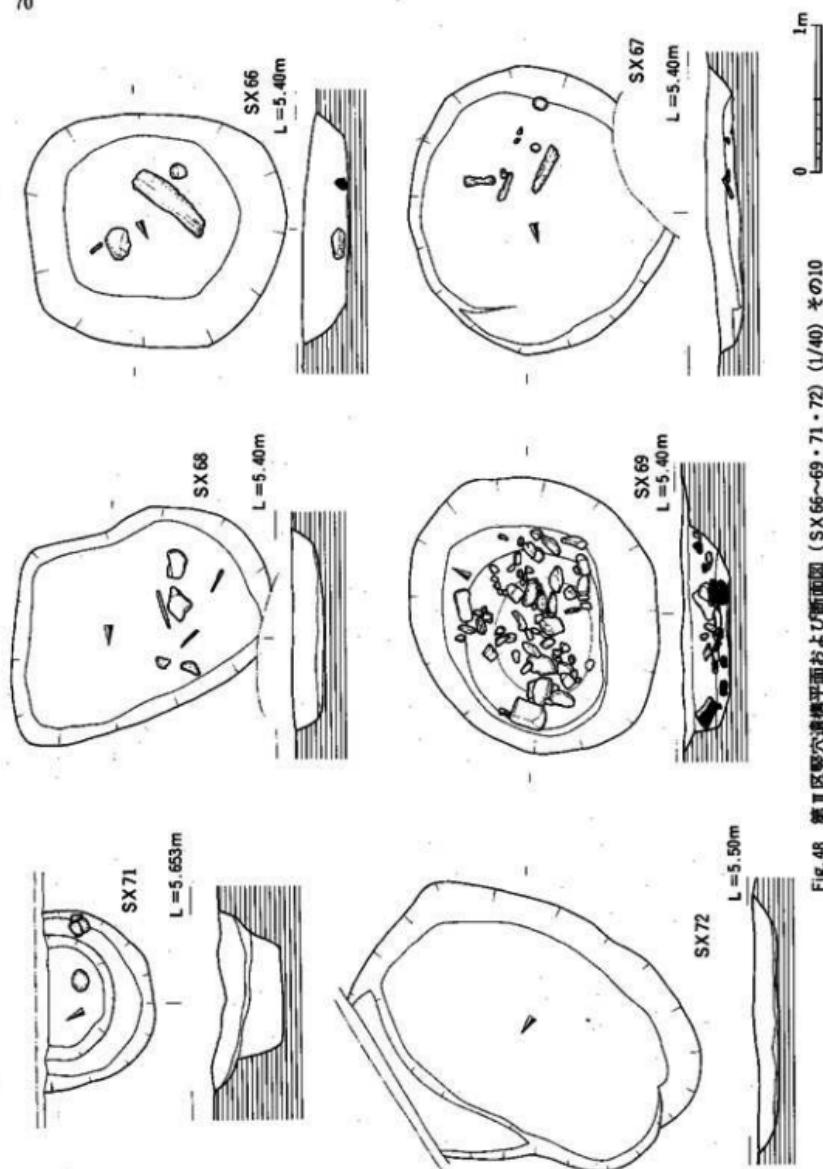


Fig. 48 第Ⅱ区整穴遺構平面および断面図 (SX66~69・71・72) (1/40) ⑦の10

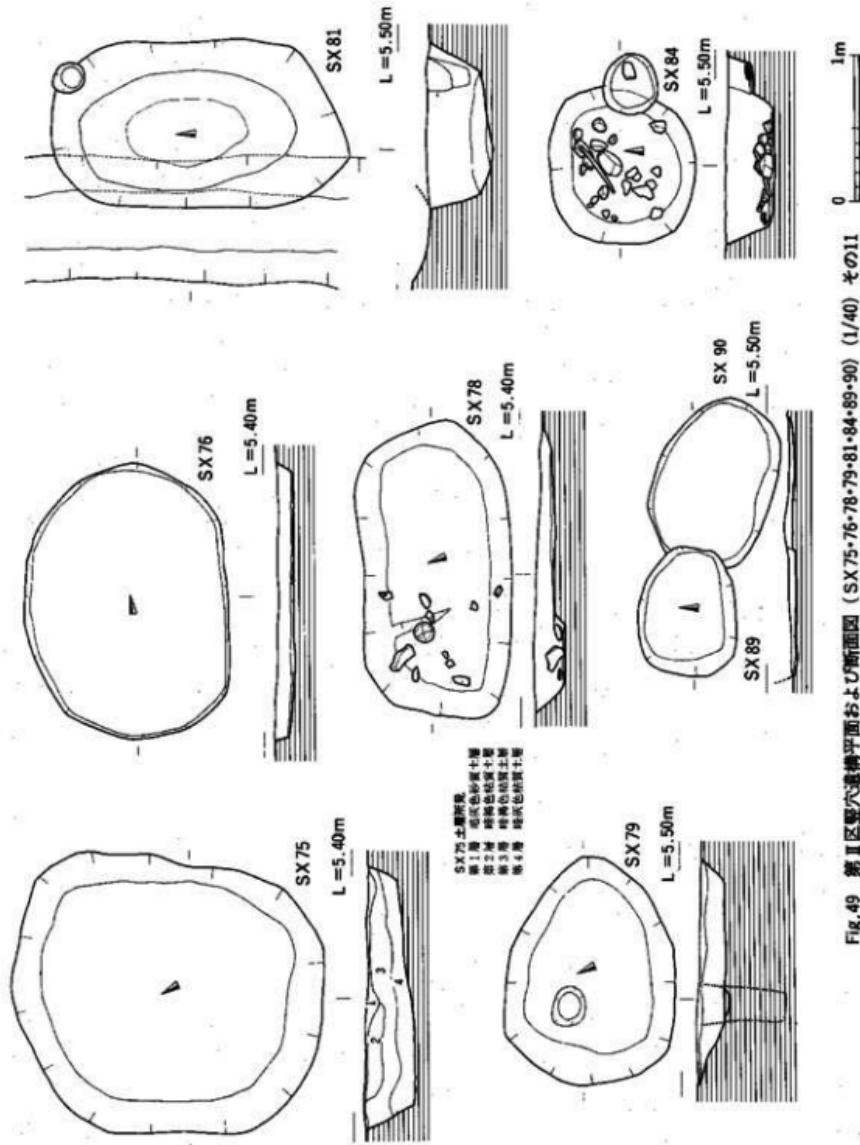


Fig.49 第II区堅穴連続平面および断面図 (SX75・76・78・79・81・84・89・90) (1/40) セの11

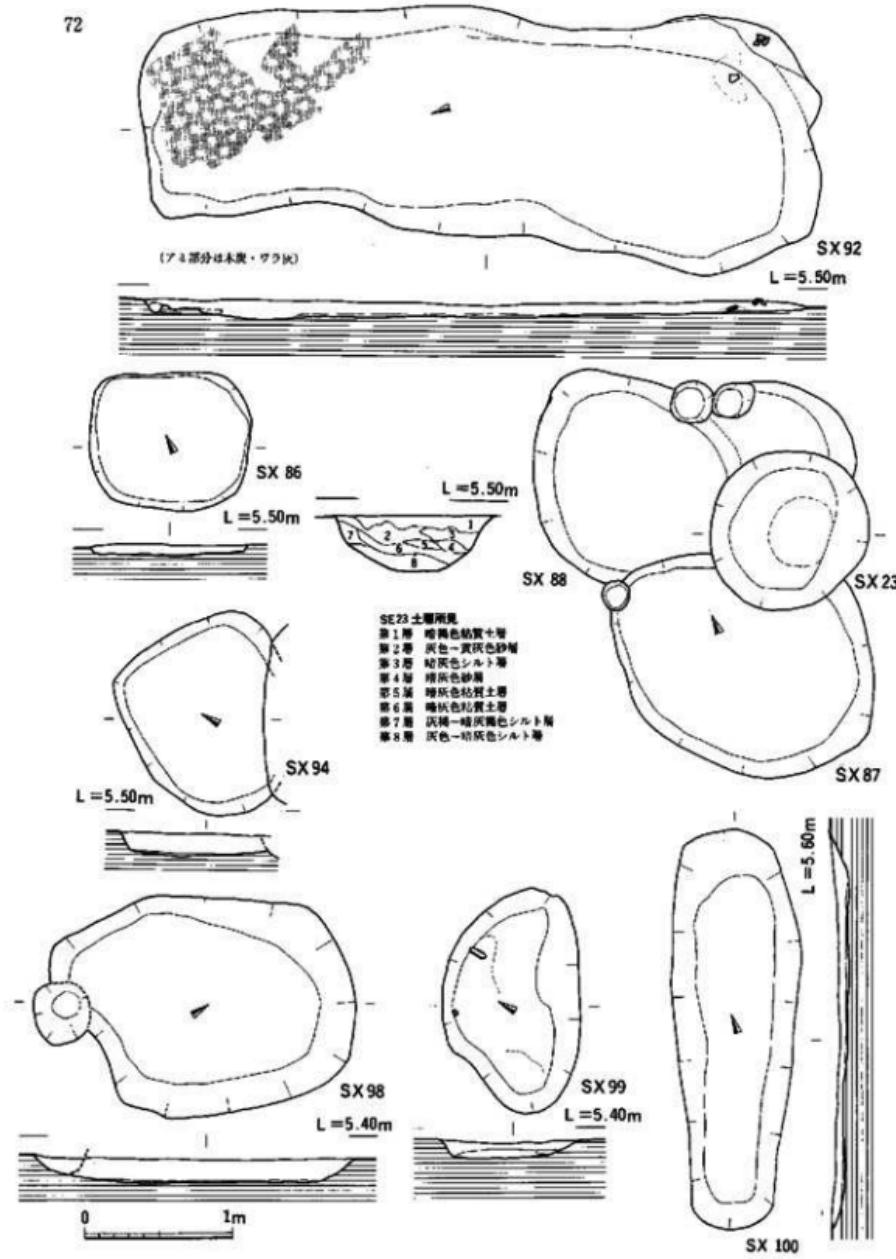


Fig. 50 第Ⅱ区堅穴遺構平面および断面図 (SX 86~88·92·94·98~100、S E 23) (1/40) その12

Fig.No	PL.No	調査区	番号No	開拓地No	形状・寸法(角×側×厚さ)	出土遺物	出土地點Fig.No	備考
39	-	II a	S X01	S X40	7枚 6.46×3.50×0.20 (m)	白磁一器、青磁一器(同安Ⅰ)、灰(同安Ⅱ)、瓦器一器、土器質一器、瓦質一器、陶質土器、瓦質一器、青磁一器、青磁一器、木炭	79-489~492	234 235
-	-	-	S X02	S X42	4枚 1.47×0.71×0.14	青磁一器(同安Ⅰ)、灰(同安Ⅱ)、土器質一器 瓦器一器、土器質土器、陶器一器	-	-
40	11	a	S X03	S X43	4枚 1.27×1.18×0.45	土器質一器、灰、土器質土器、陶器質一器、灰、土器質一器、灰	79-493~494	-
40	-	a	S X04	S X44	5枚 3.04×2.08×0.16	土器質一器	-	233 234
40	-	a	S X05	S X45	4枚 1.45×1.11×0.16	土器質一器、灰、土器質土器、青磁一器(同安) 陶器	-	-
40	-	a	S X06	S X46	4枚 1.71×1.54×0.43	青磁一器(同安Ⅰ)、土器質一器、土器質一器、 土器質土器、陶器質一器、灰、土器質一器、石鈴鉢 入西脇	79-495	-
-	-	a	S X07	S X47	6袋(たまり)のため計測不可	遺物なし	-	-
-	-	a	S X08	S X48	5袋 3.38×2.17×0.18	土器質一器、土器質土器、陶器質一器、灰、土器質 一器、土器質土器、陶器質一器、石斧	79-496	-
40	-	a	S X09	S X49	4袋 1.80×1.36×0.05	遺物なし	-	-
40	-	a	S X10	S X50	4枚 2.24×1.35×0.10	白磁一器(VI)、口丸工、青磁一器(同安Ⅰ)、灰 (同安Ⅱ)、灰(同安Ⅱ)、土器質土器、陶器質一器 灰、土器質土器、陶器質一器、灰、土器質一器、灰 灰、土器質土器、陶器質一器、灰、土器質一器、灰	-	-
40	11	a	S X11	S X51	4枚 1.73×1.43×0.09	青磁一器、灰(同1)、白(同1)、灰(同安Ⅰ)、 灰(同安Ⅱ)、灰(同安Ⅱ)、土器質土器、陶器質一器 灰、土器質土器、灰、土器質土器、土器質一器、灰	-	-
41	11	a	S X12	S X52	4枚 1.24×1.13×0.13	土器質一器、灰、青磁一器(同安)、瓦質一器、 灰	-	-
41	11	a	S X13	S X53	4枚 1.63×1.56×0.79	遺物なし	-	639
41	-	a	S X14	S X54	4枚 1.29×1.12×0.15	遺物なし	-	-
41	-	a	S X15	S X55	2袋 1.39×0.98×0.18	遺物なし	-	-
41	11	a	S X16	S X56	5袋 1.95×1.13×0.31	遺物なし	-	640
41	-	a	S X17	S X57	2袋 1.16×0.86×0.14	遺物なし	-	-
41	11	a	S X18	S X58	6袋 3.04×2.06×0.14	遺物なし	79-497~498	642
41	12	a	S X19	S X59	2袋 1.13×0.82×0.27	土器質一器、陶器一器	-	643
42	-	a	S X20	S X60	6袋 3.54×3.36×0.17	青磁一器(同安)、陶器質一器、土器質一器、陶 器一器	-	-
41	-	a	S X21	S X61	5袋 1.59×1.05×0.08	陶器質一器、土器質土器	-	-
41	-	a	S X22	S X62	2袋 0.71×0.61×0.09	青磁一器(同安Ⅰ)、陶器 質	-	-
42	12	a	S X23	S X63	4袋 1.78×1.60×0.47	青磁一器(同安Ⅰ)、土器質一器(VI)、土器質一 器、土器質土器、陶器質一器、灰、土器質土器、 土器質一器、灰	79-499~500	-
42	-	a	S X24	S X64	2袋 1.35×1.09×0.28	青磁 灰(同安Ⅱ)、白磁一器(VI)、灰 灰、土器質土器、土器質一器、灰、土器質土器	-	-
42	-	a	S X25	S X65	4袋 1.43×1.29×0.45	土器質一器、瓦質一器	-	-
42	-	a	S X26	S X66	4袋 2.06×1.83×0.15	青磁一器(同安Ⅱ)(複数半壊)、白磁一器(下 部)	79-501	-
42	-	a	S X27	S X67	4袋 1.32×1.05×0.05	遺物なし	-	-
43	12	a	S X28	S X68	6袋 3.39×2.81×0.26	青磁一器(同安Ⅱ)(複数1)、II - 灰(同安Ⅰ) 土器質一器、灰、灰、土器質土器、陶器質 一器、灰、土器質土器、灰、土器質土器、灰	-	-
43	-	a	S X29	S X69	4袋 2.09×1.74×0.15	遺物なし	-	-
43	-	a	S X30	S X70	4袋 1.39×1.31×0.24	遺物なし	-	-
43	-	a	S X31	S X71	2袋 1.17×0.98×0.25	遺物なし	-	-
43	12	a	S X32	S X72	2袋 1.27×1.05×0.11	青磁一器(同安Ⅰ)(同安Ⅱ)	-	-
43	-	a	S X33	S X73	4袋 1.51×1.44×0.12	青磁一器(同安Ⅰ)、III (同安)、土器質土器	79-502	-

Tab. 8 第Ⅱ区堅穴遺構所見一覧表(その1)

(備考欄の数字は原図番号)

Fig.No	Pl.No	調査区	遺物No	遺物名	形状・寸法(長×幅×高さ)	出土遺物	出土物Pig No	備考
43	12	II a	S X34	S X105	1類 1.30×0.92×0.26 (II)	青銅一鏡(鏡泉1)、白磁一碗、土師器一环・皿 土師質土鍋	79-562	
43	-	#	S X35	S X106	4類 1.36×1.25×0.30	青銅一鏡(鏡泉1)、白磁一鏡(IV)、瓦器、土 師器一环・皿・盆、陶片		
44	12	#	S X36	S X107	4類 1.30×1.26×0.29	土師器一环・皿、青銅 瓶(鏡泉)、陶片		
44	12・13	#	S X37	S X109	3類 1.30×1.18×0.28	青銅 直(同安1)、鏡(鏡泉1)、白磁一 鏡、土師器 一环・皿、瓦器一鏡、土師質土鍋、要 素陶片、輸入陶器-鏡、瓶、石鏡	79-563~567	669
44	13	#	S X38	S X110	3類 1.50×1.21×0.42	青銅一鏡(同安II)、土師器一环・皿土鍋、石 鏡、瓶	79-568	
44	13	#	S X39	S X112	4類 1.56×1.21×0.19	遺物なし		661
44	13	#	S X40	(SP25) 162	4類 1.20×1.12×0.16	土師器一环	80-569	660
44	13	#	S X41	(SX38) S X166	3類 1.33×1.18×0.18	青銅一鏡(鏡泉1)		651
-	-	#	S X42	S X81 の水槽	4類 0.75×0.73×0.63	遺物なし		
44	-	#	S X43	(SX10) S X163	5類 2.26×1.57×0.24	青銅一鏡(同安II)、土師器・环、石鏡、弥生土 器		
45	-	#	S X44	S P637	4類 1.45×1.90×0.87	土師器一环、陶器		
45	-	#	S X45	S P446	2類 1.13×0.34×0.23	陶器器・小片、土師器・小片、粘土塊		
45	-	#	S X46	S P642	3類 0.91×0.72×0.12	土師器一环・皿		
45	-	#	S X47	S P645	2類 1.15×0.79×0.25	青銅一小片(同安)、白磁一碗、青銅器一环・皿、 土師器一小片、土師質土鍋、弥生土器、粘土塊		
42	-	#	S X48	S X91 の東	4類 1.36×1.32×0.17	遺物なし		
44	-	#	S X49	S X107 の東	4類 1.38×0.85×0.19	遺物なし		
45	-	#	S X50	S X82 の北	3類 1.45×1.12×0.19	遺物なし		
45	-	#	S X51	S X49と S X50の 間K.n.1	4類 1.23×1.18×0.12	遺物なし		
46	23	#	S X52	S X115	7類 5.44×5.19×?	土師器一环・青白磁器皿類	80-519~536	669
46	23	#	S X53	S X116	7類 5.35×2.99×?	白磁一鏡(VI)・口先例、青銅一鏡(同安II)・鏡 (鏡泉I、II)・盤(同安)・土師器一环・皿、 土師器残片、合子、輸入陶器、石鏡、丸棒、盤、 粘土塊	80-527~539	663
-	-	#	S X54	S X119	6類 2.28×1.26×?	青銅器一鏡(鏡泉1)・III(同安II)・土師器一环 土師質土鍋	81-540	
45	-	#	S X55	S X121	5類 1.97×1.65×0.11	青銅一小片(同安)・土師器 盤・环、猪十塊	81-541~542	
45	-	#	S X56	S X122	6類 1.80×1.41×0.16	青銅一小片・切形合子蓋、土師質土鍋、灰窯骨粗鉢 器・小片	81-543~545 547~548	663
-	-	#	S X57	S X126	5類 1.58×1.58×0.12	土師器一环		
47	-	#	S X58	S X127	5類 2.75×1.07×0.22	青銅 皿・鏡、土師器一环・皿・盤・猪・猪又十塊、 土師質土鍋、皿、猪十塊、丸棒一鏡、弥生土器陶 器・盤、青銅鏡	81-552	664
47	-	#	S X59	S X128	3類 1.93×1.72×0.18	土師器一环・环、土師質土鍋、粘土塊		
-	-	#	S X60	S X164	7類 2.95×2.36×0.06	遺物なし		
47	-	#	S X61	S X128 南側上端	5類 2.10×1.28×0.08	遺物なし		
47	-	#	S X62	S P691	2類 1.69×0.73×0.30	青銅一皿(同安)・鏡(鏡泉)・土師器一环・皿 土師質土鍋、弥生土器、天目陶器		
47	-	#	S X63	S P691	2類 1.13×0.95×0.16	土師器 一环・皿、猪十塊		
47	-	II c	S X64	S X133	1類 3.11×1.30×0.11	土師器 一环・皿、土師質土鍋、猪十塊		678
47	32	#	S X65	S X134	4類 1.77×1.75×0.35	白磁-不明小片、青銅一鏡目(同安)・土師器一 环・瓦器一鏡、土師質土鍋、陶器一盘片		666
48	33	#	S X66	S X135	4類 1.77×1.60×0.33	青銅 皿小片(同安)・鏡(鏡泉)・土師器一 环・皿・小片、土師質土鍋、燒窯質小片、輸入陶 器		676

Tab. 9 第Ⅱ区堅穴遺構所見一覧表(その2)

(備考欄の数字は原図番号)

Fig.No	PL.No	調査区	遺物No	周度No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土 產 物		出土場所No	備考
						(単)	(複)		
48	33	II c	S X67	S X136	4 個 1.97×1.80×0.25	青磁一器(複1)、白磁一器(複V)、土師器一器 瓦器一器、土師質一器		81-554	
48	32	II	S X68	S X137	4 個 1.77×1.83×0.22	青磁 1個(同安Ⅰ)、土師器一器・瓦器 一小片、土師質土器・瓦器、瓦器小片		81-555	669
48	33	II	S X69	S X140	4 個 1.88×1.76×0.26	青磁一器(複1)、陶器土器、土師器一器・瓦器 1個・瓦器、瓦器片、復原器片			671
-	33	II	S X70	S X142	6 個 3.18×3.14×0.34	白磁一器(II)、青磁一面(同安Ⅱ)、陶(複泉 1)、土師器一器・瓦器、土師質土器、瓦器質土器 等生土器、瓦器			
48	34	II	S X71	S X143	4 個 ?×1.22×0.50	白磁一器(II)、青磁一面(同安Ⅱ)、陶(複泉 1)、土師器一器・瓦器、瓦器質土器、瓦器質 土器・瓦器、輸入陶器、等生土器		81-556	672
48	-	II	S X72	S X144	6 個 2.40×1.93×0.16	青磁一面(同安Ⅱ)(複泉1)、土師器一器・瓦器 1個・土師質土器、瓦器質土器、青白磁一器		81-557	673
-	-	II	S X73	S X145	6 個 2.97×2.34×0.13	白磁一面、土師器一器・瓦器、土師質土器		81-558	
-	-	II	S X74	S X146	6 個 2.23×1.70×0.25	青磁一面(複泉1)、白磁一面(II)、土師質 土器・土師器一器・瓦器、瓦器片、復原器片、粘土塊			
48	34	II	S X75	S X147	4 個 2.11×1.92×0.46	白磁一器(II)、青磁一面(同安1)、II)、陶 (複泉1)、土師器一器・輸入陶器、瓦器質土器 等生土器、石塊			667
49	-	II	S X76	S X148	4 個 1.90×1.40×0.14	土師質土器、土師器一小片			
-	-	II	S X77	S X149	6 個 判定不可	遺物なし			
49	34	II	S X78	S X150	4 個 2.94×1.88×0.22	青磁一面(同安Ⅱ)(複泉1)、土師器一器・瓦器 1個・瓦器・土器・土師質土器、瓦器質土器、等生土 器・粘土塊		81-559~562	
49	34	II	S X79	S X151	4 個 1.55×1.16×0.29	十折一器・瓦器一小片・土師質土器、等生土器、 粘土塊		82-558	674
34	31	II	S X80	S X153	4 個 1.08×1.26×0.19	瓦器一器・土師器一器			675
49	35	II	S X81	S X154	4 個 2.01×1.15×0.46	青磁一面(同安)、十折器一器・瓦器		81-563	680
-	35	II	S X82	S X157	3 個 1.60×1.29×?	青磁一面(複泉1)、瓦器一小片・土師質土器、 等生土器			
-	-	II	S X83	S X158	6 個 4.55×2.37×0.21	青磁一面(同安)(複泉1)、土師器一器・瓦器 1個・土師質土器、瓦器・土器・土師質土器、 等生土器、瓦片・灰土			
49	35	II	S X84	S X159	4 個 1.68×1.06×0.34	土師質土器、土師器一器・瓦器・粘土塊		82-565, 569 570	
-	-	II	S X85	S X161	4 個 遺物なし				
50	-	II d	S X86	S X4287	4 個 1.10×0.95×0.08	土師質土器小片			687
50	-	II	S X87	S X4296	4 個 2.03×1.50×0.76	土師器一面・土師質土器・瓦器・土師質土器			688
50	-	II	S X88	S X4298	4 個 1.67×1.39×0.16	土師質土器・土師器一小片			689
49	-	II	S X89	S X4305	2 個 0.96×0.68×0.08	遺物なし			
49	-	II	S X90	S X4306	2 個 1.18×0.91×0.06	土師器一面・瓦器・瓦器一面・陶器一面			
-	-	II	S X91	S X4310	8 個 5.47×1.41×0.66	土師器一面・土師質土器			
50	35	II	S X92	S X4311	6 個 4.63×1.83×0.13	(481~4309) 白磁一面(複V)、青磁一面(同安 II)・99(複泉1)、II)、土師器一面・瓦器・瓦 器・土師質土器・瓦器質土器・從入陶器・灰 土・磨片・器・輸入器・瓦器質土器		82-566, 567	690
-	-	II	S X93	S X4322	6 個 3.18×2.03×0.15	遺物なし			
50	-	II	S X94	S X4333	3 個 1.48×1.07×0.16	遺物なし			692
-	-	II	S X95	S X4340	8 個 6.36×2.06×0.27	青磁一面(複泉1)、土師器一面・瓦器・瓦 器・土師質土器・瓦器質土器・從入陶器・灰 土・磨片・器・輸入器・瓦器質土器			
-	-	II	S X96	S X4349	6 個 3.63×2.14×0.22	白磁一面(II)・土師器一面・瓦器・瓦器一面・ 土師質土器・土師器一面			
-	-	II	S X97	S X4298 (東側)	4 個 1.28×1.06×0.40	土師質土器・土師器一小片			
50	-	II	S X98	S X4415	4 個 2.08×1.53×0.17	土師器一面・土師質土器			693
50	-	II	S X99	S X4416	4 個 1.53×0.95×0.12	土師器一面・瓦器一小片			695
50	-	II	S X100	S X4680	1 個 2.75×0.85×0.14	土師器一面・瓦器			

Tab. 10 第Ⅱ区堅穴造構所見一覧表(その3)

(備考欄の数字は原岡番号)

7) 水田址 (Fig.11, PL.36・37)

第II区では畦畔と認められるものが各小区でみられた。平面形が全面的に確認された例はないが、溝状造構の項で述べたように、SD27~29・39・43~44・56~59が、水田に伴う畦溝、あるいは歛状造構と思われるものである。これらは屋敷地形成と廃棄の時期に相前後している。遺存状況は南北に残っているものが多い。SD43・44・49以外は、いずれも屋敷地に伴う造構を切っており、屋敷が放棄された後の土地利用が、水田もしくは畑だったといえる。

なおこれらの溝で区画されている田園の形状は、条里の一坪の北半分に、南北に長い6列の区画の大きい水田（南北に約50mの長さ、東西に15~17mの幅）で構成されていることがますますわかるが、さらにこれらの区画内において田園が小区分されていたことを示す畦畔が調査区東南部（第IId区・PL.36・37）で確認された。小区画の水田はSX93に重複するものが約42.5~50m²（東西に15~17m、南北に6.5m）ほどで、SX98・99や、水田に伴うと考えられるSX95に重複している水田が、約210m²ほどの面積である。平面形は正確な矩形ではないが、基本的には坪並、さらには条里に合わせた形状を取ることが図られたようであり、屋敷地の配置と水田の構成が、一定の計画の下で行なわれたことは否めないであろう。屋敷地の展開は、コの字型になるSD22周辺の切り合い関係をみると、SD24→SD22、SD23→SD22→SD33→SE13、SD33→SE09、SD22→SB126、SD30→SE12であるが、井戸や建物が屋敷地の東を面していたSD22を切って展開していることが明らかであり、隣接していた水田ないし畑を整地（第27層）して居住区を東に拡げたことが予想される。

8) 旧河川 (Fig.5, PL37) 旧河川については、杭列の項で若干述べたが、第I区で確認された、SR01・02の延長部が第II区の東側で確認された。この旧河川内にはSA11他2条の井堰が検出されている。平安時代後期～末までは、埋没もしくは淀み状を呈していたと思われるものである。調査区東南隅部に造構が希少であることとなんらかの関係があるかも知れないが、直接の関係はないものと思われる。

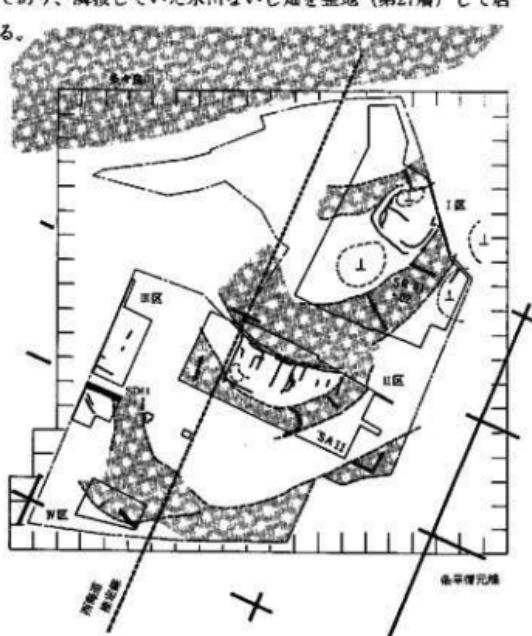


Fig. 51 戸原麦尾遺跡旧河川分布概要模式図 (1/5000)

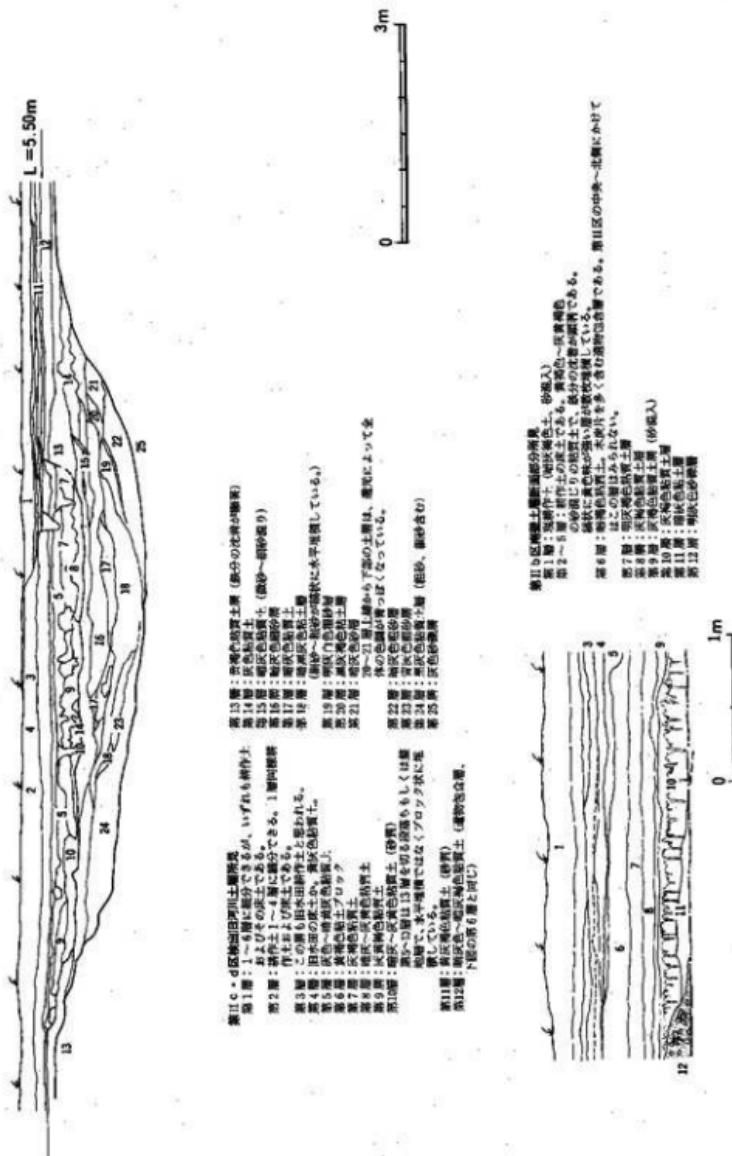


Fig. 52 Iwakawa River (II c-d zone) Soil Profile Cross-Section (1/80) and Soil Profile Cross-Section (1/40)

(2) 遺物各説

概要 第II区からは、土師器（皿・壺）を主として、土師器（土鍋）、土師質土器（捏鉢・擂鉢）、瓦器（碗）、瓦質土器（羽釜）、須恵質土器（捏鉢・壺）、陶器（常滑系壺）、等の国産の土器・陶器類のほか、白磁（碗・皿・四耳壺）、青磁（碗・皿）、青白磁（合子・水滴・皿）、褐釉陶器（四耳壺・鉢・水注）などの輸入陶磁器が出土している。その他に、管状土錐、滑石製石鍋、砥石、鉄滓、木製櫛、銅錢などが出土している。これらの遺物はほとんどが鎌倉時代に編年上位置付けられるものである。

これらの遺物の出土状況は、主として井戸、竪穴遺構、溝状遺構などから二次的な堆積の状況で出土したものが多く、ほとんどが破片である。一括埋納・投棄などの状況で出土したものは、柱穴や井戸などのわずかな例しかない。溝状遺構からの遺物の出土状況は、溝状遺構の屋敷内における位置の違いによって量的な異なりがあるようである。現耕作土の床土直下の包含層からは、多くの土器類が出土している。後世の地形変更や営田等により、かなりの遺構・遺物が擾乱・削平を受けたことが考えられる。

土器類のうち出土量が最も多いのは、供膳用の土師器皿・壺で、細かな時期区分を無視すると、出土遺物総量（破片数）の73.32%を占める。また、輸入陶磁器の総量比は第I区の7.9%と比べ、11.79%と高くなってしまっており出土量が多くなっている。また青磁と白磁の組成比では、白磁がかなり減っているという特徴がある（169頁、Tab.20）。

以下では図示できた遺物について説明する。各遺物の出土遺構名、遺構ごとの遺物の出土状況、土師器（皿・壺）の法量などは各一覧表を参照されたい。なお輸入陶磁器の分類は、森本朝子編『博多貿易陶磁分類表』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 1984に依拠した。

1) 柱穴出土の遺物 (Fig.53~62、PL.57、Tab.11~12)

柱穴からは遺物の出土量は少ないが、柱根痕跡もしくは掘り方内に1~3点ほどの土師器（皿・壺）または青磁（碗・皿）を完形のまま、あるいは半剖して埋置している例がみられた。図示したものは主にそういう出土状況のものを掲載した。なおFig.53~58は、各柱穴から1点ずつ抽出したもので、Fig.59~62は共伴関係がわかるものを図示した。

土師器 皿（1~48・52~58）器面が粗れ、調整痕が不明なものを除いて、いずれも回転糸切り離し底（以下糸切底と略す）である。口径・器高は、大きく4グループに分けられる。8.1~1.0~1.2cm前後のものと、8.4~8.8・1.1~1.3cmのもの、9.0~9.3・1.0~1.3cmのもの、そして9.5~9.9・0.9~1.3cmのものである。またまれに口径が10.0cmを超すものがある。包含層および他の遺構から出土した土師器皿の傾向をみると、数量からは、口径が約8.7cmと9.2cm前後のものが最も多く、柱穴出土の土師器皿もその傾向に沿っている。8.1cm台と9.6~9.7cm

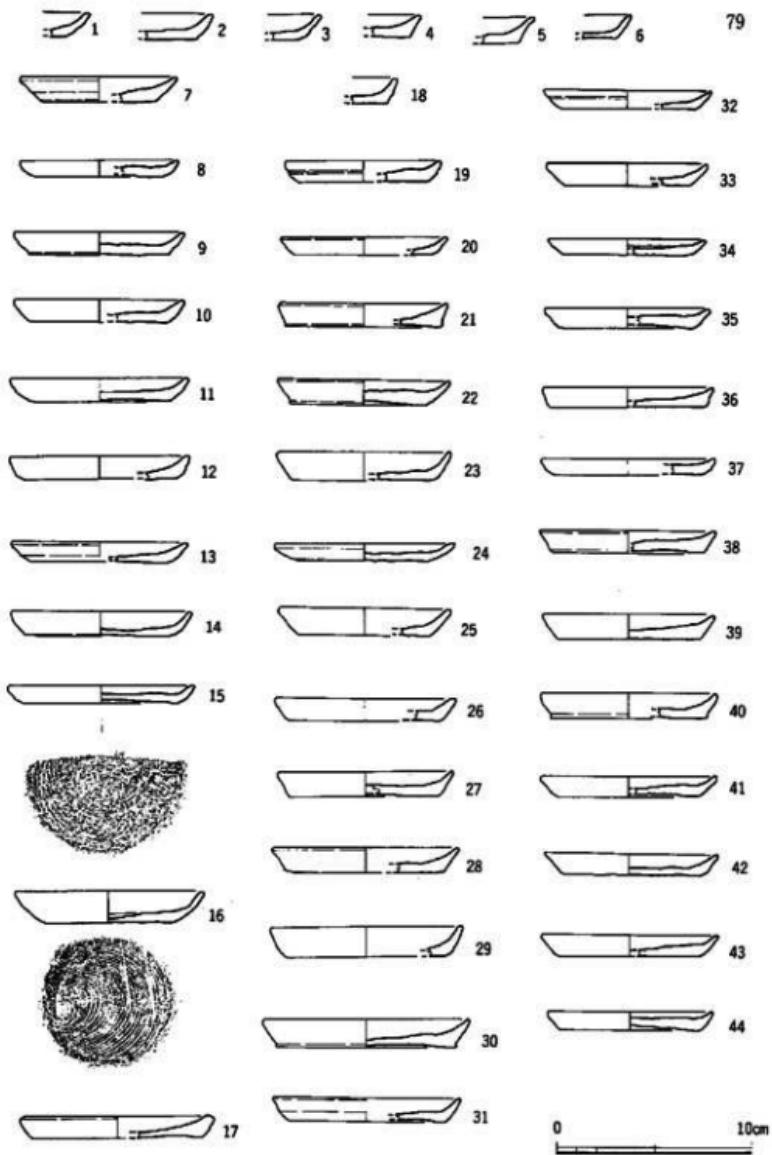


Fig.53 第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図 (1/3) その1

台はきわめて少ない。調整はほとんどが回転水挽き痕をそのまま留めているが、24・36・42などは内底にヨコナデ、外底に板目圧痕がみられる。焼成は15・16・24・35等が比較的よく焼き縮まっているのに対して、他はもろい。全般に厚ぼったい作りである。色調は褐色～明褐色。ほとんどのものに赤褐色の細かな粒子がみられる。形態的特徴については後述する。

土師器 壺(49・50・59～80) いずれも糸切底である。口径は13cm台のものと、15cm台のものとに大きく分けられる。12cmまたは15～16cm台のものは数量的には少なく、13.6cm前後のものが主体を占める。作りは全体に厚手で、鋭さがない。これは全般的に他の遺構出土の壺の特徴と同様である。形態的には、やや厚手の底部から体部をわずかに内湾気味に(66や75、76など)、あるいは弱く屈曲させて(63・64)立ち上げ、口縁部を丸くおさめ、少し端部を外反させるものが主体を占める。72・73のように口縁部径に比して、底部径が小さく、体部が直線的に立ち上がるものもあるが、数は少ない。72・73が褐白色を呈し、よく焼き縮まっているのに対して、他は焼成はあまく、もろい。色調は概ね褐色～明褐色。内外面の調整はほとんどが回転水挽き痕をそのまま残しているが、66・72・73等は内底にヨコナ

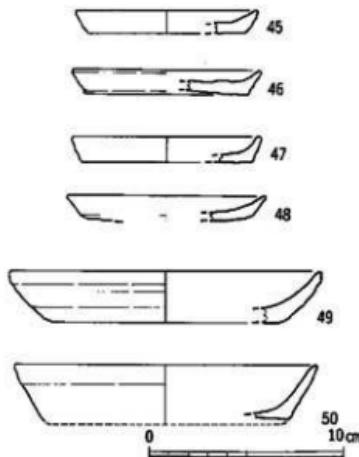


Fig. 54 第II区柱穴出土遺物実測図 (1/3) その2

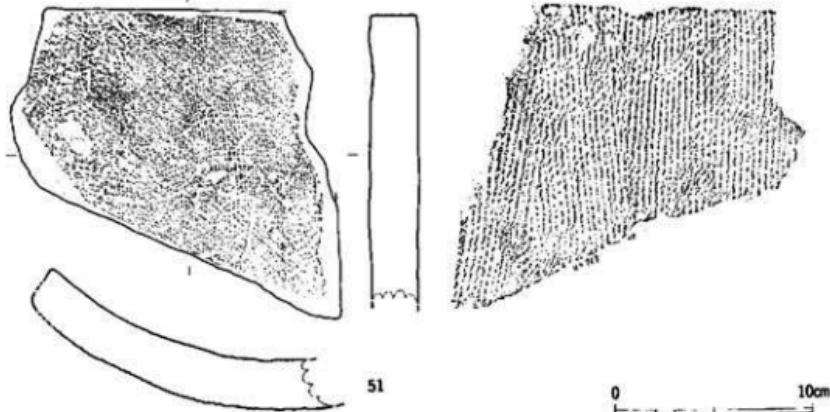


Fig. 55 第II区柱穴出土遺物実測図 (1/3) その3

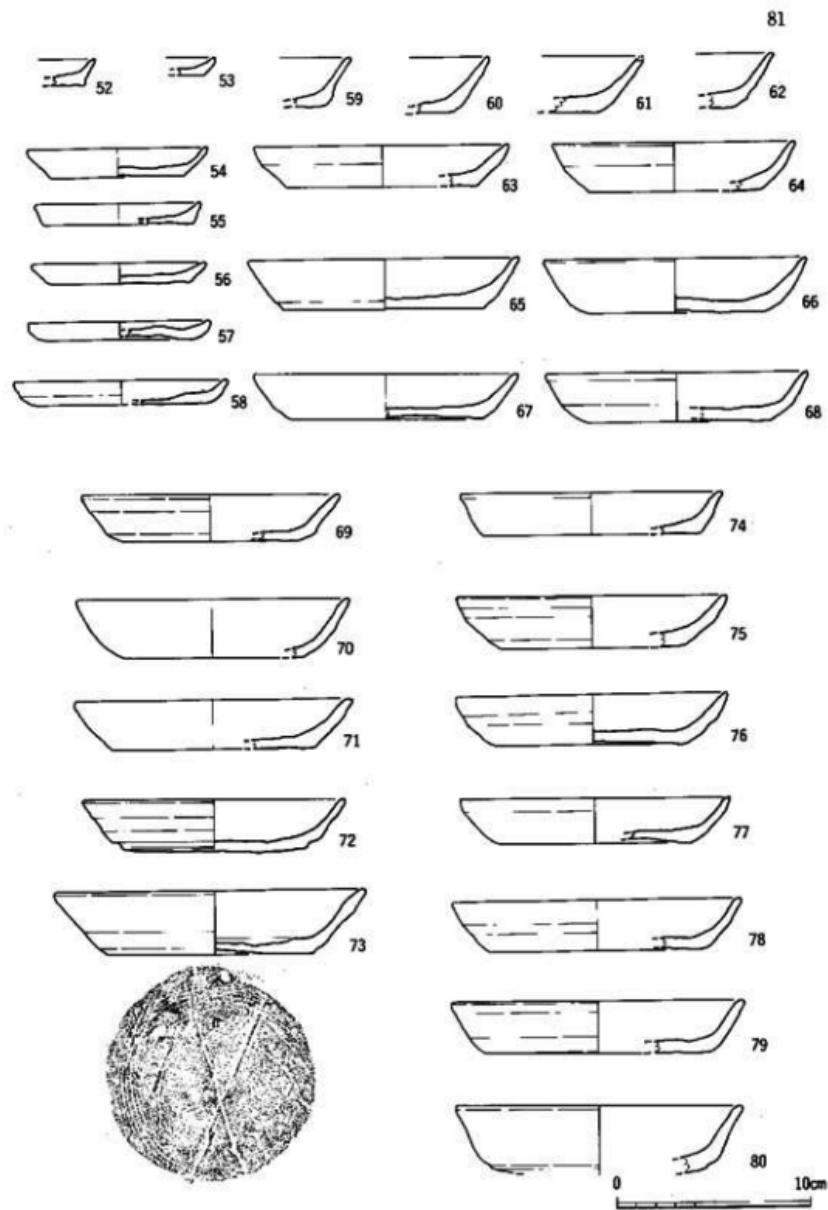


Fig. 56 第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図 (1/3) その4

デ、外底に板目圧痕を残している。

土師質土器 鉢 (81・87) 81は外径約39cm、87は外径約36cm。いずれも器高は不明。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。比較的よく焼き締まっている。調整痕は、81が内外面とも目の細かな縦ハケ目で、口縁部上面の叩き目を軽くナデ消している。87は、口縁部上面に叩き目を残し、体部外面は目の細かな縦ハケ目、内面はカキ目(近い横ハケ目)。色調は褐色～暗褐色。

土師質土器 有鈎羽蓋 (82) 口径18.4cm、胴部最大径20cm、鈎外径23cm、器高8.7～9.0cm程度を測る。内外面ともに、目の粗いハケ目調整後ヨコナデ仕上げ。底部は火を受け脆くなっている。三足が付く可能性がある。胎土は砂粒を多く含み、やや締まりが悪い。外面は鈎の下部までススが付着し黒灰褐色、内面は褐色。

陶器 無頸大壺 (83) 口径約26cmほど。器表面には非常に薄く褐色(一部暗赤褐色)の不透明釉がかかる。内外面とも平行叩きの後、軽くナデ消している。胎土は目が粗い。灰色の生地に赤紫、黒色の砂粒を含む。焼成堅緻。中国製陶器か。

管状土錐 (88～100) 土錐は第II区全体から250点出土している。そのうち柱穴からは40点が出土している。ここではその一部を図示した。形態的には97・99・100のような、長さが3cm前後で、重さが3.5gほどの丸みのある小型のもの、88・89・93のような、長さが4cm前後で5.5gほどのやや小型のもの、また91・94・96のような長さが5～6cmで、10cm前後の中型のもの、98のような長さが6cmほどで6.8cm前後の細中型のものと、Fig.85の609のような7.5cm前後で、30g以上の大型のものとに分かれる。ただし柱穴からは大型品は出土していない。孔径はほとんどが0.3～0.5cmにおさまる。焼成は比較的良好でよく焼き締まっている。褐色～明褐色。表面はナデ仕上げで、滑らかである。

滑石製石鍋 (84～86) 滑石製石鍋は柱穴からは、19点出土している。そのうちの3点を図示した。いずれも、鈎が口縁に平行してめぐるもので、口縁内径は、84が24.8cm、85が29.5cm、86が29cm。器高は85が11.7cmでやや低い器形のものである。84・86はケズリ成形の後、器表面を磨研し仕上げている。85はケズリ成形痕をそのまま留めている。外面には厚くススが付着している。素材は灰色～灰白色の良質の滑石を用いている。

青磁 盆 (101～103・106) 同安窯系の皿である(皿I類)。口径・器高・底径は101が10.6・2.2・5.1cm、102が9.2・4.1cm、103が10.4・2.2・3.6cm、106が10.2.1・5cm。いずれも底には櫛描文が施されている。釉の発色は良好で、透明な釉に青緑色が薄くかかっている。底部は釉薬を施釉後搔き取っている。106の外底部には花押が書かれている。

青磁 碗 (104・105、107～112) 104・105・108は同安窯系碗である(碗II類)。口径は104が15.6cm、105が15.1cm。いずれも外面に平行櫛描線文、内面に刻花文と櫛刺突雷光文を施す。105は内面口縁下に沈線を巡らしている。釉色は灰色がかかった透明なオリーブ色。108は口縁部の形状が特徴的な碗で、内面にヘラ片彫による雲文を施文。透明な明るい青緑色。口径12.1cm。

83

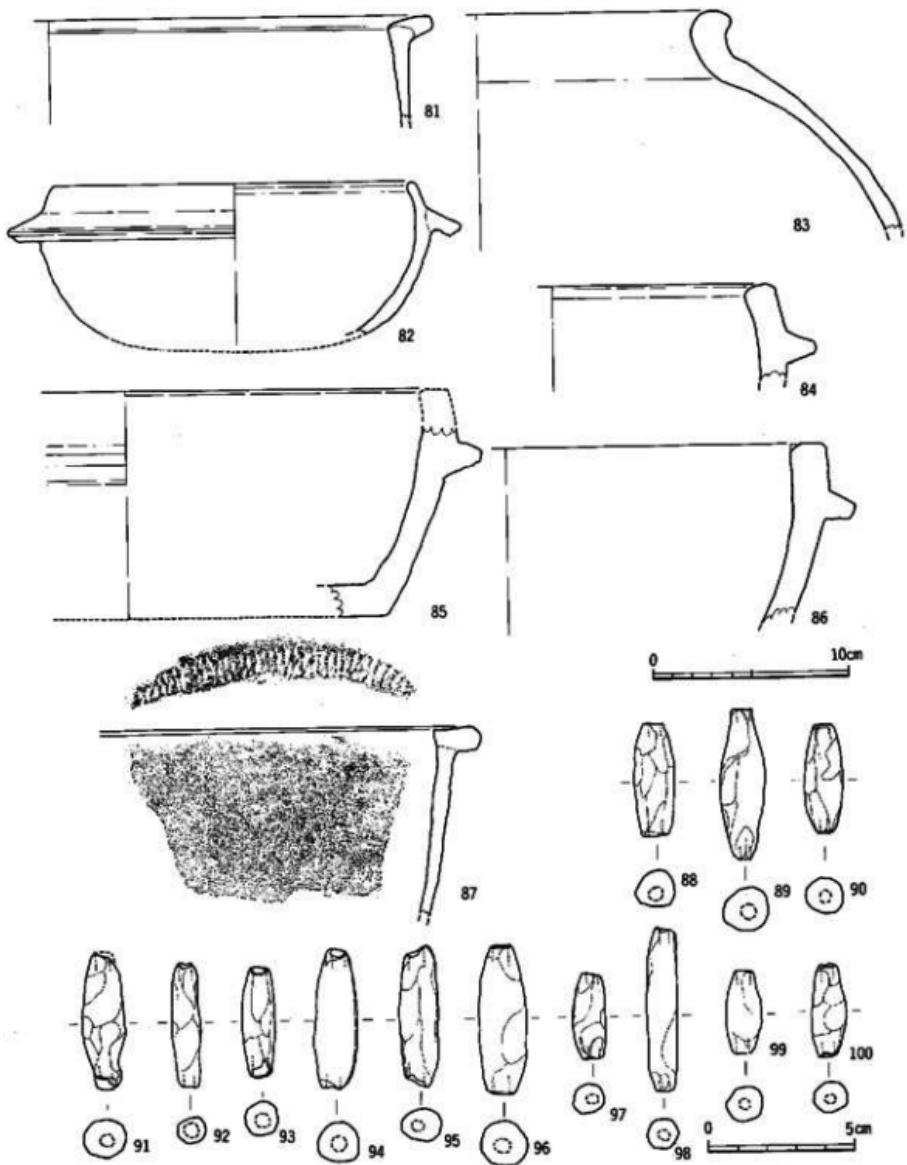


Fig. 57 第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図 (1/3・1/2) その5

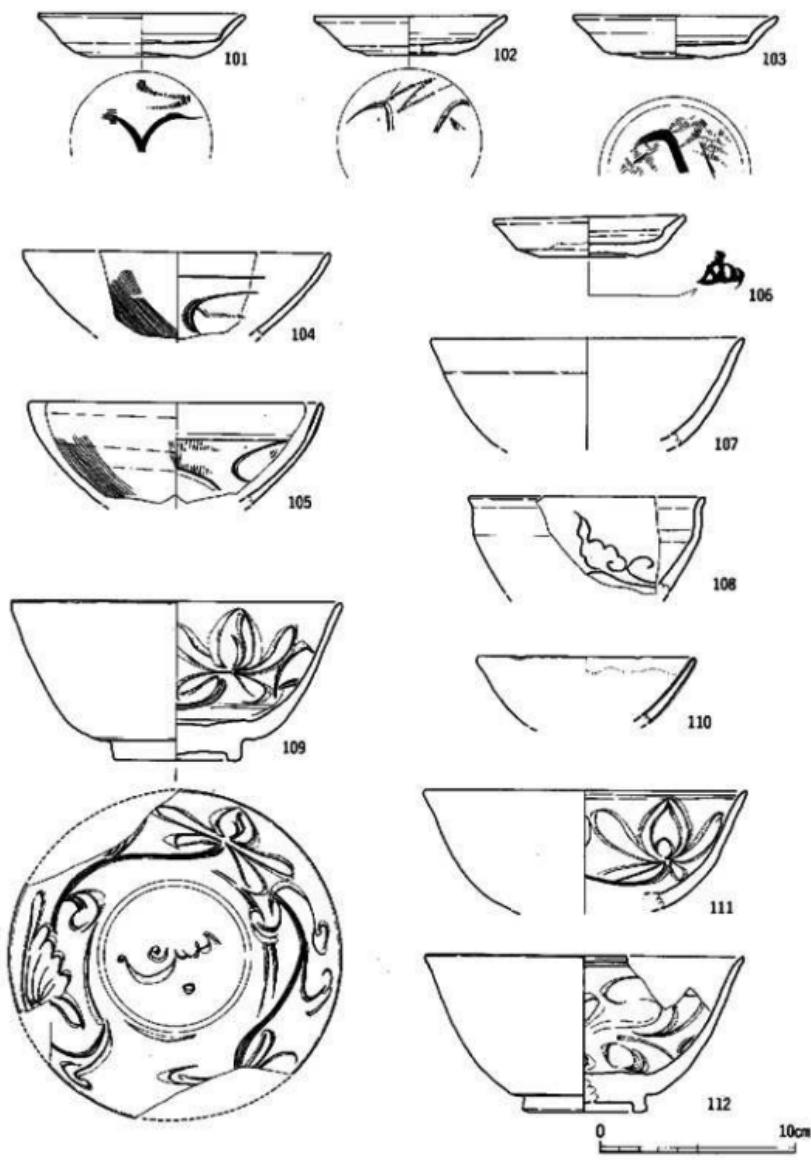


Fig.58 第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図 (1/3) その6

107・109～112は龍泉窯系碗である。107・110は無文(碗I類)で、釉は発色が良くなく、くすんだ緑灰色。口径16cm。110は内外面とも無文で、五ないし六弁をかたどった輪花碗である。口径11.2cm。109・111・112は内面に蓮花折枝文が施されている。口径・器高は109が17・8.1cm、111が16.6・?cm、112が16.4・8.0cm。釉はやや厚い。発色は良好で透明な青緑色。

SP 719出土遺物 (Fig.59)

土師器 盆 (113～128) いずれも糸切底である。口径・器高は、最小が122で8.4・1.0cm、最大が126で9.7・0.9cm、平均値は9.1・1.09cmである。焼成はいずれもあまりもろい。色調は褐色～明褐色。

土師器 坯 (129) 糸切底である。やや小片のため不正確であるが、口径・器高は12.0・2.0cm。内外面の調整痕は、器面が粗れており不明。

青磁 盆 (130) 同安窯系。口径・器高・底径は10.8・3.3・4.3cm。内底には櫛描文。青灰色。

白磁 盆 (131) 釉色は薄く青緑色がかった白色で、底部は搔き取っている。口径・器高・底径は10・1.8・6.1cm。形態的にはいわゆる口禿の白磁盆に類似。

陶器 無頸長壺 (133) 自然釉が内面に薄くかかる。外面は無釉。体部外縁～底部はロクロ回転ケズリによる整形。底部径は5.8cm。色調はくすんだ灰～灰褐色。焼成堅敏。

管状土錘 (132) 長さ4.5cm、径1.7cm、重さ11.0g。中型の土錘である。

SP 775出土遺物 (Fig.59)

土師器 盆 (134・136) 口径8.4～9.0cm、器高0.9～1.1cmを測る。いずれも糸切底で、焼成不良。色調はおおむね褐色～明褐色。

土師器 坯 (137) 糸切底で、体部中央で少し外反する。口径・器高は14.1・2.2cm。

SP 778出土遺物 (Fig.60)

土師器 盆 (138～140) 口径・器高・底径の各平均値は9.0・1.3・7.3cm。焼成不良。

土師器 坯 (141) 糸切底で板目圧痕がつく。口径・器高・底径は14.4・2.3・11.0cm。

瓦器 碗 (142) 口径・器高・高台径は17.1・6.7・7.0cm。体部中位でわずかに屈曲するが、ほとんど球形に近い。体部外縁下半には指頭圧痕がつく。高台は高さ1.2cmほどでやや高い。内面はヘラミガキと思われるが、器面が粗れており不明。部分的に銀灰色。

SP 782出土遺物 (Fig.60)

土師器 盆 (143～145) 口径・器高・底径の平均値は9.2・1.2・8.1cm。いずれも糸切底。色調は明褐色。

土師器 坯 (146) 底径に比して、器高が高い。他の坯とはやや形態的に異なる。口縁部下の沈線は意図的にロクロ回転により施文したもの。胎土は精良で、焼成良好。

SP 788出土遺物 (Fig.60)

土師器 皿 (147~154)

口径・器高・底径の平均値は9.1・1.2・7.6cm。いずれも糸切底。150の内面、151の外面にはススが付着。焼成はあまくややもろい。褐～明褐色。

土師器 壺 (155~156)

推定口径・器高・底径は15・2.8・11.6cm。155は口径が16cm程になる可能性がある。いずれも糸切底で、焼成はあまくもろい。褐色。

SP 860出土遺物

(Fig. 60)

土師器 皿 (157~160)

口径・器高・底径の平均値は8.7・1.1・7.4cm。いずれも糸切底である。

SP 890出土遺物

(Fig. 60)

土師器 皿 (161~162)

口径・器高・底径は不明。器形からみて、8.6~8cmほどの口径のものと思われる。焼成は良くなく、もろい。糸切底か。

SP 926出土遺物

(Fig. 60)

土師器 皿 (163)

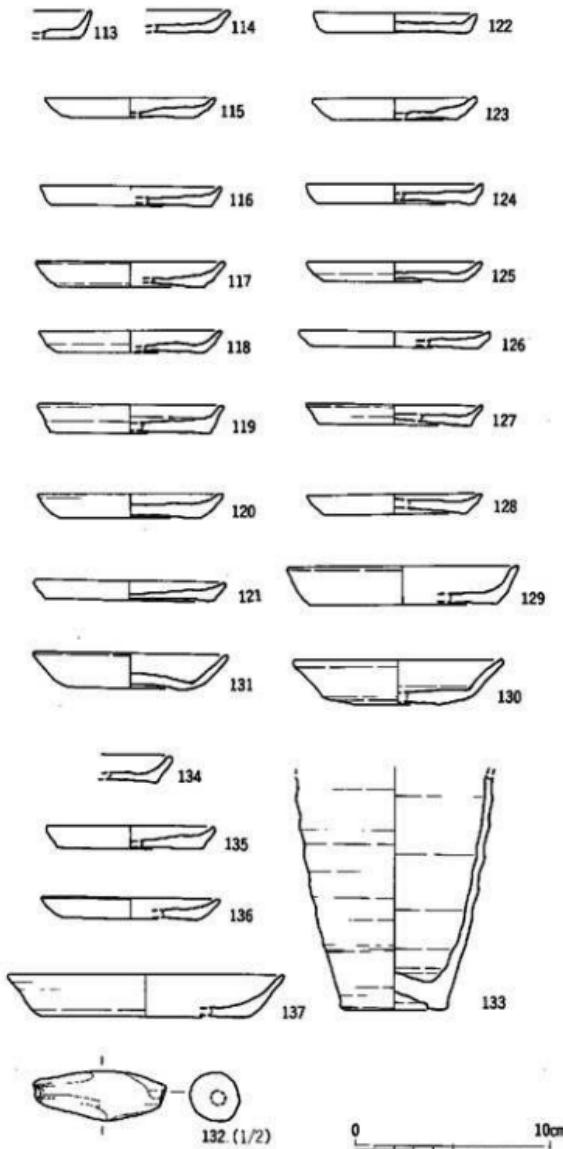


Fig. 59 第 II 区柱穴出土遺物実測図 (1/3・1/2) その 7

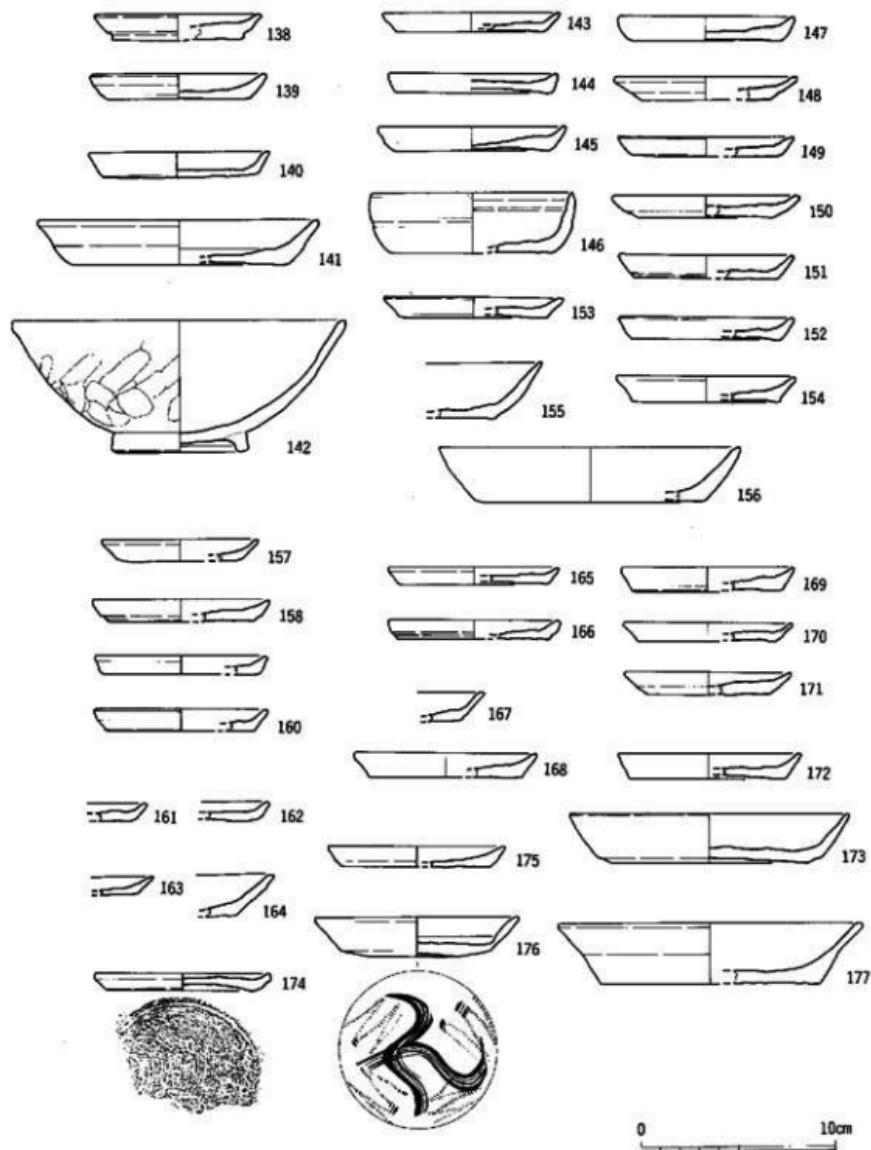


Fig.60 第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図 (1/3) その8

口径・器高は器形からみて9.5・0.9cmほど。焼成良好。色調は明褐色。

土師器 坯 (164)

口径・器高は器形からみて14.3・2.2cmほど。焼成良好。色調明褐色。

SP 978出土遺物 (Fig. 60)

土師器 皿 (165・166) 口径・器高・底径の平均値は8.8・1.0・7.8cm。いずれも糸切底。

SP 979出土遺物 (Fig. 60)

土師器 皿 (167・168) いずれも糸切底。焼成良好、良く焼き締まっている。明褐色白色。

SP 980出土遺物 (Fig. 60)

土師器 皿 (169～171) いずれも糸切底。口径・器高・底径の平均値は8.6・1.1・7.4cm。

SP 1009出土遺物 (Fig. 60)

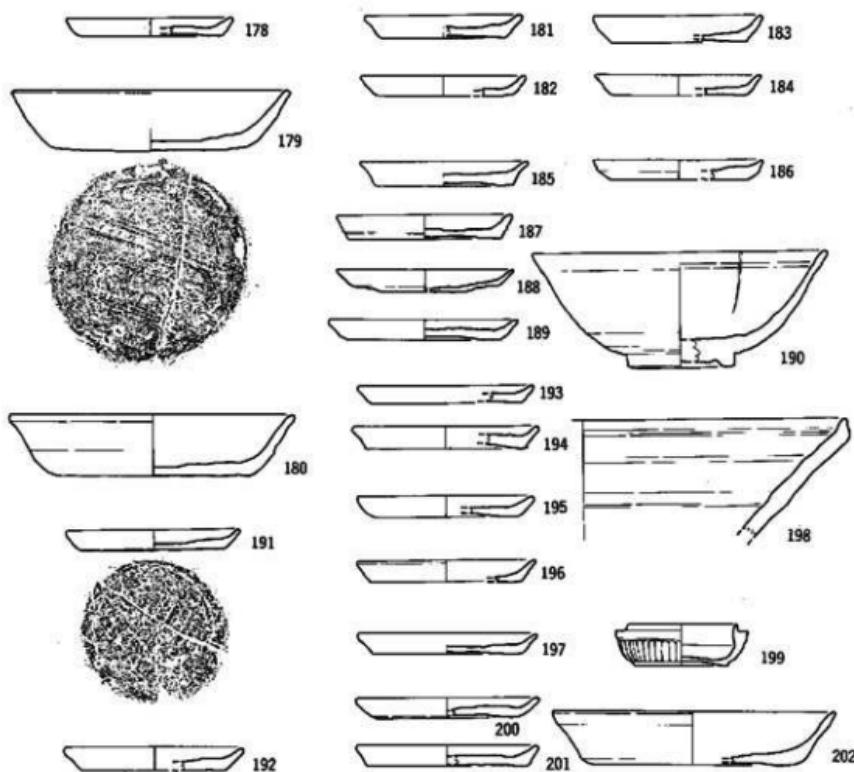


Fig. 61 第Ⅲ区柱穴出土遺物実測図 (1/3) その 9

土師器 皿 (172) 焼成良好。やや縮まり悪い。内外面とも回転ナデ。糸切底。

土師器 壺 (173) 焼成はやや悪くもろい。内底はヨコナデ。外底板目圧痕の有無は不明。

SP 1155出土遺物 (Fig. 60)

土師器 皿 (174・175) 口径・器高・底径の平均値は9.0・0.9・7.6cm。焼成・胎土良好。

SP 1170出土遺物 (Fig. 60)

土師器 壺 (177) 口径は底部からの復元のためやや不正確。焼成不良。体部中位で屈曲。

青磁皿 (176) 同安窯系である。口径・器高・底径は10.4・2.0・4.2cm。透明な緑灰色。

SP 1260出土遺物 (Fig. 61)

土師器 皿 (178) 糸切底である。作りはやや厚手。焼成は良くなくもろい。明褐色。

土師器 壺 (179・180) 口径・器高・底径の平均値は14.4・3.1・9.9cm。いずれも糸切底で、板目圧痕がつくが、180は不明確。焼成は不良でもろい。

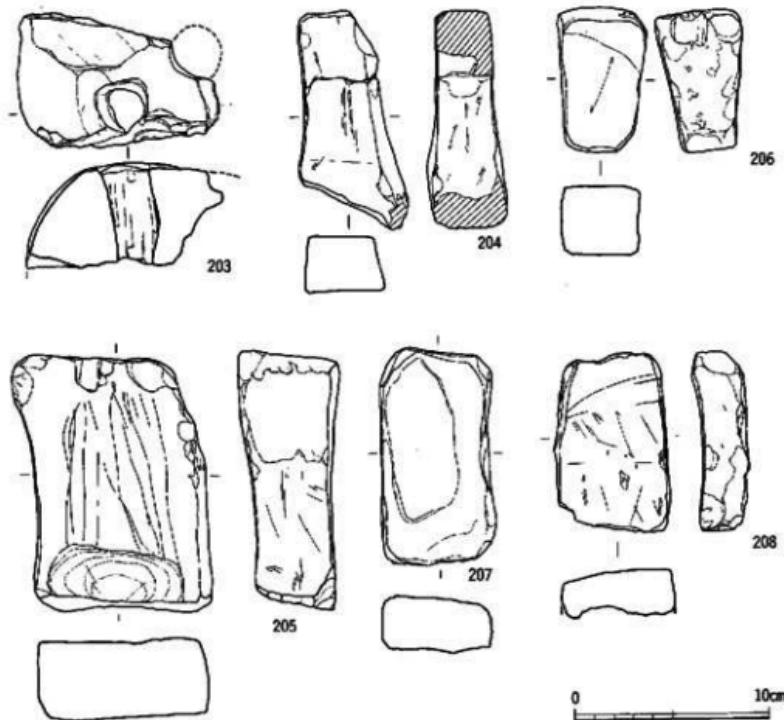


Fig. 62 第II区柱穴および溝状遺構出土遺物実測図 (SD01・18・19) (1/3)

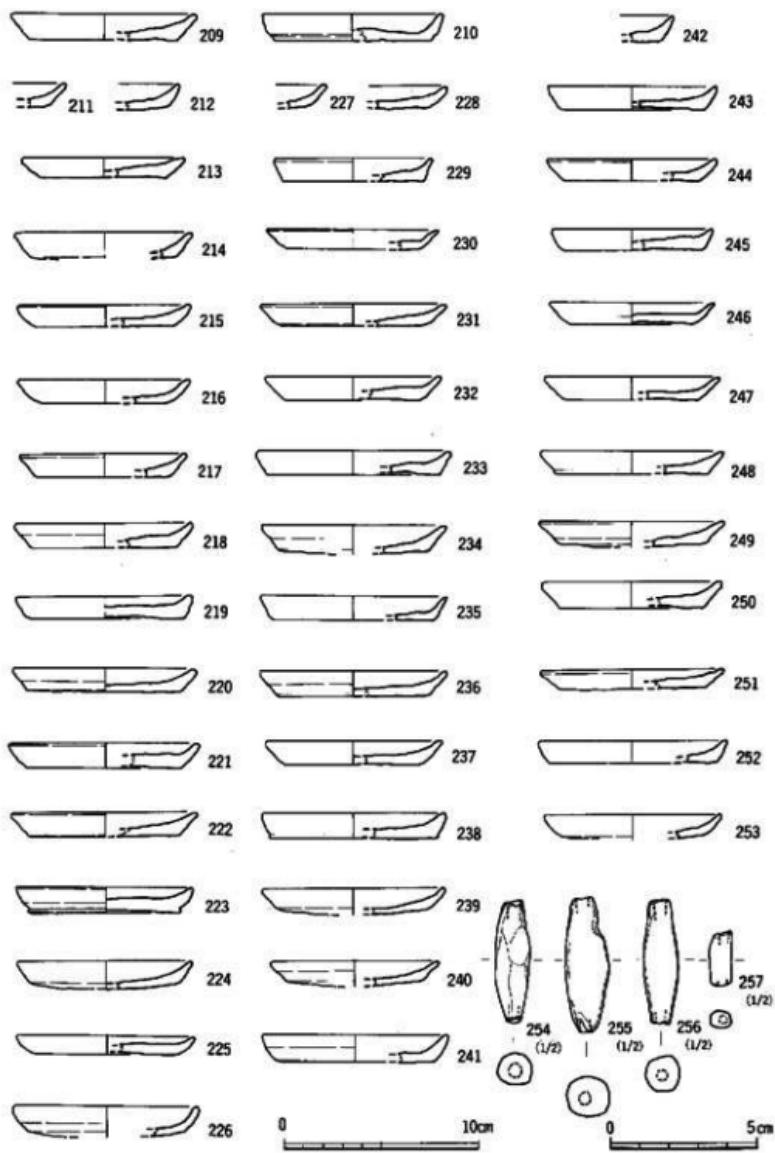


Fig. 63 第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 (SD 04・11) (1/3・1/2) その1

SP 1297出土遺物 (Fig. 61)

土師器 皿 (181~184) 口径・器高・底径の平均値は8.5・1.2・6.8cm。いずれも糸切底。焼成やや不良。褐色～明褐色。

SP 1299出土遺物 (Fig. 61)

土師器 皿 (185・186) 口径・器高・底径の平均値は8.6・1.2・7.0cm。いずれも糸切底。

SP 1305出土遺物 (Fig. 61)

土師器 皿 (187~189) 口径・器高・底径の平均値は9.3・1.2・7.8cm。いずれも糸切底で、188は板目圧痕がつく。焼成は良好。よく締まっている。褐白色～明褐色。

青磁 碗 (190) 龍泉窯系碗 I類。口径・器高・高台径は15.3・5.9・5.5cm。内面に白堆線を施文。口縁下内面および見込み内底にヘラ沈線。高台骨付に5~6ヶ所の砂目跡。薄い褐緑色。

SP 1616出土遺物 (Fig. 61)

土師器 皿 (191~194) 口径・器高・底径の平均値は9.1・1.0・7.6cm。焼成はやや良好。

SP 1643出土遺物 (Fig. 61)

土師器 皿 (195~197) 口径・器高・底径の平均値は9.0・1.1・7.6cm。焼成は良好。色調は褐色。なお図示しなかったが、口径13.5~8cmの土師器坏（糸切底）も共伴している。

須恵質土器 捺鉢 (198) 東播磨系捏鉢である。口径は約27cm。器高等は不明。胎土精良、白砂が混入。焼成堅緻。わずかに青みがかった明灰色。外面にはロクロ水挽き痕が残る。

青白磁 合子身 (199) 口径・器高・体部最大径・底径は5.4・2.2・6.8・4.8cm。型起しによる成形。蓋受け部、外底以外は薄く青緑がかった透明釉が施釉されている。焼成堅緻。

SP 1645出土遺物 (Fig. 61)

土師器 皿 (200・201) 口径・器高・底径の平均値は9.2・1.0・7.6cm。いずれも内底にヨコナデ、外底には糸切り後の板目圧痕がある。焼成良。暗褐色～褐色。

土師器 坏 (202) 内外面とも回転ナデ仕上げ。口縁部はわずかに肥厚。焼成良。褐色。

以下は各柱穴から出土した石製品である。

203は滑石製鍤である。SP 636から出土。平面形は一辺が15cmほどの円丸の矩形で、断面形は台形になる

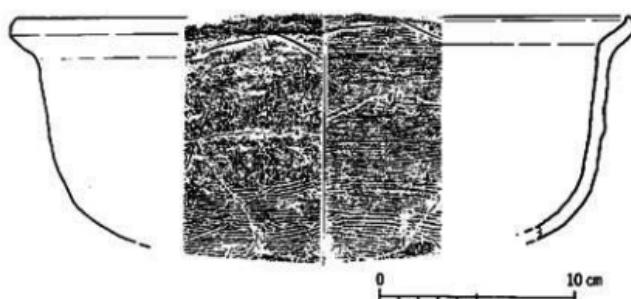


Fig. 64 第Ⅱ区溝状構出土遺物実測図 (SD11) (1/3) その2

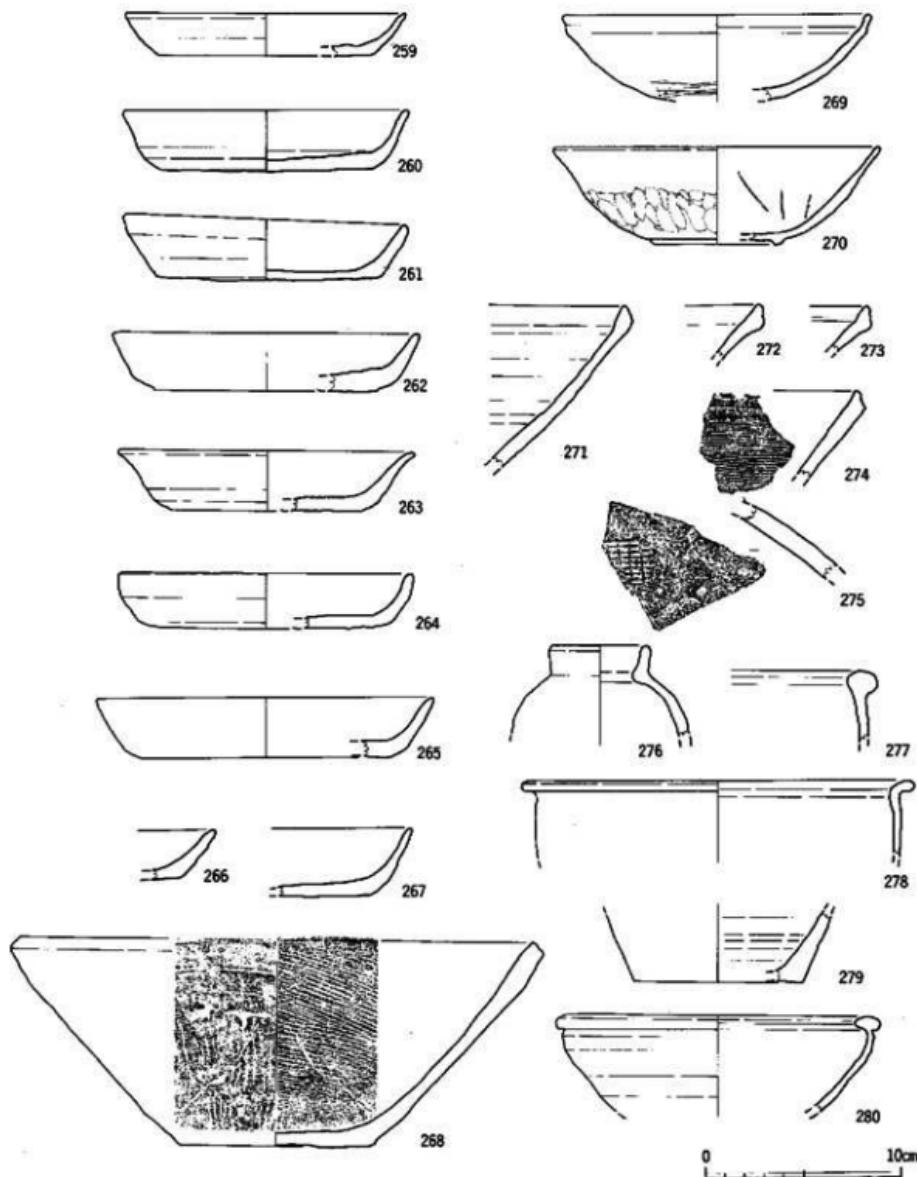


Fig. 65 第II区溝状邊構出土遺物実測図 (SD11) (1/3) その3

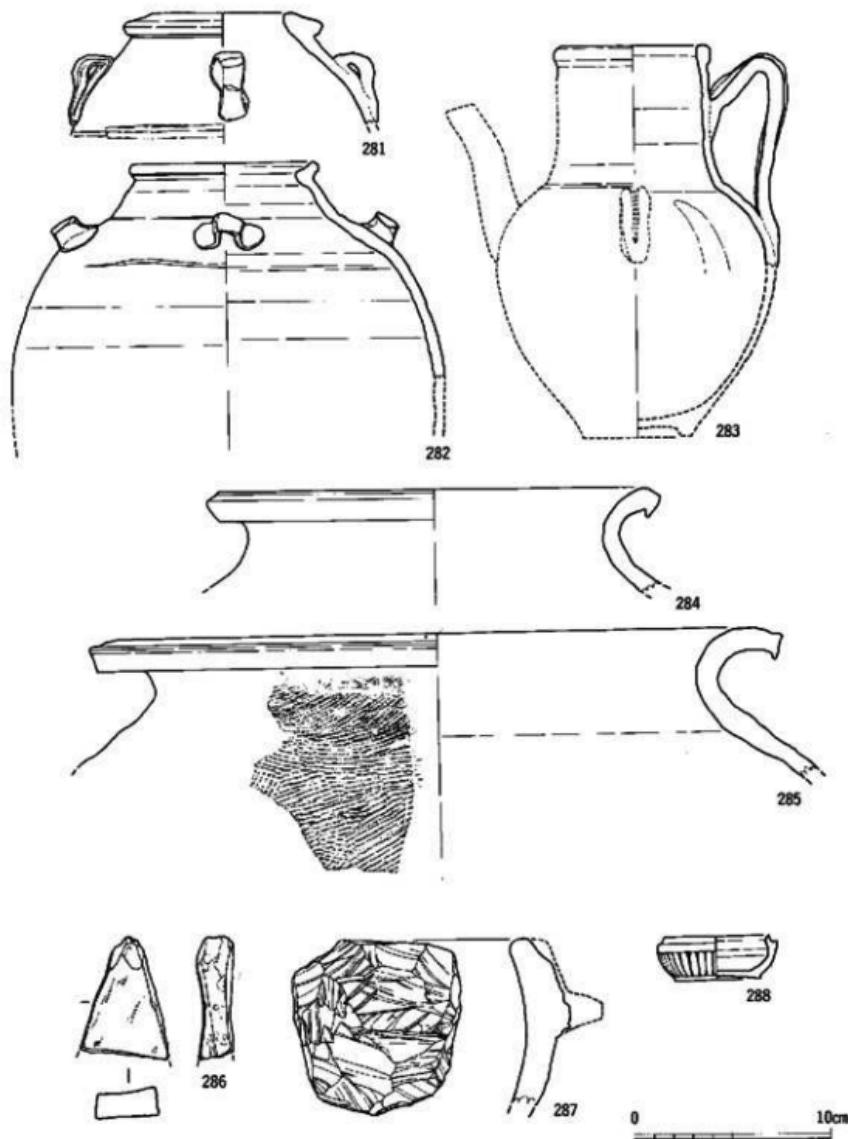


Fig. 66 第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 (SD11) (1/3) その4

と思われる。素材は良質の灰白色の滑石を用いている。204・205はキメの細かな砂岩製の砥石(中砥用か)である。長さ・幅・厚さは204が11.3・5.5・4.0cm、205が13.2・10.4・5.3cm。

2) 溝状遺構出土の遺物 (Fig.62~72)

SD01出土遺物 (Fig.62)

砂岩製砥石 (206) 長さ・幅・厚さは7.4・4.6・4.3cm。キメが細かい砂岩製。中砥用か。

SD04出土遺物 (Fig.63)

土師器 皿 (209・210) 口径・器高・底径の平均値は9.3・1.3・7.7cm。焼成やや良好。

SD11出土遺物 (Fig.63~68)

土師器 皿 (211~253) 口径・器高・底径の平均値は9.0・1.2・7.3cm。回転ヘラ切り離し底(以下ヘラ切底と略す)のものは211・214・224・(225)・226・227・228・(231)・234・239・240・249・(251)で、他は糸切底である。焼成はヘラ切底のものが比較的良好で、他はもろい。おおむね褐色~明褐色である。法量および形態的な特徴から、3つのグループに分類が可能である。1類はヘラ切底で、口径が9.5cm前後のもの。2類は糸切底で口径が9.2cm前後のもの、3類は糸切底で口径が8.6cmほどのものである。数量的には2類がSD11では最も多く、次に3類、1類の順である。おそらくこれはSD11の存続期間の上限と下限を示唆しているものと思われる。

土師器 壺 (259~267) 口径・器高・底径の平均値は15.1・2.9・11.3cm。263は口縁部が強く外反して開く器形であるが、それ以外はいずれも手で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁を丸く収めている。焼成はいずれもあまり良くなくもろい。色調は褐色~明褐色である。

土師質土器 土鍋 (258) 口径(外径)・器高・底径は32(32.8)・13.1・26cm。口縁部はやや強く外反し、内面に蓋受け用と思われる段がある。口縁端部はわずかに摘み出されている。内外面ともヨコハケによる調整仕上げであるが、底部と体部のハケ目の目の粗さが違う。

土師質土器 捏鉢 (268・274) 口径・器高・底径は268が26.1・10.5・9.6cm、274は不明。268の口縁部は肥厚している。内面は目の粗いハケ目で、内底から体部下半部までは使用によって磨耗している。外面は叩き調整後、軽いナデ仕上げ。胎土は砂を多く含む。焼成はやや堅緻。深い灰褐色~褐色。274は東播磨系の捏鉢に似る。内面が目の粗いハケ目。口縁端部は少し引き出されている。黒灰色で、焼成はややまく、もろい。

瓦器 碗 (269~270) 269の口径は15.6cm。浅い器形で、口縁端部は丸く引き出され、内側にわずかに屈曲している。内外面とも丁寧なヘラミガキで、外面下半には指頭圧痕が残る。270は細い高台を貼付した、浅い器形のもので、口径・器高・高台高・高台径は16.6・5.0・0.3・6.4cm。体部下半には指頭圧痕が、また内面にはヘラ当て痕が残る。焼成堅緻。暗灰色。

須恵質土器 捏鉢 (271~273) いずれも東播磨系捏鉢。口縁部断面形は三角形状で、わずか

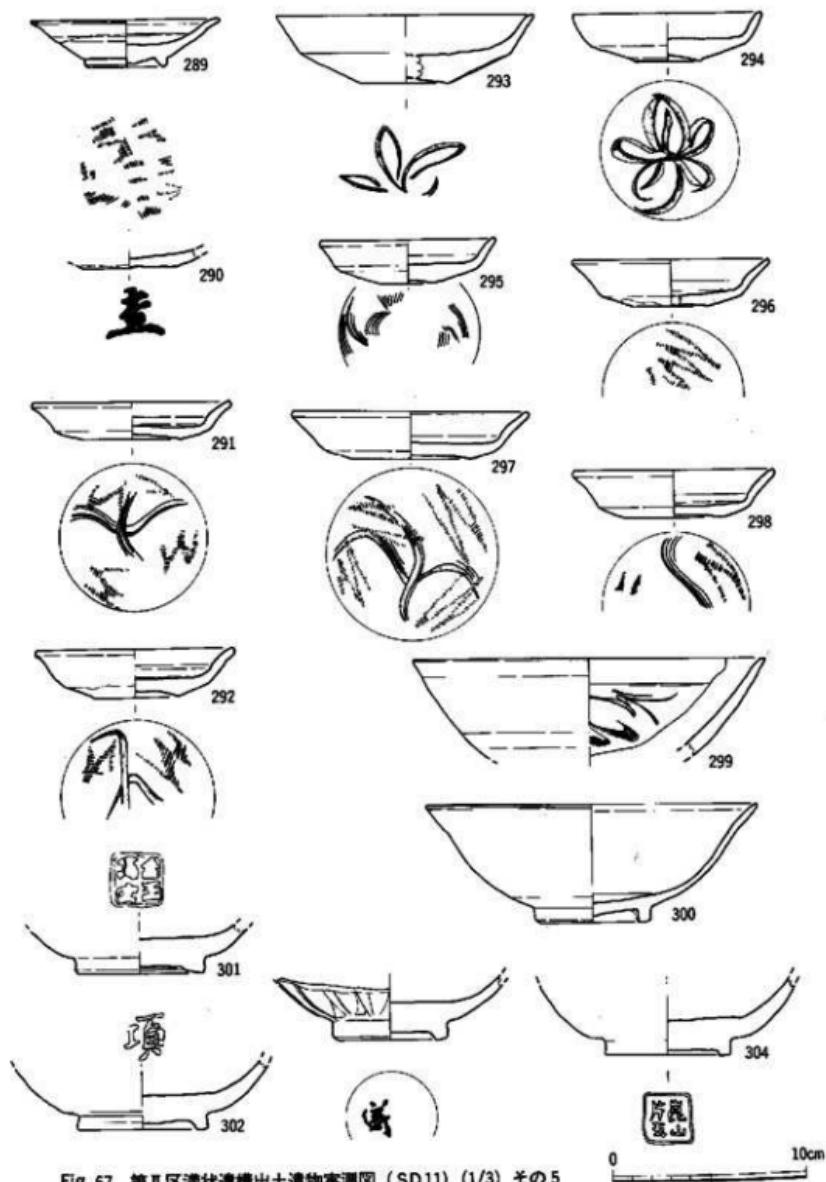


Fig. 67 第Ⅱ区溝状造構出土遺物実測図 (SD11) (1/3) その 5

に玉縁状に近い。口径は約27~30cmほどか。胎土精良、白砂が混入。焼成やや堅緻。わずかに青みがかった明灰色。内外面にはロクロ水挽き痕が残る。口縁部は黒灰色。

須恵質土器 壺 (284・285) 口径は、284が22cm(外径23.2cm)、285が35.8cm。口縁部はかなり強く外反している。口縁端部は頸部側に引き山されており、端部には、浅い凹線が巡っている。285は頸部から肩にかけて平行叩きが、284の頸部は叩き調整の後ナデ消している。焼成は、284はあまくもろい。黒褐色。285は良く焼き締まっている。明灰色。285は東播磨系と思われるが、284は形態的に良く似るものとの焼成、技法的にやや異なっている。

陶器 壺 (275) 常滑窯系の壺と思われる。肩部破片。格子目の印文がみられる。灰色で良く焼き締まっている。

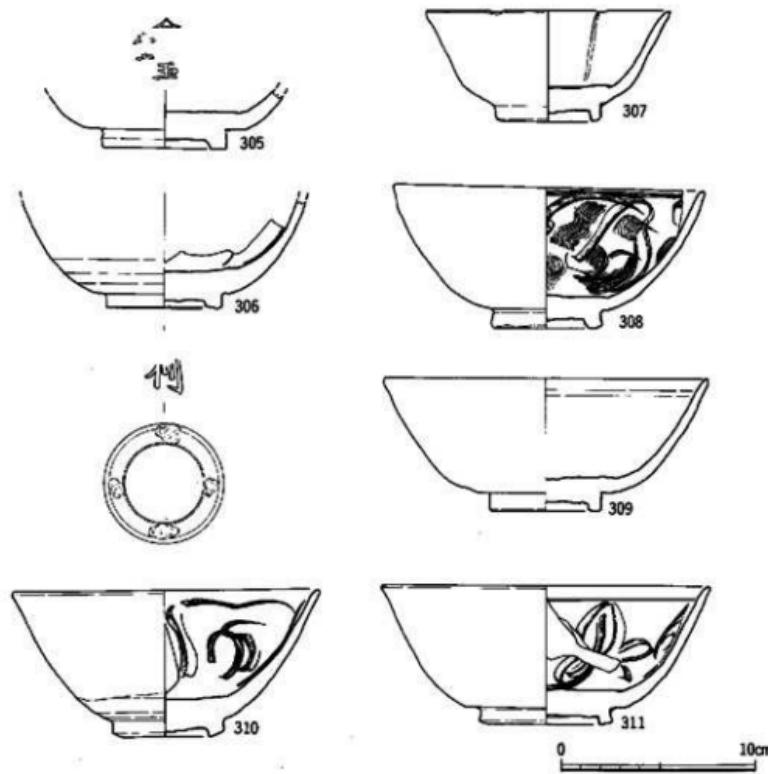


Fig. 68 第Ⅱ区溝状造構出土遺物実測図 (SD 11) (1/3) その6

陶器 瓶 (276・279) 276は口径は5.0cm。薄く灰綠釉が内外面にかかっている。焼成堅致。279は壺もしくは瓶の底部と思われる。左回転のロクロによるケズリ整形で、灰綠釉が非常に薄くかかっている。胎土はややきめ粗いがよく焼き締まっている。

陶器 壺 (277・278) 277は、玉縁口縁の壺である。口径は21cm前後のもの。278は口径20cm。口縁部が逆L字形に屈曲する。277と同様全面に褐釉が薄くかかっている。焼成堅致。

陶器 鉢 (280) 口径・器高・底径は16.6・(6)・(7.2)cm。褐釉が薄くかかる。口縁部は玉縁状に折り返している。口縁内側には目跡がみられる。

陶器 四耳壺 (281・282) いずれも褐釉が施釉。281は無頸で、口径は内径6.1cm。282はやや肩が張った、太めの作りになっている。胎土は精良で、焼成堅致。

陶器 耳付き水注 (283) 博多遺跡群出土資料を参考に復元したが、底部はもう少し上げ底になるか。口径は8cm。器高は20cmほどである。全面に褐釉を薄く施釉。焼成・堅致。

青白磁 合子身 (288) 口径・器高・体部最大径・底径は5.4・2.2・6.2・4.5cm。薄く青みのある透明釉が、底部、蓋受け部以外に施釉。体部は下半部は露胎。黒褐色の顔料が内面に付着。

白磁 碗 (299・300) 299は口径17.9cm。内面には櫛描とヘラ片切形により草花文を施文。300の口径・器高・高台径は17.0・6.0・6.0cm。口禿の白磁。釉色はいずれも明灰白色。

白磁 盆 (289・290) 289は高台付きで、口径・器高・高台径・高台高は9.6・2.4・4.7・0.45cm。ヘラケズリによる整形。口縁下内面には沈線を巡らしている。体部外面下半は露胎である。釉は明灰白色。290は内底に櫛描文を施文している。外底には花押が墨書きされている。

青磁 盆 (291~298) 293~295は龍泉窯系、その他は同安窯系である。293の口径・器高・底径は13.2・3.5・4.6cm。内底にヘラ片切形による草花文を施文。294の口径・器高・底径は9.8・2.5・3.2cm。内底にヘラ片切形による蓮花文。底部には目跡。295の口径・器高・底径は9.0・2.3・2.6cm。内底には櫛描文。いずれも青緑色の不透明釉。同安窯系皿は、297が口径・器高・底径が11.3・2.3・3.1cmで少し大きい他は、口径は10.3cm前後である。いずれも内底に草花文と櫛描文を施文している。青みがかった透明な緑灰色。焼成堅致。

青磁 碗 (301~311) いずれも龍泉窯系青磁である。303(碗II類)、307(碗III類)以外はI類に含まれる。306・302・3・4~306・309は内外面とも無文で、内部に「金玉満堂」・「項」・「利」などの印文があるものがある。釉の発色はあまり良くななく、くすんだ緑灰色。308は内面に割花文を施文。310・311はヘラ片切形による割花文、蓮花折枝文施文。

管状土錠 (254~257) SD11からは9個出土した。図示したのは中型のもの(254~256)、小型のものである。長さ・径・重さは、255が5.4cm・1.5cm・12.8g。外面は丁寧なナデ仕上げ。

砂岩製砥石 (286) 現存長6.3・4.6・1.9cm。3面が紙面である。中砥用か。

滑石製石鏡転用品 (287) 現存長・幅・厚さは9.0・8.6・3.0cm。側辺は二次的加工を施し全

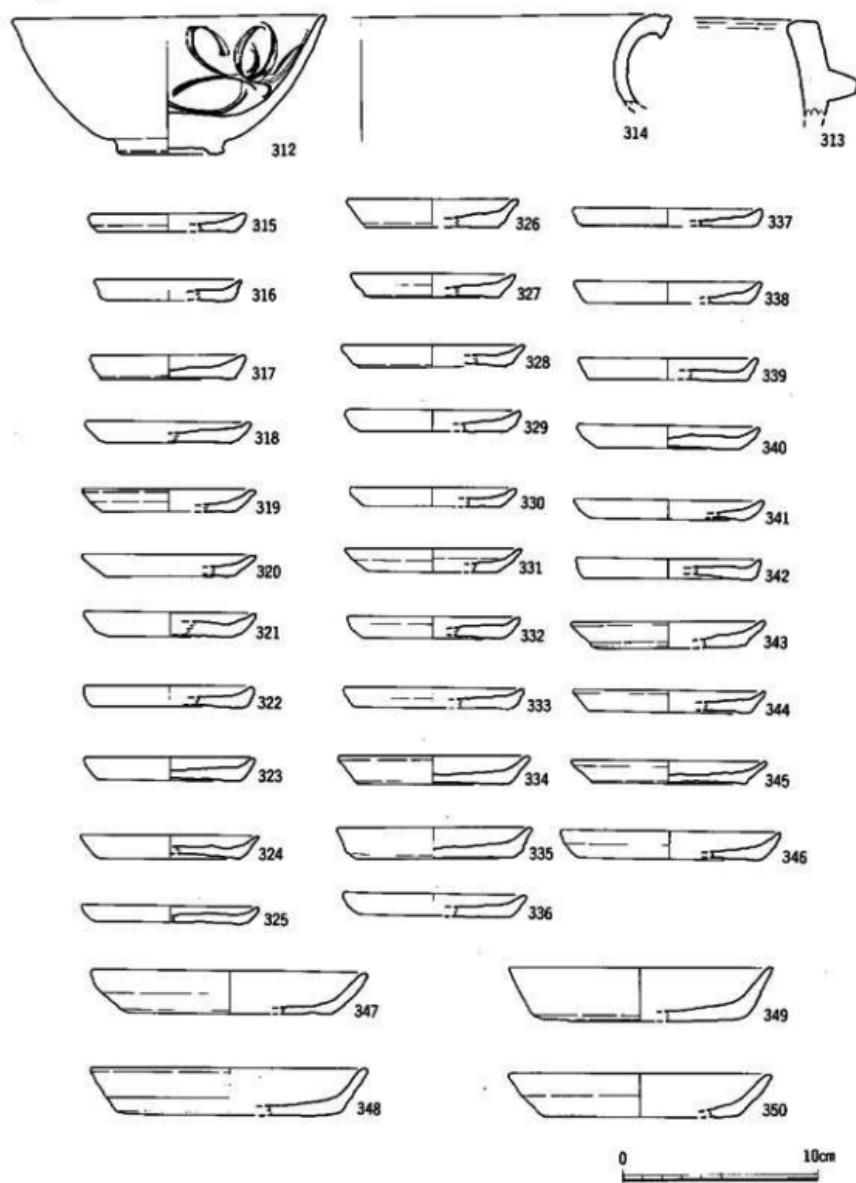


Fig. 69 第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 (SD 12・13・16・22) (1/3) その7

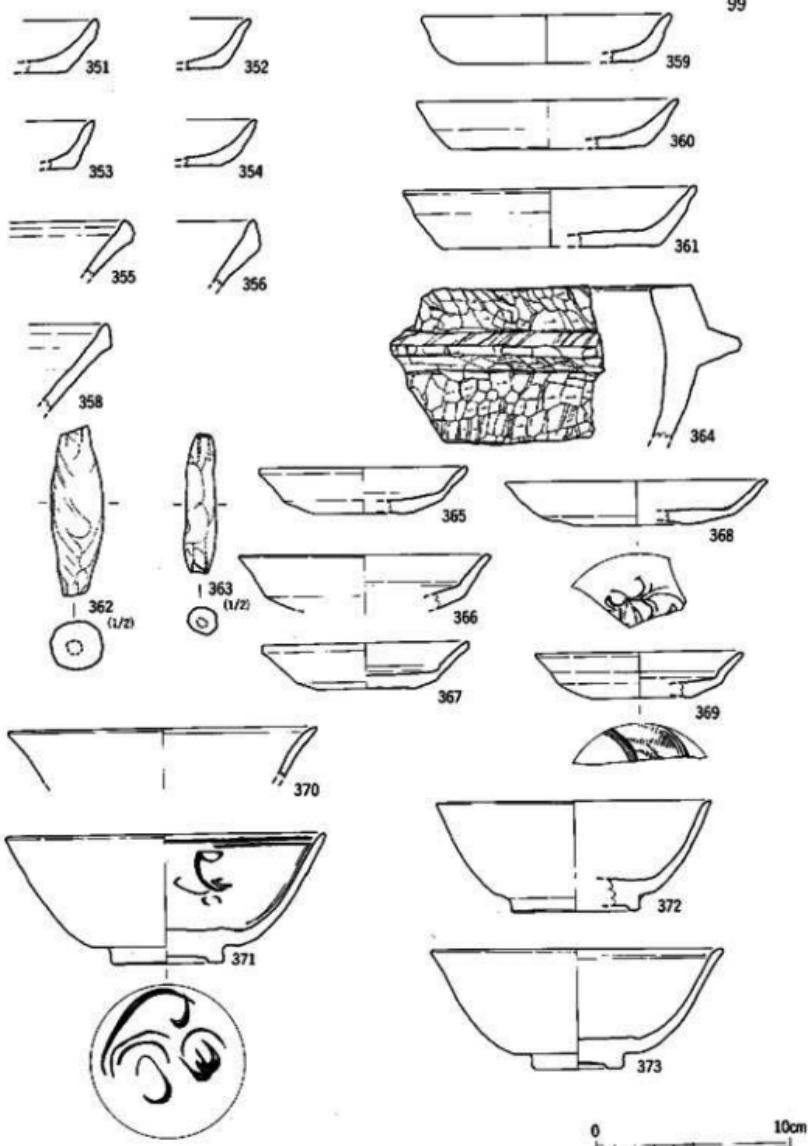


Fig. 70 第Ⅱ区溝状造構出土遺物実測図 (SD22) (1/3) その8 (357は欠番)

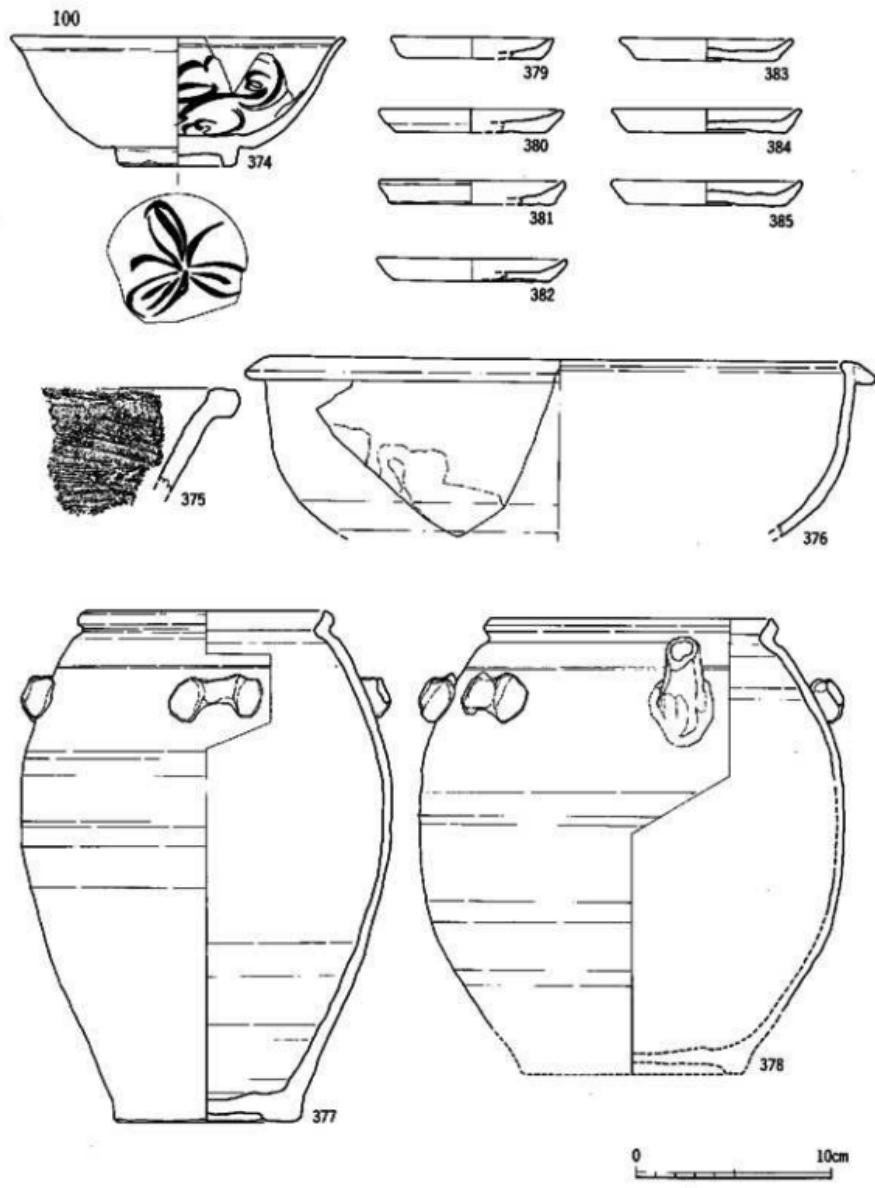


Fig. 71 第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 (SD 22・25・33) (1/3) その 9

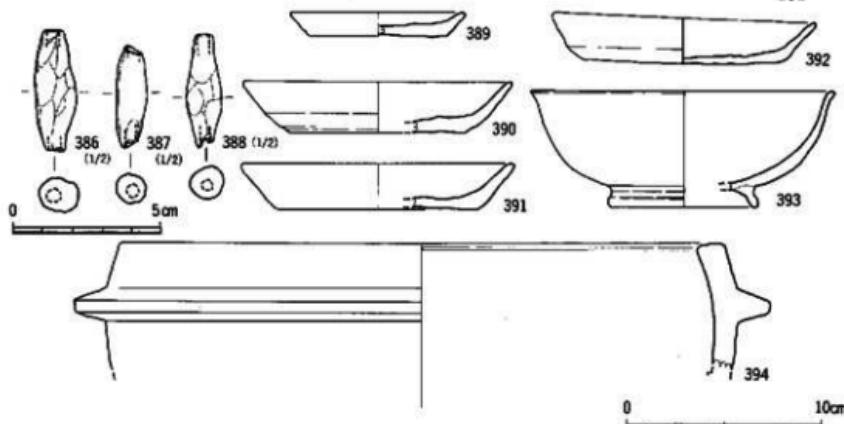


Fig. 72 第Ⅱ区溝状造構出土遺物実測図 (SD 47-52-53-55-58-59) (1/3-1/4) その10
体に丸みのある隅丸矩形に仕上げている。用途は不明。

SD 12出土遺物 (Fig. 69)

青磁 瓢 (312) 龍泉窯系碗 I 類。口径・器高・高台径・高台高は16.0・7.0・5.4・0.7cm。内面には蓮花折枝文をヘラ片切彫により施文。内底は無文。薄く褐色がかった透明な緑灰色。

SD 13出土遺物 (Fig. 69)

滑石製石鍋 (313) 口縁部片。口径は25cmほど。表面の仕上げは粗い。内面は磨研。灰色。

SD 16出土遺物 (Fig. 69)

須恵質土器 瓢 (314) 284・285と形態的に良く似ている。かなり強く口縁部は外反する。頸部外面は叩き成形の後、軽くヨコナデ仕上げ。焼成は軟質で、もろい、灰褐色を呈する。

SD 18出土遺物 (Fig. 62)

砂岩製砥石 (207) 長さ・幅・厚さは11.2・6.0・2.8cm。側辺と正面に一部研面として用いた痕跡が残る。中底用か。

SD 22出土遺物 (Fig. 69~71)

土師器 皿 (315~345) 口径・器高・底径の平均値は9.0・1.1・7.4cm。口径の最小のものは316で7.4cm、最大のものは346で11.2cmある。SD 11と比べ全体的に法量が小さくなっている。このSD 22では9.2cm前後のものと8.7cmほどのものが量的に多い。ヘラ切りと明確にわかるものは343だけである。焼成はいずれもあまり良くなくもろい。褐色～明褐色を呈す。

土師器 壺 (347~354・359~361) 口径・器高・底径の平均値は13.7・2.5・10.5cm。最小は359で口径12.8cm。最大は361で15cm。図示したもので半径が不明なものも器形的にはほとんど同じである。いずれも焼成は良くなくもろい。明褐色～褐色。

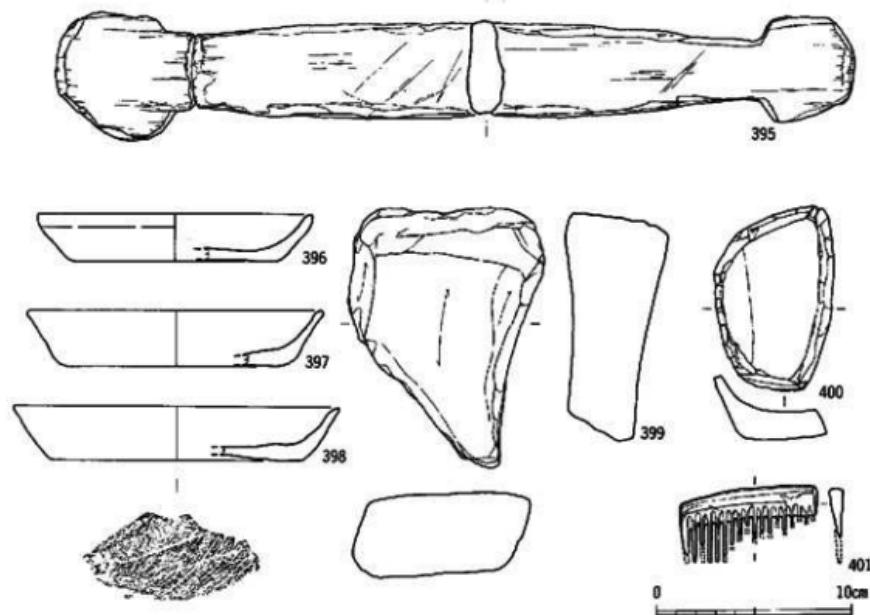


Fig. 73 第Ⅲ区井戸出土遺物実測図 (SE 03・07・09) (1/3) その 1

須恵質土器 捏鉢 (355～358) 口径は推定で25cm前後。玉縁状に口縁部外面が丸みをもつものと、断面が三角形になるものがある。焼成は比較的の良好。灰白色～灰色。口縁は黒灰色。

土師質土器 土鍋 (375) 口径は不明。内面はハケ目、外面はナデ仕上げ。暗褐色。

管状土錐 (362・363) SD 22からは19点出土している。長さ・径・重さは362が5.7・1.8cm・18.10g。363が4.7・1.0・0.4cm・4.85g。362の両端は平坦に切り落とされている。

滑石製石鍋 (364) 口径が30cmほどの低い器高のものと思われる。口縁部は内傾している。内外面とも丁寧なケズリによって整形されている。素材は灰色の良質な滑石。

白磁 盆 (368) 口径・器高・底径は13.4・(2.3)・6.3cm。内底はヘラによる草花文を施文。不透明な明灰白色の釉が全面にかかる。外底は施釉後搔き取っている。

白磁 碗 (370) 口禿の白磁である。口径は15.6cm。胎土は精良。焼成堅緻。灰白色。

青磁 盆 (365～367・369) 366は龍泉窯系で、他は同安窯系。口径・器高・底径は366以外はいずれも10.6・2.3・5.1cmでほとんど同じ大きさである。焼成堅緻。薄く青灰色がかった透明

な緑色。365・367は無文。366が13・(2.4)・5.2cm。

青磁 碗 (371~374) いずれも龍泉窯系である。372・373はやや小型。口径・器高・高台径は371が16.6・6.5・5.7cm、372が14・5.6・6.6cm、373が15.0・7.2・4.8cm、374が17.0・6.6・6.0cm。371はヘラ片切形による割花文、374は同様に蓮花折枝文。373は口縁下に沈線。

陶器 鉢 (376) 口径29.0cm。内面から体部外面の上半分に薄く褐釉を施釉。口縁部上面は露胎。体部下半は回転ヘラ削り整形。器高は10cm。胎土は赤褐色。焼成堅緻。

陶器 壺 (377・378) 377は四耳壺、378は耳がつく注口付壺。口径・器高・胸部最大径・底径は377が13.0・22.75・19.0・9.5~10.1cm。378は15.0・23.4・21.0・11.0cm。口縁部は「く」の字に屈曲。体部下半はヘラケズリ。内面は水挽き痕が残る。いずれも褐釉が薄くかかる。

SD25出土遺物 (Fig.71)

土師器 盆 (379~382) 口径・器高・底径の平均値は9.1・1.2・7.8cm。いずれも糸切底。器形はほとんど同じである。胎土精良。焼成はあまり良くなく、もろい。褐色~明褐色。

SD33出土遺物 (Fig.62・71・72)

土師器 盆 (383~385) 口径・器高・底径の平均値は9.4・1.2・7.8cm。385はヘラ切底の可能性があるが、他は糸切底。胎土精良。焼成はやや縮まりなくもろい。暗褐色~明褐色。

花崗岩製砥石 (208) 長さ・幅・厚さは9.1・5.8・2.8cm。研面は正面と、両側辺で、裏面および他の面は加工痕が残っている。キメは細かく中紙用か。

管状土錠 (387) 長さ・径・重さは3.4・1.0cm・3.15g。やや小型のものである。焼成良好。

SD47出土遺物 (Fig.72)

土師器 坯 (389) 口径・器高・底径は9.0・1.2・7.0cm。糸切底。焼成不良でもろい。

SD52出土遺物 (Fig.72)

土師器 坯 (391) 口径・器高・底径は9.0・1.2・7.0cm。糸切底。内底はヨコナデ。

滑石製石鍋 (394) 口径は31.4cm、鋸外径は31.3cm。器表面はヘラケズリ整形後磨研。素材は良質な灰色の滑石を用いている。

SD53出土遺物 (Fig.72)

土師器 坯 (390・392) 口径・器高・底径の平均値は13.7・2.5・9.6cm。いずれも糸切底。392の内底にはヨコナデ、外底には板目压痕が残る。焼成は良くなくもろい。色調は褐色。

SD59出土遺物 (Fig.72)

黒色土器 瓢 (393) 口径・器高・高台径・高台高は16.1・5.9・7.8・1.0cm。内外面はヘラミガキ仕上げ。黒色である。体部外面下半は、手持ちヘラケズリ。高台は「ハ」の字形に開く。

3) 井戸出土の遺物 (Fig.73~77)

SE01出土遺物 (Fig.73)

104

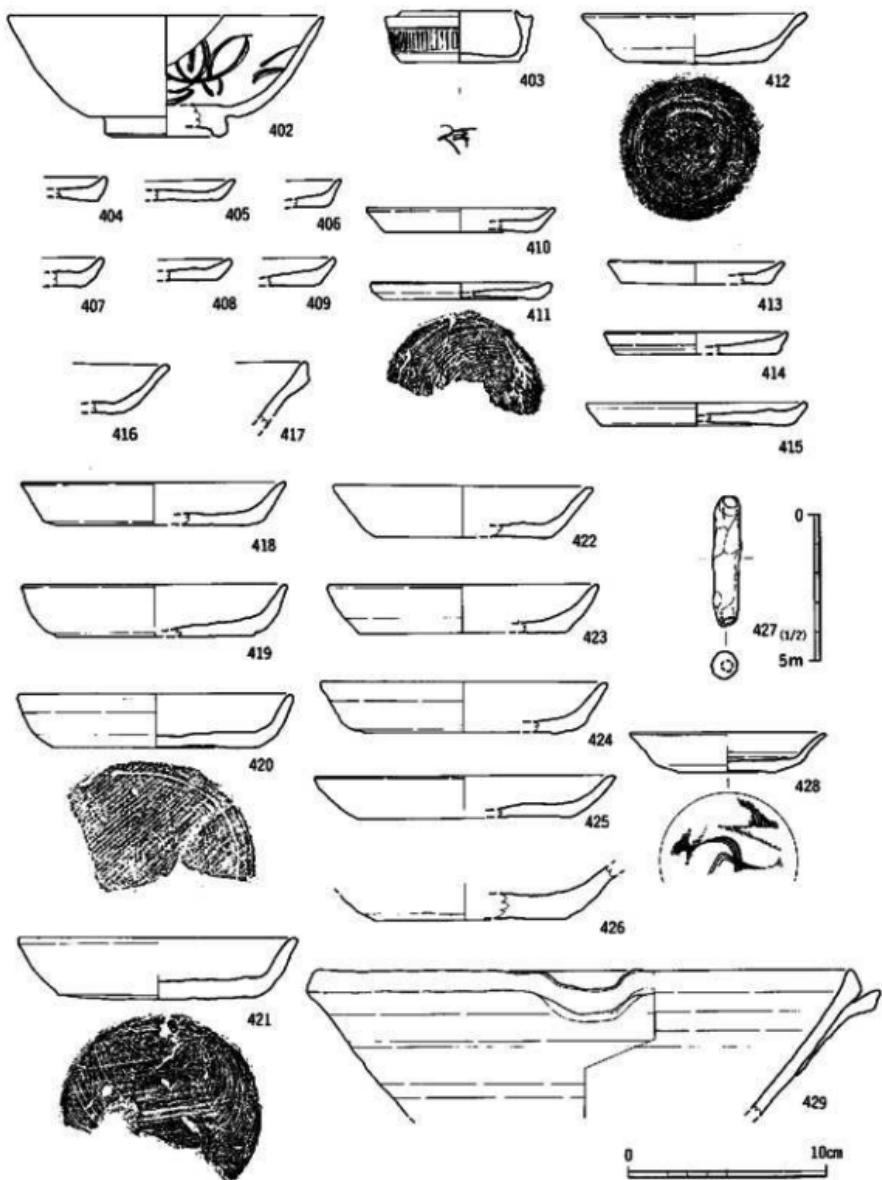


Fig. 74 第Ⅱ区井戸出土遺物実測図 (SE 05・06・09) (1/3) その2

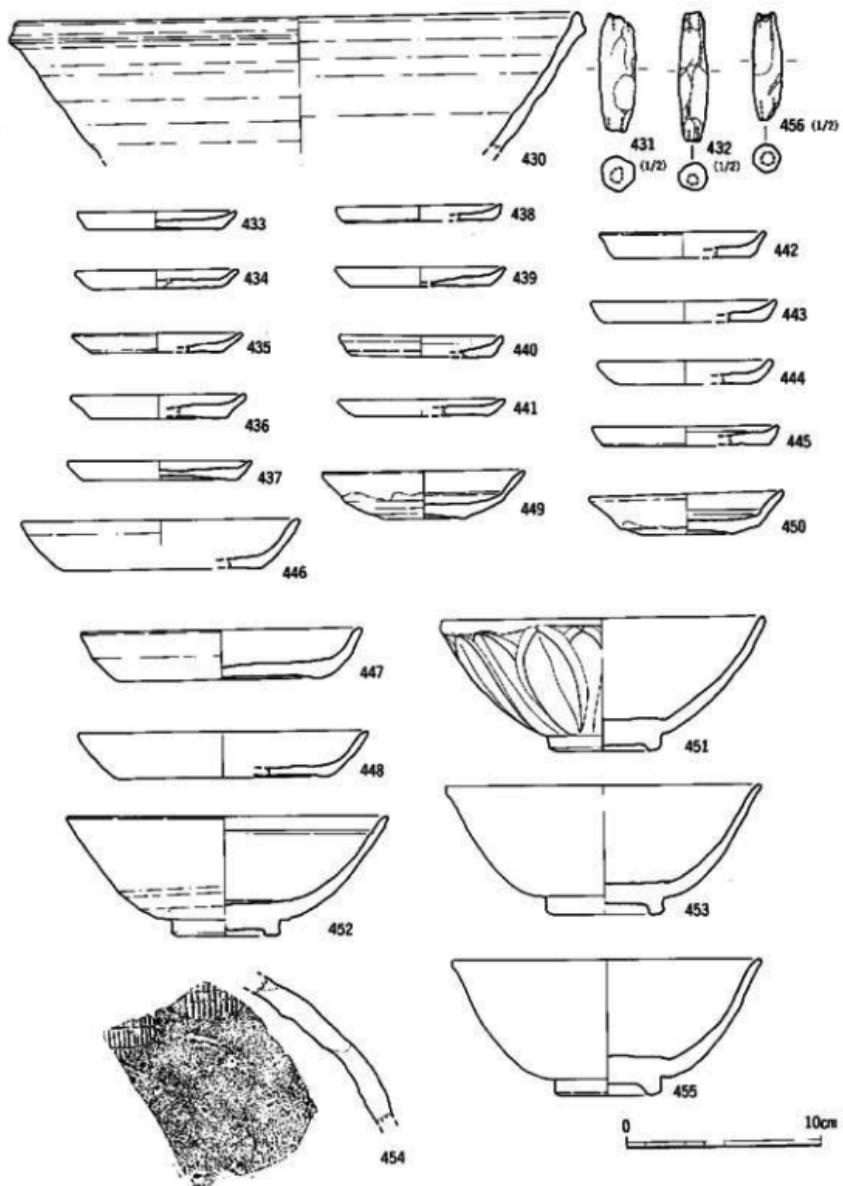


Fig. 75 第Ⅱ区井戸出土遺物実測図 (SE 09・11~13) (1/3) その3

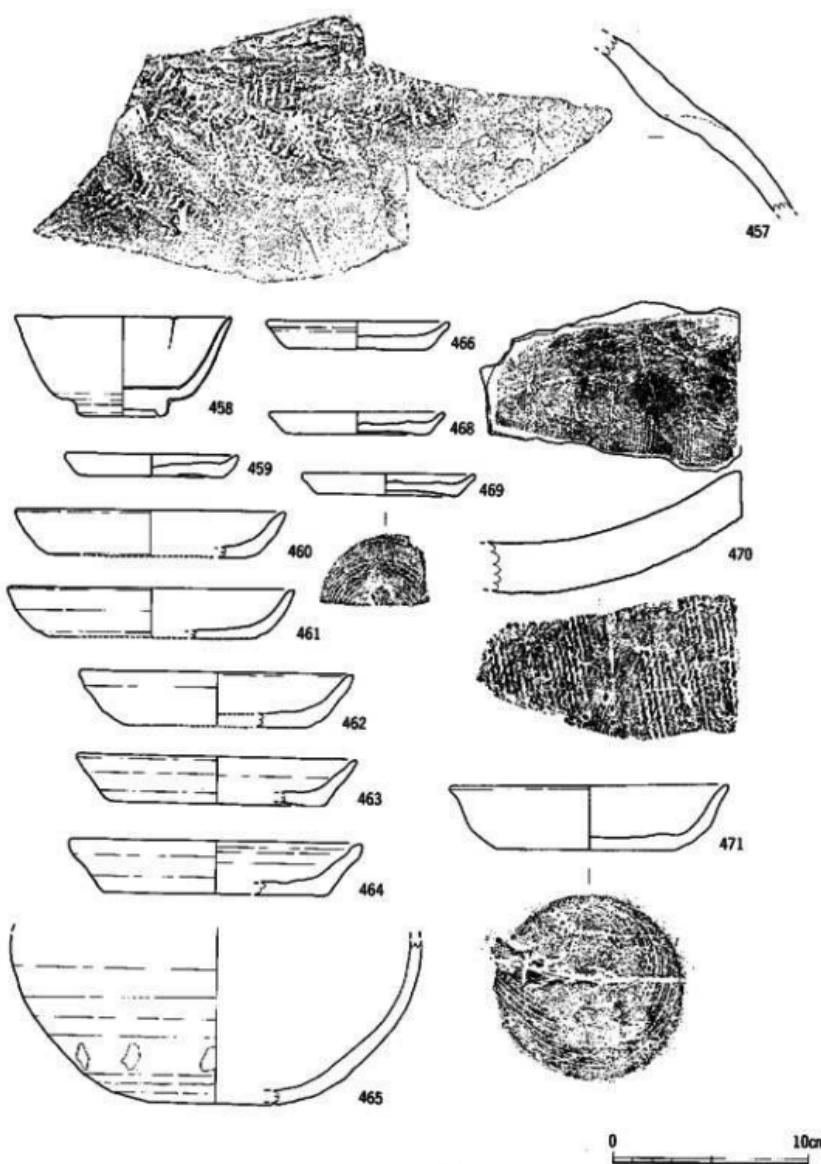


Fig. 76 第II区井戸出土遺物実測図 (SE 12~15・17・19) (1/3) その4 (467は欠番)

木製品 不明 (395) 長さ・中央部幅・最大幅・厚さは41・4.8・6.7・2cm。長方形の板木目を素材に用い、端から5cmほどのところを抉って、両端を瘤状に作り出している。紐掛けのための作りだしとも思われるが用途は不明確。(註1)曲物等の容器の枠木とする考えもある。

(註1 奈良國立文化財研究所 木器集成図錄近畿古代篇 1985)

SE 03出土遺物 (Fig. 73)

土師器 壺 (396~398) 口径・器高・底径の平均値は15.2・2.7・11.3cm。いずれも系切底で、厚手である。焼成はあまり良くなくもろい。灰褐色～明褐色。

SE 04出土遺物 (Fig. 73)

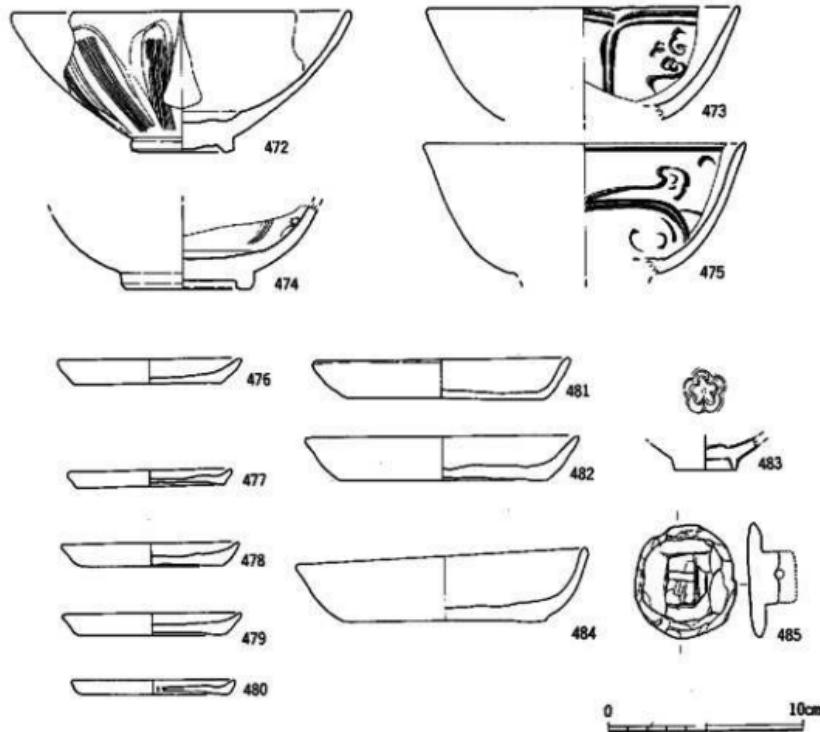


Fig. 77 第Ⅱ区井戸出土遺物実測図 (SE 17・21・28・32) (1/3) その5

木製品 横柵
(401) 長さ・幅・厚さは3.9・7.1・0.7cm。表裏から作り出された櫛歯の間隔は1.5mm前後である。

素材は木目の非常に細かな板目材を用いている。樹種は不明。

SE 05出土遺物 (Fig. 74)

青磁 碗 (402) 口径・器高・高台径は16.1・6.2・6.2cm。内面にはヘラ片切彫による蓮花折枝文を施文。焼成堅緻。薄く褐色がかかった透明な緑色。龍泉窯系碗 I類。

SE 07出土遺物 (Fig. 73・74)

陶器 合子身 (403) 褐粒が内面および体部外面にかかる。受け部・外底は露胎。外底には花押と思われる墨書きがみられる。口径・器高・体部最大径・底径は5.8・2.6・7.4・6.0cm。

砂岩製砥石 (399) 現存長・幅・厚さは13.4・10.1・5.1cm。ほぼ中央で欠損している。左右上下の面を研面としている。研面は使い込まれて滑らかである。中砥用か。

SE 09出土遺物 (Fig. 73・74)

土師器 皿 (404~411・413~415) 満定可能なものの口径・器高・底径の平均値は9.6・1.1・8.3cm。破片では口径9cm前後のものが多い。すべて糸切底である。焼成は良くなくもろい。褐色～明褐色。

土師器 坯 (412・416・418・425) 412はヘラ切底である。その他はすべて糸切底。412以外の口径・器高・底径の平均値は13.8・2.5・10.3cm。いずれも厚手である。419・420の外底には板目圧痕がつく。422の体部は直線的に立ち上がり、他と比べ、器高もやや高くなっている。焼成良好。他は焼成はいずれもあまり良くなくもろい。灰褐色～明褐色。

須恵質土器 捏鉢 (417・426・429・430) いずれも束縛唇系のものである。口径は429が28.4cm、430が29.5cm。口縁部はいずれも黒灰色。429・430の体部はわずかに膨らみがある。底部破片の426は、使用によって内底がなめらかに磨耗している。外底は回転糸切りの後軽くナデ消している。胎土は白砂・黒色砂を含み、良く締まっている。灰白色～(青)灰色。

青磁 皿 (428) 同安窯系である。口径・器高・底径は10・2.1・4.8cm。内底には柳描文とヘラ片切彫の草花文を施文。淡く青みがかかった透明な緑灰色。

滑石製石鍋転用品 (400) 石鍋の底部の破片の周縁を丁寧に再加工している。現存長・幅は9・8.5cm。素材は灰白色の良質な滑石で、石鍋として利用していた際に付着したススが残る。

SE 11出土遺物 (Fig. 75)

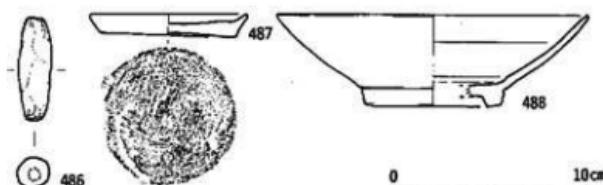


Fig. 78 第Ⅱ区土壤出土遺物実測図 (SK 02-06) (1/3・1/2)

管状土錐 (431) 長さ・径・重さは3.9・1.2cm・5.0g。やや小型である。焼成良好。

SE 12出土遺物 (Fig. 75・76・77)

土師器 盆 (433～445・467) いずれも糸切底である。口径・器高・底径の平均値は8.8・1.0・7.2cm。全体に作りが小さくなっている。特に体部の引き出しが短い。433は内底は軽くヨコナデ、外底に板目圧痕がある。焼成は良くなくもろい。褐色～明褐色。

土師器 环 (446～448) いずれも糸切底である。口径・器高・底径の平均値は14.4・2.5・10.5cm。447は内底に強い押しナデが、外底には板目圧痕が残る。胎土精良。褐～暗褐色。

陶器 壺 (454・457) いずれも常滑窯の大壺の肩部の破片である。胎土・焼成とともに須恵器に良く似るが良く焼き締まっており堅致である。肩部には格子の叩き印文が施文されている。法量は不明。

青磁 盆 (449・450) いずれも同安窯系で内外面とも無文である。口径・器高・底径は449が10.4・2.4・4.1cm、450が9.1・2.1・4.8cm。透明な緑灰～青灰色。

青磁 碗 (451～453・455) 龍泉窯系である。451は外面に錦蓮弁文を施文(碗II類)、また452・453は内外面ともに無文である(碗I類)。口径・器高・高台径は451が16.8・7.0・6.1cm、452が16.4・6.0・5.6cm、453が16.1・6.5・6.1cm。455が16.0・6.2・5.6cm。焼成は堅緻。青緑～緑灰色。

SE 13出土遺物 (Fig. 75・76)

土師器 盆 (459) 糸切底である。口径・器高・底径は8.8・1.1・8.4cm。焼成良好。

土師器 环 (461～464) すべて糸切底である。板目圧痕を残すもの(461)がある。口径・器高・底径の平均値は14.3・2.5・10.6cm。焼成はあまり良くない。器形はほとんど同じで、全体に厚い作りであるが、463・464は体部がやや直線的な形態である。褐色～明褐色。

青磁 碗 (458) 龍泉窯系の小碗である(碗I類)。口縁部には5ないし6弁をあしらって、刻みを入れ、内面には白堆線を入れる。口径・器高・高台径は11.0・5.1・4.6cm。深緑灰色。

陶器 鉢 (465) 褐釉の鉢底部である。底部はわずかに上げ底気味になる。胴部径は20.6cm。体部下半～底部はヘラケズリによる整形。底部近くには目跡がつく。

管状土錐 (456) 長さ・径・重さは3.7・1.0cm・3.3g。焼成良好。明褐色。丁寧なナデ仕上。

SE 14出土遺物 (Fig. 76)

土師器 盆 (466) 切り離し痕跡は不明。ヘラ切り底か。作りは厚手である。口径・器高・底径は9.4・1.3・7.2cm。焼成やや不良。褐色。

SE 15出土遺物 (Fig. 76・77)

土師器 环 (471) 糸切底である。板目圧痕が残る。口径・器高・底径は14.4・3.3・9.3cm。口縁はかなり歪んでいる。焼成はあまり良くない。体部外面にはススが付着。明褐色。

青磁 碗 (472～475) 473～475は龍泉窯系、472は同安窯系と思われるが、類例の検討が必

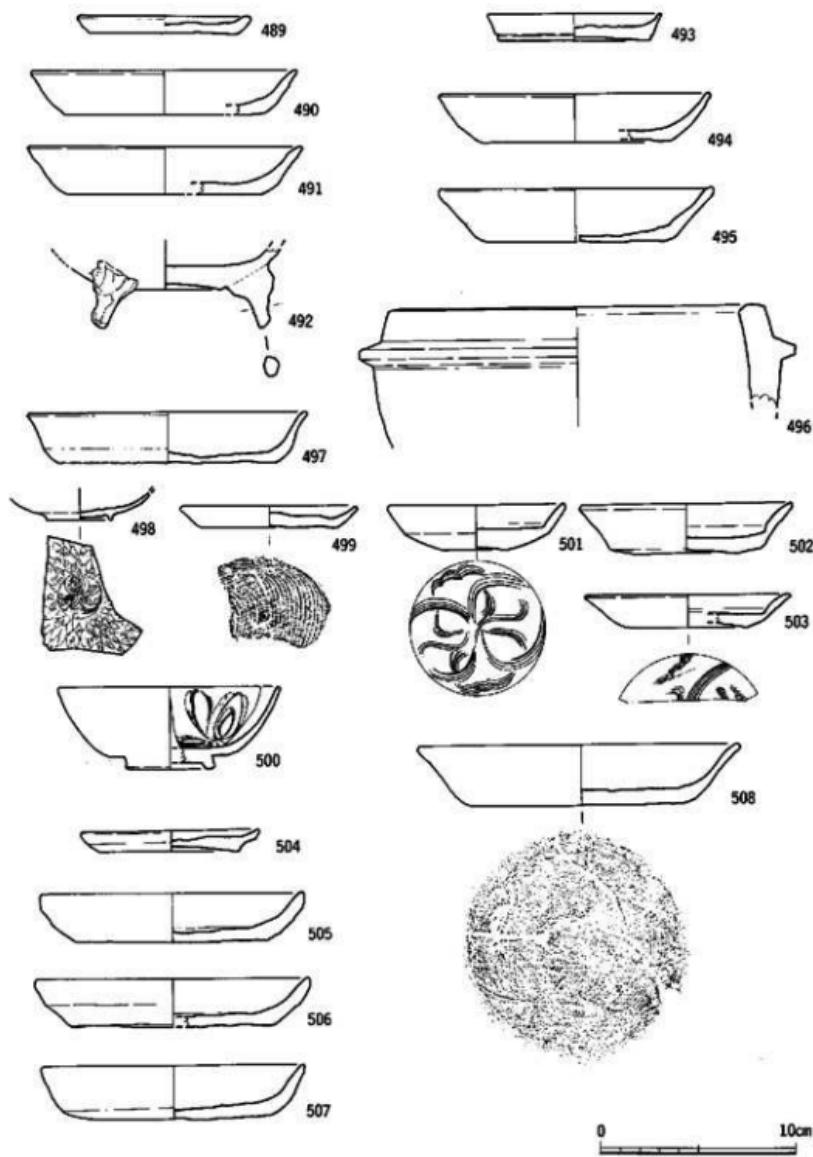


Fig. 79 第II区竪穴造構出土遺物実測図 (SX01-03-06-08-18-23-26-33-37-38) (1/3) その1

要である。口径・器高・高台径は472が $17.6 \cdot 7.1 \cdot 5.4$ cm、473が 16.1 cm（口径）、474が 7.2 cm（高台）、475が 16.6 cm（口径）。472は外面にはヘラ片切痕による蓮弁文をかたどった後、その上に櫛描線文を施文。薄く青緑がかった透明釉。473～475は雲文・蓮花折枝文等を施文する。

SE 17出土遺物 (Fig.77)

土師器 皿 (476) 糸切底。口径・器高・底径は $9.4 \cdot 1.3 \cdot 7.2$ cm。焼成不良。明褐色。

瓦 平瓦 (470) 表面には布目圧痕が、裏面には繩目叩き痕が残る。側縁はヘラ切り。

SE 19出土遺物 (Fig.76)

土師器 皿 (468・469) 口径・器高・底径の平均値は $9.0 \cdot 1.1 \cdot 7.3$ cm。いずれも糸切底。焼成良好。褐色～明褐色。

SE 21出土遺物 (Fig.77)

土師器 皿 (477・480) 口径・器高・底径の平均値は $8.7 \cdot 0.9 \cdot 7.4$ cm。いずれも糸切底で、内底にヨコナデ、外底には板目圧痕がつく。焼成はやや良好。褐色～明褐色。

土師器 坯 (481・482) いずれも糸切底で、板目圧痕が残る。口径・器高・底径の平均値は $13.6 \cdot 2.2 \cdot 10.4$ cm。481の内面にはススが付着している。いずれも焼成はあまり良くない。

青磁 小碗 (483) 高台径は 3.2 cm。見込み内底に印花文を施文。施釉は高台置付のみ露胎で、全面にかかる。深いモスグリーンで、小さな氷裂が全面に入る。龍泉窯系I類。

SE 28出土遺物 (Fig.77)

土師器 坯 (484) 口径・器高・底径は $14.4 \cdot 3.3 \cdot 10.4$ cm。糸切底で、板目圧痕が残る。口縁は焼き歪みがあるが焼成良好。褐色。

SE 32出土遺物 (Fig.77)

滑石製品 用途不明 (485) 長さ・幅・厚さは $5.8 \cdot 5.3 \cdot 1.6$ (2.5) cm。素材は石鍋の破片を転用したものである。小容器の蓋、もしくは模造鏡の可能性がある。

4) 土壌出土の遺物 (Fig.78、Tab.7)

SK 02出土遺物 (Fig.78)

管状土錘 (486) 長さ・径・重さは $3.5 \cdot 1.1 \cdot 4.55$ g。褐白色。表面は丁寧なナデ仕上げ。

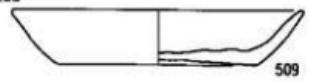
白磁 碗 (488) 口径・器高・高台径は $15.9 \cdot 7.4 \cdot 7.0$ cm。体部下半は露胎。見込み内底は施釉後、輪状に掻き取っている。焼成は堅致。不透明な灰白色。

SK 06出土遺物 (Fig.78)

土師器 皿 (487) 口径・器高・底径 $8.1 \cdot 1.0 \cdot 7.1$ cm。糸切底で、内底にヨコナデ、外底には板目圧痕がつく。焼成はやや良好。褐色～暗褐色。

5) 竪穴構造出土の遺物 (Fig.79、Tab.7)

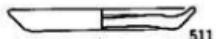
112



509



510



511

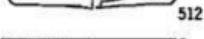


517 (1/2)

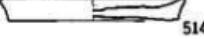


518

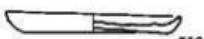
512



513



514



515



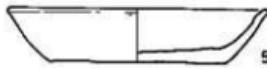
516



521



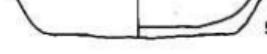
522



523



519



524



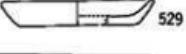
525



526



527 (1/2)



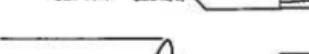
529



530



531



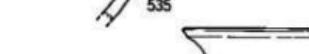
532



533



534



535



537



536



538



539



Fig.80 第Ⅱ区竪穴造構出土遺物実測図 (SX40・52・53) (1/3・1/2) その2

SX01出土遺物 (Fig.79)

土師器 皿 (489) 口径・器高・底径は9.1・1.2・7.6cm。焼成はあまり良くない。

土師器 坯 (490・491) 口径・器高・底径の平均値は13.8・2.4・10.1cm。焼成はあまり良くなく、もろい。やや赤みがかった褐色。器表面は粗れ、調整痕は不明。

青白磁 香炉 (492) 脚部破片である。三脚と思われる。脚部および体部外面は薄く青みがかった透明釉を施釉。外底は施釉後焼き取り。脚は型起しによる獸脚である。脚の高さ2.0cm。

SX03出土遺物 (Fig.79)

土師器 皿 (493) 口径・器高・底径は8.8・1.3・7.8cm。焼成は不良。褐色。

土師器 坯 (494) 口径・器高・底径は13.9・2.5・9.6cm。焼成はあまり良くなく、もろい。やや赤みがかった褐色。内面には炭化物が付着。

SX06出土遺物 (Fig.79)

土師器 坯 (495) 口径・器高・底径は14.1・2.8・9.1cm。焼成はあまり良くなく、もろい。褐色。底径は口径に比してやや小さく、体部は直線的に立ち上がる。

SX08出土遺物 (Fig.79)

滑石製石鍋 (496) 口径・脚部外径は19.4・22.6cm。器高は不明。内外面ともヘラケズリによる整形の後、滑らかに磨研し仕上げている。素材は良質の滑石。灰色。

SX18出土遺物 (Fig.79)

土師器 坯 (497) 口径・器高・底径は14.3・2.7・11.1cm。焼成はあまり良くなく、もろい。明褐色。作りは他と比べやや薄手である。口縁部はわずかに外反する。

白磁 皿 (498) 高台径は3.4cm。焼成良好で堅緻。釉は薄い明白色。内面には型起しによる蓮花文が全体に施されている。

SX23出土遺物 (Fig.79)

土師器 皿 (499) 口径・器高・底径は9.1・1.1・7.1cm。焼成は良好。明褐色。

青磁 小碗 (500) 口径・器高・高台径は11.4・4.3・4.6cm。小碗I類。焼成良好。釉の発色は良好で、透明な青緑色。釉の厚さは0.3mm。内面はヘラ片切彫による蓮花折枝文を施文。

SX26出土遺物 (Fig.79)

青磁 皿 (501) 口径・器高・底径は9.1・2.3・3.0cm。楓泉窯系皿I類。薄い緑灰色。

SX33出土遺物 (Fig.79)

青磁 皿 (502) 口径・器高・底径は11.0・2.7・5.0cm。同安窯系皿I類。発色不良。

SX37出土遺物 (Fig.79)

土師器 皿 (499) 口径・器高・底径は9.0・1.1・7.6cm。糸切り離し後ナデ消し。赤褐色。

土師器 坯 (505~507) 口径・器高・底径の平均値は13.6・2.6・9.8cm。焼成はあまり良くなく、非常にもろい。やや赤みがかった褐色。作りはいずれも厚手造り。

青磁 皿 (503) 口径・器高・底径は10.6・2.3・6.0cm。同安窯系皿 I 類。透明な青緑色。

SX38出土遺物 (Fig. 79)

土師器 壺 (508) 口径・器高・底径は16.5・3.1・11.0cm。焼成は良く縮まっている。明褐色。作りは丁寧で薄手である。内底は軽くヨコナデ。口縁部はわずかに外反する。糸切底。

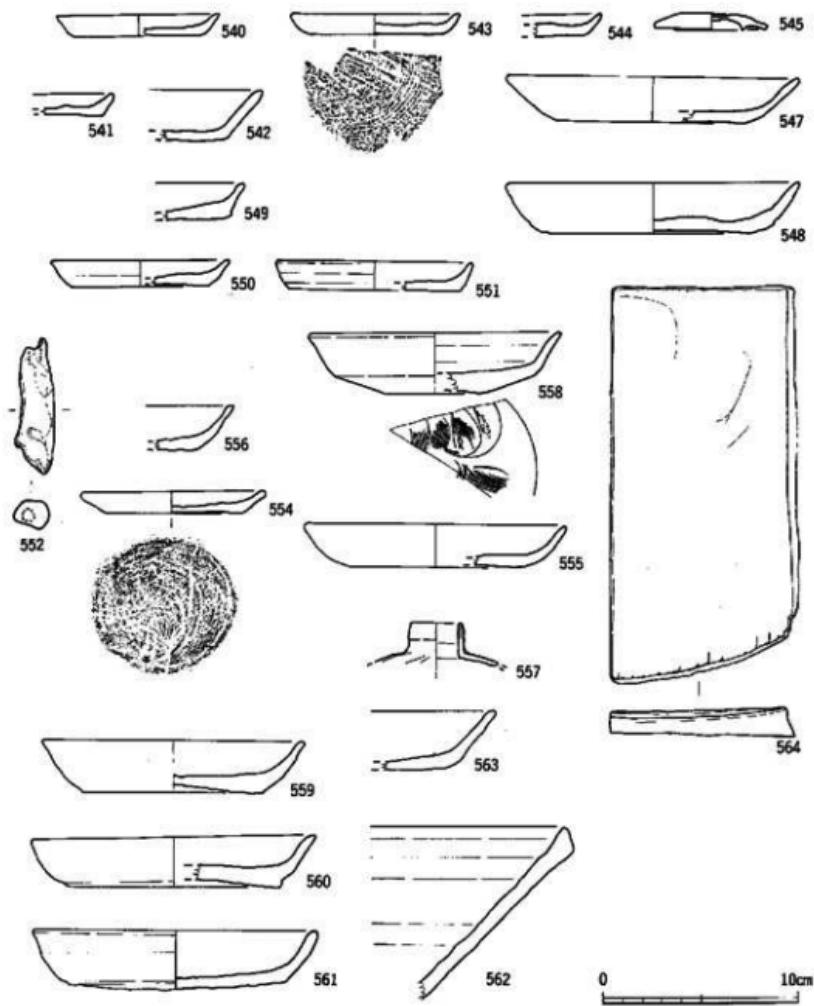


Fig.81 第II区竪穴構出土遺物実測図 (SX54~56・58~62・66~68・71~73・78・84) (1/3・1/2) その3
(546・553は欠番)

SX 40出土遺物 (Fig. 80)

土師器 壺 (509) 口径・器高・底径は14.9・2.8・10.1cm。焼成はやや良好。内底はヨコナ
ア。外底は糸切り離し後、軽くナデ消している。明褐色。体部は直線的である。

SX 52出土遺物 (Fig. 80)

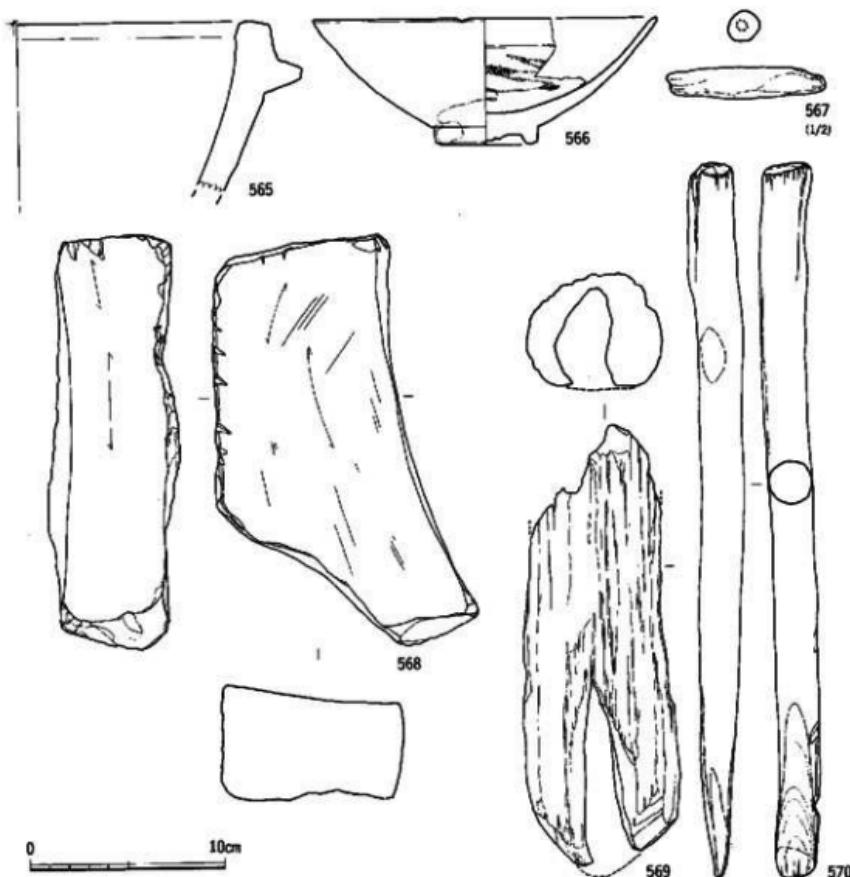


Fig. 82 第Ⅱ区堅穴遺構出土遺物実測図 (SX 78・84・92) (1/3) その4

土師器 皿 (510~516) 口径・器高・底径の平均値は9.3・1.1・8.2cm。515以外はすべて糸切底。焼成はやや良好。良く焼き締まっている。褐色～明褐色。

土師器 坯 (518・519・522~526) 口径・器高・底径の平均値は13.8(13.3)・2.7・8.6cm。いずれも糸切底で、524・526には板目圧痕がつく。焼成は良くなくもろい。いずれもやや厚手造り。暗褐色～褐色。519は復元口径がやや大きいかもしない。

青磁 皿 (520・521) 同安窯系皿I類である。520は内底にヘラと櫛による施文。521は無文。いずれも外底は全面施釉後搔き取っている。口径・器高・底径は520が10.4・2.0・5.0cm、521が10.4・1.8・4.8cm。薄く縁がかった透明な灰色。

管状土鏡 (517) 長さ・径・重さは4.1・1.1cm・7.85g。やや小型のものである。赤褐色。

SX53出土遺物 (Fig.80)

土師器 皿 (529~533) 口径・器高・底径の平均値は8.6・1.3・7.2cm。すべて糸切底。焼成は良好。良く焼き締まっている。褐色～明褐色。

土師器 坯 (534) 口径・器高・底径は14.0・3.1・10.8cm。焼成は不良でもろい。

須恵質土器 捺鉢 (535) 東播磨系のものと思われる。口径は27~30cmほどか。焼成は良好。体部は灰白色で、口縁部外面は銀灰色。

須恵質土器 肋 (536) 東播磨系のものと思われる。口径は不明。既述した284・285・314など同一の形態、製作手法のもの。焼成はややあまい。灰色～黒灰色。

陶器 合子身 (537) 内面および外面に褐釉を薄く施釉。焼成は良好。口径は6.7cm。体部最大径は7.4cm。体部には型起しによる樹齒状の文様を入れている。

白磁 碗 (538) 明明白色の釉を全面にかけた後、口縁端部内外面を搔き取った、口禿の白磁である。口径・器高・高台径・高台高は16.2・6.3・5.2・0.8cm。

青磁 皿 (539) 同安窯系皿I類。口径・器高・底径は10.4・2.1・4.8cm。透明な緑灰色。

管状土鏡 (527・528) 長さ・径・重さは527が3.7・1.3cm・6.65g。やや小型のものである。528が5.7・1.3cm・8.55gで中型のもの。焼成は良好。良く焼き締まっている。

SX54出土遺物 (Fig.81)

土師器 皿 (540) 口径・器高・底径は8.2・1.1・6.4cm。糸切底で板目圧痕がついている。焼成はやや良好。内面にススが付着。褐色～明褐色。

SX55出土遺物 (Fig.81)

土師器 皿 (541) 口径・器高・底径は9.2・1.1cmほどか。糸切底である。焼成はやや良好。内面にはススが付着。褐色～明褐色。

土師器 坯 (542) 口径・器高は14.0・2.6cmほどか。焼成は不良でもろい。糸切底か。

SX56出土遺物 (Fig.81)

土師器 皿 (543・544) 543の口径・器高・底径は8.8・1.0・7.4cmほどか。糸切底で板目圧

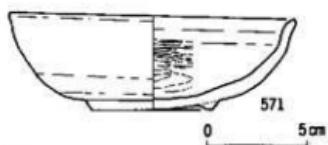


Fig. 83

第Ⅱ区旧河川出土遺物実測図 (SR 03) (1/3) 青白磁 合子蓋 (545) 直径・器高・合わせ部径は 5.8・0.9・3.2cm。型押しによる菊花文を蓋上面に施文。釉薬は蓋上面のみに施釉している。内面は露胎。透明な青白色。

SX 58出土遺物 (Fig. 81)

管状土錐 (552) 長さ・径・重さは 5.4・1.8cm・5.70g。中型である。灰白色で焼成良好。

SX 62出土遺物 (Fig. 81)

土師器 皿 (549～551) 550と551の口径・器高・底径の平均値は 9.6・1.4・8.3cm。549は口径が 9.6cm ほどで、器高は 1.8cm。いずれも糸切底である。焼成はやや良好。褐色～暗褐色。

SX 65出土遺物 (Fig. 81)

木製品 枠目材 (564) 曲物の蓋もしくは底板を転用した板材と思われるが、何に使ったかは不明。杉材。長さ・幅・厚さは 20.1・9.2・2.8cm。

SX 67出土遺物 (Fig. 81)

土師器 皿 (554) 口径・器高・底径は 9.4・1.1・6.9cm。糸切底である。焼成はやや良好。内底はヨコナデ。褐色～明褐色。

SX 68出土遺物 (Fig. 81)

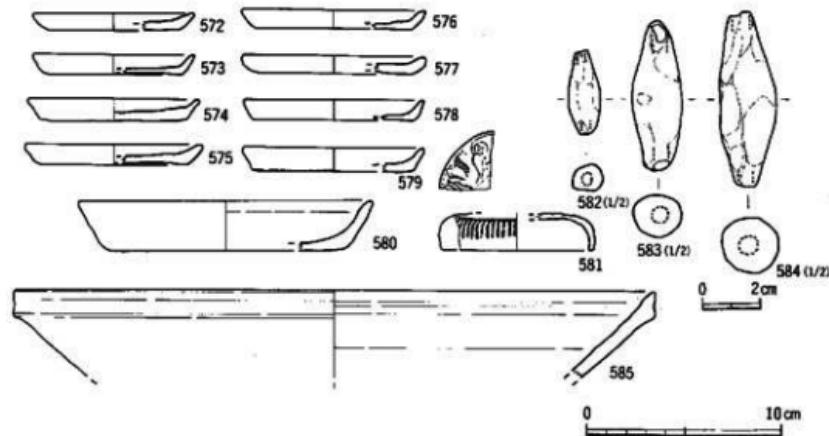


Fig. 84 第Ⅱ b 区整地層出土遺物実測図 (1/3・1/2)

土師器 坯 (555) 口径・器高・底径は13.5・2.2・8.8cm。糸切底。焼成良好。暗褐色。

SX71出土遺物 (Fig.81)

土師器 坯 (556) 口径は14cmほどで、器高は2.3cm。糸切底。焼成やや良好。明褐色。

SX72出土遺物 (Fig.81)

青白磁 小壺 (557) 口径は2.6cm。口縁内面から体部外面にかけて青みがかった透明釉がかかる。耳もしくは注口がつく可能性がある。胎土は明白で堅緻。

SX73出土遺物 (Fig.81)

白磁 盆 (558) 口径・器高・底径12.8・3.2・4.4cm。内底に割花文と櫛描文を施文。釉の発色は良好。透明な薄い緑白色の釉薬が厚くかかっている。外底は施釉の後搔き取っている。

SX78出土遺物 (Fig.81)

土師器 坯 (559～561) 口径・器高・底径の平均値は14.1・2.8・10.5cm。焼成はやや良好。いずれも糸切底。561は内底にヨコナデ、外底に板目圧痕がつく。明褐色～明褐色。

須恵質土器 提鉢 (562) 口径は28cmほどか。外面にはロクロ水挽き痕をそのまま残している。内面下半は磨耗し滑らかになっている。口縁部は断面三角形で、暗灰色を呈す。

砂岩製砥石 (568) 長さ・幅・厚さは21.3・13.6・6.3cm。中砥用か。

SX81出土遺物 (Fig.81)

土師器 坯 (563) 口径は13.8～14.2cmほどで、器高は3.0cm。糸切底で、板目圧痕がつく。焼成やや良好。褐色。

SX84出土遺物 (Fig.82)

滑石製石鍋 (565) 口径は25.6cm。鍋の外径は29cm。外面は粗いケズリ成形痕をそのまま残す。内面は丁寧に磨研し滑らかである。鍋の下部から底部にかけてススが付着している。

木製品 杖 (569) 杖または柱材の一部か。現存長・直径は21.8cm。

木製品 杖 (570) 現存長・直径は36.8・2.2cm。丸木材の先端の一方を両面から切り落とし尖らせている。先端はわずかに磨耗。他方の端は中央に長さ約6cmの細い裂目を入れている。

SX92出土遺物 (Fig.82)

白磁 碗 (566) 口径・器高・高台径・高台高は17.8・6.4・5.3・0.8cm。口縁端部は刻みが入れられ輪花となっている。内面には口縁下に沈線を入れ櫛描文を施文。体部下半部は露胎。焼成堅緻。釉は透明な灰白色（白磁碗0-類）。

管状土鍔 (567) 長さ・径・重さは5.4・1.1cm・6.80g。焼成良く、堅く焼き締まっている。

6) 旧河川出土の遺物 (Fig.83, PL.58)

第I区から延びてくる旧河川からは、第I区では黒色土器、白磁(II-1類)などの11世紀代前後の遺物が出土しているが、第II区からは図示できるものは571のみである。

黒色土器 碗 (571) 口径・器高・高台径・高台高は $14.7 \cdot 4.6 \sim 5.0 \cdot 5.3 \cdot 0.5$ cm。高台部から球状に外溝しながら立ち上った体部はわずかに屈曲して口縁へと続いている。口縁部はわずかに外反している。高台は断面三角形でやや小さい。内外面とも丁寧なヨコ方向のヘラミガキで仕上げている。

7) 包含層・整地層・表土出土の遺物 (Fig.84~88、PL.59~60)

包含層・整地層からは多量の遺物が出土している。ここではそれらのうちのごく一部について図示し、説明する。

整地層出土遺物 (Fig.84) (整地層は、Fig.52 II b区第6層に相当)

土師器 皿 (572~579) 口径・器高・底径の平均値は $9.0 \cdot 1.1 \cdot 7.7$ cm。いずれも糸切底。574・575・579には板目圧痕がつく。焼成は良くなく、締まり悪い。褐色～明褐色。

土師器 壺 (580) 口径・器高・底径は $15 \cdot 2.7 \cdot 12$ cm。糸切底。口縁部内面に弱い段がある。

須恵質土器 捶鉢 (585) 東播磨系か。口径約28cm。焼成は良好。ややもろい。灰白色。

管状土錐 (582~584) 長さ・径・重さは、582が $2.9 \cdot 1.2$ cm・ 2.60 g。583が $5.0 \cdot 1.7$ cm・ 12.7 g。584が $4.1 \cdot 1.8$ cm・ 18.40 g。表面には、指圧痕が残っている。

青白磁 合子蓋 (581) 口径・器高・天井部径は $7.9 \cdot 1.9 \cdot 7.8$ cm。型起し造り。青白色。

包含層出土遺物 (Fig.85~88) (包含層は、Fig.52 II c・d区第12~13層上部)

土師器 皿 (592) 口径・器高・底径は $8.1 \cdot 1.1 \cdot 6.2$ cm。糸切底。軽くナデ消している。

土師器 脚付皿 (593) 口径・器高・底径・脚径は $10.4 \cdot 1.4 \cdot 9.2 \cdot 6.9$ cm。焼成良好。良く締まっている。灰褐色。

土師器 壺 (594) 口径・器高・底径は $13.5 \cdot 2.5 \cdot 9.8$ cm。糸切底。板目圧痕がつく。軽くナデ消している。焼成良好。明褐色。体部中央に弱い段がつき、口縁部はわずかに外反。

土師質土器 土鍋 (590) 口縁は逆し字形。口径は不明。焼成良好。焼き締まっている。

須恵質土器 捶鉢 (597~601) いずれも東播磨系のものである。全器形がわかる例はない。口径は28~31cmほどである。口縁部は断面形が三角形のもので、口縁端部がわずかに引き出されるもの、口縁部外面下端が少し張りだすもの、そして丸味があり、玉縁状もしくは袋状になるもの、の3つに大きく分けられる。焼成はいずれも良く焼き締まっている。灰白～灰色。

瓦質土器 捶鉢 (586~589・602) いずれも口縁部破片。口縁部は肥厚している。内面は横もしくは斜位のハケ目。下ろし目は破片にはみられない。灰白色～黒灰色。焼成堅緻。

陶器 大甕 (595・596) 常滑窯系の甕の破片と思われる。いずれも格子目の印文を肩部に施文している。印文の位置は粘土紐の継目か。焼成は良好。堅く焼き締まっている。灰白～灰色。

滑石製石鍋 (603~605) 口径・鉢外径は603が $24.8 \cdot 27$ cm、604は $30.8 \cdot 37.6$ cm、605は $24.4 \cdot 28.2$ cm。調整はいずれもケズリ出し成形。605の内面は磨研仕上げ。灰色の良質な滑石を素材

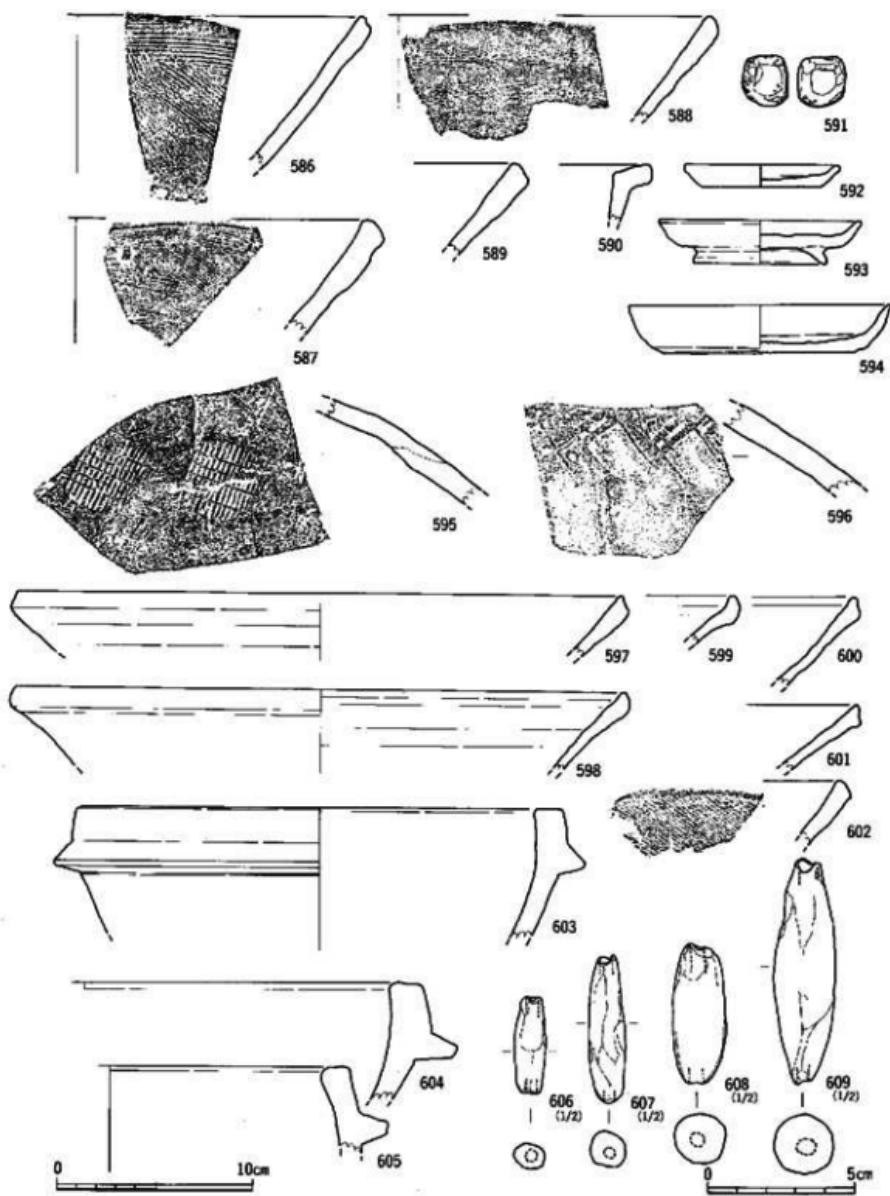


Fig. 85 第Ⅱ区包含層出土遺物実測図 (1/3・1/2) その1

とする。

管状土錐 (606~609) 長さ・径・重さは606が $3.4 \cdot 1.1\text{cm} \cdot 3.40\text{g}$ 。607が $5.1 \cdot 1.3\text{cm} \cdot 7.5\text{g}$ 。608が $4.8 \cdot 1.8\text{cm} \cdot 14.15\text{g}$ 。609が $7.7 \cdot 2.1\text{cm} \cdot 30.15\text{g}$ 。いずれも焼成良好。丁寧なナデ。

白磁 盆 (610~612・614・615) 610~612は口禿の白磁である。610・611は法量がほぼ等しく器形も良く似る。外底釉は拭き取っている。615は底部~体部下半部は露胎。青白色~灰白色。614・615は口径・器高・底径が $14.4 \cdot 3.0 \cdot 5.2\text{cm}$ 、 $10.3 \cdot 3.1 \cdot 4.8\text{cm}$ で内底にヘラ描きにより草花文を施す。釉は薄く青緑がかった灰白色(白磁皿V類)。

白磁 碗 (627) 高台径は 5.8cm 。白磁IX類。外底に「五」もしくは花押が墨書きされている。焼成堅緻。釉は不透明な灰白色。

青磁 盆 (613・616~619) 613は龍泉窯系皿I類。616・617は同安窯系皿I類。618・619は同安窯系皿II類。617の外底には「元」が、618には花押がそれぞれ墨書きされている。口径・器高・底径は613が $11.0 \cdot 2.5 \cdot 3.8\text{cm}$ 。616が $10.8 \cdot 2.3 \cdot 4.7\text{cm}$ 。617が $10.8 \cdot 2.3 \cdot 6.0\text{cm}$ 。618が $11.1 \cdot 2.4 \cdot 4.8\text{cm}$ 。619が $11.0 \cdot 2.3 \cdot 4.9\text{cm}$ 。いずれも焼成良好。透明な青灰色~青緑色。

青磁 碗 (620~626・628・635) 口径・器高・高台径は622が 13.3cm (口径)、624が $16.2 \cdot 6.7 \cdot 6.1\text{cm}$ 、626が 6.0cm (高台)、628が 6.2cm (高台)。626と628の内底には印文が施文されている。以上は龍泉窯系碗I類。623は口径・器高は $10.8 \cdot 3.6\text{cm}$ で龍泉窯系小碗I類。621は高麗青磁碗もしくは壺。青緑色の生地に、明灰白色のスリップを象眼している。脚部径は 6.0cm 。635は越州窯系青磁碗。底部はやや上げ底のベク高台で、直径 7.8cm 。胎土はくすんだ薄い小豆色。

青磁 鉢もしくは高台付皿 (620・625) 口径・器高・高台径は620が $10.8 \cdot 3.6 \cdot 6.0\text{cm}$ 。625が $14.6 \cdot 3.9 \cdot 5.8\text{cm}$ 。625は外面に輪蓮弁文を施す。

青白磁 合子身 (630・632) 口径・器高・体部最大径・底径は630が $(4.8) \cdot (1.9) \cdot 6.0 \cdot 4.0\text{cm}$ 、632が $(7.3) \cdot 1.7 \cdot 8.0 \cdot 7.4\text{cm}$ 。内面と、体部外面に青緑色がかった透明釉を施釉。

青白磁 合子蓋 (629・631・633・634) 口径・器高は629が $6.5 \cdot 1.3\text{cm}$ 、631が $8.1 \cdot 2.1\text{cm}$ 、633が $6.4 \cdot 2.7\text{cm}$ 、634が $6.2 \cdot 1.5\text{cm}$ 。いずれも型押しによるもの。大井部から体部外面に、青~青緑色がかった透明釉を薄く施釉。629は天井部のみに蓮花文を施す。

青白磁 小壺 (636) 脚部径は 9.0cm 。型起しによるもの。脚部内面下半は露胎。他は全面に薄く青みがかった透明釉を施釉。文様は頸部直下に蓮花文、肩部に草花文を施す。

陶器 壺 (637・639・640) 推定口縁径は、637が 28cm 、639が 27cm 、640が 28cm ほどである。いずれも、黒褐色~暗褐色の釉薬が体部外面(637)もしくは内面(639・640)に非常に薄くかかっている。胎土は赤褐色~赤紫がかった褐色で、堅く焼き締まっている。

陶器 鉢 (638・642・645) 638は口径が 30cm ほどで、642の口径・器高・底径は $24.6 \cdot 9.8 \cdot 10\text{cm}$ 。638は(緑)褐色の釉が非常に薄くかかっているが部分的に剥落。胎土は粗いが良く焼き締まっている。642は8条単位の下ろし目がつく擂鉢である。口縁部の内外面のみに褐釉を施す。

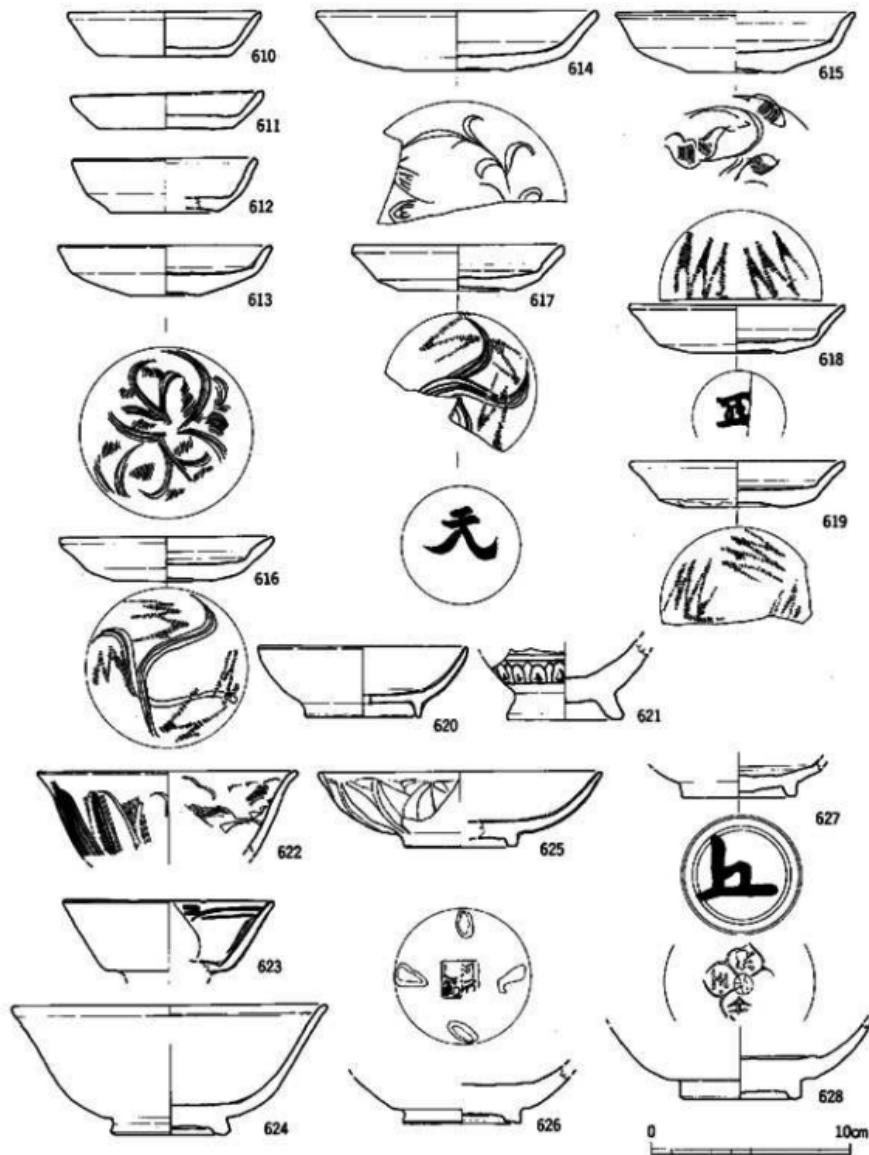


Fig. 86 第Ⅱ区包含層出土遺物実測図 (1/3) その2

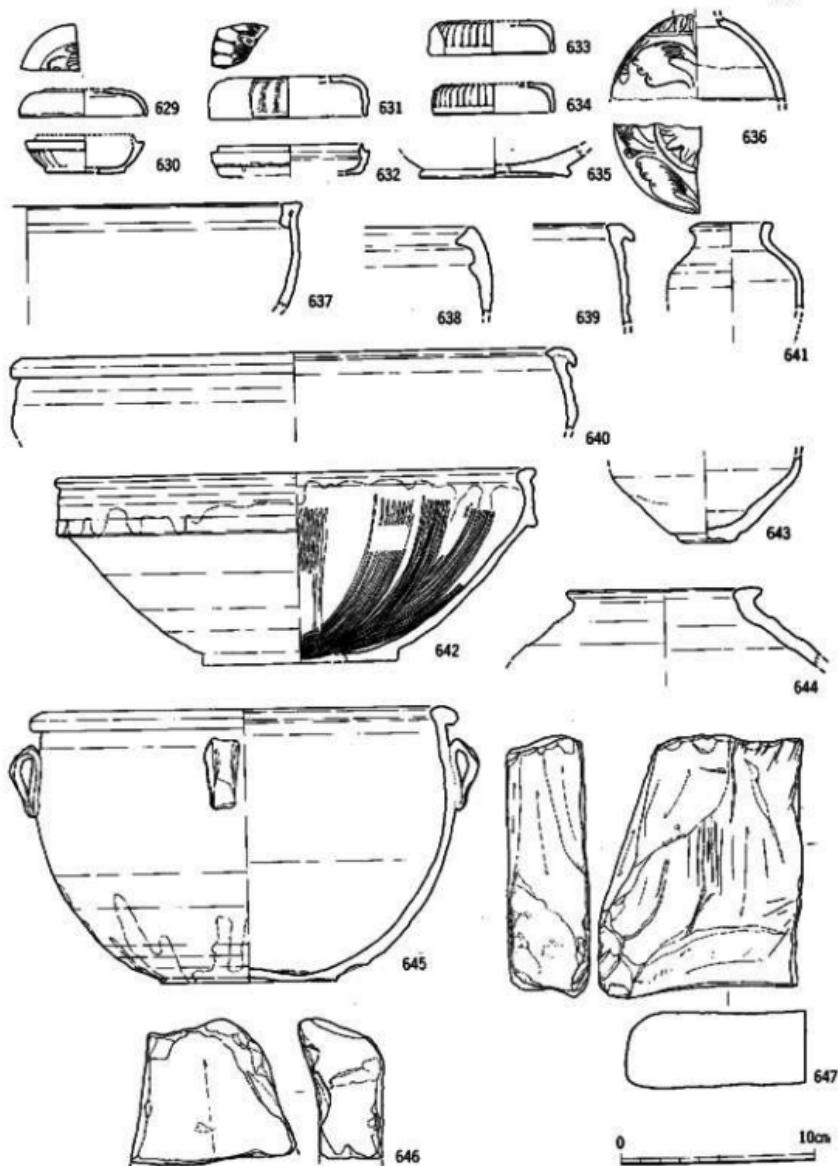


Fig.87 第Ⅲ区包含層出土遺物実測図 (1/3) その3

軸している。体部下半のヘラケズリ整形の手法は645と共通するものである。ロクロ回転は左回転。645は四耳付の鉢。体部下半はヘラケズリ整形。内外面には褐釉が施釉されている。口径・器高・胸部最大径・底径は21.8・14.0・21.4・9.0cm。胎土は赤紫がかた暗褐色。

陶器 壺 (641・644) 641は口径4.2cm。灰緑釉が外面および口頸部内面に施釉。644は褐釉の四耳壺の口頸部破片。口径は10cm。胎土は灰色で精良。口縁部上面には目跡がつく。

陶器 天目碗 (643) 高台径は3.0cm。体部上半に黒釉が厚くかかる。胎土は精良で灰色。

砂岩製 砕石 (646・647) 646の現存長・幅・厚さは7.4・8.6・4.3cm。上側縁は加工面。中底用か。647の現存長・幅・厚さは13.5・10.5・4.1cm。キメの細かな砂岩製。中底用か。

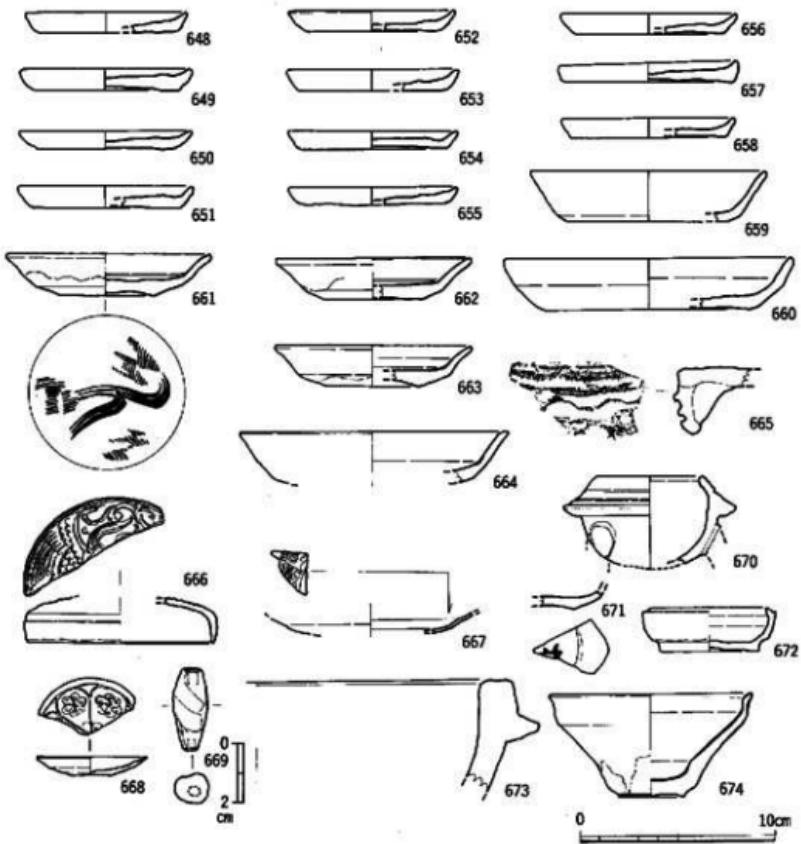


Fig. 88 第II区包含層出土遺物実測図 (1/3 · 1/2) その4

軽石製品 不明 (591) 一辺が2.6cm前後の立方体に面取りしている。面は粗い。賽子か。

第II区東側第27層出土遺物 (Fig. 88)

土師器 盆 (648~658) 口径・器高・底径の平均値は8.8・1.0・7.5cm。褐色~明褐色。

土師器 坯 (659・660) 口径・器高・底径の平均値は13.5・2.6・10.3cm。糸切底。

瓦質土器 足蓋模造品 (670) 口径・器高・鉢外径は5.2・4.6・10.8cm。内外面ともヘラミガキ仕上げ。三足か。

陶器 天目碗 (674) 口径・器高・高台径は10.5・5.3・3.2cm。黒色釉が厚くかかる。胎土はきめ細かな明灰色。

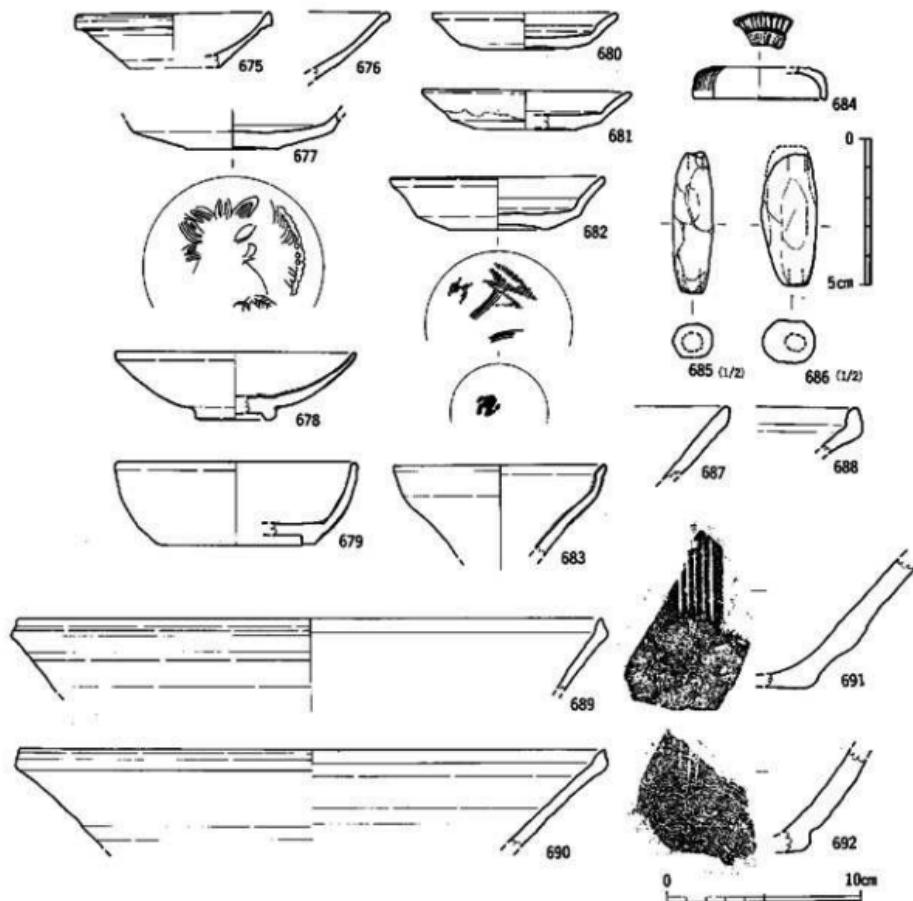


Fig. 89 第II区表土出土遺物実測図 (1/3・1/2)

白磁 皿 (664) 白磁Ⅶ類。口径は13.8cm。半透明の灰白色。

青磁 皿 (661～663・671) いずれも同安窯系皿である。口径は10cmほど。671外底にはひらがなの「よ」に近い字が墨書きされている。662の内底は無文。

青白磁 合子身 (672)・蓋 (666)・小皿 (667・668) 672の口径・器高・底径は9.1・1.2・7.6cm。無文。666は天井部に鳳凰文を描いている。口径9.6cm。667・668はそれぞれ霞文・瑞雲文・花文をあしらっている。焼成良好。以上の釉はいずれも青みのある透明な明白色。

瓦 軒平瓦 (665) 北方系の瓦である。焼成良好。灰色。^(註1)

(註1) 常松幹雄「博多出土の北方系瓦のルーツを求めて」Museum Kyushu 19 1986

表土出土の遺物 (Fig. 89)

土師質土器 捏鉢 (687)・擂鉢 (691・692) いずれも暗褐色。ハケ目調整後下ろし目を施す。

須恵質土器 捏鉢 (688～690) いずれも東播磨系である。口径は28～30cmほど。灰色。

管状土錠 (685・686) 685が4.8・1.3cm・6.75g。607が4.2・1.2cm・6.0g。焼成良好。

陶器 天目碗 (683) 黒褐色釉をたっぷり施釉。外面下半部は露胎。口径は11.1cm。胎土は、きめ細かな灰色。

白磁 碗・皿 (675～677) いずれも明白色の透明釉を施釉。675は高台付皿I類。口径・器高・底径は10.1・2.8・4.6cm。677は皿VII類。碗676は小玉縁口縁となるもの。焼成良好。うすく青みがかった白色。

青磁 鉢・皿 (678～682) 678・679は龍泉窯系である。他は同安窯系。678の内底には印文があるが内容は不明。682外底には「徳」の墨書きがある。

青白磁 合子蓋 (684) 口径・器高・天井部径は6.8・1.6・5.1cm。釉は薄い緑灰色。

Tab. 11 第II~IV区出土土師器(皿・杯) 法量一覧表(その1)

遺物 No.	名 称	切り離しの区分 （ハラ駄引・糸切引）	実測数 子母の 件数	法 番 (cm)	直管その他の特徴	出 土 場所	土 壹 壤 種類	Fig.No	PL.No	遺物登録番号 (8400は省略)
143	四			9.0 - 6.05	直管		沙	S.P.282		1314
144	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1315
145	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1316
146	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1317
147	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1318
148	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1319
149	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1320
150	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1321
151	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1322
152	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1323
153	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1324
154	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1325
155	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1326
156	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1327
157	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1328
158	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1329
159	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1330
160	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1331
161	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1332
162	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1333
163	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1334
164	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1335
165	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1336
166	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1337
167	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1338
168	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1339
169	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1340
170	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1341
171	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1342
172	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1343
173	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1344
174	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1345
175	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1346
176	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1347
177	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1348
178	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1349
179	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1350
180	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1351
181	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1352
182	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1353
183	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1354
184	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1355
185	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1356
186	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1357
187	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1358
188	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1359
189	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1360
190	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1361
191	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1362
192	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1363
193	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1364
194	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1365
195	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1366
196	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1367
197	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1368
198	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1369
199	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1370
200	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1371
201	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1372
202	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1373
203	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1374
204	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1375
205	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1376
206	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1377
207	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1378
208	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1379
209	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1380
210	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1381
211	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1382
212	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1383
213	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1384
214	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1385
215	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1386
216	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1387
217	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1388
218	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1389
219	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1390
220	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1391
221	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1392
222	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1393
223	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1394
224	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1395
225	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1396
226	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1397
227	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1398
228	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1399
229	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1400
230	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1401
231	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1402
232	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1403
233	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1404
234	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1405
235	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1406
236	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1407
237	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1408
238	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1409
239	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1410
240	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1411
241	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1412
242	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1413
243	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1414
244	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1415
245	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1416
246	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1417
247	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1418
248	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1419
249	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1420
250	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1421
251	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1422
252	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1423
253	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1424
254	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1425
255	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1426
256	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1427
257	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1428
258	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1429
259	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1430
260	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1431
261	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1432
262	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1433
263	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1434
264	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1435
265	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1436
266	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1437
267	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1438
268	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1439
269	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1440
270	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1441
271	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1442
272	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1443
273	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1444
274	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1445
275	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1446
276	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1447
277	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1448
278	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1449
279	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1450
280	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1451
281	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1452
282	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1453
283	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1454
284	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1455
285	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1456
286	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1457
287	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1458
288	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1459
289	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1460
290	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1461
291	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1462
292	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1463
293	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1464
294	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1465
295	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1466
296	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1467
297	四			9.0 - 6.05	直管		沙			1468
298	四			9.0 - 6						

Tab. 13 第II~IV区土師器(皿・壺)法量一覧表(その3)

通 物 料 No.	名 称	切り離しの区分 ハラ切り 溝切り	内側部 寸法	高 さ (cm)	測定その他の特徴	出 土 地 点	Fig.No	PL.No	遺物登録番号 (8000以降)	
									横	高さ
353	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 01	Fig. 01		8001	8002
354	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 02	Fig. 02		8003	8004
355	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 03	Fig. 03		8005	8006
356	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 04	Fig. 04		8007	8008
357	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 05	Fig. 05		8009	8010
358	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 06	Fig. 06		8011	8012
359	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 07	Fig. 07		8013	8014
360	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 08	Fig. 08		8015	8016
361	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 09	Fig. 09		8017	8018
362	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 10	Fig. 10		8019	8020
363	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 11	Fig. 11		8021	8022
364	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 12	Fig. 12		8023	8024
365	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 13	Fig. 13		8025	8026
366	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 14	Fig. 14		8027	8028
367	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 15	Fig. 15		8029	8030
368	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 16	Fig. 16		8031	8032
369	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 17	Fig. 17		8033	8034
370	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 18	Fig. 18		8035	8036
371	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 19	Fig. 19		8037	8038
372	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 20	Fig. 20		8039	8040
373	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 21	Fig. 21		8041	8042
374	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 22	Fig. 22		8043	8044
375	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 23	Fig. 23		8045	8046
376	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 24	Fig. 24		8047	8048
377	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 25	Fig. 25		8049	8050
378	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 26	Fig. 26		8051	8052
379	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 27	Fig. 27		8053	8054
380	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 28	Fig. 28		8055	8056
381	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 29	Fig. 29		8057	8058
382	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 30	Fig. 30		8059	8060
383	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 31	Fig. 31		8061	8062
384	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 32	Fig. 32		8063	8064
385	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 33	Fig. 33		8065	8066
386	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 34	Fig. 34		8067	8068
387	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 35	Fig. 35		8069	8070
388	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 36	Fig. 36		8071	8072
389	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 37	Fig. 37		8073	8074
390	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 38	Fig. 38		8075	8076
391	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 39	Fig. 39		8077	8078
392	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 40	Fig. 40		8079	8080
393	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 41	Fig. 41		8081	8082
394	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 42	Fig. 42		8083	8084
395	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 43	Fig. 43		8085	8086
396	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 44	Fig. 44		8087	8088
397	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 45	Fig. 45		8089	8090
398	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 46	Fig. 46		8091	8092
399	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 47	Fig. 47		8093	8094
400	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 48	Fig. 48		8095	8096
401	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 49	Fig. 49		8097	8098
402	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 50	Fig. 50		8099	8100
403	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 51	Fig. 51		8101	8102
404	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 52	Fig. 52		8103	8104
405	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 53	Fig. 53		8105	8106
406	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 54	Fig. 54		8107	8108
407	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 55	Fig. 55		8109	8110
408	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 56	Fig. 56		8111	8112
409	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 57	Fig. 57		8113	8114
410	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 58	Fig. 58		8115	8116
411	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 59	Fig. 59		8117	8118
412	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 60	Fig. 60		8119	8120
413	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 61	Fig. 61		8121	8122
414	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 62	Fig. 62		8123	8124
415	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 63	Fig. 63		8125	8126
416	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 64	Fig. 64		8127	8128
417	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 65	Fig. 65		8129	8130
418	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 66	Fig. 66		8131	8132
419	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 67	Fig. 67		8133	8134
420	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 68	Fig. 68		8135	8136
421	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 69	Fig. 69		8137	8138
422	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 70	Fig. 70		8139	8140
423	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 71	Fig. 71		8141	8142
424	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 72	Fig. 72		8143	8144
425	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 73	Fig. 73		8145	8146
426	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 74	Fig. 74		8147	8148
427	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 75	Fig. 75		8149	8150
428	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 76	Fig. 76		8151	8152
429	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 77	Fig. 77		8153	8154
430	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 78	Fig. 78		8155	8156
431	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 79	Fig. 79		8157	8158
432	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 80	Fig. 80		8159	8160
433	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 81	Fig. 81		8161	8162
434	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 82	Fig. 82		8163	8164
435	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 83	Fig. 83		8165	8166
436	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 84	Fig. 84		8167	8168
437	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 85	Fig. 85		8169	8170
438	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 86	Fig. 86		8171	8172
439	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 87	Fig. 87		8173	8174
440	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 88	Fig. 88		8175	8176
441	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 89	Fig. 89		8177	8178
442	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 90	Fig. 90		8179	8180
443	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 91	Fig. 91		8181	8182
444	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 92	Fig. 92		8183	8184
445	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 93	Fig. 93		8185	8186
446	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 94	Fig. 94		8187	8188
447	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 95	Fig. 95		8189	8190
448	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 96	Fig. 96		8191	8192
449	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 97	Fig. 97		8193	8194
450	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 98	Fig. 98		8195	8196
451	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 99	Fig. 99		8197	8198
452	器	C	15.1 - 2.7 - 1.6	高さ	器	S X 100	Fig. 100		8199	8200

Tab. 14 第II~IV区土師器(皿・环) 法量一覧表(その4)



(アミ部分は、最近の瓦用粘土採掘地)

Fig.90 第III a・c区造構分布全体図 (1/200)

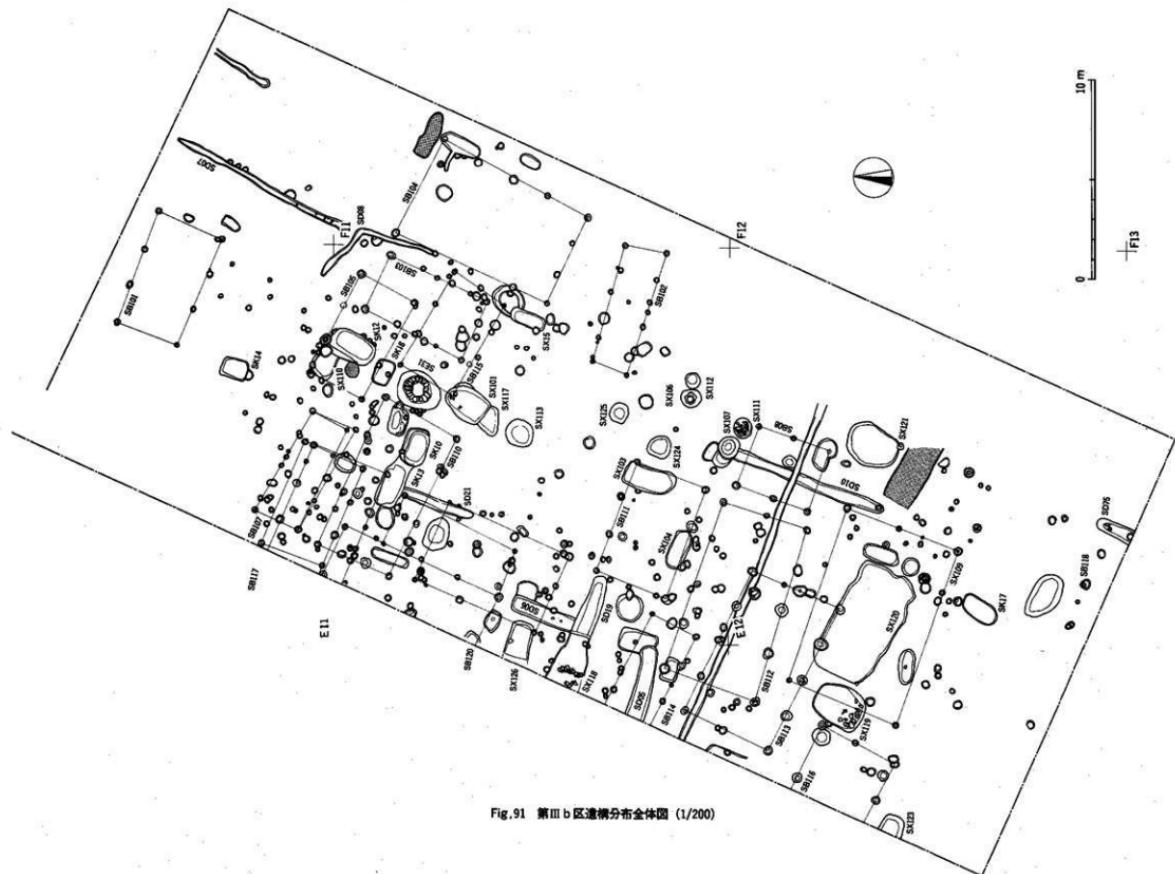


Fig.91 第III b 区遺構分布全体図 (1/200)

V 第III区の調査

概要 第III区は、浄水場敷地の最も西側に位置している。現在の広田の集落の範囲に含まれる地点である。多く良川左岸からは南へ約200m離れた、砂礫層を基盤とする旧自然堤防上に立地している。遺構検出面の標高は約5.1m前後（現地表面は5.4～5.5m）で、第II区と比べると約10～15cmほど低い。

検出された遺構は杭列（SA10）、掘立柱建物（SB101～120）、溝状遺構（SD05・10・19・21・61～67）、井戸（SE31）、土壌（SK10～21）、竪穴遺構（SX101～155、埋甕・石組遺構も含む）などがある。

これらの遺構の年代はSA10が古代後期で、掘立柱建物やSX106等の埋甕、SX120や126などの竪穴遺構は近世江戸時代後期のものである。

(1) 遺構各説

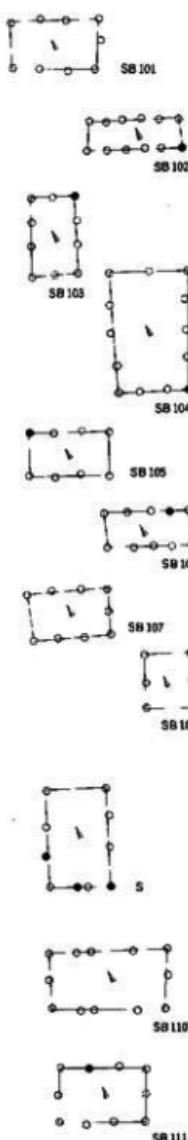
1) 杭列 (Fig.90、PL.50付図)

SA10 第III c 区の調査区北側に位置する、溝状遺構 SD61内で検出された。調査区西壁からSD61の途切れる東側まで約24mの長さにわたって、85本の杭がSD61の南壁に平行して打たれている。少なくとも杭列の並びは3列あったものと思われる。先後関係は不明であるが、溝状遺構の壁の傾斜に沿って、杭列の並びを少しづつずらしながら打たれているようである。これらの杭の層位的関係は、溝状遺構 SD61の中位から下部にかけて堆積している暗灰～黒灰色粘質土層を切っていることから (Fig. 97)、SD61内の土壌堆積がある程度進んだ段階で打たれたものと思われる。またこの黒灰色土を櫻う灰～(青)灰色粘質土の途中に一部の残りのよい杭の頭が位置しているものがあることから、この土層が堆積してゆく過程において杭が打たれたことが考えられる。この灰色粘質土下層から出土している板絵、土師器皿 (ヘラ切り底)、土師器丸底环等からみて、平安時代後期頃の所産かと思われる。護岸用の杭列か。

2) 掘立柱建物 (Fig.92～96、PL.42・43、Tab.15)

概要 第III区では調査現場、および図上の操作によって確認された掘立柱建物は、20棟である。建物の柱間取りからみた種類は1×2間が1棟、1×3間が3棟、1×4間が1棟、1×5間が1棟、2×3間が10棟、2×4間が3棟、3×4間が1棟である。

これらの掘立柱建物の分布は、調査範囲が狭いため全体的な傾向は明確ではないが、SD07～10などの小さな溝状遺構で区画された範囲において、数回建変わっている傾向が窺える。さらに小区画の屋敷地がいくつか集まって大きな集落を形成していることが予想される。



SB101 調査区の北側に位置する。2×3間の東西棟である。平面形は北東隅柱が張り出した長方形。棟方向はN-68°-W。柱の配列は対称的で、ほぼ等間隔である。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径21~32cm、深さは15~25cm。埋土は暗褐色粘質土。

SB102 SB104の南側に隣接する。1×5間の東西棟である。平面形は南東・南西隅柱が張り出した長方形。棟方向はN-73°-W。柱の配列はほぼ対称的で、柱間隔はやや不規則である。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径21~40cm、深さは15~35cm。

SB103 SB104の西隣に位置する。1×3間の南北棟である。平面形は西南隅柱がわずかに張り出した長方形。棟方向はN-26°-E。柱の配列は対称的。間隔はややばらつきがある。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径25~63cm、深さは15~47cm。埋土は暗褐色粘質土。

SB104 2×4間を基本形とする3×4間の南北棟である。棟方向はN-25°30'-E。柱の配列は対称的。間隔はややばらつきがある。南側妻の棟柱は2本。北側妻は未確認。柱穴は径25~38cm、深さは15~30cm。埋土は木炭をわずかに含む暗褐色粘質土。

SB105 1×3間の東西棟である。平面形は端正な長方形。棟方向はN-62°-W。柱の配列は対称的。間隔はややばらつきがある。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径27~58cm、深さは16~35cm。

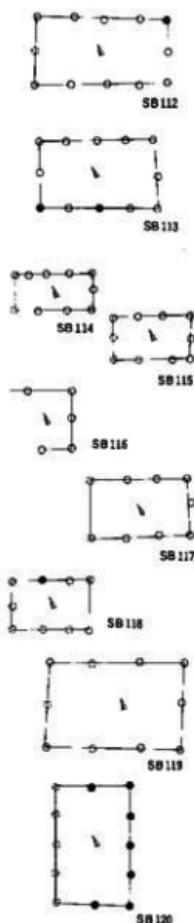
SB106 1×4間の東西棟である。平面形は北西側に歪んだ長方形。棟方向はN-59°30'-W。側柱の配列は対称的。間隔は狭くややばらつきがある。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径22~42cm、深さ16~35cm。

SB107 2×3間の東西棟である。平面形は端正な長方形。棟方向はN-65°30'-W。柱の配列は対称的。間隔は狭くややばらつきがある。西側妻の棟柱は未確認。柱穴は径27~35cm、深さは20~35cm。

SB108 1×2間の南北棟である。平面形は端正な長方形。南東隅柱はSX108から切られている。棟方向はN-20°-E。柱の配列は対称的。間隔はほぼ均等。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径22~35cm。

SB109 2×3間の南北棟である。平面形は端正な長方形。棟方向はN-24°-E。北東隅柱はSD21から切られている。柱の配列はほぼ対称に配されている。平面形は端正な長方形。北側妻の棟柱は未確認である。

SB110 2×3間の東西棟である。平面形は南東隅柱がやや張り出



した長方形。棟方向はN-65°-W。南北の側柱のうち、西側妻側の柱はそれぞれ2本寄せている。柱の配列はほぼ対称である。柱穴は径26~42cm、深さ10~28cm。柱根痕跡は10cm。

SB111 2×3間の東西棟である。平面形は端正な長方形で、規模は小さい。棟方向はN-70°-W。竪穴遺構SX103・104を切っている。東側妻の棟柱は未確認である。側柱の配列は対称的である。柱穴は径25~45cm、深さ10~35cm。柱根痕跡は15cm。

SB112 2×4間の東西棟である。平面形は西側梁行が49cmほど長い長方形。棟方向はN-73°-W。III区ではSB104・113などとともに規模が大きい建物である。西側妻の棟柱は未確認である。柱の配列は対称。

SB113 2×4間の東西棟である。平面形は東側妻がわずかに長く、東南隅柱が若干張りだした端正な長方形。棟方向はN-64°-W。SB104・112等とともに規模の大きい建物である。溝状遺構SD11・竪穴遺構SX120を切っている。柱の配置は対称的で、柱間隔は均等に配されている。東側妻には2本の柱が配されている。

SB114 1×3間もしくは2×3間の東西棟である。調査区の壁にかかるて検出された。平面形は端正な長方形である。規模は小さい。棟方向はN-63°-W。東妻側の棟柱は未確認。その位置に浅い竪穴があるが棟柱の掘り方かどうか不明。柱穴は径30~35cm、深さ13~27cm。

SB115 2×3間の東西棟である。平面形は東南隅柱が内側にはいった長方形。棟方向はN-60°-W。柱の配列は北側柱が平均184cm程の間隔でほぼ均等に配されているが、南側柱はやや不規則である。西南隅柱は竪穴遺構SXに切られ不明。柱穴の大きさは径30~35cm、深さ15~28cm。

SB116 調査区西壁にかかるて検出された。2×3間と考えられる東西棟である。棟方向はN-62°-W。柱の配列は不明。東側妻の棟柱は北側にわずかに寄っている。柱穴の大きさは径30~35cm。

SB117 調査区西壁にかかるて検出された。2×3間もしくは2×4間と考えられる東西棟である。棟方向はN-67°-W。柱の配列は対称的で、均等な距離である。東側妻の棟柱は北側にわずかに寄っている。柱穴の大きさは径30~55cm。SK13によって切られている。

SB118 調査区南壁にかかるて検出された。2×3間あるいは2×4間の建物または棚の可能性がある。棟方向はN-67°-W。平面形は

長方形。東側柱は溝状造構 SD75から切られている。柱穴の大きさは径25~35cm。

SB119 調査区の南側に位置する。柱穴はすべて検出しておらずやや不正確であるが、
2×3間を基本形とする建物と思われる。平面形は南北隅柱がやや張り出した長方形である。
豊野造構 SX109・119・120と重複している。先後関係は不明。柱穴の大きさは径25~40cm。

SB120 調査区西壁にかかって検出された。2×4間の南北棟である。規模はSB104、
112、113などほぼ同じである。棟方向はN-67°-W。東側柱はほぼ均等な距離で配されて
いる。棟柱の位置からみて、側柱の配置は対称的であると思われる。柱穴は径28~40cm、深さ
25~32cm。

建物番号	棟 種	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	長軸基袖の方位	床面積 (m ²)	柱穴数	備 考
SB101	2×3	北 607 南 588	77 598 324 350	N-68°-W	20.15	9	
102	1×5	北 612 南 656	631 190 212	N-73°30'-W	12.79	13	SP598
103	1×3	西 543 550 536	東 306 326 326	N-26°-E	17.95	8	
104	3×4	西 830 840 820	東 538 513	N-25°30'-E	42.66	12	
105	1×3	北 552 南 550	西 561 298 300	N-62°-W	26.38	(8)	
106	1×4	北 581 南 576	西 579 241 240	N-59°30'-W	13.74	(10)	
107	2×3	北 505 南 432	西 469 350 322	N-65°30'-W	17.64	9	SP599
108	1×2	西 381 382 380	東 326 325 325	N-20°-E	12.45	6	SP461
109	2×3	西 668 668 668	東 425 426 426	N 24°-E	28.48	9	
110	2×3	北 606 南 764	西 785 403 416	N-63°-W	31.51	10	
111	2×3	北 586 590	西 588 374 370	N-70°-W	23.09	9	SP464、388
112	2×4	北 898 914	西 906 466 441	N-73°-W	51.91	11	SP462、463、465、468
113	2×4	北 792 (534)	西 822 475 486	N-64°-W	38.23	13	SP457、466
114	1×3	北 536 500	西 535 (250) 302	N-63°-W	(13.45)	(10)	SP467、469
115	2×3	北 528	西 514 302 304	N-60°-W	16.35	(9)	SP595
116	2×3		東 408	(N-62°-W)		6(10)	S P456 SB113と同程度の大きさか。
117	2×3	北 6.70 6.77	西 4.03 4.12 3.94	N-67°-W	27.12	8(10)	
118	2×3	北 5.32 5.30	西 5.31 (3.46) (3.48)	N-67°-W	18.36	6(11)	
119	2×3	北 920 940	西 930 580 600	N-70°30'-W	54.32	7(10)	
120	2×4		848 (560)	(N-67°-W)	(47)	(12)	

Tab. 15 第III区埋立柱建物計測値表

() 内の数字は推定値

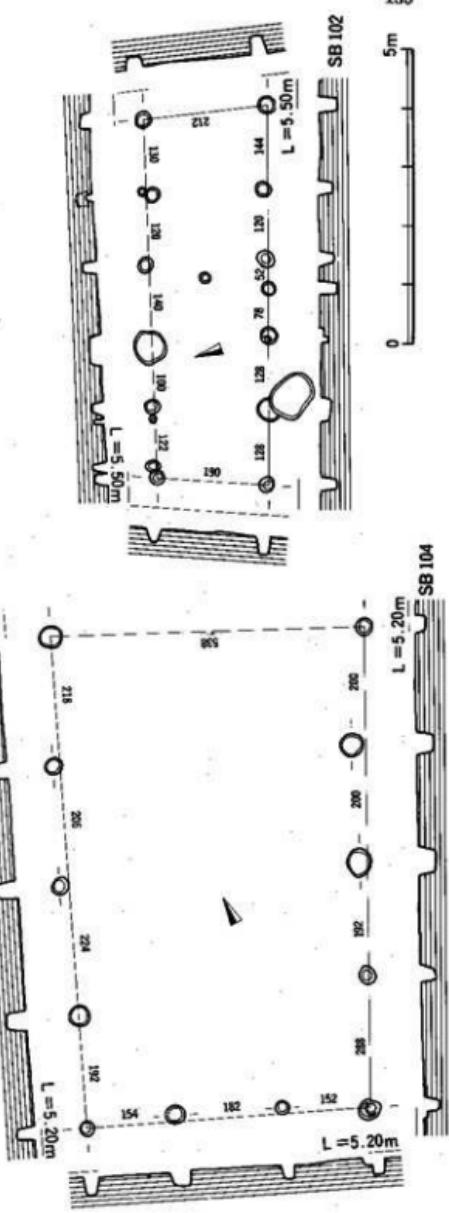
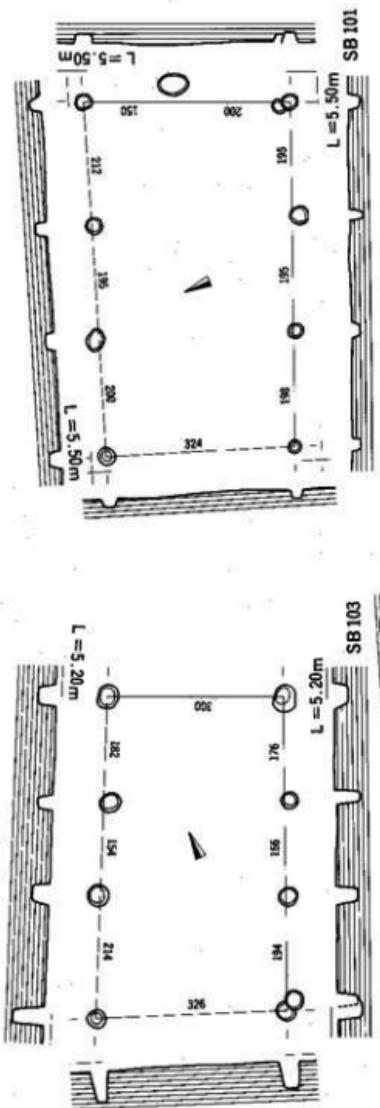


Fig. 92 第III区振立柱建物平面および断面図 (SB101~104) (1/100) その1

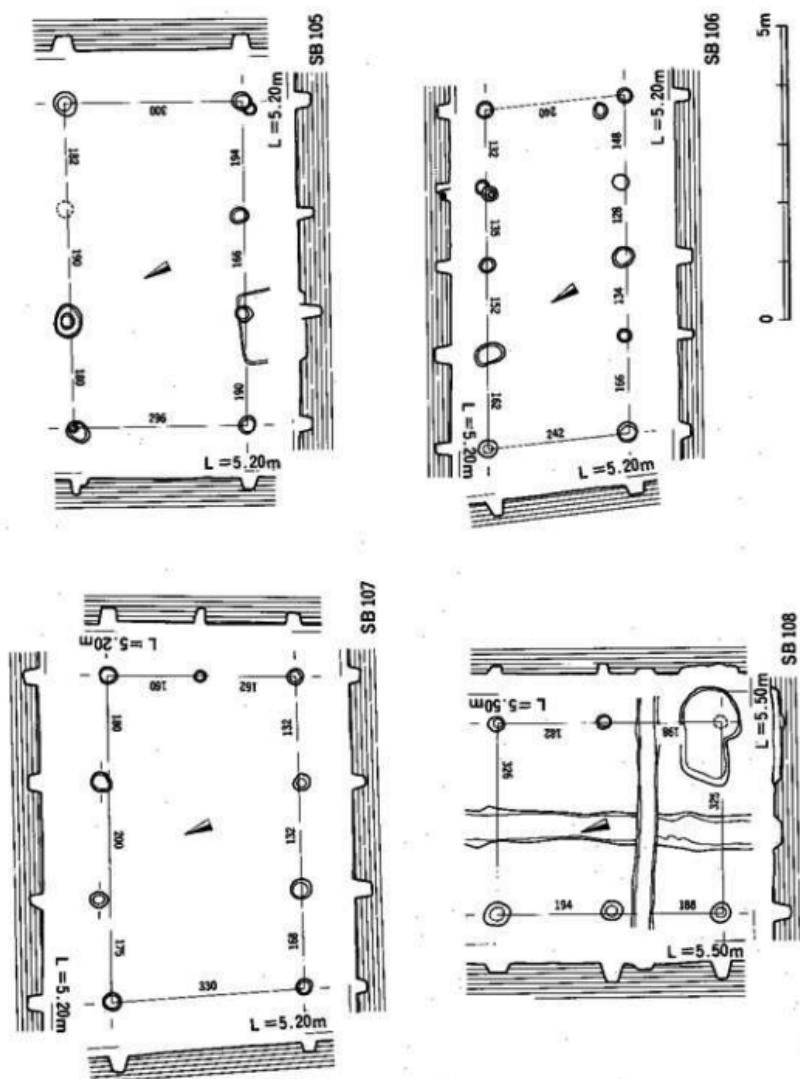


Fig. 93 第三区域立木平面および断面図 (SB 105~108) (1/100) その2

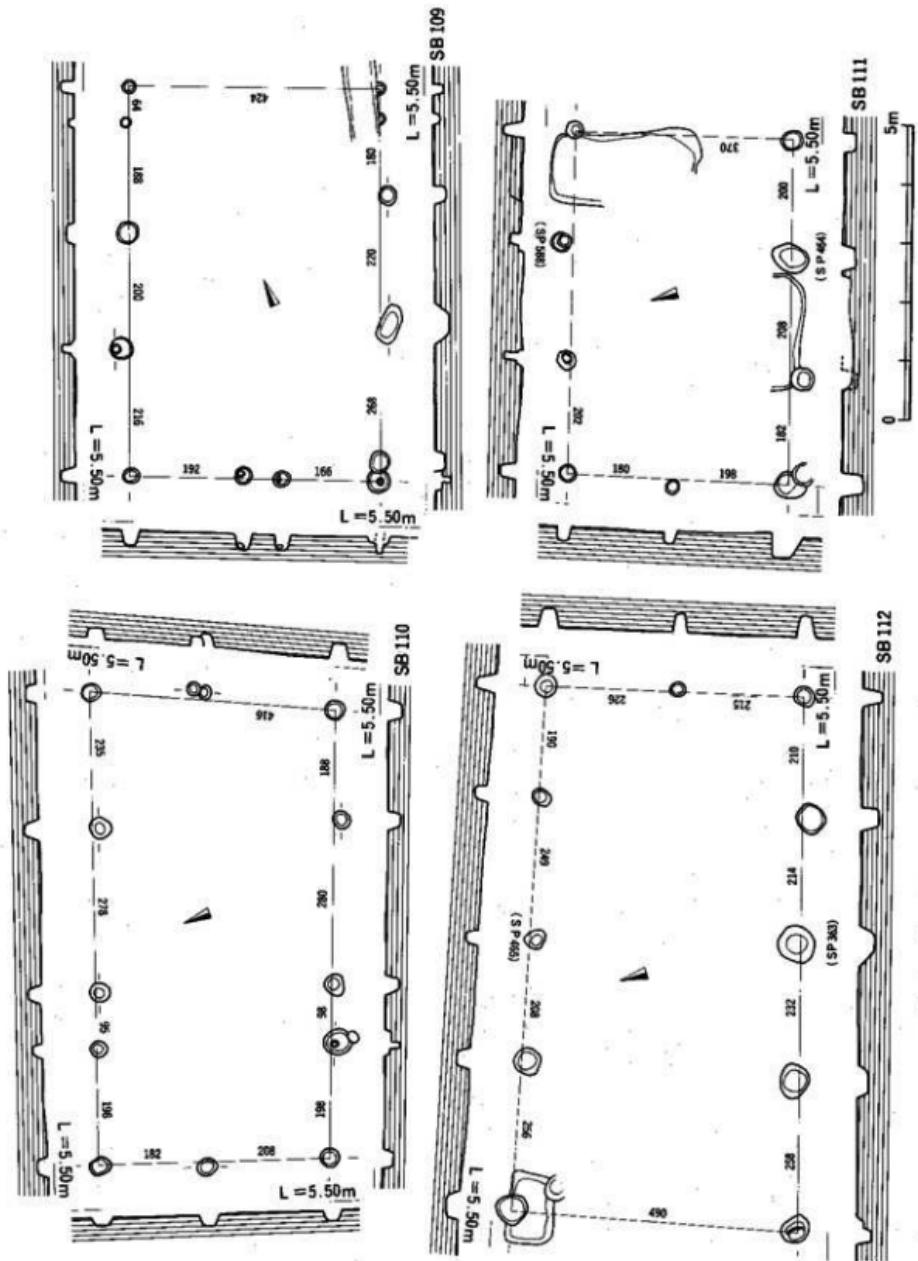
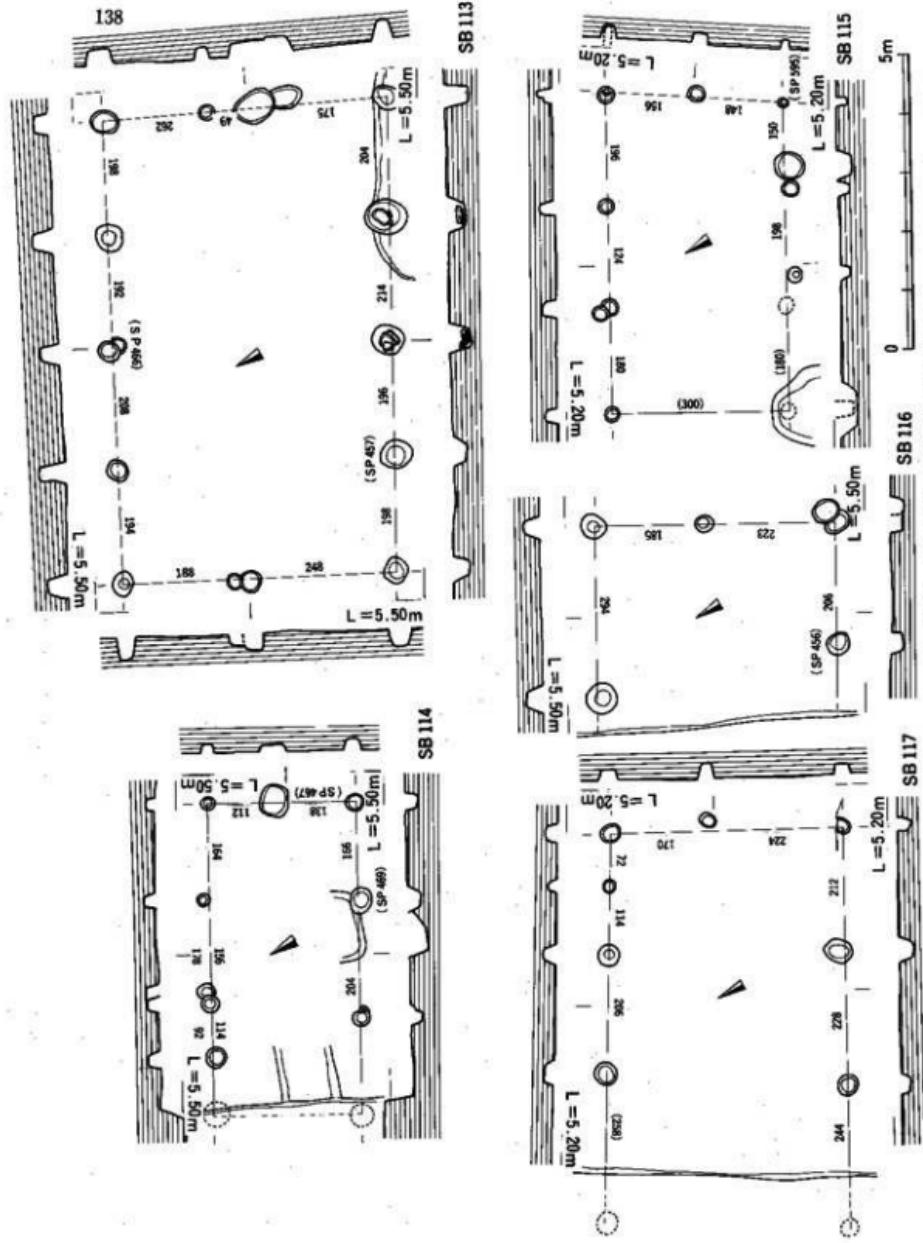


Fig. 94 第三回櫻立本建物平面および断面図 (SB109~112) (1/100) *



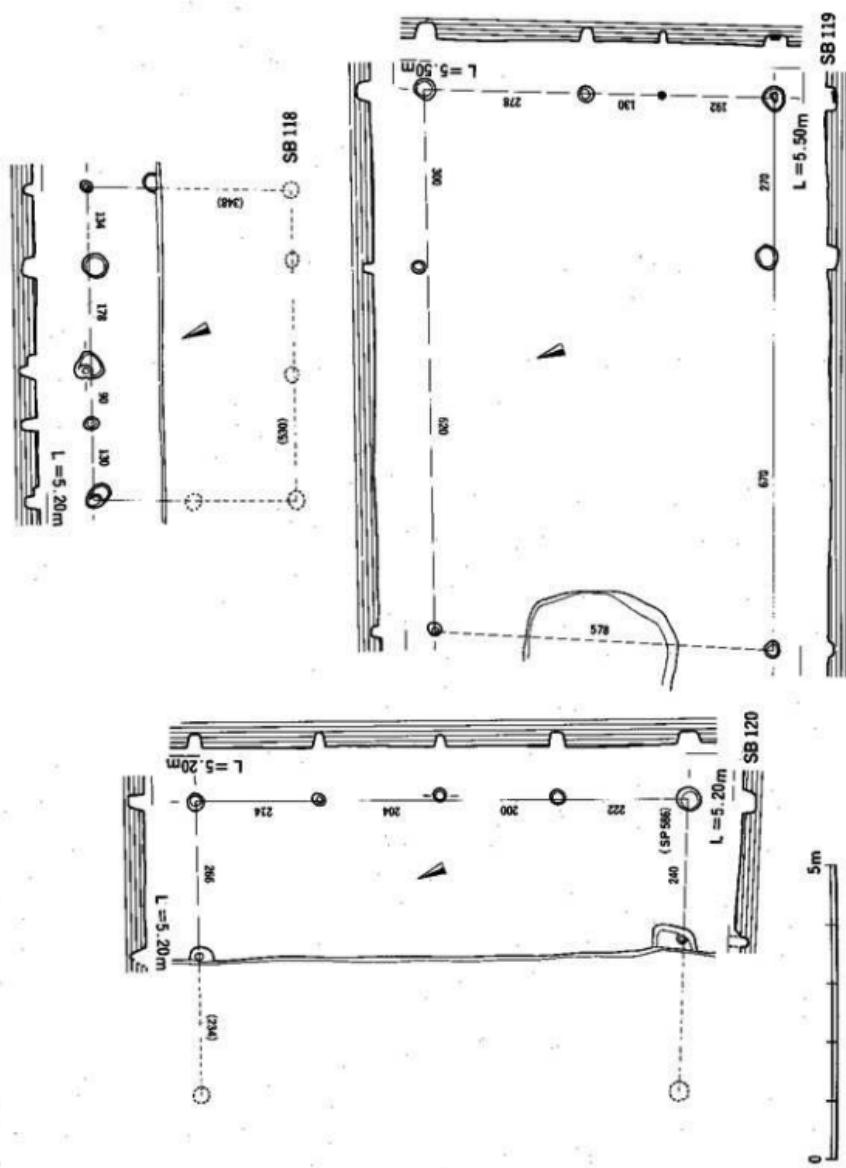


FIG. 96 第III区掘立柱建物平面および断面図 (SB118~120) (1/100) もの5

3) 溝状遺構 (Fig.97、Tab.16)

概要 第III区では溝状遺構はSD05~10・19・21・SD61~67・75の16条が検出された。遺物の出土量が少ないので時期の比定が難しいが、SD05~09・19・75の6条は近世江戸時代の溝状遺構である。平安時代後期以降と考えられるものは、第IIIc区のSD61~67で、そのうちSD61はさらに平安時代の早い時期まで遡る可能性がある。SD10・21は鎌倉時代と思われるが明確でない。江戸時代まで下がる可能性がある。掘立柱建物・井戸等を取り囲んで小さな区画を形成している溝はSD05~08・10・21で、SD62~67は水田に伴う溝状遺構と考えられる。SD61は、現存条里の坪境に沿う大溝であるが、東側は途中で消滅しており、その性格は明確ではない。

以下、個別の溝状遺構について個別に説明するが、遺物の出土状況などの詳細はTab.16を

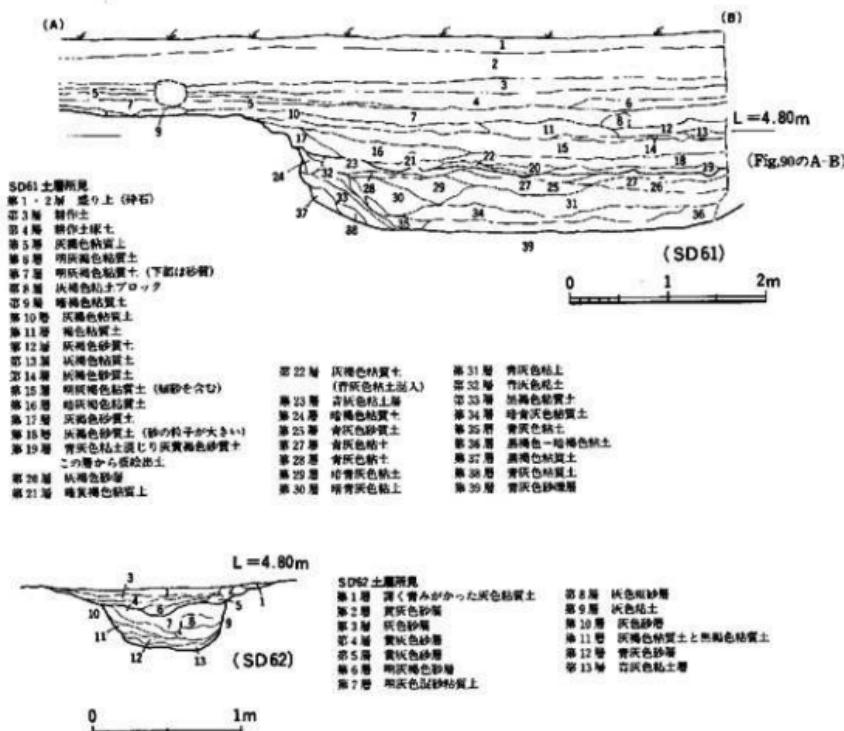


Fig.97 第III区溝状遺構 (SD61-62) 土層断面図 (1/60)

参照されたい。

SD05 調査区西壁にかかっている。幅1m、深さ30cm。東端はわずかに北に屈曲している。北側のSD06の東壁とこの溝状遺構の東端の面が合うことからなんらかの関係があると思われる。断面形は逆台形である。埋土は暗褐色粘質土で砂礫が混入する。主軸方位はSB112・119などの棟方向とおおよそ平行である。

SD06 調査区西壁に平行に沿って検出された。SD19から切られている。SD05とは連続していないが、屢歴地を画する溝状遺構の可能性がある。埋土は暗褐色粘質土。

SD07 調査区の北側に位置する。SD07と08は同一の溝状遺構かもしれないが、SD08が07を切っている可能性がある。幅は30~40cm、深さは20~25cmである。埋土は暗灰色。水田に伴う溝状遺構の可能性がある。

SD08 SD07の南端近くに位置している。L字型に屈曲している。おそらく、SB103・105を取込んで、小区画を形成しているものと思われる。南西方に約3m延びるが途中で消滅している。方向を同じくして棚列がやや南側に続いている。

SD09 調査区の中央からやや南に位置している。掘立柱建物SB113、SX110に切られている。またSB112・SD10を切っている。幅40~45cm、深さ15~20cm。東側で自然消滅している。埋土は暗灰色。断面形は浅いU字型。水田に伴う畦溝か。

SD10 調査区の中央からやや南寄りの地点に位置している。SD09・SX107によって切ら

Fig.No.	PLNo.	調査区	遺構No.	遺構名	出土遺物		出土遺物 Fig.No.	備考
					上部	下部		
105	III b		SD05	SD 19	上部第一段 埴輪陶器、甕			
			#	SD06	SD 20	瓦片		
			#	SD07	SD 21	遺物なし		
			#	SD08	SD 22	遺物なし	108-700	
98	III b		#	SD09	SD 23	遺物なし		
			#	SD10	SD 24	七輪器一杯、小片 土質質土塊		
			#	SD11	SD 33	陶器一杯、小片 白磁一杯、小片		
			#	SD12	SD 35	青磁一杯(直腹)、碗(直腹) 灰瓦 灰瓦 青磁(直腹)、碗(直腹)	62-208	
97	III c		SD51	SD3801	遺物一杯 土質質土塊	瓦質土器一杯 土質質土塊		
			#	SD52	SD3803	不明小片 灰瓦	107-893	
			#	SD53	SD3804	灰瓦		
			#	SD54	SD3806	遺物なし		
IV			#	SD55	SD3806	発生その他の 瓦質土器一杯	土質器一杯 土質器一杯	
			#	SD56	SD3826	瓦質土器一杯	サスカイド製鉄片	
			#	SD57	SD3828	土質器不明小片		
			#	SD58	SD4144	土質器不明小片		
IV			#	SD59	SD61	遺物なし		
			#	SD60	4246	遺物なし		
			#	SD70	4255	遺物なし		
			#	SD71	4261	土器一杯灰瓦	115-739	
IV b			#	SD72	4262	瓦質一小片 土質器一高台付造形、皿、小片		
			#	SD73	4279	陶器片		
			#	SD74	4281	陶器一小片 土器一口縫		
			#	SD75				

Tab. 16 第III・IV区溝状遺構所見一覧表

れている。この溝状遺構から東側は遺構が少なくなっている。この溝が屋敷地の東限を画する溝状遺構の一つになっている可能性がある。幅0.5~0.65m、深さ25cm前後で断面形はU字型である。

SD19 後述する石組遺構と一緒にになって機能していたか、または埋め立てられてその後石組が作られたものなのかについては不明確である。SD06を切っている。幅は1m、深さ40cm。断面形は逆台形。埋土中に位に薄く木炭層がある。SB111・112等と方向は同じである。

SD21 SK10・13に切られ、SB109を切っている。SD10と方向性は一致する。幅は50~55cm、深さは37cm。

SD61 第IIIc区の北側で検出された。幅は約5m、長さは約28mにわたって確認されたがその東側延長部で自然消滅している。また幅も不正確である。断面形は逆台形である。埋土は大きく3層に分かれる。上から2層と3層の境で板塗が出土(Fig. 97)。

SD62 SD61にある時期に流れこんでいた溝状遺構と思われる。掘り方は明確だが、断面形は三角形である。この溝状遺構の埋土は第IV区の溝と類似している。状遺構平安期の資料が出土。

SD63~67 これらの埋土はいずれも、明灰色~灰色(砂混入)土である。堆積は一時に埋没したものである。平面形はやや不規則なものが多く、一定しない。深さは5~10cmである。方向は残存条里とは必ずしも合致しておらず当該地域では、これらの溝よりも新しい段階に条里が施行されたと思われる。

4) 井戸 (Fig. 99, PL. 44, Tab. 6)

第III区では井戸はSE31の一基しか確認されていない。井戸の可能性のあるものは、SX113・124・125があるが、井側などの痕跡がなく明確ではない。

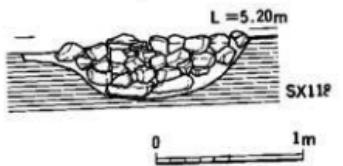
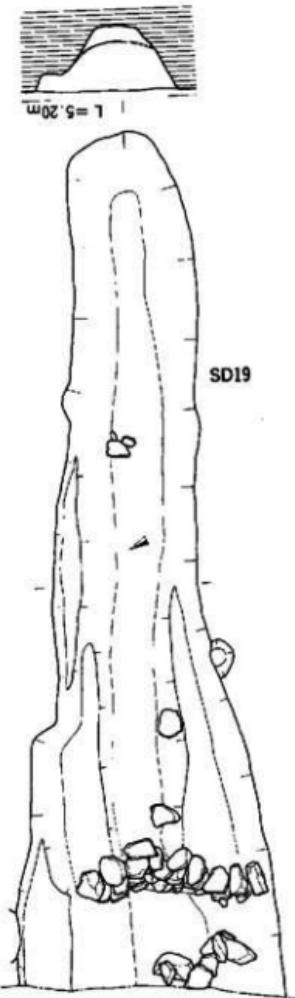


Fig. 98 第III区溝状遺構(SD19)、石組遺構(SX118)平面および断面図(1/40)

SE31 調査区の中央からやや北側で検出された。掘立柱建物SB105の南に隣接している。検出時は上面に多量の礫が見られた。石組を壊した後埋め戻されたものと思われる。

掘り方上面での直径は2.2~2.05mである。深さは1.6mで、第I~III区で最も深い。井戸は井戸埋め戻しの際に抜き取られたと思われる。基底部に残っている石組の直径は60~65cmである。遺物は二次堆積の状況で小片しか出土していないため、時期の比定が難しいが、江戸時代後期以降のものと思われる。

5) 土壌 (Fig.100~101, PL.45, Tab.17)

概要 第III区では、豊穴遺構が67基確認された。そのうち、出土遺物や形態的な特徴から、墓壙または地鎮などに関する掘り方と思われるものについては、第II区と同様土壌(SK)としたが、豊穴遺構中にも平面形など土壌と共通する要素をもつものもある (SX104・109・115)。67基に関する分類については、6) 豊穴遺構(58~68頁・142~152頁)を参照されたい。ここでは土壌とした12基について説明する。なお第II区と同様に、これらの土壌の遺物の出土状況は、副葬または供獻と思われるような出土例がなく、その性格づけにはやや無理があるかもしれない。時期は、江戸時代のものとわかるものが、SK10・12で、他は出土遺物がきわめて少ないため明確でない。埋土の同質性からほとんどのものが江戸時代のものと思われるが、SK14は鎌倉時代のものと思われる。法量や出土遺物の詳細についてはTab.17を参照されたい。

SK10 SE31の西側に隣接している。平面形は隅丸の長方形で、北辺が二段掘となっている。断面形は逆台形で、床面は中央がわずかに窪んでいる。埋土は一時に埋め戻されたもので、暗褐色~灰褐色粘質土が大きなブロックで堆積している。遺物の出土量は少ない。

SK11 SE31の西側にほとんど接している。平面形は隅丸の長方形でSK10と同様南辺が二段掘りとなっている。床面は平坦で、ほぼ垂直に壁は立ち上がっている。壁の上半分は一部崩落している。木炭片をわずかに含む暗灰褐色の粘質土が一時的に埋め戻されている。

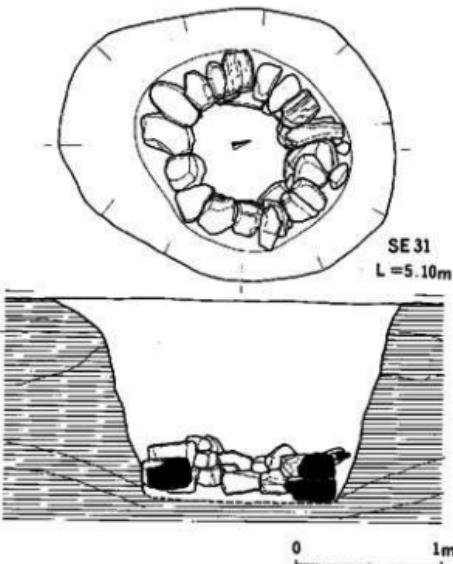


Fig.99 第III区井戸平面および断面図 (SE 31) (1/40)

SK12 SE31の北側に隣接している。平面形は隅丸の長方形で、形態的にはSK10・11とよく似ているが、掘り方は一回り大きい。床面は平坦。

SK13 平面形はやや不整な隅丸の長方形である。ST10の西側に隣接している。SK10との切り合い関係は不明。掘立柱建物SB117・溝状造構SD21を切っている。床面は平坦である。壁の立ち上がりはやや緩やかである。

SK14 調査区の北側に位置する。平面形は隅丸の端正な長方形である。床面は中央がわずかに窪んでいるが、ほぼ平坦である。木炭片をわずかに含む暗褐色粘質土が、一時的に埋め戻された状況で堆積している。遺物は土師器破片が出上しているのみ。

SK15 調査区中央のやや東寄りに位置している。平面形は隅丸の長方形である。床面は平坦で、断面形は逆台形である。壁の立ち上がりは緩やかである。上部はかなり削平を受けている。埋土は灰褐色粘質土。一時的に埋め戻されている。

SK16 SX120の東側に隣接している。平面形はSK15によく似ており、隅丸の長方形である。床面は平坦。壁の立ち上がりは緩やか。埋土は木炭片がわずかに混入する灰褐色粘質土。

SK17 SK16・SX120の南側に隣接している。平面形はSK15・16とよく似ており、隅丸の長方形である。床面は平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は砂を多く含む暗褐色粘質土。

SK18 SK12とSE31の間に位置する。平面形は東辺がやや短い端正な長方形。灰褐色粘質土を埋土とする。床面は平坦。S B105から切られている。

SK19 第IIIc区のほぼ中央に位置する。平面形は北辺が長い台形である。残りは非常に悪く、壁が5~7cm程しか残っていない。暗褐色粘質土を埋土とする。

SK20 第IIIc区南側に位置する。平面形は北東側がやや張り出した隅丸の長方形である。床面は平坦。褐~暗褐色粘土を埋め土とする。硬く締まっている。

SK21 SK19の北東部に位置する。隅丸の長方形である。残りは悪い。床面は平坦である。硬く締まった暗褐色粘質土を埋土とする。

6) 壓穴造構 (Fig.102~106, PL.46・47・52, Tab.18)

概要 第III区からは竪穴造構が67基検出された。そのうち、すでに述べた井戸1基、土壙11基以外の55基は、その性格が不明確なものである。これらは形態、規模において多様であり、平面形は方形、長方形、円形、橢円形、あるいは不定形で、掘り方の断面形は浅皿状、船底状、逆台形状などである。また規模はおおよそ長さが1m前後から約3mほど、幅が0.5mほどから2m前後ほどを測る。

これらの竪穴造構の分布は、遺構間の時期の厳密な時期比定が要求されるが、先述した掘立柱建物のまわりに散在、あるいは建物に付属するかのような位置関係(側柱筋や、側柱内)にあるものなど、多様である。これらの分布の形成過程、竪穴造構間、および他の造構との関連

については項を改めて述べる。

ここでは67基の竖穴の形態的な特徴や遺物の出土状況等から、第I区の報告時に行なった分類基準に沿って以下のように分類を行い、性格づけにあたっての目安とし、遺構所見については種類ごとに概括的に述べてゆく。種類で、抜けているものはその種類に該当するものがないことを意味する。なお個別の遺構所見、遺物の出土状況、他の遺構との切り合い関係などの詳細についてはTab. 18を参照されたい。図示していない番号のものは微地形の土層だまりと判断されたものである。

1類 (Fig.103)

SX114のみである。平面形は長楕円形で、断面形は浅皿状である。長さは2m前後で幅は狭い。第I区では遺物が多量に出土するものと、少ないものとがあったが、第III区の場合遺物の出土は少なく、出土状況は二次的な流れ込みによるものである。溝状遺構が部分的に残存したものとも考えられる。SD06と方向性がほぼ同一であり屋敷地を画す性格のものかもしれない。

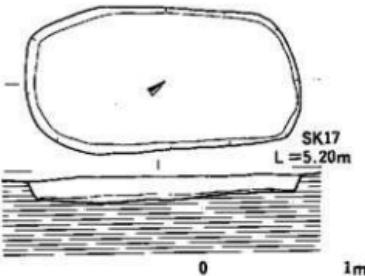
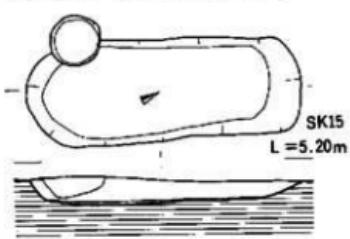
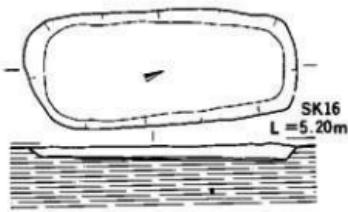
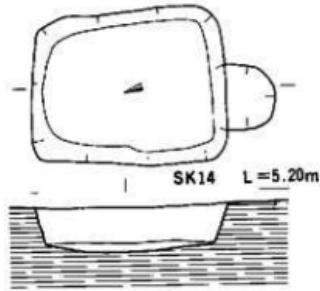
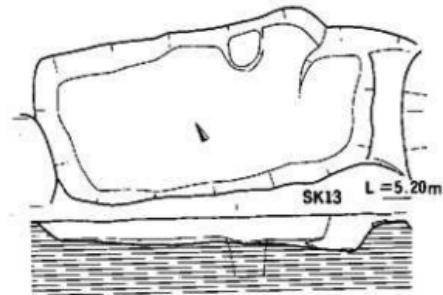
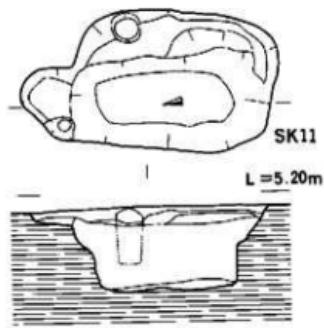
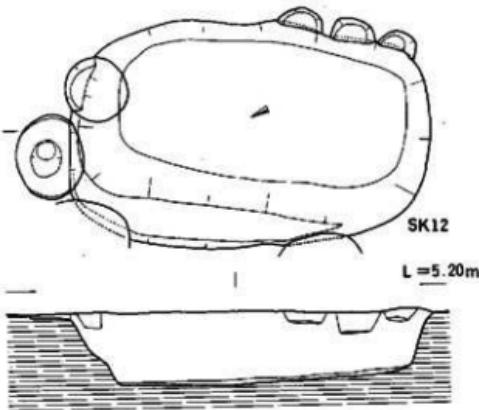
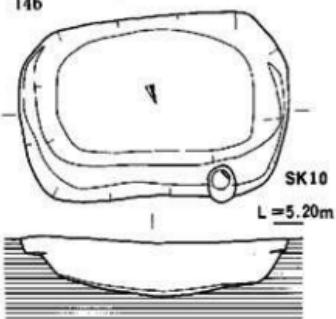
3類 (Fig.102~106, PL.52)

土壤SK10~21の12例と、SX104・109・115・138・155の5例がある。第II区の項でも述べたように、平面形は、長辺がやや短な寸法よりの長方形、もしくはやや長めの長方形である。いずれも明確な掘り方を持ち、壁は床面からほぼ垂直近くに立ち上がる。長さが1.2~1.7m前

Fig.No	PLNo	調査区	遺構No	調査時No	寸法(長×幅×深さ)	出 土 遺 物	出土遺物Fig.No		備考
							上部	下部	
100	45	Ⅲb	SK10	SK35	1.83×1.29×0.42	土質質土器、陶器一小片、土器群一不明小片			
100	-	#	SK11	SK36	1.95×0.97×0.50	上部一灰、陶器			
100	-	#	SK12	SK37	2.42×1.57×0.51	青磁一3個(腹足1)、白磁一小片、その他の白磁 陶器一小片、青磁(腹足) 陶器、土質質一鉢・上 鉢、土器群一灰又は土			
100	-	#	SK13	SK38	2.32×1.32×0.25	上部一小片			
100	-	#	SK14	SK43	1.34×1.08×0.33	遺物なし			
100	45	#	SK15	SK44	1.88×1.74×0.20	遺物なし			
100	-	#	SK16	SK45	1.88×1.84×0.13	遺物なし			
100	-	#	SK17	SK50	1.89×1.02×0.18	遺物なし			
101	-	#	SK18	SK00A	1.27×0.93×0.22	遺物なし			
101	-	Ⅲc	SK19	2024 (SX)	0.96×0.84×?	遺物なし			
101	-	#	SK20	3016 (SX)	1.36×1.10×0.13	遺物なし			
101	-	#	SK21	3018 (SX)	1.33×0.96×0.17	遺物なし			

Tab. 17 第III区土壤所見一覧表

146



0 1m

Fig.100 第III区土壤平面および断面図 (SK 10~17) (1/40) その1

後、幅が0.7~1.0mを測る一群と、長さが1.8~2.1m前後、幅が1.2~1.5mほどのやや大きなものとがある。この類は、第I区での遺物の出土状況からみて、木棺墓または土壤墓などの墓址、あるいは地鎮などの祭祀用竪穴と推定されるものである。しかし第II・III区では、副葬品もしくは供獻と考えられるような遺物の出土例がないために、土壤墓・木棺墓などの墓址かどうか積極的に断定できない面がある。しかし4類とは、掘り方、土層の堆積状況が異なっていることが指摘できる。

4類 (Fig. 102~106)

SX102・105・112・113・116・
117・122~125・127・132・133・135の14基ある。

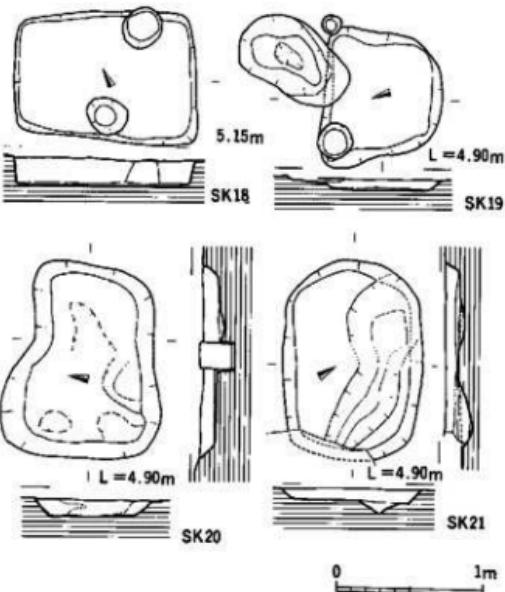
平面形が不整な円形または梢円形になる。これらはいずれも、生活残滓物の廃棄用の穴として掘られたものと考えられるもので、埋土壌土中には炭化した木片、焼けた礫石、焼土等が出土する。ただしそれらの出土量は多くはなく、二次的な流れ込みによる出土例がほとんどである。また礫のみが多量に出土しているものもある。なお4類とした中で、井戸と考えられるものが数例ある(SX113・124・125)。井戸の項で述べたように、これらは、井戸と確定できるものではないが、平面および断面形態や、土層断面などの共通性から井戸と推定される。

5類 (Fig. 102~106)

SX101・103・108・119・121・126・128・146の8例がある。平面形は不整な方形や長方形が主で、やや不整な梢円形のものもある。規模はやや大きく、長さが2~3m、幅は1.7~2.5mを測る。比較的明確な掘り方を持ち、床面は平坦で壁はほぼ垂直または斜めに立ち上がる。拳大ほどの礫石が床面にみられたSX119や、木炭が薄く屑をなしているもの(SX126)などがある。分布についてみると第III区の場合は、建物のまわりに比較的多くまとまる傾向がある。

7類 (Fig. 104)

SX120の1例のみである。平面形は隅丸の長方形で、長さは5.7m、幅は3.5mの長大な堅



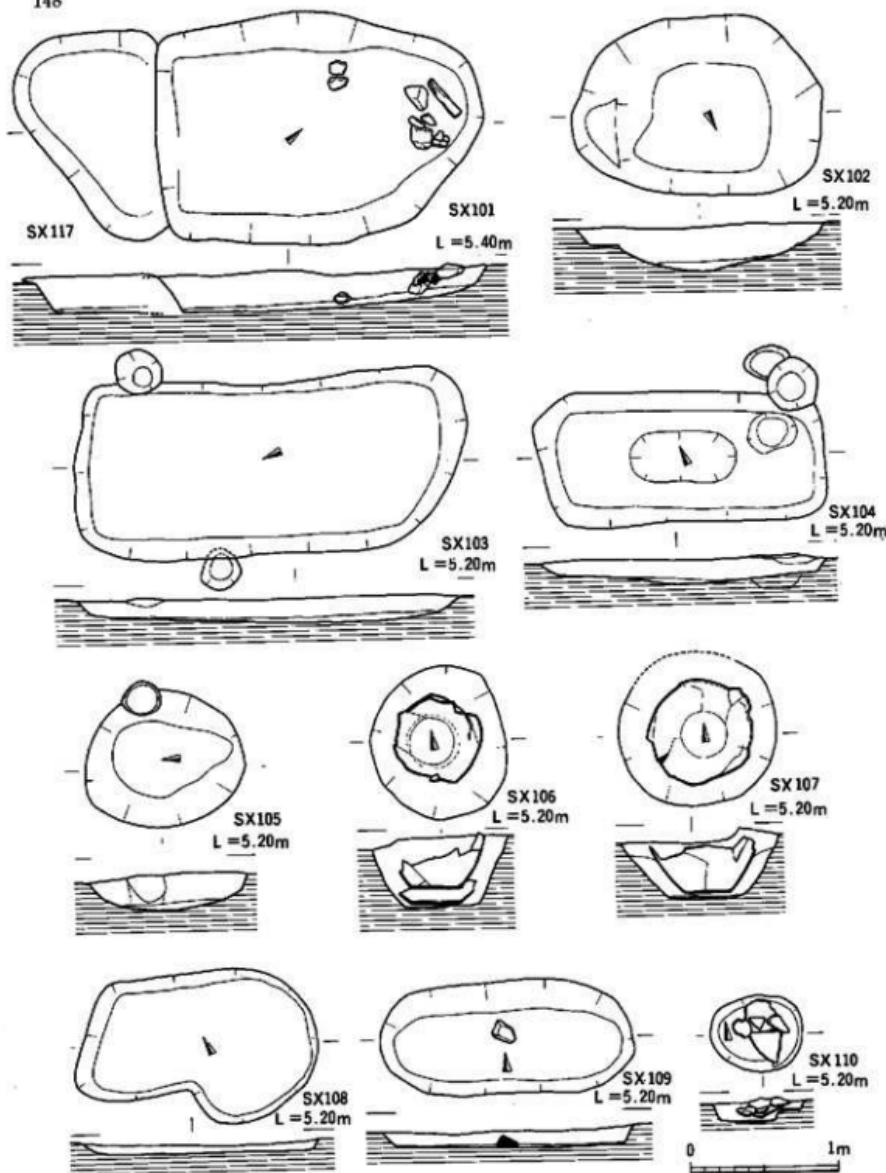


Fig.102 第III区堅穴造構平面および断面図 (SX101~110・117) (1/40) その1

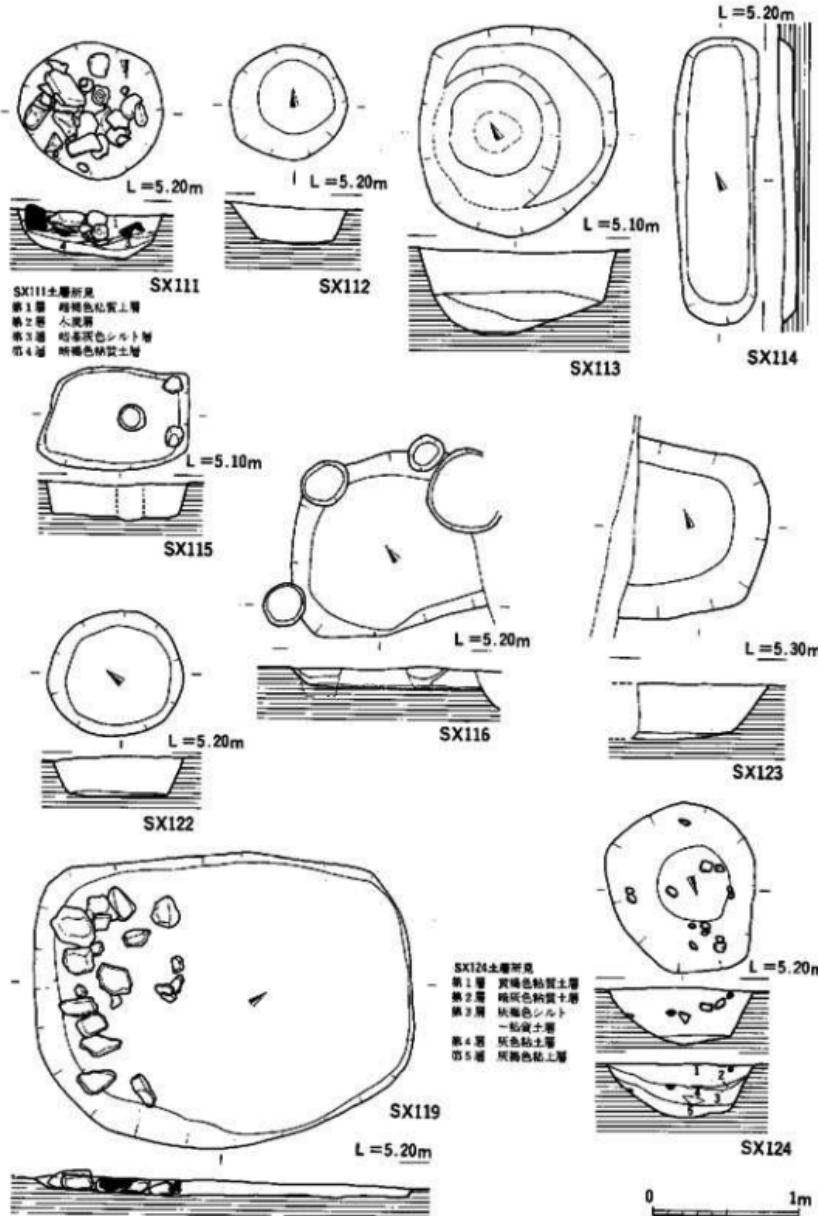


Fig.103 第III区堅穴造構平面および断面図 (SX111~116・119・122~124) (1/40) その2

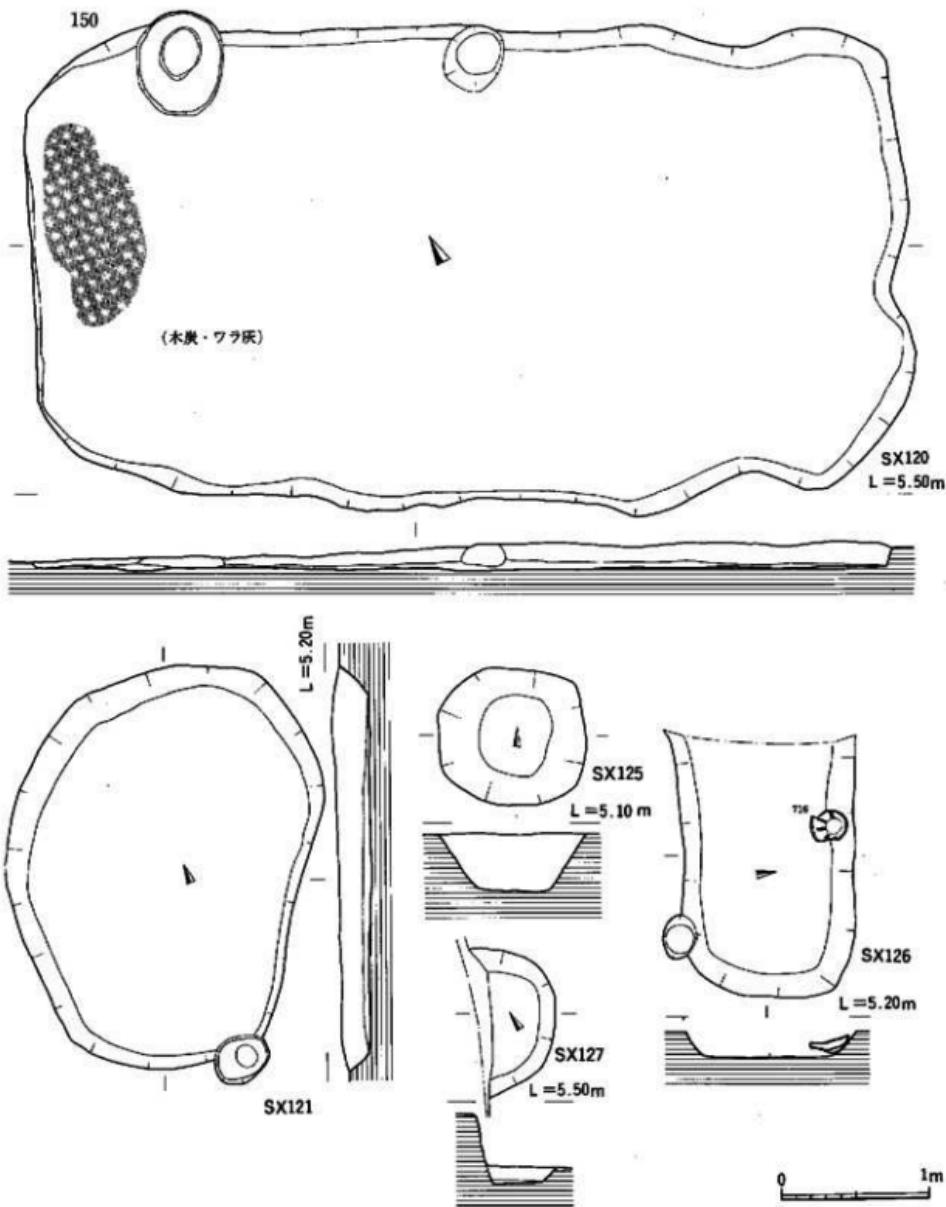


Fig.104 第III区堅穴造構平面および断面図 (SX120・121・125~127) (1/40) その3

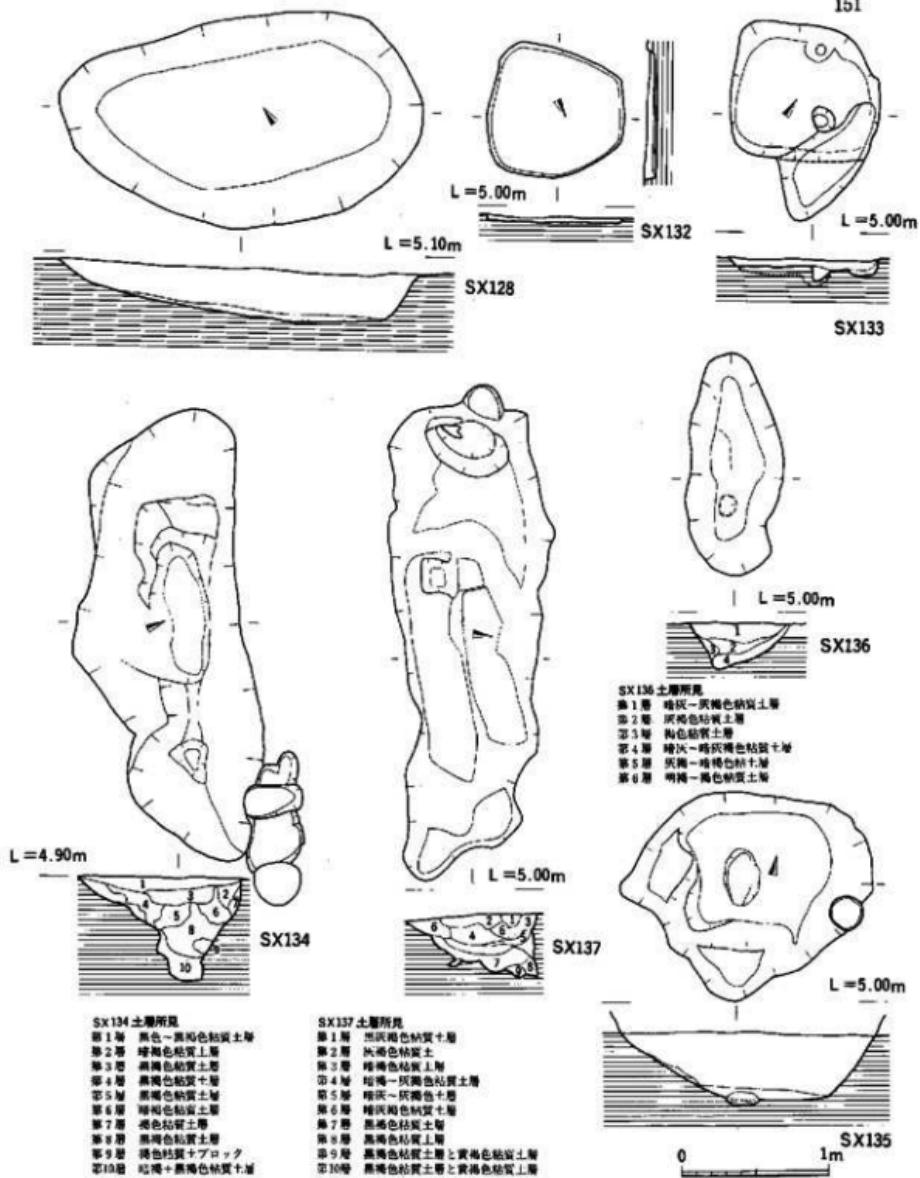


Fig.105 第三区整穴造構平面および断面図 (SX128・132~137) (1/40) その4

穴である。床面は平坦で、断面形は逆台形。遺物は比較的多く出土するが、ほとんどが破片で投棄または二次混入によるもので、細片が多い。

9類 (Fig. 102・103、PL. 47)

SX106・107・110・111の4例である。いずれも瓦質土器の焼成のあまい大甕を床面に据えている。甕はやや目の粗い砂で固定されている。おそらく温氣抜きの目的もあったと思われる。この埋蔵は、米などの貯蔵用のものと考えられるが、あるいは墓址だった可能性もある。

10類 (Fig. 98)

SX118の1例である。石組遺構である。廻の可能性がある。

11類 (Fig. 105・106)

SX134・136・137・142の4例がある。平面形は不定形のものが多い。土層は非常に乱れた状況を呈しており、掘り方の壁は不明確で凹凸が激しい。人為的な遺構かどうか不明である。

その他、遺構番号を付したもので微地形の凹凸の窪み内の堆積と考えられるものは、SX129～131・139～141・143～145・147～154の17例で、第IIIc区に多い。

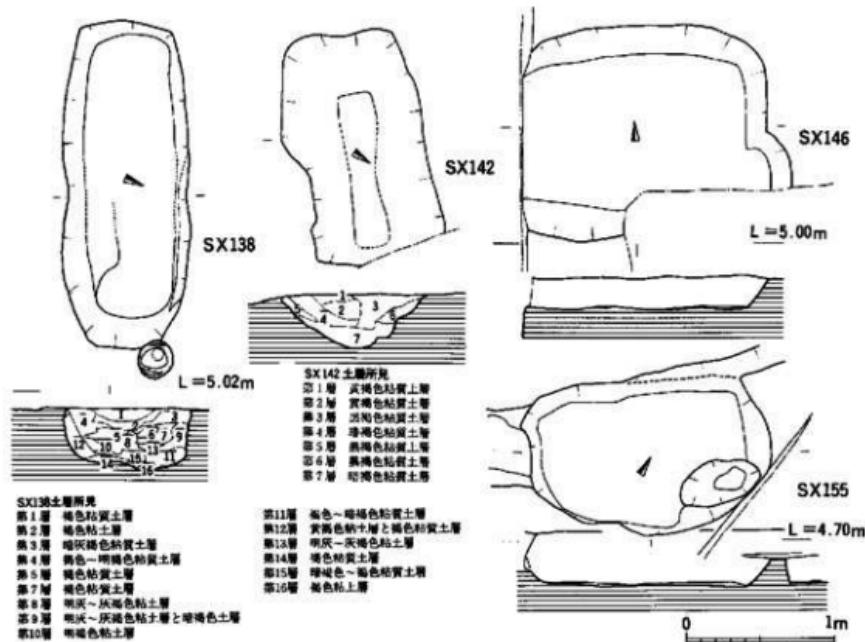


Fig. 106 第III区堅穴遺構平面および断面図 (SX138・142・146・155) (1/40) その5

Fig.No	PLNo	調査区	遺構No	調査坑No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土 遺物	出土地點Fig.No	備考
102	-	III b	S X101	S K34	5 塔 2.23×1.59×0.28	土師器一环・瓦、瓦質捲跡片、陶器片、弥生土器		
102	46	#	S X102	S K36	4 塔 1.70×1.22×0.32	土師器一环	109-706	
102	-	#	S X103	S K40	5 塔 2.67×1.25×0.18	陶器捲跡、土師器一小片	109-709	
102	46	#	S X104	S K41	1 塔 1.98×0.92×0.18	土師器一小片、近世漆竹		
102	-	#	S X105	S K42	4 塔 1.98×0.93×0.34	土師質土器	109-710	
102	-	#	S X106	S K45	9 塔 1.95×0.92×0.49	瓦質一塗、小片(埋藏)	110-717, 718	
102	47	#	S X107	S K46	9 塔 1.98×1.05×0.43	瓦質一塗(埋藏)、土師一小片、木片、陶器一塗 跡、小片	110-719	
102	-	#	S X108	S K47	5 塔 1.87×1.26×0.10	近世陶器、瓦器一塗、土師一小片		
102	-	#	S X109	S K49	1 塔 1.75×0.80×0.16	近世陶器、弥生土器		
102	-	#	S X110	S K51	9 塔 0.62×0.53×0.17	染付小瓶	109-707, 708	
103	47	#	S X111	S K53	9 塔 0.98×0.94×0.34	土師質一塗、近世陶器、木炭、近世漆漆片	110-720, 721	
103	-	#	S X112	S K60	4 塔 0.80×0.77×0.36	遺物なし		
103	-	#	S X113	S X48	4 塔 1.44×1.35×0.90	近世陶器、十輪器一小片・环、白磁一小片		
103	-	#	S X114	S X49	1 塔 1.99×0.59×0.12	陶器一塗・捲跡		
103	-	#	S X115	S X50	1 塔 1.84×0.71×0.25	瓦質捲跡、土師不明小片		
103	-	#	S X116	S X51	4 塔 1.36×1.28×0.17	土師器一环・小片		
102	-	#	S X117	S X52	4 塔 1.43×1.03×0.27	遺物なし		
98	-	#	S X118	S X53	10 塔 1.31×1.03×0.45	遺物なし		
103	-	#	S X119	S X54	5 塔 2.81×2.04×0.14	近世陶器、染付、輪入陶器、土器一小片		
104	-	#	S X120	S X55	6.11×3.36×0.22	陶器片、土師器一小片、土師質一塗、調理器一小片、粘土塊、青白磁紅口、近世漆付、弥生土器他 ニワトリ人形	109-714, 715	
104	-	#	S X121	S X56	5 塔 2.80×2.18×0.28	土器器一环・小片、白磁一袋(VI)、陶器一袋・ 捲跡・蓋	109-711	
103	-	#	S X122	S X57	4 塔 0.93×0.96×0.28	土師器一袋・捲跡・小片	109-712	
103	-	#	S X123	S X58	4 塔 1.25×1.04×0.40	土師器一小片、近世陶器	109-713	
103	-	#	S X124	S X59	4 塔 1.16×1.04×0.39	土師質一塗		
104	-	#	S X125	S X60	4 塔 1.00×0.94×0.39	陶器一塗、瓦質一塗、灰處一小片・土器一小片		
104	47	#	S X126	S X70	5 塔 1.84×1.36×?	遺物なし	109-716	
104	-	#	S X127	S X71	4 塔 1.04×0.60×0.13	遺物なし		
105	-	#	S X128	S X60B	5 塔 2.50×1.51×0.40	遺物なし		
-	-	Ⅲ c	S X129	S X300	4.32×2.13×0.26	遺物なし		

Tab. 18 第III区竪穴遺構所見一覧表(その1)

Fig.No	PL.No	測定区	遺 備 No	測定地 No	形状・寸法(奥×幅×深さ)	出 土 遺 物	出土遺物 Fig.No	備考
-	-	III c	S X 130	S K 3808	1.48×0.90×0.28	遺物なし		
-	-	"	S X 131	S K 3819		遺物なし	109-706	
105		"	S X 132	S K 3820	4 枚 0.95×0.92×0.06	遺物なし	109-709	
105	-	"	S X 133	S K 3821	4 枚 1.37×1.03×0.15	遺物なし		
105	-	"	S X 134	S K 3822	11 枚 1.36×3.08×0.71	遺物なし	109-710	
105	-	"	S X 135	S K 3823	4 枚 1.72×1.45×0.50	遺物なし	110-717, 718	
105	-	"	S X 136	S K 3825	11 枚 1.51×0.67×0.32	遺物なし	110-719	
106	-	"	S X 137	S K 3826	11 枚 3.39×1.28×0.44	遺物なし		
-	52	"	S X 138	S K 3827	1 枚 2.24×0.88×0.62	土器部一小片		
-	"	"	S X 139	S K 4183	4.34×3.26×0.28	遺物なし	109-707, 708	
-	-	"	S X 140	S K 4184	2.29×2.14×0.33	遺物なし	110-720, 721	
106	-	"	S X 141	S K 4185	1.75×1.71×?	遺物なし		
-	-	"	S X 142	S X 4186	11 枚 1.62×1.12×0.45	遺物なし		
-	-	"	S X 143	S X 3905	0.65×0.62×0.20	遺物なし		
-	-	"	S X 144	S X 3965	測定不可 深いたまりか?	遺物なし		
106	-	"	S X 145	S X 4027	1.66×1.00×0.43	土器部一小片		
-	-	"	S X 146	S X 4028	5 枚 1.86×1.49×0.34	骨生土器		
-	-	"	S X 147	S X 4051	1.01×0.83×0.25	遺物なし		
-	-	"	S X 148	S X 4070	2.73×1.66×0.18	遺物なし		
-	-	"	S X 149	S X 4072	1.05×0.72×0.09	遺物なし	109-714, 715	
-	-	"	S X 150	S X 4074	0.75×0.73×?	遺物なし	109-711	
-	-	"	S X 151	S X 4101	測定不可	遺物なし	109-712	
-	-	"	S X 152	S X 4164	実面図なし 測定不可 深いたまり	遺物なし	109-713	
-	52	"	S X 153	S X 4140	1.55×1.30×0.15	遺物なし		
-	52	"	S X 154	S X 4341	2.24×2.18×0.46	遺物なし		
106	52	"	S X 155	S X 4144	1 枚 1.71×1.08×0.39	土器部一小片	109-716	
113	54	IV b	S X 156	S X 4344	1.39×1.42×0.39	遺物なし		
113	54	"	S X 157	S X 4245	1.58×1.51×0.60	黒曜石碎片		
113	54	"	S X 158	S X 4248	0.98×0.92×?	遺物なし		

Tab. 19 第III区堅穴遺構所見一覧表 (その2)

(2) 遺物各説

概要 第III区からは第I区・第II区と比べて、遺物の種類、出土量はかなり少ない。遺物の種類には、土師器(皿・壺)を主として、土師質土器(土鍋・擂鉢)、瓦質土器(羽釜)、須恵質土器(擂鉢)、陶器(備前窯擂鉢)等の国産の土器・陶器類のほか、白磁(碗、皿)、青磁(碗皿)、青白磁(合子皿)、などの輸入陶器が出土している。その他に、管状土錐、滑石製石鍋、砥石、鉄滓、板絵、木製龜などが出土している。これらの遺物は鎌倉時代および江戸時代のものと考えられるものである。

これらの遺物の出土状況は、主として井戸、竪穴遺構、溝状遺構などから二次的な堆積の状況で出土したものが多い。一括埋納・投棄などの状況で出土したものはわずかである。出土品のなかで注意されるのは、溝状遺構(SD61)から出土した板絵(693)である。これについては付論2で詳細に述べる。

以下では図示できた遺物について説明する。各遺物の出土遺構名、遺構ごとの遺物の出土状況、土師器(皿・壺)の法量などは各一覧表を参照されたい。

1) 柱穴出土の遺物 (Fig.108)

柱穴からは遺物の出土量は少ない。第II区では柱根痕跡もしくは掘り方内に1~3点ほどの土師器(皿・壺)または青磁(碗・皿)を完形のまま、あるいは半剖して埋置している例がみられたが、第III区ではその例はみられなかった。

SP605出土遺物 (Fig.108)

土師器 皿 (694・695) 口径・器高・底径の平均値は9.2・1.2・7.8cm。いずれも糸切底。焼成あまくもろい。褐色。

土師器 壺 (696)

口径・器高・底径は

15.2・2.4・12.0cm。

糸切底。暗褐色。

SP605出土遺物

(Fig.108)

土師器 皿 (697)

口径・器高・底径はやや不規格であるが

10.1・1.2・8.6cm。

糸切底。焼成不良で

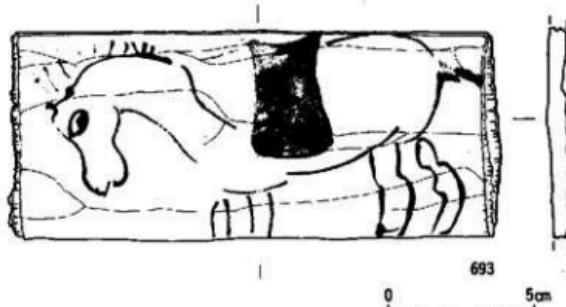


Fig.107 第III区溝状遺構出土遺物実測図 (SD61) (2/3)

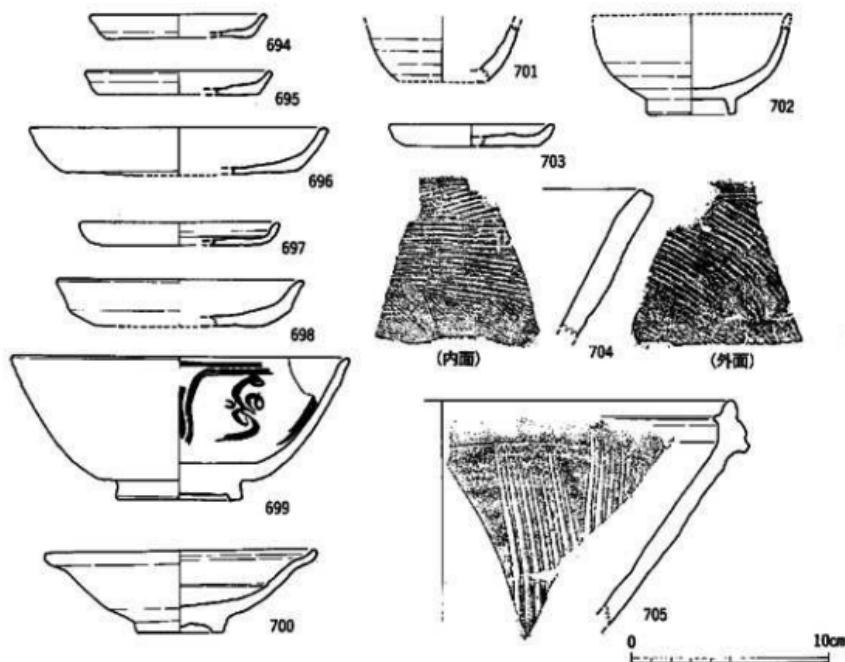


Fig.108 第III区柱穴、溝状造構(SD 07)、井戸(SE 31)、土壌(SK 12)出土遺物実測図(1/3)

もろい。

土師器 壊 (698) 口径・器高・底径は $12.6 \times 2.4 \times 8.8\text{cm}$ 。やや小型である。糸切底で軽くナデ消している。焼成不良で、もろい。褐色。

青磁 碗 (699) 龍泉窯系碗Ⅰ類。口径・器高・高台径は $17.4 \times 7.3 \times 6.4\text{cm}$ 。ヘラ片切形による区画線・雲文を体部内面に施文している。釉はやや発色が良くなく薄い灰緑色。

2) 溝状造構出土の遺物 (Fig. 108)

SD 07出土遺物 (Fig. 108)

陶器 盆 (700) 唐津系陶器。体部はヘラケズリ成形。ロクロ回転は右回転である。口径・器高・高台径は $14.6 \times 4.1 \sim 5.4 \times 4.4\text{cm}$ 。釉は不透明な灰白色で、胎土は赤褐色陶土。

SD 61出土遺物 (Fig. 108)

木製品 板詰 (693) 現存の長さ・幅・厚さは $14.1 \times 6.0 \times 0.6\text{cm}$ 。スギ(板目材)を素材と

している。板材はおそらく刀子もしくは鎌鉋によるものと思われるが、絵が描かれた面を丁寧に削り面取りしている。裏面は切り出したままの状態である。平坦にされた面に、墨書によって、鞍をつけ、たてがみを編んだ馬を、左向きにして、描いている。馬の腰の部分、尾、足の先は途中で切れていることから、上下および図の右側縁は欠けているものと思われる。絵の遺存状況はあまり良くない。たてがみと鞍の部分は消滅している。筆の運びからみてかなり手慣れた描き方という感じがする。この板絵については付論2を参照されたい。

3) 井戸出土の遺物 (Fig. 108)

SE 31出土遺物 (Fig. 108)

陶器 小壺 (701) 底部の破片。備前焼である。胎土はキメ粗く、細かい白砂を含む。焼成良好でよく焼き締まっている。赤褐色～灰褐色。

白磁 碗 (702) 伊万里系の白磁。口径・器高・高台径は(10.3)・5.2・4.6cm。体部下半はヘラケズリ成型。高台疊付には目跡が付着。釉は半透明の灰白～明灰白色。

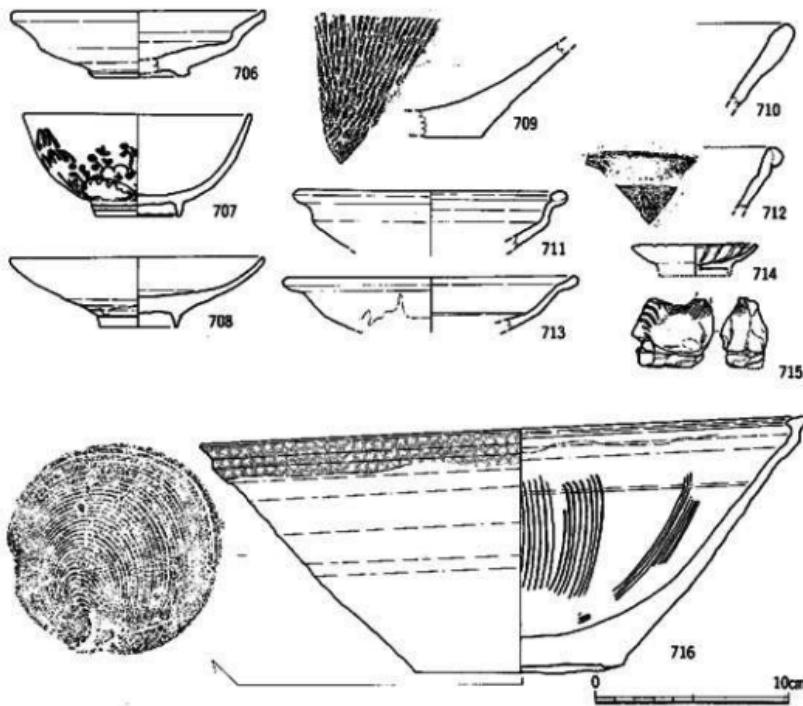


Fig. 109 第III区竪穴遺構出土遺物実測図 (SX 102・103・105・110・120～123・126) (1/3)

4) 土壙出土遺物 (Fig.108、Tab.11~12)

SK 12出土遺物 (Fig.108)

土師器 皿 (703) 口径・器高・底径は8.5・1.1・6.8cm。糸切底。焼き締まっている。

土師質土器 土鍋 (704) 口径不明。内外面ともにヨコハケ仕上げ。明灰褐色。やや脆い。

陶器 揚鉢 (705) 口径は約30cm。口縁部は段を有し外面に2条の沈線を巡らしている。

端部は内側に引き出されている。下ろし目は7条が一単位である。焼成は堅緻。赤褐色。

5) 穫穴遺構出土遺物 (Fig.109)

SX 102出土遺物 (Fig.109)

陶器 皿 (706) 口径・器高・高台径は13.0・3.4・5.2cm。胎土はややキメ粗い陶土である。釉は薄く緑がかった灰色で、内面から外面上半分にやや厚くかかっている。

SX 103出土遺物 (Fig.109)

陶器 揚鉢 (709) 胎土は赤褐色の陶土できめ細かい。堅く焼き締まっている。下ろし目の単位は不明であるが、かなり密に内面全体に入れられている。底部は糸切底で軽くナデ消し。

SX 105出土遺物 (Fig.109)

土師質土器 土鍋 (710) 口縁部は肥厚。内面はハケ目調整。外面はナデ仕上げ。焼成良。

SX 106出土遺物 (Fig.109)

瓦質土器 壺 (717) 底部径は34.4cm。底部の厚さは0.9~1cm。4~5cm幅の単位で粘土の継目がわかる。継目部分で内外面ともハケ目調整が丁寧に行なわれている。焼成は非常に悪くもろい。胎土はややキメ粗い。灰白~灰色。

SX 107出土遺物 (Fig.110)

瓦質土器 壺 (719) 底部径は36.0cm。底部の厚さは0.9~1cm。717と同様4~5cm幅の単位で粘土を継いでいる。継目部分で内外面ともハケ目調整が丁寧に行なわれている。特に外面はその部分にのみヨコハケを巡らしている。胎土はやや粗くもろい。焼成不良。灰褐~灰色。

SX 110出土遺物 (Fig.109)

磁器 染付碗 (707) 口径・器高・高台径は11.6・5.2・4.4cm。素地は薄く青みがかった白色。くすんだ(緑)青色で絵付けしている。高台疊付には白色珪砂が帶状についている。

陶器 皿 (708) 唐津系陶器である。釉は高台以外は全面施釉。ただし内底の釉は施釉後、輪状に掻き取り、砂目が残る。高台にも砂目が残る。釉色は茶褐色で、刷毛目手の施文。

SX 111出土遺物 (Fig.110)

陶器 皿 (741) 唐津系陶器である。高台径は6.0cm。透明釉が全面に薄くかかっている。

陶器 揚鉢 (720) 大型の揚鉢である。底部径は10.8cm。下ろし目の単位は不明だが、内面全体に付けてある。胎土は精良、焼成堅緻。赤褐色。

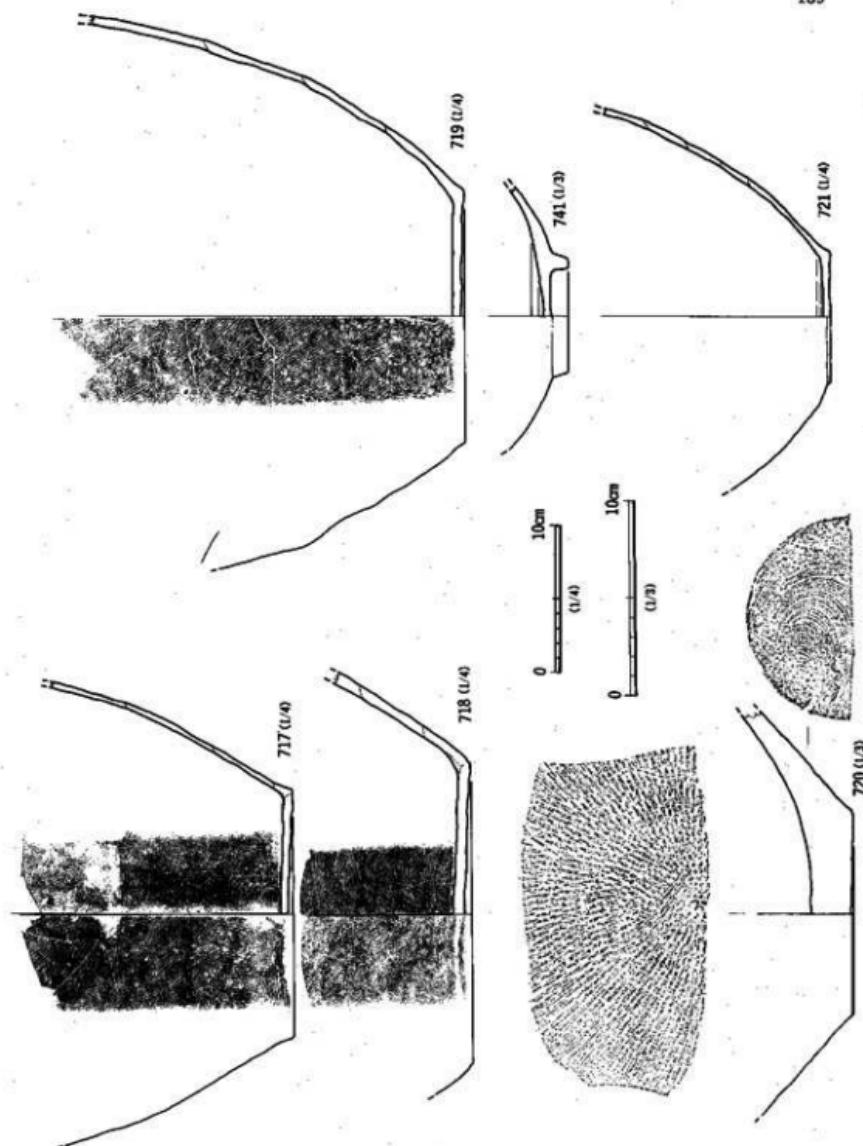


Fig. 110 第三区堅穴遺構出土實物測量圖 (S X 106・107・111) (1/4・1/3)

瓦質土器 壺 (721) 底部径は18.3cm。717・719と同様に叩きの後、縫目部分を丁寧にハケ目仕上げ。焼成悪く、もろい。灰白～灰色。

SX 120出土遺物 (Fig. 109)

白磁 小皿 (714) 口径・器高・高台径は6.5・1.5・3.8cm。型押し造り。菊花文または蓮花文をあしらっている。釉は透明な明灰白色。伊万里系か。

土製品 鶏形土人形 (715) 頭部、尾の部分は欠損。焼成はやや不良。褐白色。現存高4cm

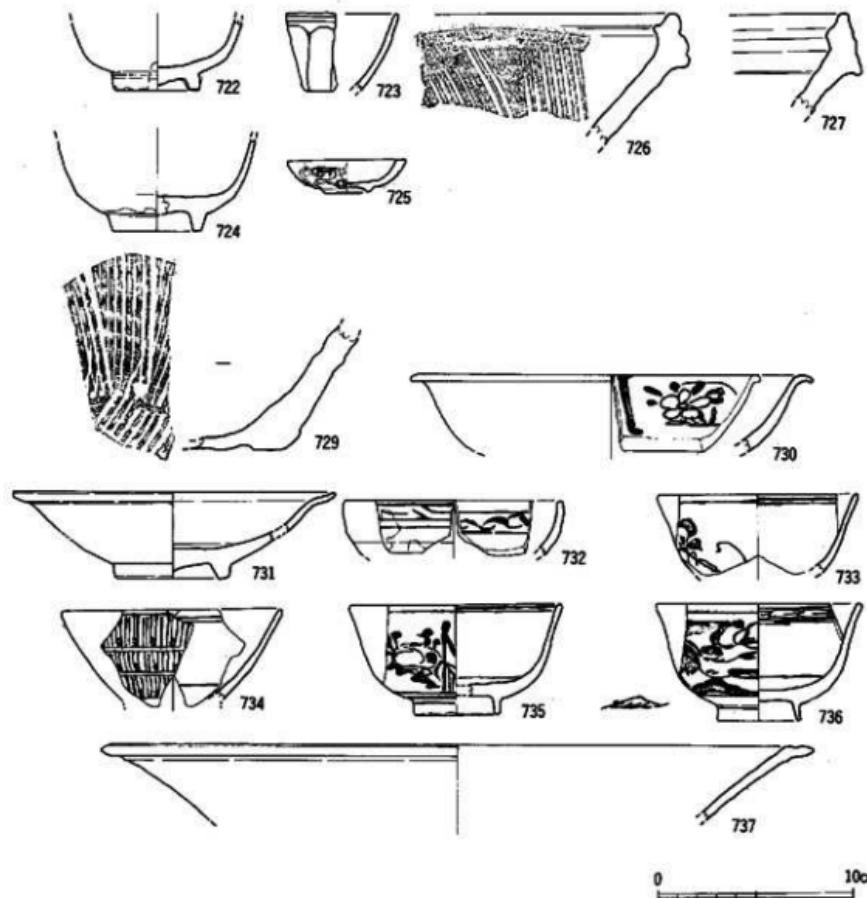


Fig. 111 第III区表土出土遺物実測図 (1/3) (728は欠番)

SX 121出土遺物 (Fig. 109)

陶器 鉢 (711) 口径14cm。体部中位よりやや上で屈曲。口縁は丸く成形されている。焼成堅緻。口縁部内面から体部屈曲部外面まで黒褐色の釉を施釉。

SX 122出土遺物 (Fig. 109)

陶器 摺鉢 (712) 目の細かい下ろし目が内面全面に付く。口縁部のみ鉄釉を施釉。

SX 122出土遺物 (Fig. 109)

陶器 皿 (713) 唐津系陶器。緑～緑灰色の半透明釉を施釉。口径は15cm。

SX 126出土遺物 (Fig. 109)

陶器 摺鉢 (716) 8条1単位の下ろし目がつく摺鉢である。口縁部は屈曲し内側に少し引き出されている。褐色釉が口縁部のみに施釉されている。他は露胎。口径・器高・底径は32.0・11.6～13.3・10.8cm。

6) 表土出土遺物 (Fig. 111)

陶器 碗 (722・724・732) 722・724は唐津系の碗。高台径は722が[±]4.2cm、724が[±]4.6cm。釉は722が半透明の灰白色、724が外面に黒(褐)色の釉を施釉。高台部は露胎である。732は高取系と思われる。灰色の素地に白色の粘土を象眼している。口径は10cm。

陶器 摺鉢 (726・727・729) 726・727は備前焼。口径はいずれも30cm前後。下ろし目は7～8条が1単位。焼成堅緻。胎土色調は赤褐色。729はやや焼きのあまい、明褐色の胎土。下ろし目はかなり粗い。産地は不明。

陶器 皿 (731・737) 731は唐津系緑釉皿。口径・器高・高台径は16.6・4.4・5.8cm。施釉後内底は輪状に搔き取っている。緑釉は内面から口縁部外面まで施釉。737は同じく唐津系二彩大鉢。口径37cm。部分的だが、口縁部に、緑釉がかけられている。

磁器 碗 (723・733～736) いずれも伊万里系磁器である。口径はおおむね10～11cm程度で、やや小振である。素地は薄く青みのある白色。くすんだコバルトブルーで絵付けを行なっている。734は大山新窯出土例に類似する。いずれも18世紀後半から19世紀にかけてのものか。(註1)

磁器 皿 (730) 伊万里系絵付皿。口径は20.4cm。内面にくすんだ藍色で絵付けしている。

磁器 小皿 (725) 伊万里系磁器。紅皿。型押しによるもの。口径・器高・高台径は6.0・1.8・2.4cm。外面は露体。網目がつく。内面に明白白色釉を施釉。

VI 第IV区の調査

概要 第IV区は浄水場敷地の西南部に位置する。多々良川左岸からは南へ約350~400mほど離れた地点に位置する。第I~III区の集落関連の遺構群がそれぞれ、旧自然堤防と考えられる微高地に位置していたのに対して、第IV区は旧河川の川道内にあたっている。現地表面の標高は5.2~5.3mで、遺構検出面はおおむね4.9m前後の高さである。遺構検出面はよく締まつた明るい褐色粘質土で、北東から南西に向かって緩やかに低くなっている。調査区の北西部には、黒色粘質~粘土層がこの明褐色粘質土の下部に厚く堆積している。土層断面の分布範囲は、この地点周辺からさらに西側へ、おそらく三日月状に、延びるものと思われる。形成された時期は不明である。おそらく古い時期に形成された、多々良川の後背湿地であろうと思われる。出土した遺構・遺物はきわめて少ない。西側に井戸と思われる円形の竪穴、南北隅に性格不明の円形~梢円形の竪穴が確認された以外は、水田に伴う溝状遺構が4~5条認められたのみである。なお遺構の上面には共通して灰白(褐)色シルトまたは砂層が覆っており、ある時期に一時的に埋没した状況である。

(1) 遺構各説

1) 溝状遺構 (Fig.112~114, PL.53)

溝状遺構は5条検出された。いずれも埋土は、灰白(褐)色シルト~砂層である。一時的に埋没したものと思われ、これらに伴う水田址の有無が注目されたが、全体的に削平されており水田址については確認することができなかった。ただし溝状遺構周辺では、足跡と思われる小さな凹凸があることが観察された。溝状遺構の遺存状況は悪く、深さは約10cm前後である。

SD70 調査区の北側に位置する。南東から北側に緩く弧を描いて続いている。長さ約5.8m、幅20cm。床面は凹凸が激しい。

SD71~72 調査区の南東部から北西にかけてほぼ平行して続いている。溝間の幅は0.3~1mで、一定の幅ではない。SD71は最大幅が0.8mで、深さが15~20cm。SD72は最大幅が0.5mで、深さが10~15cm。SD71は途中で部分的に幅が広くなっているところがある。第IIIc区のSD63~65と直接連なるものではないが、方向性や埋土の状況からみて同一時期の水田に伴う溝状遺構であったと考えられる。その場合、条里の方向性とはまったく異なった区画がある時期(当該調査区では11世紀ごろ)に部分的にあったということになる。

SD73~74 調査区の南側に位置する。方向は不定方向でまた掘り方の壁も明確ではない。床面は凹凸が激しい。埋土は粗砂が堆積。土師器の小片がわずかに出土しているのみである。

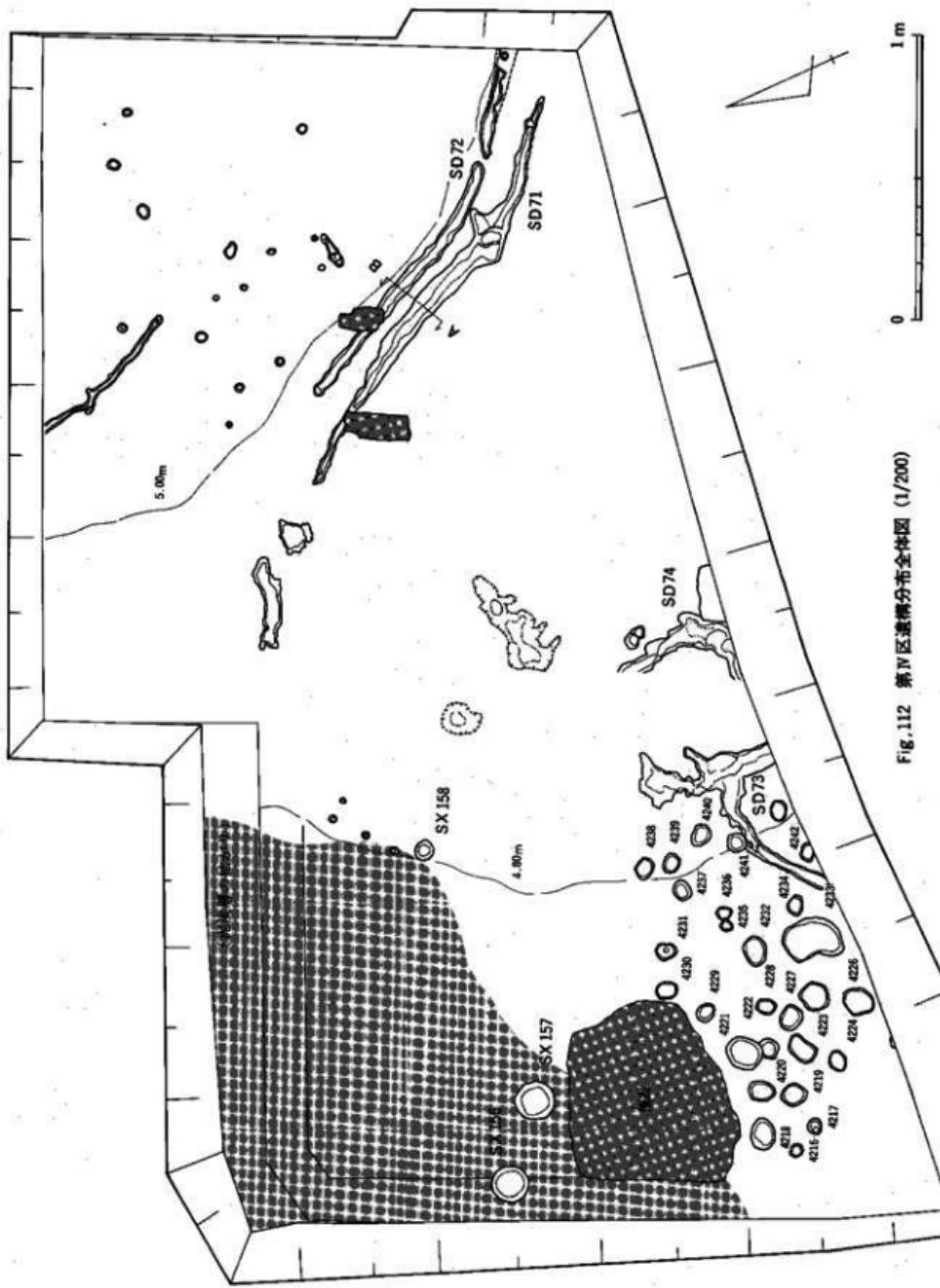


Fig. 112 第IV区造構分布金鉱図 (1/200)

2) 壓穴遺構 (Fig.113、PL.54)

壓穴遺構は、第IV区から32基検出された。調査区の南西側に特に集中する1群(29基)と、西側に点在するもの(3基)がある。

4類 西～西北側に分布する3基である。いずれも平面形は円形である。掘り方断面形は逆台形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。西壁近くに位置するSX156・157は、掘り方の形態などからみて井戸の可能性がある。SX156の床面近くには鋸状木製品が出土した。他に出土遺物はない。埋土はSX158黒褐色粘土。他は灰～暗灰色の粘土が堆積している。

12類 南西側の29基である。平面形はやや不整な円形もしくは梢円形で、平面形からは4類に共通している。しかし埋土の堆積が明らかに第I区から第III区までの4類とは異なっている。すなわち、先の4類が、廐棄用の壓穴であり、木炭片や焼土・礫を含みながら徐々に埋没して行く状況であったのに対して、第IV区の壓穴は掘削後一時的に埋没している状況である。これはほぼ共通した堆積の仕方である。また遺物はまったく出土しておらず、時期比定は難しい。断面形は逆台形で、床面は平坦なものと凹凸に富むものとがある。掘り方は良質の青灰～暗青灰色粘土を握こんでおり、砂礫層までは達してはいない。法量は最大のもので1.2m前後削平されているので本来の深さは、深さは30～55cmほどで深さはあまりない。

鋸状の木製品や掘り方の深度、埋まり方からみて、やや飛躍するが、粘土採掘を行なった穴の可能性もある。

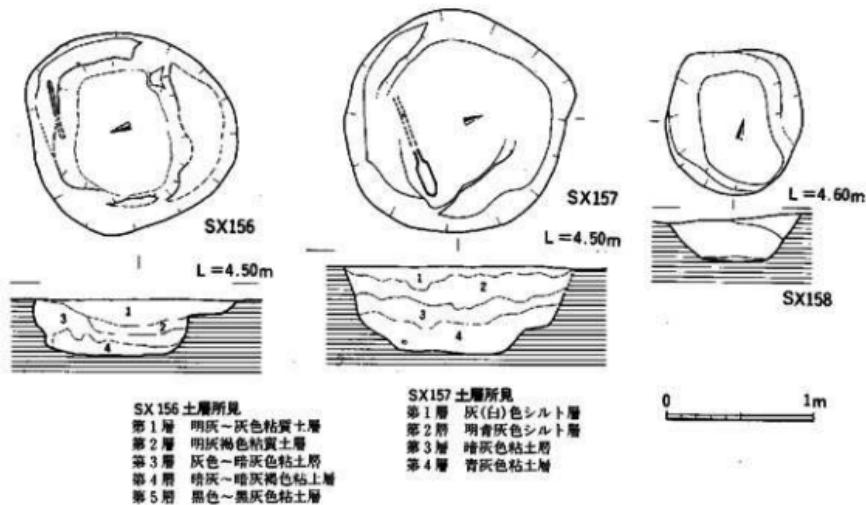


Fig.113 第IV区壓穴遺構平面および断面図 (SX156～158) (1/40) その1

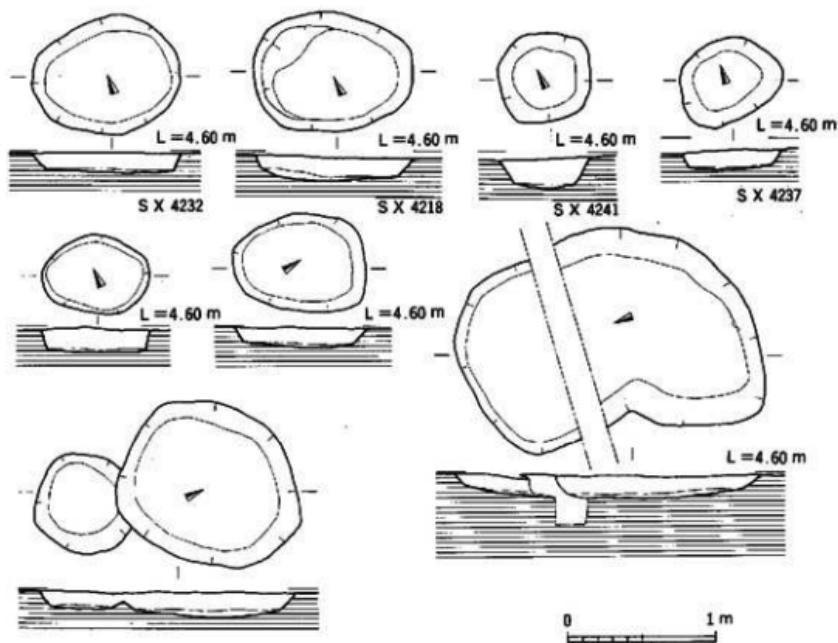


Fig. 114 第IV区堅穴造構平面および断面図 (1/40) その2



Fig. 115 第IV区溝状造構断面図 (1/20)

(2) 遺物各説

概要 第IV区では遺物はほとんど出土していない。

縄文時代の早期のものと思われる黒曜石製石鏃、土師器（皿・坏）破片、瓦器破片など数えるほどである。

以下では図示し得たものについて説明する。

1) 溝状遺構出土の遺物 (Fig. 116)

S D70出土遺物 (Fig. 116)

土師器 丸底坏 (739) 口径・器高・底径は $14.8 \cdot 3.4 \cdot (8.2)$ cm。外底は手持ちヘラケズリ。内面から口縁部外面にかけては回転ナデ仕上げ。胎土は精良。焼成良好。明褐白色。

2) 堆穴遺構出土遺物 (Fig. 116)

S X157出土遺物 (Fig. 116)

木製品 鋤 (740) 桶製。現存長・柄の長さ・柄の直径・身の長さ・身の幅・身の厚さは順に、 $56 \cdot 33 \cdot 3.8 \cdot 22.5 \cdot 8.0 \cdot 1.3$ cm。

柄の末端部は潰れている。鋤先はわずかに丸く作ってある。鋤身はわずかに内湾している。

3) 表土出土遺物 (Fig. 116)

磁器 碗 (738) 口径・器高・高台径は $10.7 \cdot 4.3 \cdot 3.8$ cm。伊万里系磁器である。内底は輪状に掻き取っている。外面に茶褐色の釉がかかる、焼成は堅緻。

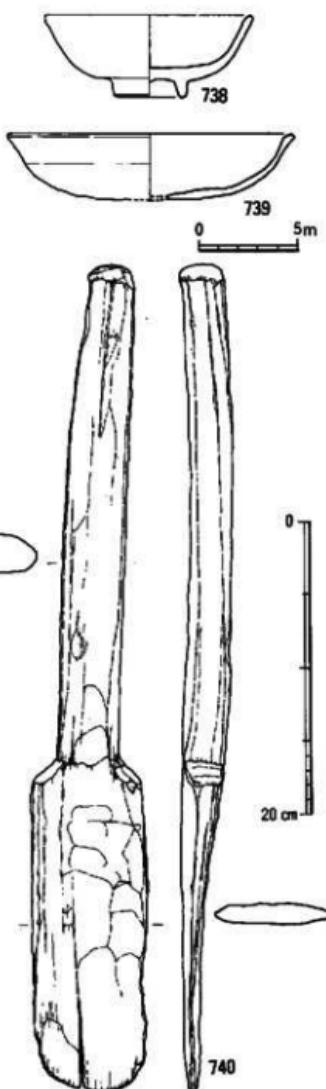


Fig. 116 第IV区表土・溝状遺構(S D71)、堆穴遺構(S X157)出土遺物実測図(1/4・1/3)

VII おわりに

以上調査の所見について述べてきたが、ここでは第Ⅰ区から第Ⅳ区までの調査の成果について概観し、遺物、遺構および屋敷地について、若干の問題点を提示して足掛け3年にわたった戸原麦尾遺跡の調査のまとめとしたい。

(1) 遺跡の概観

戸原麦尾遺跡は、多々良側左岸に形成された、3つの屋敷地跡、水田址、墓址などから構成される遺跡である。時期は中世前期、鎌倉時代を主要な構成時期とするもので、平安時代後期まで遡る堀、条里地割りに沿う溝状遺構等も検出されている(Fig.51)。

当該時期における本遺跡周辺は、宮崎宮が所領していた莊園であり、本遺跡の調査においては少なくとも、当時の莊園内における屋敷地の分布、屋敷地と水田との関係、また屋敷地内の具体的な構成などの一端を知ることができた。

約33000m²の調査区のうち北東部に位置する第Ⅰ区においては、方形に区画された屋敷地跡が確認された(正確には、コの字形)。屋敷地は一辺が半町規模で、2条の溝状遺構が並行して建物・井戸等の遺構の周囲をめぐらしている(付図1・2)。なお、2条の溝状遺構の間には基底部の最大幅が3m前後、最小幅が2mほどの土壙が存在した可能性が考えられた。遺物からみると上塗の形成時期は13世紀後半以降になってからと思われる。また屋敷地とはほぼ同時期あるいは前後する時期の墓址も、調査区東端部、中央部、屋敷地内などに認められ、湖州六花鏡とガラス小玉、また高麗鏡等を副葬する墓址が検出された(付図1, Fig.6)。

これらの南西部に位置する第Ⅱ区においても、第Ⅰ区の屋敷地と比べ、やや形成時期が新しいと思われる屋敷地が検出された。この地点では、日野尚志氏が復元された、多々川下流域に展開する柏屋条里区の坪並に合致して屋敷地が区画されており、日野氏の坪並の復元案に従うと、屋敷地は柏屋西郷北六闕八里11坪に位置していることになる(Fig.118-119)。屋敷地は遺構の先後関係、出土遺物の新旧関係からみて、その形成初期(13世紀半ば)は第Ⅰ区と同様に半町四方の規模であったものが、おおよそ13世紀後半ころに、東側を向する溝状遺構を埋め立て、東西1町、南北半町の規模の敷地に拡張したことが推定された。また拡張にあたっては、いわゆる半折型の水田区画に合わせていることが認められ、屋敷地に隣接する水田の形状と規模がある程度推定できた(p39~42, p76)。なお遺構面を覆う焼土層からの出土遺物からみて13世紀末から14世紀前半の時期にこの屋敷地は廃絶されるようである。廃絶される契機が興味あるところである。

第Ⅲ区調査区の西側においては、現在の広田集落に関連すると見られる近世の屋敷地がある。遺構の分布状況から見て屋敷地の一隅と思われる(Fig.91)。出土遺物から見て18世紀から

19世紀頃の時期が想定できるが、建物はすべて掘立柱建物であり、溝状遺構により敷地が小区画化されている。第IIIc区からは、条里地割りに沿う大溝が検出され、西端部の埋土中位から板絵が出土している。全国的にみても出土例は希少であり、また古代から近世の絵馬資料の欠を埋める好資料である。この資料については、付論2で詳しく論じているので参照されたい。第IV区では古代末の水田に伴うと思われる溝状遺構が検出されている。現存条里の方向とは一致せず、多々良川の氾濫によって形成された微地形に沿う水田の区画も、一時期存在したこと予想された。

以下では、主に第I区と第II区の出土遺物と遺構について見て行きたい。

(2) 出土遺物について

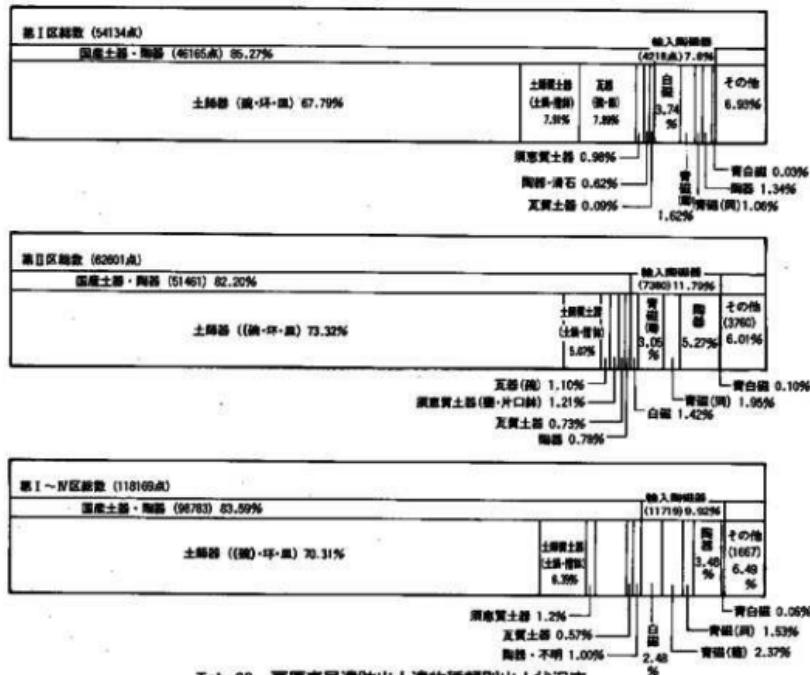
本遺跡から出土した遺物は、土師器（皿・壺・碗）、土師質土器（土鍋・擂鉢）須恵質土器（甕・片口鉢）、瓦器（碗・皿）、瓦質土器（釜・三足釜・鉢）、近世陶磁器（染付・備前播鉢）等の国産土器、陶磁器類を始めとして、白磁（碗・皿）、青磁（碗・皿）、青白磁（皿・合子）、陶器（壺・壺・四耳壺・水注・鉢）、天目碗等の中国産輸入陶磁器の類、また滑石製品（石鍋・転用品）、鉄製品（釘・刀子・紡錘車・鉄滓）、土製品（土錐・土人形）、銅錢、青銅製鏡（鳳凰文柄鏡・湖州六花鏡）、木製品（櫛・曲物）などである。これらは当時の生活資材のごく一部にしかすぎないであろうが、破片による総点数は118,169点を数える（以下点数表記の場合いすれも破片数）。遺物は第III区を除いて、ほとんどが中世前期、鎌倉時代に属するもので、太宰府編年を参考すると、ほぼ13世紀～14世紀初め頃を主要な時期とする。一部に11世紀まで遡るものや、15世紀頃までに含まれるものがあるが、数量はわずかである。

これらの遺物の器種構成を見ると、主体を占めるのは土師器、土師質土器などの供膳、調理形態のものである。破片数の占める割合からみた供膳調理形態の器種が、出土遺物総量に占める割合は83.59%である。これに対して輸入陶磁器は9.92%の量で、比較的高い割合を占めている。なるべく個対数の抽出に努めながら分類作業を行なったが、時間的な制約もあり数量の確認は難しかった。したがって破片数であるので、使用された器物の実態をどこまで反映しているかは、いくつかの前提条件が必要であろうが、中世前期の本遺跡における遺物の数量的な内容の大まかな傾向は窺えると考えられる。今後の課題としては、より細かな時期毎の組成比がどのように変化していくのかが問題となるが、現段階では編年作業が不十分なため明確にし得ない恨みがある。

第I区と第II区および遺跡全体の遺物の出土状況を見ると、第I区で多かった白磁・瓦器が第II区では少なくなっている。白磁は分類の上では、森田分類によるIII類（第I区596点、第II区32点）・V類（第I区399点、第II区222点）といった12世紀代に位置付けられるものが大幅に減り、より新しい時期のいわゆる口禿の白磁（皿）・青白磁がや日立つようになる。土師器の法

量や、その他の遺物の出土傾向からも同様にいえるが、時期的に古く遡り得る遺物の出土頻度は第I区の方が高い。おそらくこれは、戸敷地の成立が第II区よりもやや古いことによると考えられる。輸入陶磁器の中で比較的割合が高いのは、褐釉・黄釉の陶器で、しかも調理形態の擂鉢・鉢の類や甕がやや目立つことである(第I区726点・第II区3297点)。しかし、須恵質とした東播磨系の土器(捏鉢)の量は減ってはおらずむしろ増えており(第I区531点、第II区755点)、ほぼ同時期に本遺跡では国産品と輸入品で、器種を補完しながら調理具・貯蔵具を用いていたことが考えられる。またこのことは13世紀半ばから後半の内外の物質的な流通がかなり煩雑であったことが想像できよう。

青磁では圧倒的に龍泉窯系の碗(第I区881点、第II区1908点)と同安窯系の碗・皿(第I区574点、第II区1222点)が主体である。越州窯系青磁、高麗青磁などもあるが、わずか数点で少ない。龍泉窯系の中では、碗I類のうち、見込み内底に「金玉満堂」等の印文を施している例が、第II区で目立った。しかしいずれも出土品は、釉の発色の悪いわゆる下手物の類で、品質は良くないものが多い。



Tab.20 戸原麦尾遺跡出土遺物種類別出土状況表

これらの輸入陶磁器の占める割合は先述したように、9.92%を占めている。この割合について、数例の他の遺跡における出土傾向と比較してみる。

博多遺跡群冷泉7-1地点（福岡市博多区冷泉7-1、博多遺跡群第4次）では土師器（碗・皿）の69.5%に対して輸入陶磁器は23.9%を占める。同じく冷泉474-9地点（博多区冷泉474-9 博多遺跡群第10次）では、土師器などの国産品の61.3%に対して38.7%という高い比率を占めている。これらの数値は、貿易港という遺跡の性格からくるものであることを示している。戸原交尾遺跡とほぼ同時期の、南区柏原遺跡K区で確認された、入来文書に記載ある屋敷地に考えられている居館跡からの出土遺物の構成は、土師器、土師質土器が99.2%、輸入陶磁器が0.62%、陶器が0.18%である。陶磁器の類は個体数抽出によって、破片数が必然的に減っているので全体に占める割合はかなり低いものになっている。固体識別が可能だったものは、土師質土器が壺15、鉢4、火鉢1の20点、陶器が擂鉢25、黄釉盤2、鉢1で、龍泉窯系青磁58、同安窯系青磁3、越州窯系青磁1、白磁46が数えられている。

南区五十川高木遺跡は、中世集落遺跡と考えられているが、全出土遺物の約38%というかなり高い比率で輸入陶磁器が出土している。

数値の扱い方が均一でないために、ある一定の傾向を看取るのは難しいが、最後に示した福岡市域内における中世の遺跡からの輸入陶磁器の出土状況は、一般的にいって、高い比率を示している。これは、北部九州、特に博多湾周辺においては、地理的な有利性によって、輸入陶磁器の需要層の底辺が広かったものと考えられる。このことは西日本のその他の遺跡について見れば明らかである。例えば時期はやや新しくなるが、鎌倉～江戸時代にかかる広島県草戸千軒町遺跡では、土師器（碗・皿）が45%、国産陶器が23%に対して、輸入陶磁器は全体の1%ほどである。また広島県尾道遺跡群では、土師器（碗・皿）が86.4%、国産陶磁器が10%に対して、輸入陶磁器が5.7%を示している。また大阪府高槻市内の平均的な輸入陶磁器の占める割合は1.3%ほどでそれぞれ低い傾向を示している。

残された問題としては、需要層の底辺がどういった社会的階層なのかということであるが、北部九州の場合、一つの見通しとしていえば、この時期に、各莊園を基盤に成長し御家人化していた在地名主層や自立農民層まで、及んでいた可能性があることを指摘しておきたい。

- ・高槻市教育委員会「上牧遺跡調査報告書」 1980
- ・松下正司「草戸千軒出土の日本陶磁」草戸千軒42 1976
- ・福岡市教育委員会 博多1 福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集 1981
- ・福岡市教育委員会五十川高木遺跡福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集 1975
- ・福岡市教育委員会 柏原遺跡群III 福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集 1987

次に国産の土器類のうち土師器についてみてゆく。

遺構毎に出土した皿、壺について法量の計測を行い、皿と壺の法量変化を遺構単位の平均値の変化をとおして見てみた。その結果では、まず全体の出土傾向でみると、第I区では、土師

器皿の場合、口径平均値が8.5~8.8cm、器高が1.2~1.3cmの皿を出土する遺構が最も多く、次に9.4cm、器高が1.0~1.2cmのものが次に多い。次に口径9.2cmで、器高1.0cmのもの、次に8.0~8.3cmで、1.1~1.2cmのもの、次に9.6cm、1.1~1.2cmのものとなり、全体の平均値では口径が9.1cm、器高が1.14cmである(個体数257個)。壺の場合では、口径平均値が13.6~15cm、器高が2.6~2.8cmのものが最も多い。口径が11cm~12cm弱の小型のものも見られる。全体の平均値では口径が14.16cm、器高が2.64cmである(個体数107個)。次に第II区では、皿の場合、全体の口径平均値は9.03cm、器高が1.2cmで(個体数293個)、口径が8.8cm~9.0cmのものを出土する遺構が最も多い。土師器壺では口径平均値は14.1cm、器高が2.6cmで(個体数124個)、口径が13.6cmのものが最も多く、次に14.0cmのものを出土する遺構が多い。土師器の法量数値から見た場合、第I区と第II区とは、全体的にはほとんど変わらない時期のものという結果が出ている。次に遺構の切り合い関係から見た法量の変化を見ると、第I区の報告時に区分したように、皿の場合は時期が新しくなるにつれて、口径法量が減少する傾向が認められ、便宜的に1~9期に区分した(Tab.22)。壺の場合は時期の違うものの混入例が多いために明確でないが、16~17cm大のものは皿の3~5期にかけて特に顕著に見られる。12~13cm大のものは6期以降に見られるようになり、11~12cmの小型のものは9期以降に見られるようである。年代観は大宰府における編年を参考にすると、1期が11世紀半ば頃、4期が12世紀末~13世紀初め、5~8期が13世紀半ば~後半頃と考えている。これを参考にすると第I区は4~9期にかけて、また第II区は5~8期にかかる遺構群(尾敷地)といえる。なおTab.22では該当する時期に遺構を置いてみたが、遺構間の切り合い関係等で、遺構が包含していた皿の口径よりも大きな口径値のところに位置付けしたものもある。

その他の国產土器の中では、須恵質土器とした東播磨系捏鉢・壺が注意される。

本遺跡出土の捏鉢・捏鉢は大きく分けて国産品と、輸入品とに分けられるが、東播系須恵器捏鉢および壺はTab.20に示した比率を占める。破片数にすると、第I区で531点、第II区で755点、第III区で21点、計1307点出土している。

これらの捏鉢の、形態的な諸特徴は以下のようになる。

焼成は堅緻で、硬質である。焼成上の個体間の差はあまりない。強いて分けると、硬質のものと、やや焼き縮まりのあいまい小孔が若干見られるものがある。胎土は精良で白色と黒色の細砂を含んでいる。黒色又は黒褐色の細かな粒子が目立つものと余り目立たないものとに分かれる。色調は明るい灰色が一般的であるが、灰白色~薄く青みがかった明灰白色のものなどがある。口縁部は暗灰色~黒灰色で、残りの良好なものは口縁部の外面に部分的に瓦器特有の銀灰色を呈するものがある。一般的に銀灰色の部分が残っているものは、焼成堅緻で、全体的に良品である。成形はすべて輻輪回転による。底部に残された切り離痕は回転糸切りのものがほとんどである。口縁部・体部・底部、および上記の焼成・胎土・色調・成形上の特徴的な要素

から大きく3種類のタイプに分けられる。

I、断面形が稜の鋭い三角形のもので全体に造りが比較的に丁寧な、良品のもの。焼成は堅致で、薄く青みがかった灰白色～灰色。口径は28～30cmほどか。

II、断面がI類と同様玉縁状に近いものであるが、全体に丸みがあり、焼成はややあまいが、締まりは良好である。明灰色を呈す。数量はこの類が最も多い。

III、口縁部断面は袋状となり、やや粗成のもの。器形はやや小型化しており、焼成はあまりやや脆い。回転糸切り痕を底部にはそのまま残す。

本遺跡での出土状況は、I類とした捏鉢が、先に述べた4～5期に、II類が5～7期に、III類が8期に含まれる遺構から出土している。これらの出土時期について、生産地における編年と対比すると、I類は12世紀末～13世紀初め、II類は13世紀後半頃に、III類は14世紀前半に考えられており、生産地と消費地との流通関係が、ほぼ同時期のものであることがわかる。また東播磨系捏鉢の、中世前期の全国的な流通の傾向については、13世紀半ばから後半に一つの画期期があることが指摘されているが、本遺跡での時期的な変化が、全国的な動向と軌を一にしていることを指摘しておく。また本遺跡では、常滑窯系陶器や畿内系の瓦質土器等は、東播磨系のものよりもやや遅れて（約四半世紀ほどか）出現するようである。

（森田他「東播磨系中世須恵器生産の成立と展開」神戸市立博物館研究紀要第3号1986）。

（3）遺構について

第1区から第III区まで130棟の掘立柱建物が認められた。これらの内訳は1×2間が2棟、1×3間が4棟、1×4間が1棟、1×5間1棟、2×2間が1棟、2×3間が96棟、2×4間が13棟、2×5間が1棟、3×3間が7棟で、3×4間が1棟、4×5間が1棟、圧倒的に2×3間が多い。これらのうち庇のあるものは13棟で、その内訳は片面庇のものが6棟、両面庇のものが7棟である。

確認された数から見て、2×3間の間取りの建物が当時の家屋の基本形となっていたと見ることができる。この間取りには、いくつかの変形があり、当時の家屋の構造を知る手掛かりになるものと思われる。本遺跡で確認された2×3間の建物は大きく6つの類型化が可能である。1類は典型的な2×3間のもので、側柱が9本で構成されており、柱が整然と並んでいるもの（Fig.117の1・2）。2類は妻もしくは側面に庇が付くもの（6）。3類は四面に庇が付くもの（3）である。この3類は第II区にしか存在しない。4類は、どちらかの側柱が3間の間取りでなく、2間のものや、柱の無いもの、あるいは補助的な柱をもつもの（4）などがある。5類は側柱の中央2本の柱が、中央によるもの、またまれに隅柱間に寄るものもある（5）。6類は2×3間ではあるが柱間隔が長く伸びるもの（7）もある。これらの1～6類は、間仕切り用と思われる補助柱をもつものと持たないものなどがある。補助柱は棟筋に並ぶものや、いずれかの壁へ寄るものな

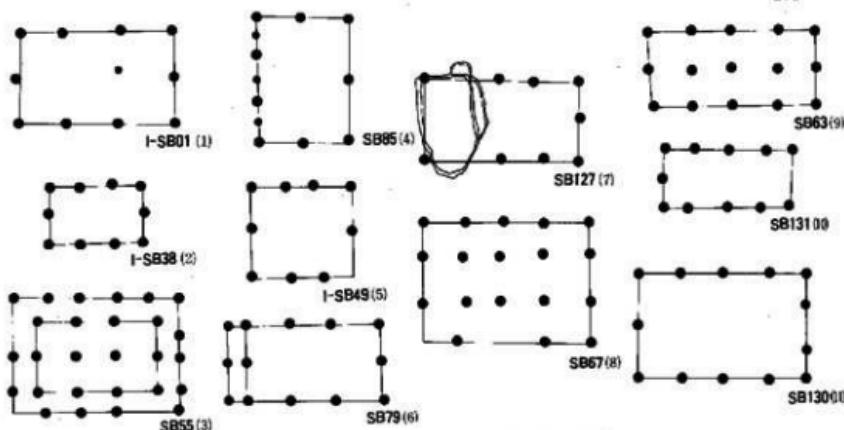


Fig.117 戸原変局遺跡掘立柱建物平面図

どがある。3類は四面に庇を持つとしたが、古代の渡殿造り的な庇ではなく、軒をさらに延長した、いわゆる下屋的な構造のものとも思われる。3類は規模も大きく、第II区では母屋的な大きさ、配列をとる。

2×4 間のものは数が少ないために類型化は難しいが、基本的には 2×3 間の分類に近いと思われる。概して規模は大きい。ただし四面に庇が付くものは第I区～III区を通して認められなかった。ただし側柱に庇を付けたと考えられるものがある(8)。

以上の建物の機能と用途については、1類と3類、8～11類は、その規格性と規模から住居用の家屋と考えられ、特に3類は母屋的な建物とすることが出来る。これに対して、小規模な2類などは納屋、倉庫等が想定できる。4・5類は住居としての用途も含んで、比較的多様な用途の建物と思われる。竪穴造構と重複する例の多い7類は作業用の建物とも思われる。

(4) 屋敷地と条里地割りについて

Tab.21に第I区から第III区までの掘立柱建物の棟方向のグラフを示した。これを見ると形成時期の新しい第II・III区の建物は、条里地割りの方向性によく合致していることがわかる。第I区は、かなり方向性にバラツキがあり、多分に立地条件に制約されたものとなっている。これはおそらく屋敷地形成の契機と動機がそれぞれ異なっている可能性がある。すなわち第I区の屋敷地は、条里地割りが整備される初期もしくはそれ以前の立地の上での選択がなされたもので、これに対して第II区の屋敷地はかなり計画性のある建物の配置がなされており、条里地割りがある程度整備された段階の占地であると考えられるのである(P76)。

条里の施行がどのような展開をしていったのか興味あるところであるが、多々良川下流域に

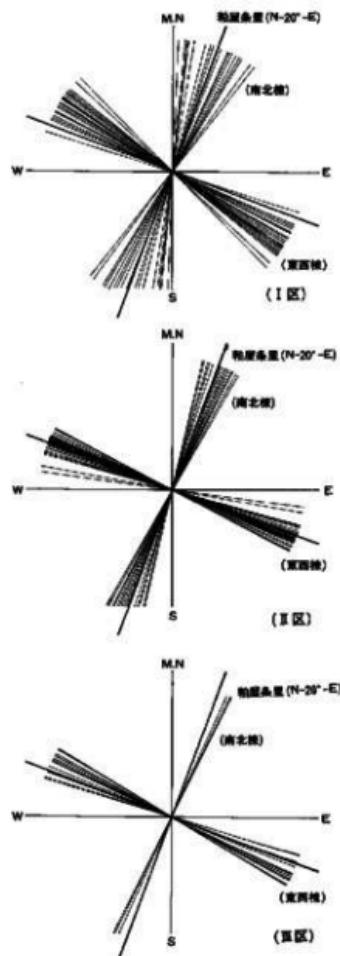
おいては、おそらく多く良込田遺跡周辺でまず条里が整備され、その後の荘園の発達に伴いその周辺（古代官衙域）に展開していったと考えられる。戸原麦尾遺跡の旧河川や造構の在り方、また遺物の出土状況等の所見では、条里施行は、平安時代後期以降のやや新しい時期までおりるのでないかと考えられるからである。

ここで、Tab. 22をもとに、本遺跡の成立と展開について、第I・II区における屋敷地の建物やその他の造構の構成も含めて見てゆきたい（付図1・2）。

本遺跡の形成過程の分期はおおまかに、1、平安時代後期～末、2、鎌倉時代、3、鎌倉末から室町時代初め、4、江戸時代後期の4期に分けられる。

第1期は、本遺跡において造構が見られ始める時期である。多く良川の氾濫により形成された湿地や支流が、おそらく点々と存在している景観の下で、一定しない河道の治水のためや灌漑用として第I区SA01・02にみるように井堰が作られ水路の整備をはじめとする水田の経営が行われた時期である。第I区SK10などの墓跡以外にはこの時期の集落に関わる造構は未確認である。本遺跡の西側に約700m離れた、多く良込田遺跡は造構および出土物から官衙的な性格の強い遺跡で、11世紀頃まで當まれた遺跡であるが、この遺跡の廃絶される時期と本遺跡の形成時期が近接していることは注意される。多く良込田遺跡では、奈良時代までに通り、復元条里に一致する大溝が確認されている。おそらく、多く良込田遺跡周辺に施行された条里を基準とした水田圃場の整備が、その後の荘園の新たな展開に応じて進められたことが考えられる。第III区のSD61はそのことを物語っていると思われる。

なお絵馬の出土や、胡州六花鏡を副葬した木棺墓（SK10）の存在は、当該地に入植した最初の人々の証左と考えられる。特に絵馬は本遺跡の立地条件上、多く良川の氾濫を被りやすいということを考慮すると、水田経営にあたって、早魃のみならず大雨・洪水に対する忌避や、豊作祈願などの祈りが込められたものと



Tab. 21 振立柱建物棟方位グラフ

見ることもできよう。

第2期は、木遺跡へのはじめての入植から約1世紀を経て、周辺の地盤が安定した時期にあたり、屋敷地が形成される時期である。調査区内では、多々良川にもっとも近い第Ib区に半町四方の規模で、軸が約2~2.5m程の溝で周囲を囲った屋敷地がまず見られる(付図2)。2×4、2×5間規模の母屋を中心とし、北側ないし、東南側に2×3間の小さな倉庫、また曲げ物を井戸とする井戸がこれらの建物の近辺に位置し、さらに屋敷地の北辺には半地下式の建物が位置している。これらの建物および遺構が一組となり屋敷地を構成している。

第Ib区の屋敷地の成立とはやや遅れて、第Ia区の東側と、第II区の西側(第IIa~b区)に屋敷地が形成される。第Ia区では溝の有無は確認できていない。第IIa~b区の屋敷地では当初、第Ib区の屋敷地の規模とはほぼ等しい半町四方規模であったものが、東辺の溝の形状の変化(直線から近世の城館に見られる「樹形」に似た平面形をなすコの字形)を経て、さらに東へ半町拡張され、面積の上では約2倍の屋敷地となる。おそらくこれとは同時に第Ib区の屋敷地では土塁(土塁の内外には幅が1~2mの溝が付属する)が設けられる。曆年ではおよそ13世紀後半以降と推定される。

この時期に、調査区内において、土塁を持つ屋敷地と、溝で囲った屋敷地、の2つの異なるタイプの屋敷地が至近距離に並存していることが想定でき、土塁の有無は、それぞれの屋敷地の居住者の社会的な身分差を表現しているものとも考えられる。

昭和45年に調査された多々良遺跡でもほぼ同時期の屋敷地が確認されている事も考えると、この時期に、多々良川下流域において半町四方の規模の大きさの屋敷地が点在していたことが考えられる。しかもこれらの屋敷地は条里地割り上に分布しており(Fig. 11B)、当該地周辺の営田と灌漑水利等の整備が、これらの条里地割り上に点在する集落・居館を中心に網目状に進められたことは十分考えられるところであり、第I・II区の屋敷地および多々良遺跡が相互に密接な関係をもって莊園經營の実際を担っていた事が想定できる。

第2区の屋敷地の構成は、先に述べたように半町規模から、東西に1町、南北に半町規模に拡張されている。半町四方の段階では2×3間規模の母屋と考えられる建物が東北隅(SB69~75周辺)、西側(SB89~95)、そして西北隅(SB99~100)にみられ、これらの建物に隣接してSX01-52などの竪穴遺構が見られる。また近接して曲げ物を井戸とする井戸がみられる(SX23, SE32-17)。屋敷地の東~南側には水田ないし畠地が展開していた。東西1町の段階では、SB55の位置と、SB124周辺にも母屋と考えられる建物が展開しており、4面庇の建物が見られるようになる。遺構の構成は従前通りで、掘立柱建物と竪穴遺構(7類)、井戸が基本的な構成要素である。なお屋敷地東側の境は柵があった可能性があるが、この時期の柵についての確認できていない。

第3期は、第2期まで営まれた屋敷地としての利用が放棄される時期である。当該地周辺は

水田または畠地として土地利用がなされるものと考えられる。この時期の水田は第II区の南東側、第I区でその一部が確認されたが、明確な平面形を確認するまでにはいたっていない。ちょうど中世後期に相当するこの時期には、芦崎官領粕屋西郷の中に含まれ、12町を数える戸原村の田敷には屋敷地が4ヶ所あったことや、また水田圃場も零細で、おむね生産力が低かったことが佐伯弘次氏により付論1において指摘されている。遺跡周辺の字名に「古屋敷」等が散見できるが、屋敷地が他の地点に移ったことも考えられ、当該時期の考古学的な所見は、周辺の今後の調査に期待されるところが大きい。なお屋敷地が廃棄される契機は、建武3年(1336年)の多良羽の合戦の影響が大きいと考えている。

第4期は第III区で確認された屋敷地である。江戸時代後期の村落と考えられ、現在の広田集落と歴史的に直接つながるものである。建物はいまだに掘立柱建物で、鎌倉期の建物と構造規模ともにほとんど変わらないものの、井戸がかなり大きくなっている。また廻と思われる造構も存在するなど、生活様式の変化が造構の上からも読み取ることができる。

以上本遺跡について述べてきたが、当該期の他の遺跡と比較検討し本遺跡の特性を抽出するまでにはいたらなかった。しかし非常にわずかではあるが文献記録が残っている莊園の一隅を調査し得たことは、博多湾沿岸における当該期の莊園経営の実態を考察する上で非常に貴重な資料を得たと言つてよい。最後に福岡市域における古代末から中世の集落関係の主要な報告書の一覧を添え結びとする。

市域内中世関係調査報告書一覧 (福岡市埋蔵文化財調査報告書は福市埋調報と略した)

福岡市教育委員会 同上	多々良羽町葉葉美報告書 多手田遺跡 五十川高木通跡A・B地点 多々良浜川遺跡 山陽新幹線関係遺跡文化財調査報告書	福市埋調報 第20号 福市埋調報 第27号 福市埋調報 第32号 福市埋調報 第32号	1972 1972 1972 1972
同上	福岡直轄 九州編 貨幣半圓開拓場遺跡文化財調査報告書	福市埋調報 第33号	1975
同上	板付堀辺遺跡調査報告書(6) 桐原G(福市堀辺跡)	福市埋調報 第57号	1981
同上	板付堀辺遺跡調査報告書(7) 一宮同I・J・K	福市埋調報 第65号	1981
同上	三氣遺跡・大原丸高石遺跡	福市埋調報 第69号	1981
同上	田村遺跡I	福市埋調報 第89号	1982
同上	田村遺跡II	福市埋調報 第104号	1984
同上	美野下古墳遺跡	福市埋調報 第107号	1984
同上	福岡通跡 第14・17・18高木便行	福市埋調報 第118号	1985
同上	博多田 第17・20・22北調查の概要	福市埋調報 第120号	1985
同上	博多Y (東25大綱生)	福市埋調報 第123号	1986
同上	那珂久平遺跡 I	福市埋調報 第138号	1986
同上	那珂久平遺跡 II 第8・10・11次発掘調査報告書	福市埋調報 第138号	1986
同上	有田・小田原 第7~10墓	福市埋調報 第139号	1986
同上	博多Y 円多遺跡群第26次調査の概要	福市埋調報 第145号	1986
同上	井田C遺跡 I	福市埋調報 第152号	1987
同上	船尾遺跡跡 III (長穴)	福市埋調報 第157号	1987
福岡県教育委員会 瑞穂道跡	福岡市東区瑞穂1丁目所在遺跡の調査	福岡県文化財調査報告書 第79号	1987
同上	那珂久平遺跡II	福市埋調報 第163号	1987
同上	下山門乙古田遺跡	福市埋調報 第170号	1987
同上	長崎遺跡	福市埋調報 第185号	1988
同上	田村遺跡V	福市埋調報 第192号	1988
同上	春鹿跡	福市埋調報 第197号	1989
同上	原六次 西部地区II	福市埋調報 第213号	1989



Fig. 118 多々良川下流域の条里の復元 (1/40000)

○○○○○は道路(西海道) ●●●は郡境

日野尚志「筑前国那珂・鹿田・船屋・御笠四郡における条里について」

(『佐賀大学教育学部研究論文集24(I)』1976)に一部加筆



Fig. 119 遺跡周辺の字名と条里の推定復元 (1/8000)(赤アミ線は条里)

時 間 区 分	測量の概要	第Ⅰ区			第Ⅱ区			第Ⅲ区		
		SR01	SR02	SR3723	SE01	SE02	SE03, 15	SE09-(04)	SE10-11	SE12, 13, 14, 17, 07
1 (10.1)	初期計測	SX62 SX23, 31, 40, 55, 67 SX58 SX23, 37, 52, 53 SX23, 03	SX06, 18 SX56 SX78, 81 SX126	SX95 SX54						
2 (9.5)					SE03, 15	SE12, 13, 14, 17, 07	SE19	SE10-11	SE21	(SE26)
3 (9.4)					SD04, 23-SD23	SD04, 23-SD22	SD11-SD16 SD15			SD39, 59m
4 (9.2)					SB51-SB100 SB80	SB127-SB134 SB123-126 SB55				
5 (9.0)		SX83 SX29 SX26 SX09, 39-38 SX08 SX34 SK31 SK01 SE11 SE10 SE09	SX26 SX09, 39-38 SX21, 22, 24, 26, 27 SK20 SK20, SK01, 12, 14, 31 SK03, 06, 10, 11, 14, 69-75 SK36 SK32, 34 SK24, 30 SK11-16 SK02, 25, 26 SK08, 36, 39 SE08	SX67 SK20 SK01, 12, 14, 31 SK03, 06, 10, 11, 14, 69-75 SK36 SK62-61-SE21-SK64-SK63 SK11-16 SK02, 25, 26 SE08						
6 (8.8)		SE01 SE17 SE06 SE07	SE05, 06 SE04 SX2403 SX3137	SD05, 06 SD02, 23, 26 SD40 SD38 SD07, 08, 11, 66						
7 (8.5)			SB01-31, 37, 39					SB33-36		
8 (8.2)										
9 (7.8-8.0)										
10										

Tab.22 検出連絡時期区分表

() 内の数字は、土壤湿度の目標平均値

中世の糟屋郡と筥崎宮領

佐伯 弘次

はじめに

律令制下の郡郷名を記す「和名抄」は、筑前国糟屋郡の郷名として、香椎・志珂・厨戸・大村・池田・阿曇・柞原・勢門・敷梨の九郷をのせてある。寛弘二年（一〇〇五）十一月十五日筑前国符案（内閣文庫所蔵文書／『平安遺文』四四二号）には、文書の宛所に「糟屋西郷司」が見える。したがって、11世紀初頭には、糟屋郡には東郷・西郷の二つの郷が所領の単位として成立していた。^①

糟屋西郷には、「中原」「戸原村」のほか、「打橋村」「阿恵」「日守」「多々良村」「牛町」「平松」「寺門」「駒形」「ハスワ」「高田」「小松田」などの地名があり（石清水文書／『筥崎宮史料』四六五・四八七号、以下「筥」と略す）、現在の糟屋郡の西部一帯に分布している。これに対して糟屋東郷は、「南里」「和田」「津波黒」「田中」などの地名があり（石清水文書／『筥』四六六号）、糟屋郡の東南部に分布している。

「和名抄」の郷郷は、十一世紀の四十年代に大きな改編がなされ、中世的所領が形成されることが指摘されている。^②中世の糟屋郡関係史料には、「香椎郷」「敷梨郷」「勢戸村」など、「和名抄」郷に由来する名称をもつ地名もあるが、「多々良郷」「蒲田別符」「青柳郷」「八田郷」「三吉郷」など、「和名抄」には見られない郷名も見られる。いわゆる中世的郷郷である。こうした新しい中世的郷郷がいつごろから成立したのかは明らかにしえないが、他地域と同様、平安後期以降に形成されていったと考えられる。

一、糟屋郡内の莊園

糟屋郡内の莊園について、その主なものを「角川地名大辞典」40福岡県などによりながら概観しよう。

① 猪野莊（久山町猪野）

安樂寺（太宰府天満宮）領。觀応三年（一三五二）が史料上の初見。足利尊氏が安樂寺に寄進した。

② 植木莊（須恵町植木）

宇美宮領。本家は石清水八幡宮。建久三年（一一九二）が初見。宇美宮六か莊の一つ。鎌倉後

期の正和二年（一一一三）には、沙汰人・名主らが年貢抑留を行なった。

③ 宇美荘（宇美町宇美）

宇美宮領。本家は石清水八幡宮。治承二年（一一七八）が初見。石清水八幡宮の祠官によって伝領された。

④ 小中荘（篠栗町尾仲）

安楽寺領。成立は早く、延喜十九年（九一九）の寄進という。鎌倉時代には地頭職が設置された。天文九年（一五四〇）、大内氏被官の河津氏が代官職をもつ。

⑤ 香椎荘（福岡市東区香椎）

大宰大弐平頼盛が領家職を持つ。蓮華王院に寄進。平家没官領となった後、源賴朝より平頼盛に返却される。のち大宰府領になる。建久八年（一一九七）、香椎宮は石清水八幡宮の支配下に入った。

⑥ 酒殿荘（粕屋町酒殿）

安楽寺領。長寛二年（一一六四）、安楽寺の開発によって成立。南北朝期以降は、「酒殿村」と表現される。

⑦ 多々良荘（福岡市東区多々良）

安楽寺領。至徳元年（一三八四）が初見。このほか、菅崎宮領糟屋西郷に「多々良村」があり、香椎社領に「多々良郷」がある。多々良は多々良川の河口部に位置するが、有力寺社領が錯綜していたと考えられる。

⑧ 田富荘（志免町田富）

宇美宮領。本家は石清水八幡宮。治承二年（一一七八）が初見。宇美宮領を相伝した石清水八幡宮の祠官によって伝領。

⑨ 福満荘（宗像郡福間町福間）

福万荘とも書く。中世においては糟屋郡に属した。京都の公家勘解由小路在宗家領があった。ここは、在地領主河津氏の根拠地であり、文明十一年（一四七九）、河津弘業は福万在内在宗家領の代官職に任命されている。

⑩ 吉原荘（志免町吉原）

宇美宮領。建久三年（一一九二）が初見。本家は石清水八幡宮。同宮の祠官によって伝領された。

以上、十の莊園について概観した。宇美宮領と安楽寺領が多いことが特色である。平安末から鎌倉初期以降に見える莊園が多く、特に酒殿荘は安樂寺が自力で開発した唯一の莊園であるという。地方寺社領であっても、莊園制的な関係によって、宇美宮領は石清水八幡宮が、安楽寺領は菅原氏が、香椎社領は平氏や石清水八幡宮が支配をしていた。

二、糟屋郡内の宮崎宮領

柏屋郡内には、香椎社・宮崎宮・宇美宮などの有力な神社があった。その中で郡内に多くの社領を有したのは宮崎宮であった。本節では、糟屋郡内の宮崎宮領について概観したい。

十五世紀中後期の宮崎宮領を示すのが、文明十年（一四七八）十月の「宮崎宮神事用途注文」（石清水文書／『宮』四八七号）である。これには、宮崎宮で古来から行なわれてきた神事とその用途を書き上げているが、当時の状況を反映して、「不納」と注記された用途も多い。この文書は、文明十年十月という年代からみて、神領回復を意図した宮崎宮側が、当時博多に下向中であった守護大内政弘に対して提出したものと考えられる。この注文から、柏屋郡関係の社領を一覧表にしてみよう（表1）。

この表を見ると、「不納」「半分納」がかなり多いことがわかる。特に、郡内でも比較的遠隔地になる久原は全て「不納」であり、当時宮崎宮領としての実質を失っていた。宮崎宮領が危機におちいりつつあったことを示している。しかし、穂波郡や嘉麻郡の遠隔地社領と比べると、収納率は高いといってよい。糟屋郡内の社領は、那珂郡内の社領とともに、宮崎宮にとっては膝下社領であったからであろう。この表から、郡内の宮崎宮領を抽出すると、①柏屋西郷、②柏屋東郷、③久原郷、④青柳郷、⑤乙犬、⑥蒲田別府の六か所が検出される。以下、個別の社領ごとに、その動向を概観しよう。

① 柏屋西郷

文治三年（一一八七）八月三日、源頼朝は、平家のために祈禱をしていた宮崎宮司秦親重を宥し、那珂西郷・柏屋西郷などの所領を与えた（『吾妻鏡』）。これに関連して、文治三年八月の日付を持つ「宮崎宮領坪付帳」（田村文書／『宮』八七号）がある。宮崎宮領の柏屋西郷・那珂西郷の坪付である。この史料の年号の部分は、本文の筆蹟とは異なり、明らかに追筆である。他の宮崎宮領の坪付は室町末期から戦国期のものしか伝来しない。したがって、この史料は、文治三年のものではなく、中世後期に成立し、のちに年代の追筆がなされたと考えたい。

前述のように、柏屋西郷には、「中原」「戸原村」「打橋村」「阿恵」「日守」「多々良村」「牛町」「平松」「寺門」「駒形」「ハスワ」「高田」「小松田」などの地名を含んでいる。宮崎宮に近い福岡市東区多々良から柏屋町打橋・戸原・中原にかけての一帯に位置する。

宮崎宮領柏屋西郷は、戦国期の惣田数が百八十町であった（石清水文書／『宮』四六五号）。その中には、座主田三十町、加灯三十町、打橋村三十町、阿恵・日守八町四反、下中原二十三町四反、宮崎御縫地二十三町六反、多々良村四町六反などを含んでいる。戦国期には武家被官による代官諸負がなされていた。戸原変尾遺跡は、おそらく柏屋西郷戸原村の中に位置すると考えられる。

神事	社領	用途	注記
二月十五日六日	糟屋郡西郷牛町役	7斗	加座主田
〃	糟屋西郷牛町四反役	5斗	年不・加座主田
三月三日	糟屋東郷	3石	預所役
四月八日	糟屋西郷半松一町役		近年未納・押領
七月十五日	駒形五反(糟屋西郷)		渡座主田内京進役
〃	ハス7四反(〃)		〃
八月十五日放生会	久原郷役	3石	不納
〃	青柳郷社家	3石	半分納
〃	地頭分	3石	半分納
九月九日	青柳郷社家	3石	9斗不納閑怠
十月一日	糟屋西郷高田一町役	2石5斗	
〃	〃 アウリヤウシ役	1斗	納
〃	〃 七庄司役	2斗5升	納
〃	〃 小松田五反役	1斗5升	納
十月十五日	青柳郷役社家分	1石7斗	
霜月御神業	青柳郷社家分	1石5斗	
〃	同郷地頭分	1石5斗	近年半分納
十二月十四日	糟屋乙犬役	2斗	納
〃	同郷坂本役端庵寺	3斗	納
〃	同	2斗	不納
〃	同新高一町役	5斗	納
〃	同ムキ田一町	5斗	神光寺不知地
〃	同ムマワタリ町二反役	5斗	不納
十二月十五日	糟屋四月田	1石5斗	加座主田京進役
潤月	青柳郷役	2斗5升	
〃	蒲田別符役	2斗5升	
〃	久原菊王丸役	1斗	不納
〃	久原益永役	1斗	不納
〃	糟屋東郷役	2斗5升	
〃	同 西郷役	1斗	

表(1) 糟屋郡の菖崎宮領(「菖崎宮神事用途注文」より)

② 構屋東郷

構屋東郷がいつ宮崎宮領となったのかはわからない。嘉徳三年（一二三七）五月の宗清处分状（石清水文書／『管』三三二号）によると、「柏屋東郷宮崎宮領
田中百三十町七反を含んでいた」が宗清の女少将局に譲られている。鎌倉前期にはすでに宮崎宮領となっており、本家職は石清水八幡宮の祠官によって伝領されていた。この社領も戦国期の惣用数は百八十町であり、南里四十町、和田・津波黒・田中百三十町七反を含んでいた（石清水文書／『管』四六六号）。戦国期には、構屋西郷同様、武家被官による代官請負がなされていた。

③ 久原郷（久山町久原）

寛元五年（一二四七）の法橋榮舟譲状によれば、久原内半多田一町は宮崎宮講経免田であった。久原郷には、益永各・菊王丸名などの名が存在した。前述のように、文明十年の段階では、宮崎宮領としては有名無実化していた。

④ 青柳郷（古賀町青柳）

戦国期の田数は、五十町で、納分は十五貫文であった（石清水文書／『管』四六六号）。嘉徳三年の宗清处分状には、「青柳郷宮崎宮領
田中百三十町七反を含んでいた」とあって、宗清の女房に譲られている。応永三十一（一四二四）八月二十二日、良清は、青柳郷下地を一円に、分錢二百貫文で田中融清に沽却した（石清水文書／『管』四〇八号）。

⑤ 乙犬（篠栗町乙犬）

岩門合戦で武藤景資に味方した宮崎宮執行成直は、乙犬丸を没収され、弘安九年（一二八六）閏十二月二十八日、同地は神田糺らの御家人に給与された。その後、宮崎宮領として復活したと見られる。戦国期の田数は二十町（石清水文書／『管』四六六号）。室町期には石清水八幡宮田中坊の直務支配となる。戦国期には、同じ宮崎宮領の和田（篠栗町和田）・大隈（柏屋町大隈）とともに、大内氏の筑前守護代杉氏が代官職を得ている。

⑥ 蒲田別府（福岡市東区蒲田）

戦国期の田数は十三町。乙犬名同様、若門合戦後に没収され、御家人に蒲田別府倉永名が与えられた。正平二十一年（一三六六）には預所として宗久為元がいた。

以上の社領のほか、薬王寺村（古賀町薬王寺）（田村文書／『管』七十五号）、長者原（柏屋町長者原）（田村文書／『管』一二四号）、大隈村などが宮崎宮領として検出される。以上のように、宮崎宮領は構屋郡全体に分布していた。

三、宮崎宮領戸原村

次に、本遺跡がある戸原（村）について述べよう。戸原は、宮崎宮領構屋西郷の中に含まれる。田数は十三町六反。明応三年（一四九四）の坪付によると、戸原村の田数は十二町あり、う

ち年不が一町五反あり、屋敷が四か所あった（田村文書／『管』一二三号）。田の12.5%が年不となっており、この当時、耕地が不安定であったことを示している。先に、中世後期のものとした「管崎宮領坪付帳」には、戸原十三町六反の坪付が一筆ごとに書き上げられている。それを一覧表にしてみよう（表2）。

この戸原坪付は合計三十五筆ある。一反に満たないものから、一町規模のものまで多岐にわたるが、概して零細な耕地片が多い。平均すると一筆四反弱となる。斗代は、最も低いものが一斗三升代で、最も高いものが三斗六升代である。二斗代台が大半を占め、平均の斗代は二斗三升弱である。中世の戸原の生産力はさほど高くないと考えられる。ただし、屋敷地に三斗台の斗代が多く見られるため、屋敷の周辺に門田などの比較的生産力の高い耕地が付属していたと考えられる。不作となっているのは四か所のみであり、明応三年の年不一町五反と比べると非常に少ない。この坪付が作成された当時は耕地が安定していたのだろうか。

明応八年（一四九九）十二月二日の「戸原田地坪付」（田村文書／『管』八七号）にも一筆ごとの耕地の書き上げがあり、作人の名前が記されている。ただしこの史料は錯簡があり、完全なものではない。この坪付には、「宗兵部方被申時付之分」と記されている。こ

場所	田数	不	斗代
はすいの屋敷	3反半	半不	3斗5升
同 屋敷	1反		3斗5升
はたけ中	大		3斗5升
上屋敷	6反		3斗6升
えかう	1町		2斗
みくりまち	6反		2斗3升
まかり	3反		2斗3升
上つかさ	1町		2斗2升
むろ田	1町		2斗6升
ひわたし	1町		2斗
きしのもと	3反		2斗7升
こくきは	7反	1反年不	2斗3升
つちあな	1町		1斗3升
まえた	3反		2斗3升
おとた	3反		2斗5升
かいそい	7丈		3斗6升
はたけた	4丈		2斗5升
つかわら	3反		2斗3升
みはし	3反	不1反	2斗5升
しまめくり	3反	不大	2斗
ひとせまち	1反		1斗5升
かたひらた	3反		1斗5升
くすはかわら	3反		2斗5升
おおちそい	1反		1斗5升
はらた	2反		1斗6升
いかかはら	2反		2斗5升
かみまかり	大		2斗2升
りうのつぼ	1町		1斗6升
ひわのくひ	小		1斗5升
かみくきしは	60分		2斗
大ねん仏てん	半		2斗
わたうのほり	小		1斗5升
はた	1反		1斗5升
己川てんしん田	7反		2斗5升
くすは	7反内	川小	2斗5升

表2 戸原坪付

の当時、宗兵都が戸原村を知行していた可能性がある。

おわりに　—中世後期の動向—

中世後期の糟屋郡の動向を、宮崎宮領を中心に簡単に見て、しめくくりとしたい。

南北朝期にはいると、郡内が直接戦乱にまきこまれるようになる。九州に下向した足利尊氏が南朝方に勝利した建武三年（一三三六）三月の多々良川の合戦、菊地武光が九州探題斯波氏経を破った貞治元年（一三六二）九月の長者原の合戦はその代表的なものである。とくに、多々良川の合戦が室町幕府の成立に与えた影響は極めて大きい。

南北朝期には、半濟や押領によって、多くの寺社領が武家領化していく。糟屋郡内の所領も当然そのような傾向にあったが、宮崎宮は藤下社領であるだけに、郡内社領の保全に力を注いだと考えられる。室町時代にもこうした傾向は続くが、宮崎宮領で注目されるのは、本家の石清水八幡宮祠官の直務支配の努力である。

応仁・文明の乱後、大内氏の領国支配が強化される。これにともない、筑前国内の所領の武家領化がさらに進展する。宮崎宮領においては、大内氏被官による社領の代官請負が一般化する。これは、寺社領を知行制の中に組みこもうとする大内氏と、社領の年貢確保を図ろうとする宮崎宮の妥協の産物であった。これは宮崎宮領だけの傾向ではない。文明十六年（一四八四）二月十八日、大内政弘は、奉行人杉弘依に対して、糟屋郡内顯孝寺領打橋三十町の代官職を与えた（『永田秘録』所収文書）。多々良顯孝寺の寺領の代官請負である。この大内政弘下文に、「正税者寺納」「余得者給恩」という文言が見える。寺社に契約した正税（年貢）以外は余得分として、大内氏からの給恩となったのである。こうした余得分の給恩は、例えば石清水社領の代官請負をした大内被官杉長忠が、「至余得分者、公事足參拾石地、遂武役」とされているように（石清水文書／『宮』四〇一号）、大内氏の軍役が賦課されたのである。

このような状況の中で、宮崎宮領の土質をめぐって、武家被官同志が争い、生害に及ぶという事件も起きてくる（田村文書／『宮』一一六号）。また、那珂郡の宮崎宮領堅槽は、半濟か收公の対象となり、大内氏からある武士に給与された。この時、「昔者雖為百廿貫之在所、其比被檢地、定米八十石に被相定候」ということになった（石清水文書／『宮』四六〇号）。大内氏により完全に知行制の中に組み込まれ、検地さえ行なわれたのである。

天文二十年（一五五一）の大内義隆の滅亡後、宮崎宮領に加えられた武家側の圧迫はさらに強まる。大内義長のもとで筑前守護代となつた陶晴賢は、宮崎宮領である那珂西郷や糟屋郡和田・乙犬・大隈などを「公領」としてしまう（石清水文書／『宮』四四五、四五二号）。大内氏の公領すなわち直轄領といつても、実質的には陶氏領となつたと考えられる。ここに宮崎宮領は最大の危機をむかえ、社領回復のための種々の努力を強いられることになる。

しかし、宮崎宮領の有名無実化＝武家領化は、上からのみ進んだわけではない。天文五年（一

五三六）の奏押書状（石清水文書／「宮」四七七号）に、「当時者、地下之儀、悉く守護被官ニ罷成候間、本家不被及御進退候」とある。在地では、守護をはじめとする武士層による小領主・農民層の被官化が広範に進展しつつあった。宮崎宮領は、上下からの板ばさみにあい、その実体を急速に失っていったと考えられる。

（注）

- (1) 『角川地名大辞典』40福岡県（角川書店）1988年。なお、本稿で言及する糟屋郡内の地名についての記述は、特にことわらない限り、本書による。
- (2) 坂本寅三『莊園制成立と王朝国家』第三章第一節（壇書房）、1985年。
- (3) 有川宣博「石清水八幡宮による宮崎宮領の支配」（『九州史学』51号）より作成した。

古代の絵馬小考

久保寿一郎

1.はじめに

柏原郡柏原町に位置する戸原麦尾遺跡の第III C区から、馬を描いた板絵が出土した。このような絵馬は今日までに少数ながら各地からの出土例が知られている。また昨年には平城京跡二条大路の溝から彩色を施した絵馬が出土し、最古にして最大の絵馬として紙面を飾ったことは記憶に新しい。小稿ではこれら遺跡から出土した絵馬を概観し、初期（平安時代末～室町時代初期）の絵馬資料と比較しながら考察を行うこととする。

2.出土絵馬の様相

出土絵馬の類例は戸原麦尾遺跡例を含め、管見にて10遺跡20点を数える（Tab.1）。以下、各資料について表現方法を中心とした特徴を見てゆくことにする（Tab.2）。

弘田櫛跡（Fig. 1-1）

1/2以上欠損しており、確定はしえないが表裏に描かれている。飾り馬であろうか。

道伝遺跡（Fig. 1-2・3）

寛平八年（896年）銘記のある木簡などとともに水路跡から出土している。①は中央部分が不鮮明であるが、左向きの飾り馬を描いたらしく、手綱と思われる表現もある。②も左向きの飾り馬が描かれており、①より小型ながら共通した表現方法がうかがえる。

伊場遺跡（Fig. 1-4～9）

大溝とそれに注ぐ枝溝より出土した多量の木製品の中から6点の絵馬が確認されている。①は

出 土 地	数 量	時 代	出土遺跡	備 考
秋田県仙北郡仙北町他 弘田櫛跡	1	平 安		
山形県東置賜郡川西町 道伝遺跡	2	奈 良 ～ 平 安	水 路 跡	木簡等出土。
静岡県浜松市東伊場町他 伊場遺跡	6	奈 良 ～ 平 安 前期	大 溝 ・ 枝 溝	豪申、人形、馬形他木製品、木簡、陶馬、土馬骨等出土。
静岡県藤枝市立花 郡遺跡	1	奈 良	溝SD26	豪申他木製品、木簡、土馬、桃種子類等出土。
滋賀県長浜市十里町 十里町遺跡	1	奈 良 ～ 末 期	七 壇	
奈良県奈良市法華寺町 平城京跡	1	奈 良 ～ 初 期	溝	山水図（板絵）、木簡等出土。
奈良県大和郡山市稗田町他 稗田・若槻遺跡	4	奈良後葉～平安初期	河 川	豪申、人形、馬形他木製品、木簡、土馬、人面墨苔土器、馬骨、牛骨等出土。
福岡県太宰府市太宰府 人奉左守跡8条9坊指定地	2	難 倉	溝SD605	墨書き木札他木製品等出土。
福岡県太宰府市觀世音寺 推定金光明寺跡	1	難 倉 ～ 室 司	包 合 層	什器類他木製品、僧形仏、慈仏他 寺院関係遺物出土
福岡県柏原郡柏原町 戸原麦尾遺跡	1	平 安 ～ 後 期	溝SD61	

Tab. 1 絵馬出土遺跡一覧表

曲物側板を利用したもので、角や尾の形状から左向きの牛と思われる。9世紀後半代。②は下半部のみが明らかで、蹄が表現された脚より左向きの馬を描いたと思われる。①と近接して出土し、同じく9世紀後半代とされる。③は上半部が欠損するものの、蹄を有する脚や尾の表現から左向きの馬を描いたと思われる。9世紀後半代。④は角と尾の表現から左向きの牛と思われる。毛並みが誇張して表現されている。8世紀後半～9世紀前半代。⑤は左向きの裸馬で、体部に赤色顔料の痕跡を残す。8世紀後半～9世紀初頭。⑥は曲物側板と思われるものに頭絡、手綱、鞍、障泥などが表現された左向きの飾り馬を描く。8世紀中頃かとされているが、層位的に明確にはしないようである。これらは③以外いずれも中央上方に円孔を有している。

大溝において祭祀関係遺物が盛行するのは8世紀前半～9世紀前半であり、絵馬もこの時期に含まれている。また馬形木製品が衰退した後も、絵馬は存続するようである。

^(注5) 郡遺跡 (Fig.1-10)

奈良時代の溝から木筒などとともに出土している。上半部は腐蝕しており不明瞭であるが左向きの飾り馬を描いたと思われる。体部には斑毛状の表現があり、手綱も描かれている。木筒の転用材で、裏面には「□六日□牛等調七月二日丁□」など月日を中心とした記述が見られる。中央上方に円孔を有する。

絵馬が出土した溝のすぐ北側にはそれに先立つ溝が並走しており、両者ともに豊富な祭祀関係遺物が出土している。絵馬などの遺物は溝縁部に沿った中～上層に集中していたという。

^(注6) 十里町遺跡 (Fig.2-1)

一部不明瞭であるが頭絡、鞍などをつけた左向きの飾り馬が描かれている。中央上方に円孔を有する。復原長径1.2m、短径0.8m、深さ0.65mの土壌の最上層から、奈良時代末期の須恵器の鉢をかぶせた状態で出土している。

^(注7) 平城京跡

二条大路の溝より出土した。鞍や障泥が表現された右向きの飾り馬が描かれている。馬体に赤色、鞍に白色など彩色の痕跡が残る。伴出した大量の木筒の年代から、天平十年(738年)以前に描かれたのは確実とされ、現存する最古の絵馬に位置づけられる。ヒノキ材。

^(注8・9) 稲田・若槻遺跡

2回にわたる調査で、平城京造営に伴う人工河川からおびただしい量の祭祀関係遺物が出土し、

	長さ(横)	幅(縦)	厚さ
弘田 柵跡	14.0	4.0	0.4
遠伝遺跡①	15.0	8.0	0.9
②	10.0	8.0	0.6
伊場遺跡①	12.0	9.6	0.5
②	11.8	7.6	0.3
③	14.5	3.3	0.9
④	13.5	5.9	0.7
⑤	8.9	7.3	0.5
⑥	11.4	7.1	0.5
郡 遺 跡	13.4	7.5	0.4
十里町遺跡	23.7	16.8	1.2
平城京跡	27.0	19.5	0.7
大宰府 ①	30.2	5.7	0.3
②	15.7	13.5	
推定金光明跡	4.3	6.6	0.3
戸原鬼尾遺跡	14.1	6.0	0.6

Tab. 2 出土絵馬計測表(単位:cm)

*一部実測図より計測

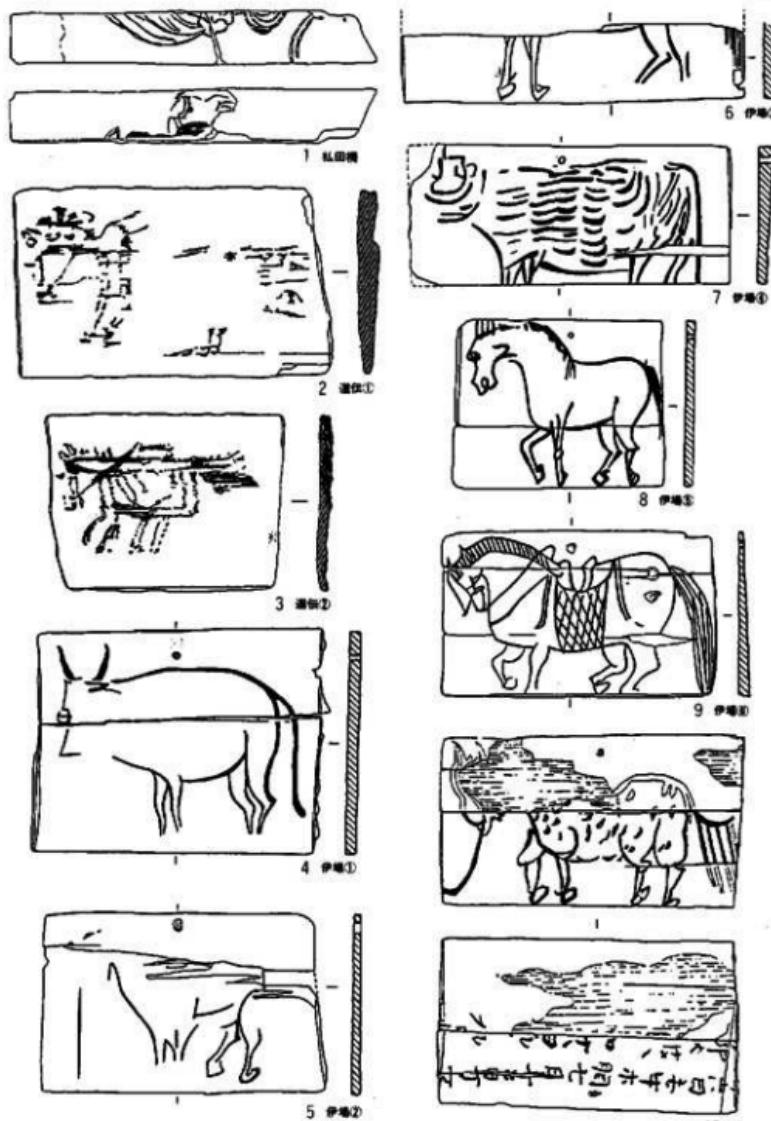


Fig. 1 出土絵馬実測図① (2/5)

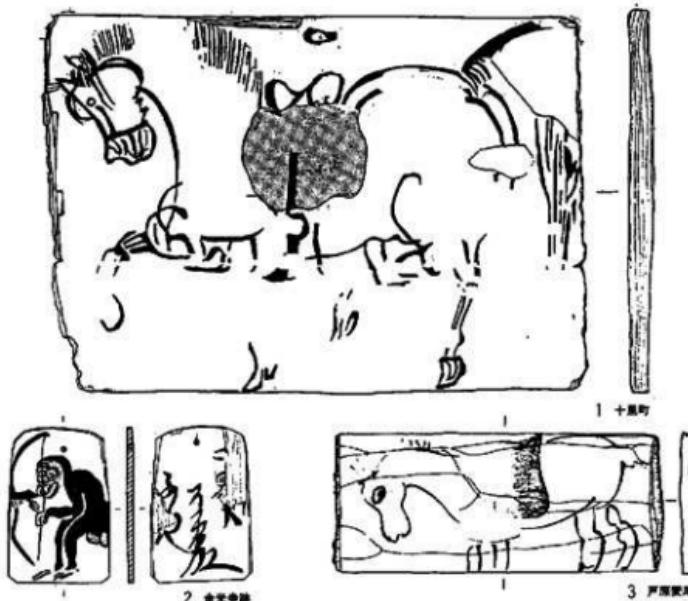


Fig. 2 出土絵馬実測図② (2/5)

計4点の絵馬が確認されている。個々の詳細は不明であるが、1点は「直径九センチの半円形で半分欠けているが、墨で両耳を立てた馬の姿がはっきりと描かれている」もので、残り3点はいずれも長方形状のものと思われる。

河川は幅約10m、深さ約2mを計り、奈良時代の初頭に掘削され、平安時代の前半には廃絶されたと見られる。土馬260以上、ミニチュアカマド160以上、人面墨書き器約70、斎車約100その他多くのものが出土している。

大宰府左郭8条9坊推定地

13世紀の初めから14世紀前半にかけてのものと思われる溝から2点出土している。①は下半部が欠損するものの、馬の臀部らしきものが描かれている。上辺はゆるい山形に加工され、中央に円孔を有する。②は左半分程が欠損しており、鹿と兎らしきものが描かれている。残存する右端部は杓子状に加工されている。

推定金光寺跡 (Fig.2-2)

寺院関係と思われる建物址付近から出土している。縦長の板に、弓を弾く左向きの猿を描く。面部と尻部に朱を施し、裏面には墨書きが見られる。板は上方を幅狭とし、ゆるい山形に成形し、

中央に円孔を有する。

戸原麦尾遺跡 (Fig.2-3)

鞍をつけ、たてがみを編んだ左向きの馬を描く。上・下・右端部は欠損しているものと思われる。スギ材。11世紀後半。

以上、簡単に出土絵馬の特徴を見てきた。少數ではあるが出土地は東北地方から九州地方にわたって分散しており、大宰府・推定金光寺跡例を除きいずれも奈良時代～平安時代に属するものである。ここでこの時期の出土絵馬の特徴をまとめておこう。

1. 形状は長方形を基本とし、法量は横10cm内外～15cm、縦6cm内外～10cmが標準である。これに対し十里町・平城京例はほぼ同規模で、縦横ともに通常の約2倍を計り、別格のものとして存在する。
2. 描かれた馬は左向き、右向きのものがあり、平城京例以外全て左向きである。
3. 節り馬、裸馬があり、多くは節り馬である。またすでに馬以外のものが描かれている。
4. 墨書きを基本とし、彩色を施したものもある。
5. 曲物、木筒からの転用材がある。また多くは懸垂用の円孔を有する。

これらに加えて、頭部がやや下向き気味で、いずれかの足を上げ躍歩しているような姿勢が多いのは、筆致の差を越えて構図的な共通性を感じさせるものである。

次に出土遺跡について簡単に見ておきたい。奈良時代～平安時代の絵馬は、対蝦夷城柵、宮都、郡衛など多くが公的性質を有する遺跡から出土している。出土遺構は溝、水路、河川などの流路遺構が多く、他の遺物と混在し、廃棄された状態を示している。その中には、蕭串、人形などの木製品を中心とするいわゆる律令期祭祀を特色づけるものが多い。いくつかの遺跡では馬形木製品、土馬、馬骨など他の馬に関わる遺物もあり、絵馬がそれらと共に存していたことがうかがえる。このような中で十里町・戸原麦尾例は、前者が土壌内出土、後者が単独出土といった点で異った視点を要する特殊な例と言えるだろう。なお大宰府・推定金光跡例は、年代的にも形態的にもこれらと一線を画するものであり、次節にて検討することにしたい。

3. 初期絵馬資料の様相

一般に絵馬は室町時代中期頃を転換期とし、これ以降形状や仕様が多様化し、大型のものも作られ、また馬以外のものも多く描かれるようになるとされている。ここではそれ以前のものを初期の絵馬資料と仮称し、奈良時代～平安時代の出土絵馬に統く絵馬資料を検討してみたい。具体的には少數の伝世絵馬と各種の絵巻物に限られ、それに先述の大宰府・推定金光寺跡からの出土絵馬が加わることになる。

初期の伝世絵馬には奈良県奈良市秋篠寺、同北葛城郡当麻寺にそれぞれ伝わるものがある。^(註34) 秋篠寺の絵馬は昭和39年の本堂修理の際、天井裏から5個体が発見された(Fig.3)。1は上半分のみであるが、躍動する右向きの黒馬が描かれている。上辺はゆるい山形に作られ2ヶ所に円孔を有す

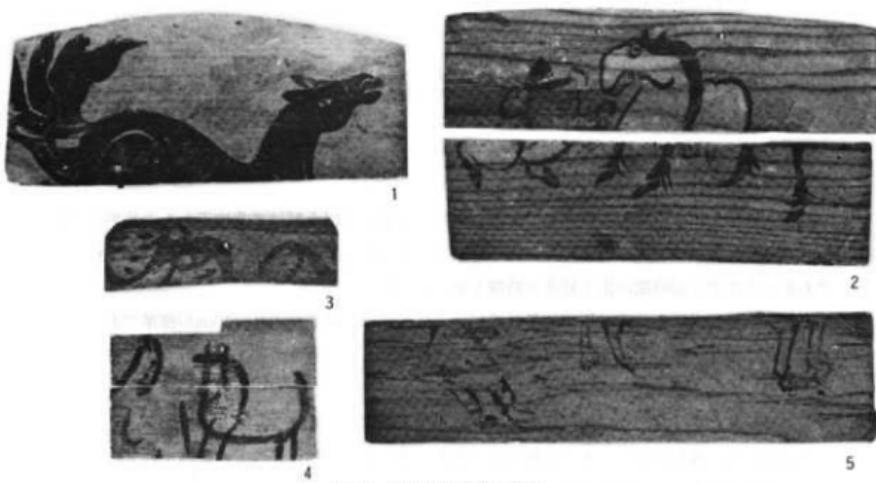


Fig. 3 秋篠寺本堂発見絵馬



Fig. 4 当麻寺曼荼羅堂発見絵馬

る。裏面に「奉施」の文字と「応永」(1394~1427年)の年紀銘が墨書きされており、年紀銘をもつ最古の絵馬とされている。長さ14.6cm、幅6.1cm。2は中央部を欠損するもので、左向きの馬とその左側に人物を描いており、駆者による索馬の図のようである。上辺はゆるい山形とし、2ヶ所に円孔を有する。裏面には「秋篠口、薬師口、礼馬、右心口令満足」などの文字と「長縁」(1457~1459年)の年紀銘が見られ、薬師如来に対する何らかの祈願と御札がこめられているものと思われる。長さ14.6cm、幅8.6cm。これ以外の3点はいずれも小片で左向きの馬や人物が描かれており、後述の当麻寺における伝世絵馬に近い筆致をもつものもある。

当麻寺の絵馬は昭和35年の曼茶羅堂解体修理の際、その天井裏から各種の庶民信仰資料とともに5点発見されている(Fig.4)。いずれも長さ7~8cm、幅6cm弱を測り、ごく単純な略画で戯画風に描かれている。全て左向きと思われ、横に人物の顔を描くものもある。上辺が残るものはいずれもゆるい山形に作られ、中央に円孔を有する。年紀銘はみられないが、仕様や図柄あるいは他の庶民信仰資料との関係から鎌倉時代末~室町時代前期を下らないものと見られている。

次に限られた実物資料を補うものとして、平安時代末~室町時代初期にかけての絵巻物を見ておきたい(Tab.3)。具体的に絵馬が散見されるのは『年中行事絵巻』^(注15)『天狗草紙絵巻』^(注16)『一遍聖絵』^(注17)『春日權現記絵巻』^(注18)『不動利益縁起巻物』^(注19)、『幕帰絵詞』^(注20)などであり、他にも『絵師草紙』^(注21)のように、絵師の子供が紙に筆で馬の絵を描いている光景が見られるようなものもある。これらの絵巻物は成立年代、背景、意図、内容など様々なものがあり、個別の検討を必要としようが、各々の場面にはある程度客観的事実が反映されていると考えられ、当時の絵馬をめぐる状況を読みとることは可能であろう。

このような資料をもとに平安時代末から室町時代初期における絵馬についてまとめてみたい。



Fig. 5
「天狗草紙絵巻」東寺の巻第一段(部分)

まず絵馬自体の特徴について伝世絵馬を中心まとめるところとなる。

1. 形態は長方形で上辺をゆるい山形に作るものが多く、1~2ヶ所の円孔を有する。
2. 馬は左向きで、人物を伴うものが多い。
3. 墨書きを基本とし、朱を伴うものもある。また略画風のものも多い。

このような特徴は概して絵巻物に見られる絵馬にも共通するものである。筆致については秋篠寺の「黒馬」の写実性、あるいは他の多くに見られる略画風の自由さ、ともに奈良時代~平安時代の出土絵馬と異なるものである。大宰府・推定金光寺跡の出土絵馬3点については、大宰府①は上辺をゆるい山形に作り、この時期の典型的な形態と言える。他の2点

は類例が見られず、絵馬の多様化の萌芽とも考えられるがここでは類似資料としてとらえておきたい。

次に絵馬を取りまく状況について、絵巻物から看取される点を中心にまとめてみよう。

1. 神社のみならず、寺院にも奉納されている。また地方の小祠にも見られる。
2. 社の扉、壁、柱だけでなく、神木と考えられる樹木、あるいは特別に設けられた祭壇にも掛けられている。
3. 2枚1組とするものが多く、また彩色されていることを示すものもある。
4. 共同の祭り、あるいは個人的な祈願など様々な場面で見られる。

1については秋篠寺や当麻寺などに絵馬が伝世している事実もあり、加えて『天狗草紙』に描かれたいわば「絵馬堂」とも呼べるもの的存在は、絵馬と寺院との強い結びつきを示すものである。また絵馬の地方への波及は、すでに奈良時代～平安時代の出土絵馬の分布が示すとおりである。3については必ずしも左向きの絵馬、右向きの絵馬をもって1組とするとは限らないようであり注意される。また4からは絵馬奉納の主体者ならびに目的の多様化がうかがえよう。

4. 絵馬の起源と変遷

各資料をもとに奈良時代から室町時代初期にかけての絵馬のあり方を検討してきた。出土絵馬と伝世絵馬ならびに絵巻物は時代的にも、また資料の性格としても異なるものであり、これらを同列に論じるには問題を残すところである。しかし「板状のものに馬などを描いて懸垂することにより何らかの祭り、祈願に用いる」ことを絵馬の本義であるとするならば、奈良時代の絵馬は

絵巻物	成立	場所	場面	絵馬の場所	特徴
『年中行事絵巻』第十一卷第二段	12C 後半	今宮社(京都)	森林に両まれた境内、二社の神殿の前。巫女、神人、里人による祭礼(疫神の銷魂)の場。	三社の神殿の各正面、左右の扉や柱附近。鏡とともに2枚1組とする。	馬のみ、索馬図、馬以外のもの? 長方形で上面はゆるい山形。
『天狗』東寺巻 東寺の巻第一段	13C 末	東寺(京都)	中門東側の廊廻の南側に設けられた小室。室内に一人の女性、軒端近くに二人の人物を描く。	小堂の内壁や軒先に8~9枚掛けれる。	左右に馭者を描く索馬図。長方形で上面はゆるい山形。
『一通御絵』第四卷第四段	14C 初め	因幡守(京都)	堂の南面の様子。夜間の人々の様子を描く。	宝付近の築地壁の間に2枚1組を掛けれる。	不明瞭、索馬図? 長方形。
『一遍坐絵』第五卷第三段	"	白河の関(陸奥)	陸奥国に入った一遍が、関の明神を前に、道中安全(?)を祈願してぬかずく。	小さな祠の正面に一枚	索馬図。長方形。
『春日權現験記絵巻』第八卷第五段	14C 初め	熱田の宮(尾張)	興福寺の住僧空和僧都が参詣する宮の神前の様子。	社殿の柱や戸に2枚1組とする。	馬のみ、索馬図。長方形で上面はゆるい山形。
『不動利益縁起絵巻』第二段			僧智興の重病回復を願い、庭先に設けられた祭壇の前で祈禱の祭文を読む	御幣や供物を並べた祭壇の正面に、文字を書いた紙とともに3枚。	索馬図。長方形の紙絵馬。
『墓塔絵詞』第七卷第一段	14C 半ば	玉津島明神(紀井)	玉津島明神に参詣した西本願寺院如上人らが境内の神木の前でぬかずく。	神木の幹や枝に2枚1組で10枚以上か。	馬のみ、索馬図。白毛と黒毛を描き分けるものあり。長方形で上面はゆるい山形。

Tab.3 絵巻物に描かれた絵馬

後世のいわゆる絵馬の祖型であることは疑えないところであり、時代とともにその内容の拡大あるいは変質がなされていったと見るのが妥当であろう。ここでは絵馬の起源と変遷にかかわるいくつかの問題を提起しておきたい。

古米より馬は生産、交通、軍事に重要な役割を果たしており、人々の生活と密着した存在であったことは幾多の考古資料の存在からも明らかである。その背後に横たわる馬に関わる信仰の問題についてはこれまで文献や土馬を中心とする考古資料をもとに検討されてきた。今回その具体的な内容に立ち入ることはできなかったが、筆者は奥野義雄氏による「馬信仰は水神と漢神の両極の内容を内在させることによって一方では降雨・止雨の祈雨をもとにした水神信仰として、他方では行疫神を主体にした漢神信仰として現れていた」という立場をとるものである。絵馬というものはそうした馬に関わる信仰が実際の馬に代わるものとして表出されたもののひとつであると言える。現時点で最も古い絵馬は8世紀前半のものであり、馬形木製品や土馬にやや後出するものの、出土遺跡や出土状況を見る限り律令期の祭祀の中で起源し、その拡がりとともに各地へ普及していくと思われる。ここで問題になるのはこれら馬に関わる他のものとの差別化であろう。まだ資料数に乏しく、実際の使用状況も含めて不明な点が多いが、福岡県沖ノ島には滑石製の馬形という特殊な存在もあり、今後種類ごとの特質やそれを越えたところにある表現方法の共通性などを検討してゆく必要があるだろう。例えば出土絵馬には左向きに馬を描くものが多いが、沖ノ島の馬形が全て左向きである点、また各遺物を通じて飾り馬と裸馬が存在する点などがあげられる。

絵巻物によると、絵馬は鎌倉時代にはすでに多様化しており、室町時代中期以降への基盤が整っていたように思われるが、その変化の兆しは平安時代の中頃、すなわち律令期の祭祀が衰退してゆく10世紀頃に求められよう。この時期の資料は乏しく具体的な様相は把握できないが、伊場遺跡のように馬形木製品が消滅した後も絵馬は存続していたと見られる状況もあり、恐らく馬形や土馬を含む律令期の祭祀遺物が衰退する時期に、絵馬がその枠からはなれて独自の発展を遂げていったと思われる。したがって絵馬の変遷における第1の画期と呼べるのは平安時代の中頃であり、その後鎌倉時代を通じて神社、特に寺院との結びつきを強めながら受け継がれてゆき、国家的な祭祀から個人的な祈願の場へと移行する過渡期を形成していったと思われる。

5. おわりに

最後に戸原麦尾遺跡出土の絵馬について少し触れておこう。本例からは時期的にも、また出土状況からも平安時代後期の過渡期における絵馬の一画面がうかがえる。

戸原麦尾遺跡は中世を主体としており、絵馬の時期にあたる古代末期の状況は不明な部分が多い。しかしこれに接する多良田遺跡は官衛的性格の強い遺跡であり、本遺跡とその周辺も官衛域に含まれる地域であったと考えられる。またこの両遺跡の調査によって、多良田は古来より氾濫と蛇行をくり返しており、安定するのは10世紀後半～11世紀であることが確認さ

(註27) れている。絵馬が出土した東西に走る溝は、多々良川流域における復元条里に位置、方向ともに一致しており、絵馬は多々良川の流れと同様東から西へ向って流れ着いた状態で出土している。

このような背景の中で出土絵馬を位置づけるなら、それは官衙城における公的な祭祀の中で用いられたもので、他に祭祀関係遺物が出土していない点を重視するなら、すでに絵馬が単独で機能していたことが考えられる。本例は懸垂円孔の有無が確認できず、実際の使用状況も不明であるが、おそらく絵馬を主体とする何らかの祭祀の後に廃棄されたと思われる。その内容については推測の域を出ないが、先述の自然環境という観点からひとつの可能性としてそこに「氾濫する水流」に対する「鎮魂」の場を想定しておきたい。

以上古代の絵馬について、いくつかの問題点を提起したにとどまるが、戸原麦尾遺跡出土の絵馬は過渡期における絵馬の数少ない資料であり、また一方では地方における律令期祭祀の存続という問題についても一視点を与えるものであると言えよう。

(註)

- (1) 遺跡から出土する「馬などを描いた仮縫」は、後世のいわゆる絵馬に発展してゆくもの、との解釈からすでに「絵馬」と呼ばれていることが多い。小鶴もそれに従うが必要に応じ、遺跡から出土した絵馬を「出土絵馬」、伝世されてきた絵馬を「伝世絵馬」と呼び分けることにする。
- (2) 秋田県教育委員会「払田塚古墳群事務所『払田塚古墳第46~52次発掘調査報告』」1983
- (3) 川西町教育委員会「道の駅」1984
- (4) 岩手県教育委員会「伊代道路・道標」1978
- (5) 藤枝市教育委員会「藤枝市立図書館開館記念式典」1988
- (6) 県民文化財文化財保護委員会「『霞城文化財だより』No.106」1986
- (7) 朝日新聞社「アサヒグラフ」運営352号 1989
- (8) 京良県立総合考古学研究所「京良県道路調査報告 1976年度」1977
- (9) 京良県立総合考古学研究所「京良県道路調査報告 1988年度 第二分冊」1982
- (10) 岩井宏美「絵馬と馬」岩井宏美著「絵馬秘史」日本放送出版会 1979 21頁
- (11) 美野義雄「新穂高寸詠~先生期の絵馬にみる二つの藝術形態によって~」(『佐賀県立民族博物館研究紀要』第6号 1983 47頁)
- (12) 九州歴史資料館「大河右近編『昭和49年秋葉原開拓調査報告』」1975
- (13) 九州歴史資料館「大河右近編『昭和53年秋葉原開拓調査報告』」1979
- (14) 梶原義高記念公苑学芸部「馬の美術品展」1983
- (15) 篠山敏郎「新修日本繪物全集 第24巻」角川書店 1978
- (16) 柳浦次郎編「新修日本繪物全集 第27巻」角川書店 1978
- (17) 望月信成編「新修日本繪物全集 第11巻」角川書店 1975
- (18) 野間信之編「新修日本繪物全集 第16巻」角川書店 1978
- (19) 高崎吉士彦 黑登京編「新修日本繪物全集 第30巻」角川書店 1980
- (20) 幸津秋二郎「新修繪物考による日本寫真史叢書引 第五色」平凡社 1984
- (21) 藤津次郎・岡村正雄編「新修日本繪物全集 第18巻」角川書店 1979
- (22) 美野義雄「馬の論文」48頁
- (23) 安藤神社復興完成会「安藤神ノ島 木工」1979 420頁
- (24) 金子祐之編「神奈川縣史稿の集成」1988 200~204頁
- (25) 盛岡市教育委員会「多々良込出遺跡」1980
- (26) 盛岡市教育委員会「多々良込出遺跡」1985
- (27) 盛岡市教育委員会「戸原尾尾遺跡」1988
- (28) 野野高志「武藏前河・施主・柏原・轉写四郎における名産について」(『佐賀大学教育学部研究論集』24(1) 1976)。

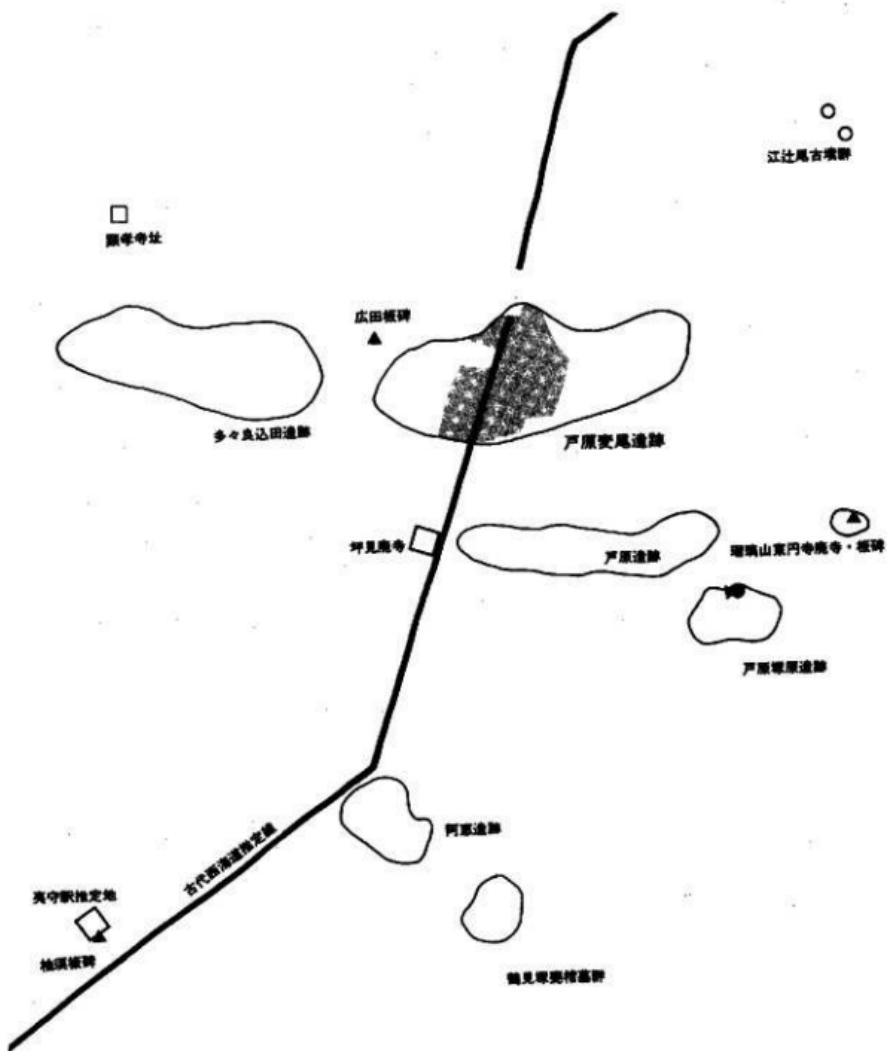
小稿は特に岩井宏美氏の著作・論文に負うところが大きかったことを付記しておく。また192頁の写真図版は岸根義高記念公苑学芸部・秋篠寺・当麻寺関係各位の御厚意により転載させて頂きました。末尾ながら感謝の意を表します。

図 版

PLATES



第III b 区溝状造構（SD61）調査作業風景（東から）





戸原更尾遺跡とその周辺遺跡



(1) 戸原麦尾遺跡遠景および柏原平野を臨む（西から）



(2) 戸原麦尾遺跡遠景および多々良川河口を臨む（東南東から）



(1) 第I b 区完撤状況
(東から)



(2) 第I b 区掘立柱建物検出状況
(東から)



(3) 第I a 区遠景 (西から)



(1) 第IIa区完掘状況全景（北から）



(2) 第IIa区完掘状況東側部分（北から）



(1) 第IIa区完成状況西側部分（北から）



(2) 第IIa区部分拡大（掘立柱建物・柱穴群）

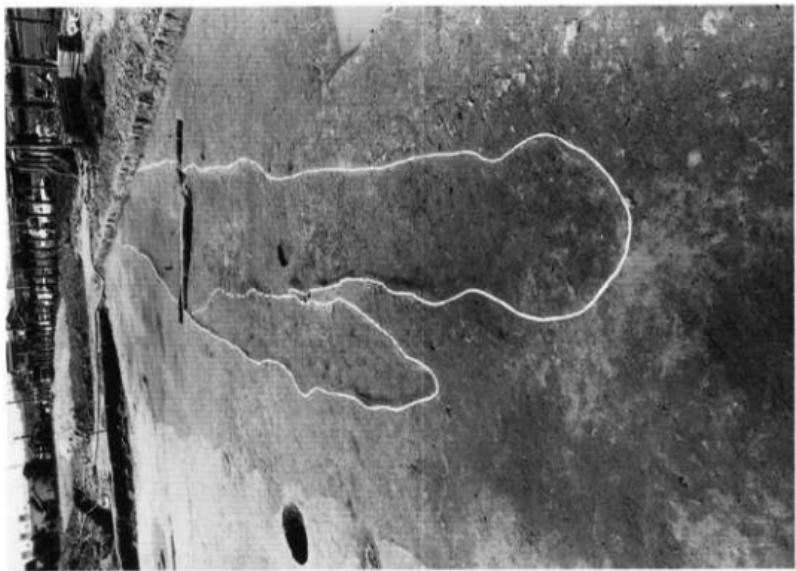


(1) 第II a 区完掘状况部分拡大（掘立柱建物群）

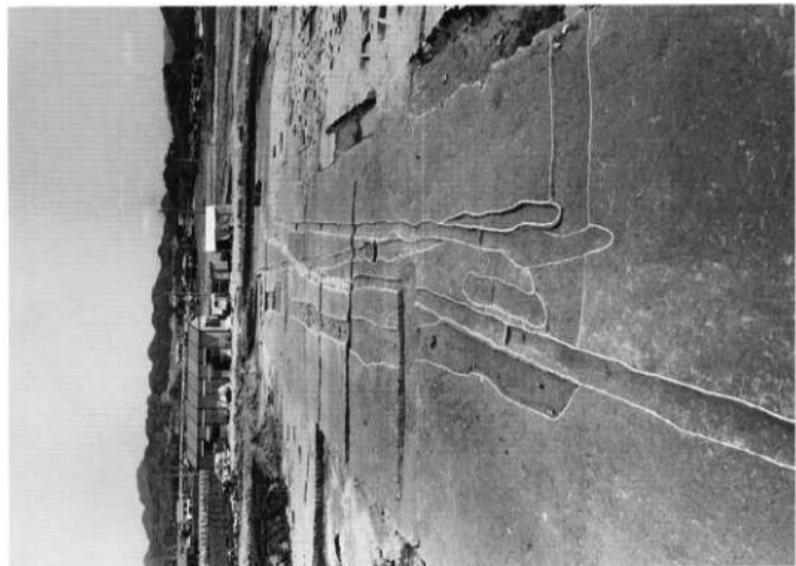


(2) 第II a 区完掘状况部分拡大（掘立柱建物群）

(2) 海扶道跡 (SD20) 完整状況 (南東から)



(1) 海扶道跡 (SD20-03-16-17) 完整状況 (南から)





(1) 第II a 区西側溝状遺構
(SD02・03・16・17)
完掘状況（北から）



(2) 第II a 区北側溝状遺構
完掘状況（西から）



(3) 溝状遺構 (SD20) 遺物出土状況（西から）



(4) 溝状遺構 (SD16)
遺物出土状況（西から）



(1) 桁列 (SA03) 検出状況 (北西から)



(2) 桁列 (SA04) 検出状況 (東から)



(3) 桁列 (SA04) 取り上げ作業風景 (東から)



(1) 穴窓構 (SX01) 完掘状況 (南から)



(2) 井戸 (SE01) 遺物出土状況 (北東から)



(3) 井戸 (SE01) 基底面遺物出土状況 (北東から)



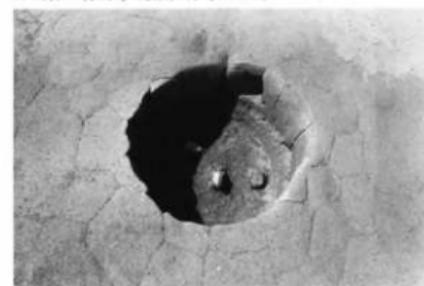
(4) 井戸 (SE02・03) 完掘状況 (西から)



(5) 井戸 (SE04) 完掘状況 (北から)



(6) 井戸 (SE04) 井筒内遺物出土状況 (北から)



(7) 井戸 (SE05) 完掘状況 (北から)



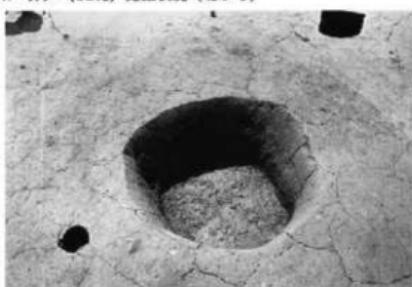
(8) 井戸 (SE15) 完掘状況



(1) 井戸 (SE16) 完掘状況 (北から)



(2) 井戸 (SE32) 完掘状況 (北から)



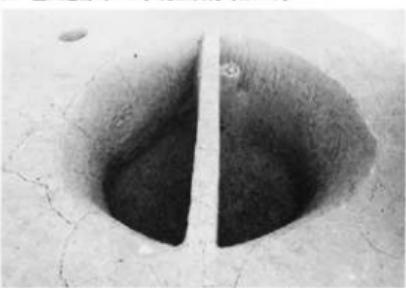
(3) 竪穴造構 (SX03) 完掘状況 (南から)



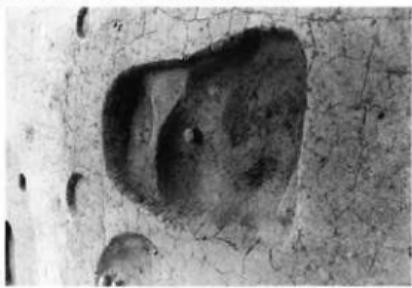
(4) 竪穴造構 (SX11) 完掘状況 (北から)



(5) 竪穴造構 (SX12) 完掘状況 (西から)



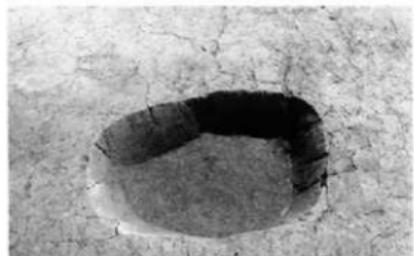
(6) 竪穴造構 (SX13) 完掘状況 (南から)



(7) 竪穴造構 (SX16) 完掘状況 (南から)



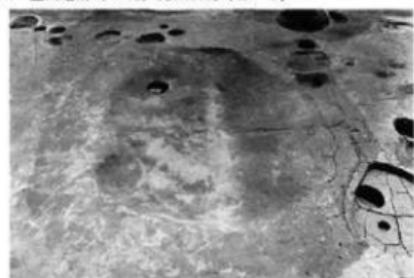
(8) 竪穴造構 (SX18) 完掘状況 (北から)



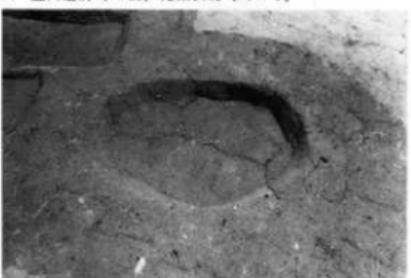
(1) 墓穴遺構 (SX19) 完掘状況 (北から)



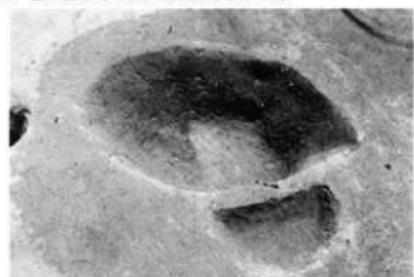
(2) 墓穴遺構 (SX23) 完掘状況 (西から)



(3) 墓穴遺構 (SX28) 完掘状況 (西から)



(4) 墓穴遺構 (SX32) 完掘状況 (西から)



(5) 墓穴遺構 (SX34) 完掘状況



(6) 墓穴遺構 (SX36) 完掘状況 (北から)



(7) 墓穴遺構 (SX37) 完掘状況 (西から)



(8) 墓穴遺構 (SX37) 完掘状況 (東から)



(1) 積穴遺構 (SX37) 遺物出土状況



(2) 積穴遺構 (SX38) 遺物出土状況（北から）



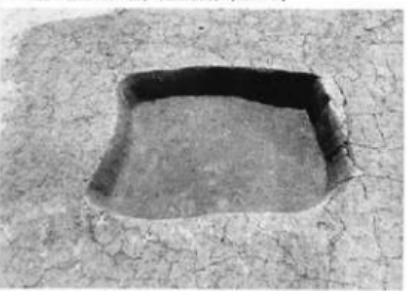
(3) 積穴遺構 (SX38) 完掘状況



(4) 積穴遺構 (SX39) 完掘状況（北から）



(5) 積穴遺構 (SX40) 完掘状況（北西から）



(6) 積穴遺構 (SX41) 完掘状況（北から）



(1) 第II b 区完掘状況（北から）



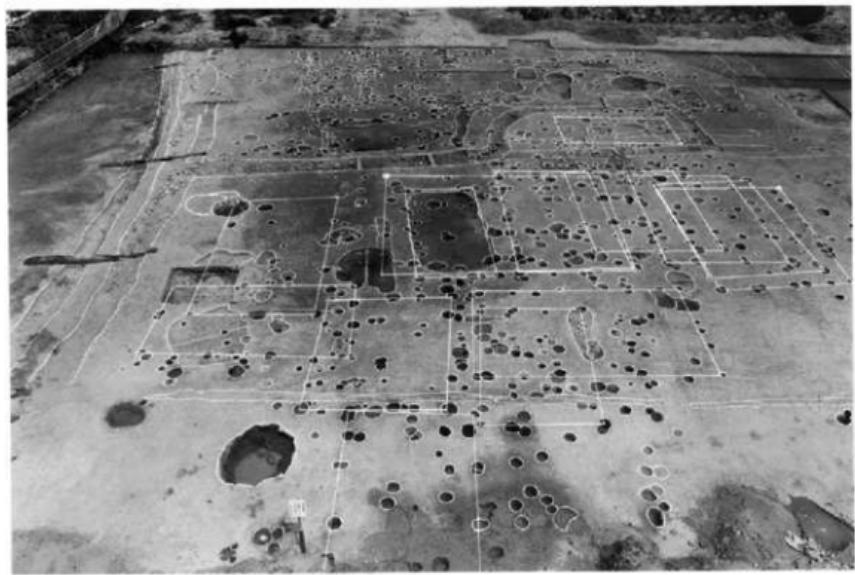
(2) 第II b 区完掘状況（北から）



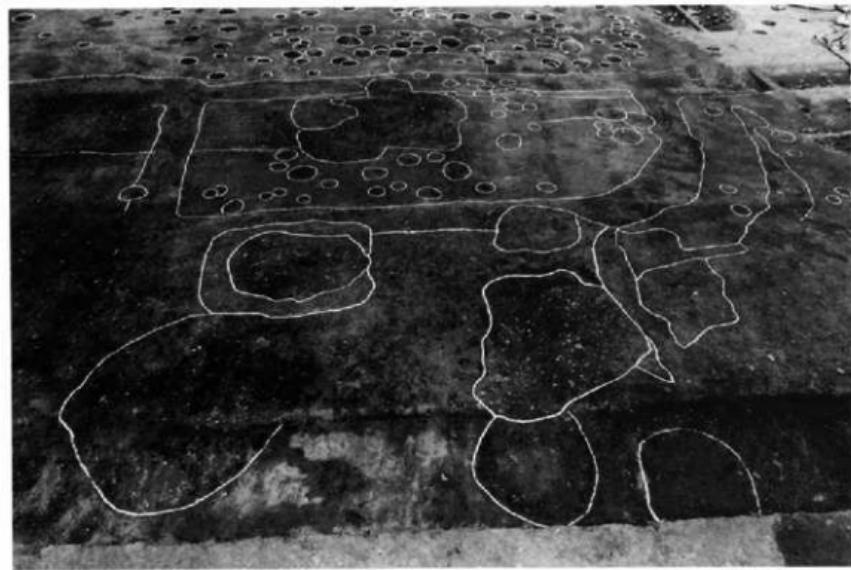
(1) 第II b 区西侧完掘状況全景（北から）



(2) 第II b 区完掘状況（西北西から）



(1) 第II b 区発掘状況（北側部分・西北西から）



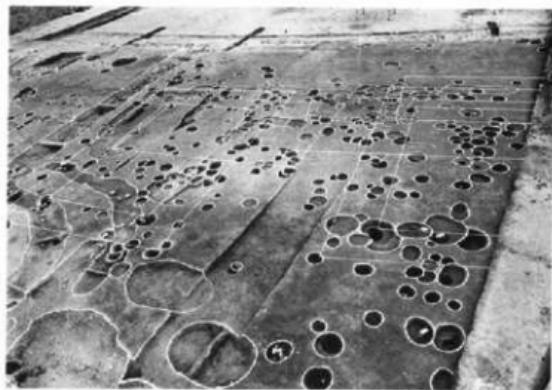
(2) 第II b 区西側遺構検出状況（東から）



(1) 第II b 区中央西側部分遺構分布状況
(東から)



(2) 第II b 区中央部遺構分布状況
(南東から)



(3) 第II b 区北部遺構分布状況
(南から)



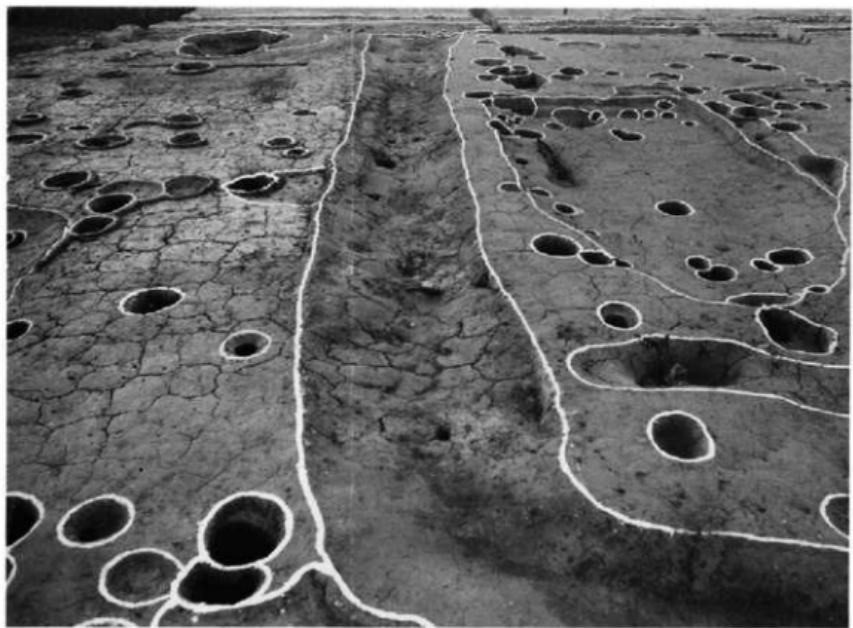
(1) 第II b 区南側掘立柱建物（西から）



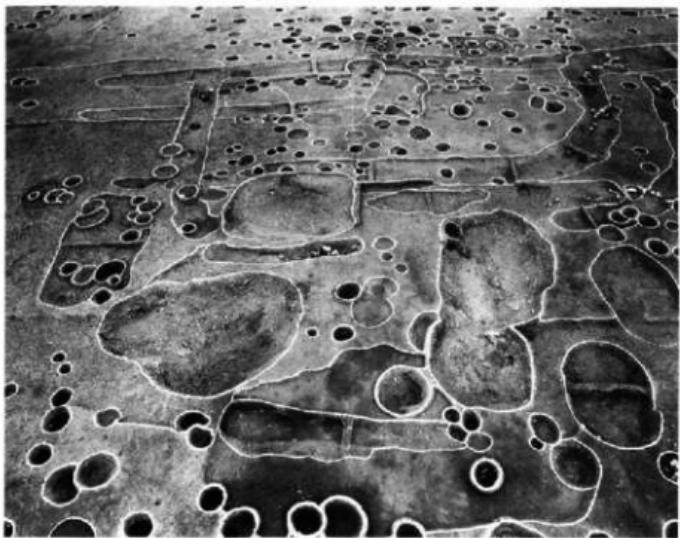
(2) 滑状遺構（SD11、22）
遺物出土状況（北から）



(3) 滑状遺構（SD22）
遺物出土状況（北西から）



(1) 溝状地構 (SD22) 完成状況 (南南東から)



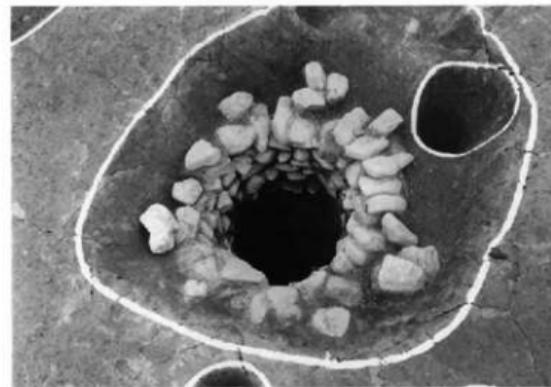
(2) 第II b 区東側部分地構分布状況 (東から)



(1) 井戸 (SE07・17) 完掘状況
(南から)



(2) 井戸 (SE07) 底面
福軸合子出土状況 (東から)



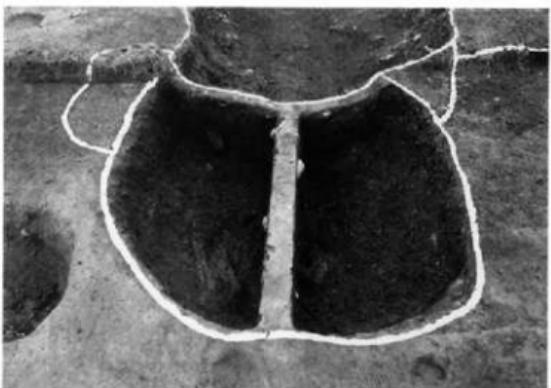
(3) 井戸 (SE08) 石組状況
(東から)



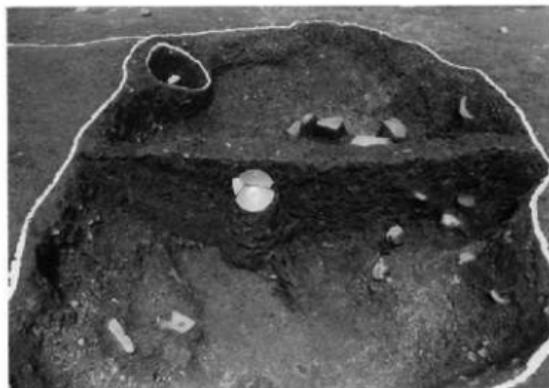
(1) 井戸 (SE08)
石組及び井側 (曲物) (東から)



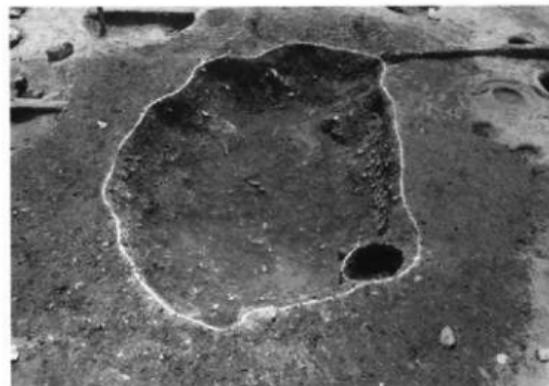
(2) 井戸 (SE08)
土層堆積状況 (東から)



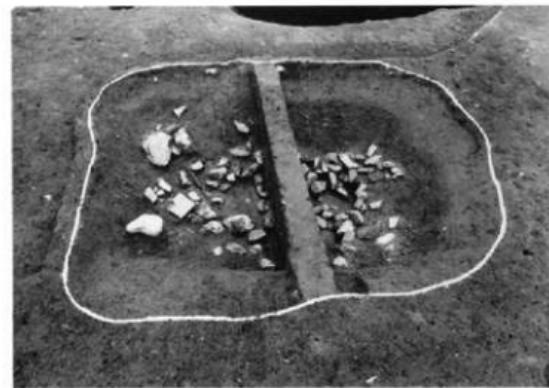
(3) 井戸 (SE11) 完掘状況
(東から)



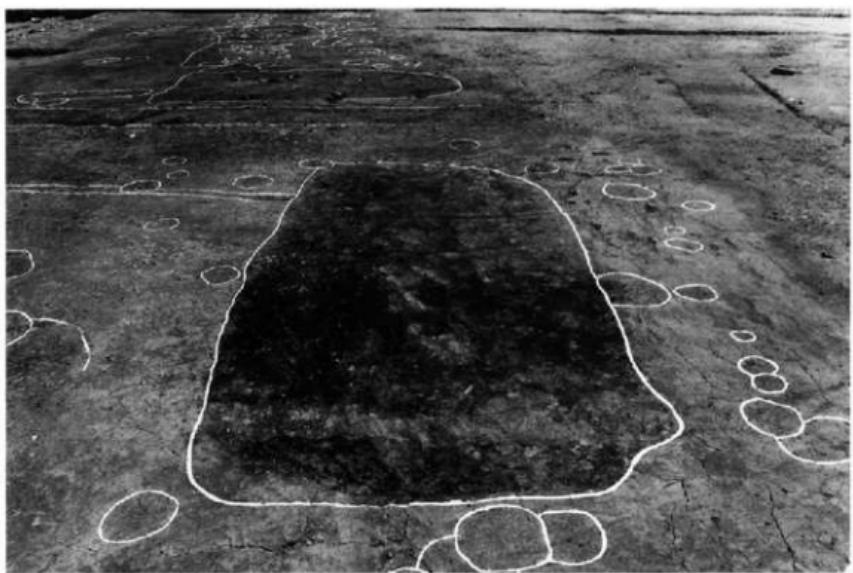
(1) 井戸（SE12）遺物出土状況
(南東から)



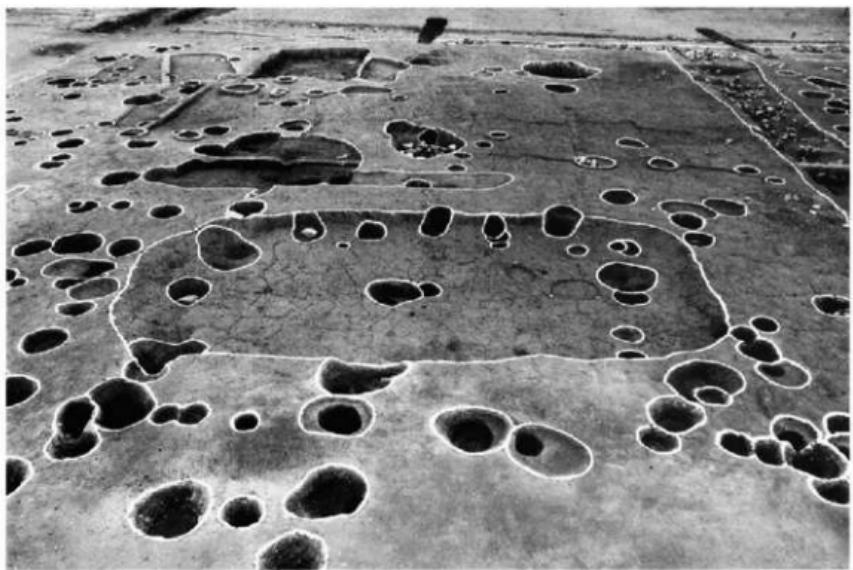
(2) 井戸（SE12）完掘状況
(西から)



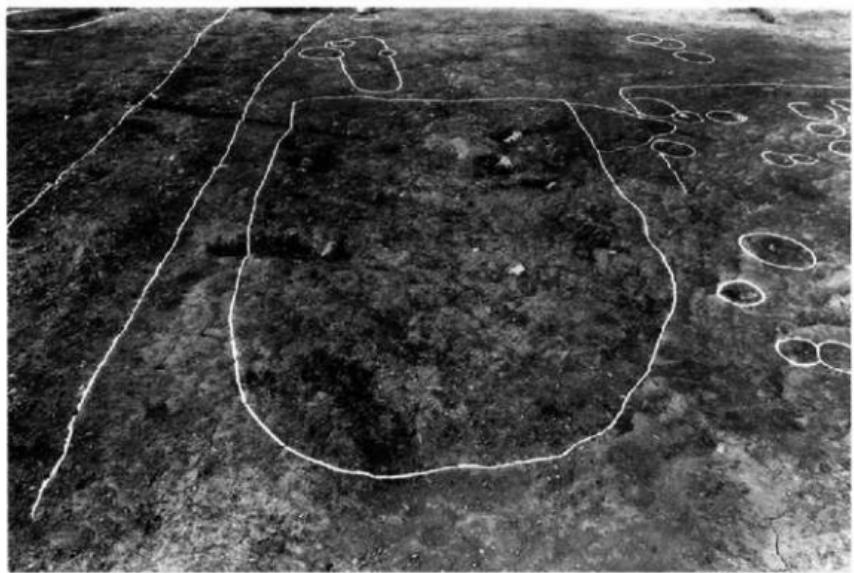
(3) 井戸（SE13）完掘状況
(西から)



(1) 穹穴造構 (SX52) 採出状況 (西から) (本炭片を多く含む)



(2) 穹穴造構 (SX52) 実掘状況 (南から)



(1) 積穴遺構 (SX53) 掘出状況 (南から)



(2) 積穴遺構 (SX53) 遺物出土状況 (南から)



(1) 壇穴造構 (SX53) 西北部炭化木出土状況（南から）



(2) 壇穴造構 (SX53) 完掘状況（南から）



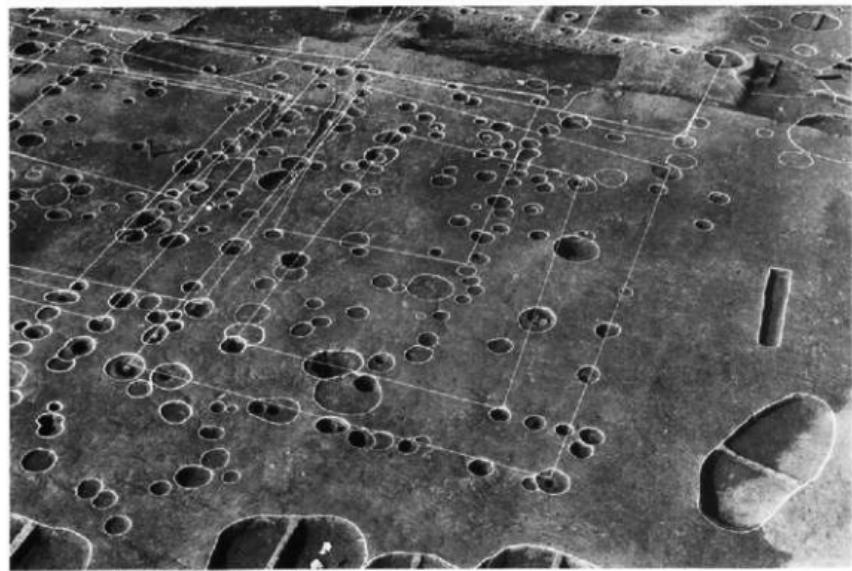
(1) 第IIc区空襲状況（西から）



(2) 第IIc区空襲状況（南東から）



(1) 第II c 区北側部分発掘状況（南から）



(2) 第II c 区中央～東部分発掘状況（南から）



(1) 梯列 (SA01)
完掘状況 (南から)



(2) 溝状造構 (SD39)
完掘状況 (北から)



(1) 滾状造構 (SD46)
完掘状況 (西から)



(2) 滾状造構 (SD25)
完掘状況 (西から)



(3) 旧河川露呈状況 (南から)



(1) 井戸・竪穴造構完掘状況
(南東から)



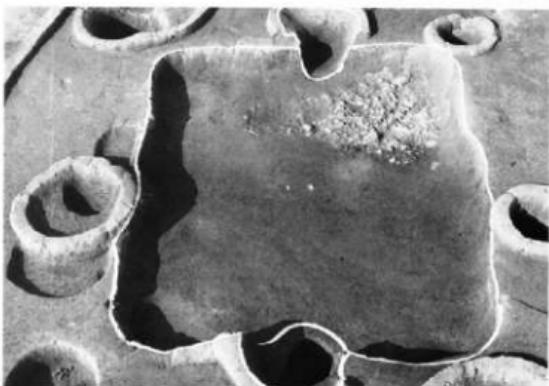
(2) 井戸 (SE18) 土層堆積状況
(南南西から)



(3) 井戸 (SE19) 完掘状況
(北から)



(1) 壁穴遺構 (SX83)、土壙 (SK06)
完掘状況 (南から)



(2) 土壙 (SK07) 完掘状況
(南から)



(3) 土壙 (SK08) 遺物出土状況
(北から)



(1) 墓穴遺構 (SX65)
完掘状況 (北から)



(2) 墓穴遺構 (SX66)
遺物出土状況 (西から)



(3) 墓穴遺構 (SX68)
完掘状況 (西から)



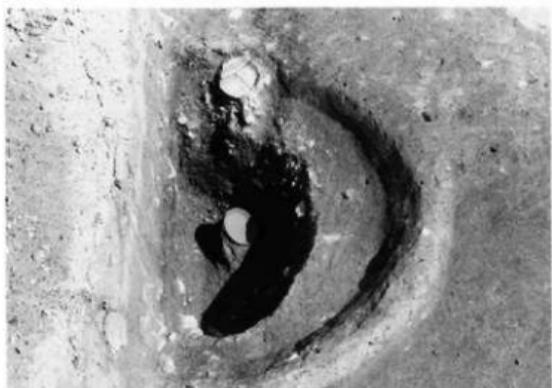
(1) 壁穴造構 (SX66・67)
完掘状況 (西から)



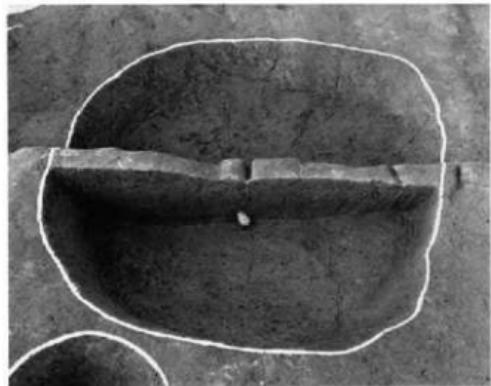
(2) 壁穴造構 (SX69)
出土状況 (南から)



(3) 壁穴造構 (SX70)
完掘状況 (南から)



(1) 墓穴遺構 (SX71)
遺物出土状況



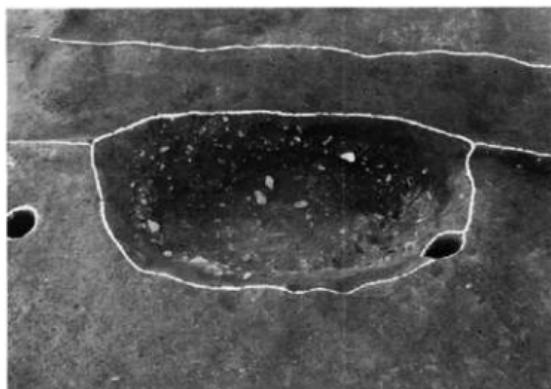
(2) 墓穴遺構 (SX75) 完掘状況 (南から)



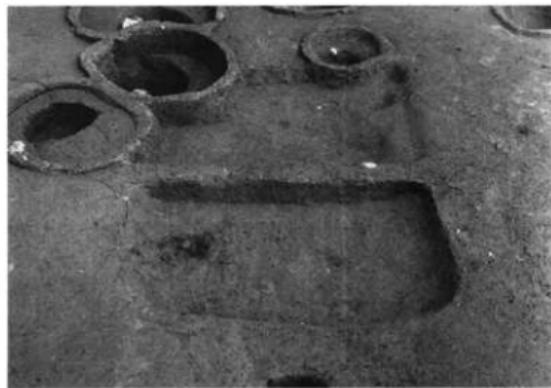
(3) 墓穴遺構 (SX78)
完掘状況 (東から)



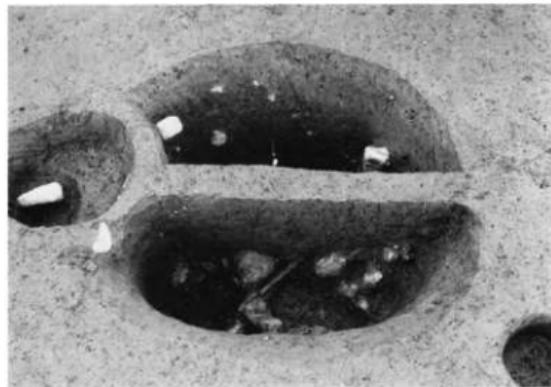
(4) 墓穴遺構 (SX79)
完掘状況 (南から)



(1) 竪穴造構 (SX81)
完掘状況 (東から)



(2) 竪穴造構 (SX82)
完掘状況 (南西から)



(3) 竪穴造構 (SX84)
遺物出土状況 (北から)



(1) 第Ⅱ d 区完掘状況（南から）



(2) 第Ⅱ d 区完掘状況（東から）



(1) 第II d 区西侧畦畔換出状況



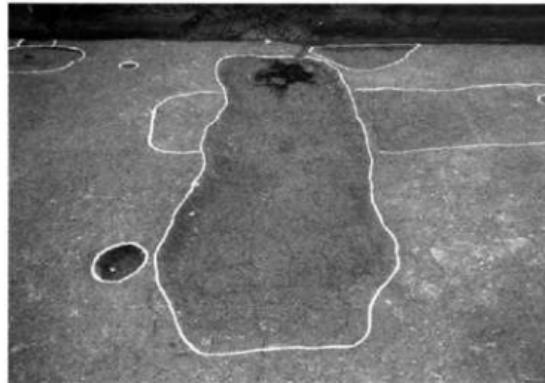
(2) 第II d 区造構換出面下部旧河川露呈状況（東から）



(1) 旧河川内土層堆積状況
(西から)



(2) 漏斗造構SD73完掘状況
(南から)



(3) 穴造構 (SX92)
完掘状況 (南から)



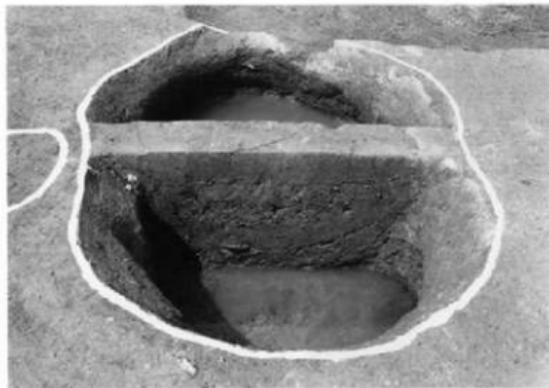
(1) 技列 (SA11) 掘出状況
(東から)



(2) 技列 (SA11) 部分拡大
(北東から)



(3) 技列 (SA11) 中央部直交軸の
土層堆積状況 (北から)



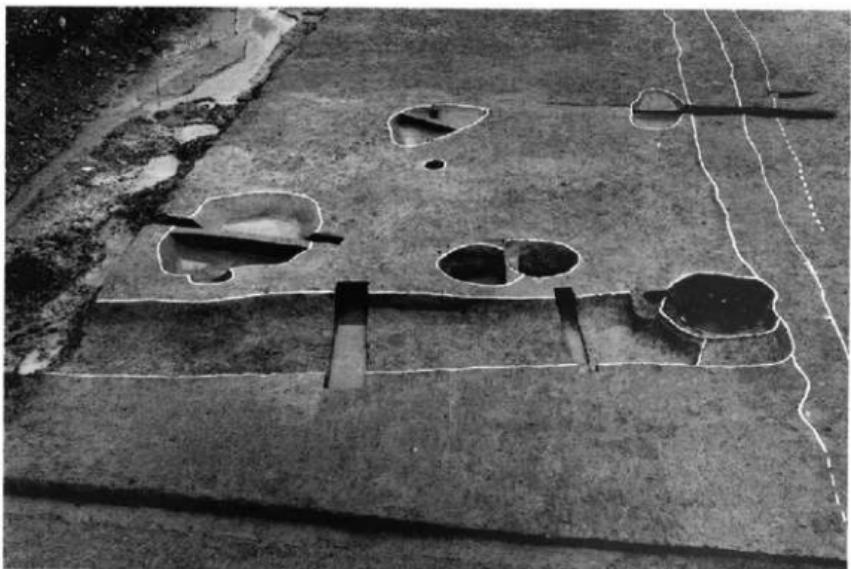
(1) 井戸 (SE21) 土層堆積状況
(南から)



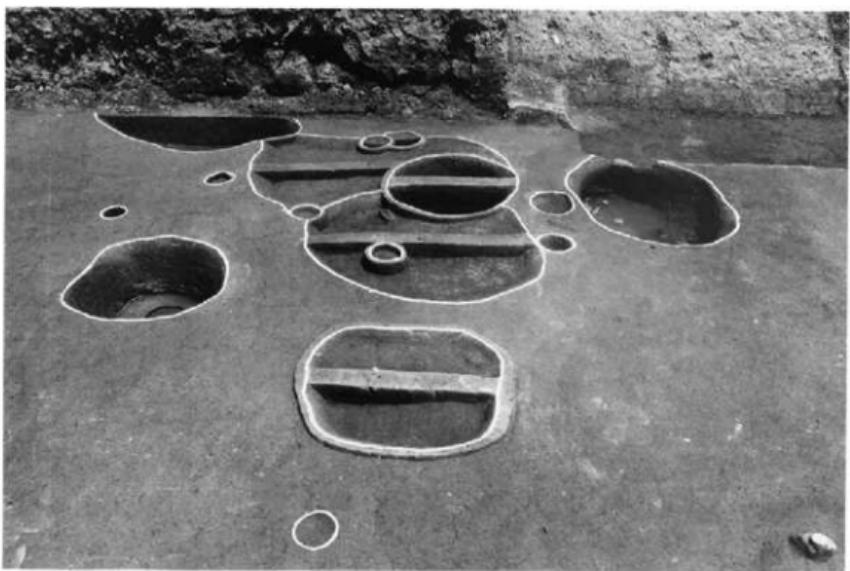
(2) 井戸 (SE28) 井側検出状況
(南から)



(3) 井戸 (SE29) 掘り下げ状況
(南から)



(1) 第II d 区西南部遺構分布状況（南から）



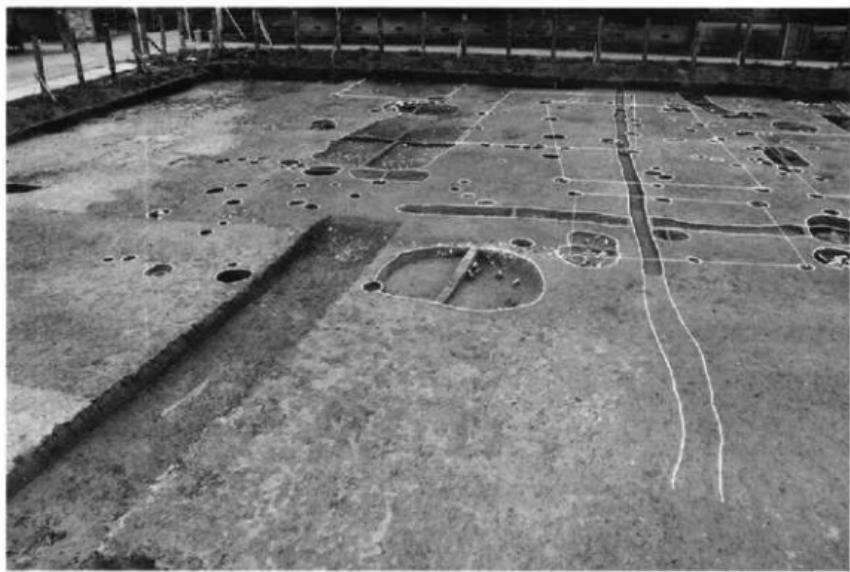
(2) 第II d 区北東部遺構分布状況（南から）



(1) 第III c 区完掘状況（西から）



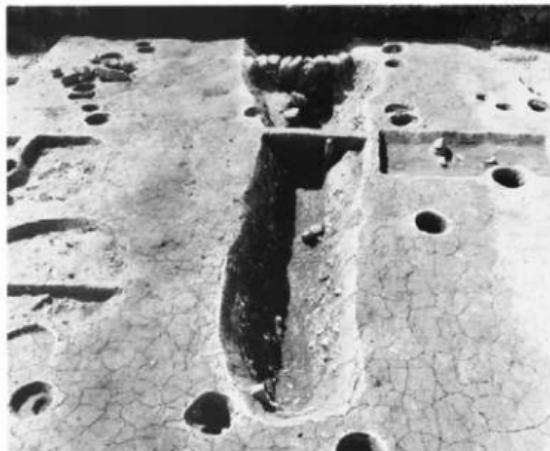
(2) 第III d 区完掘状況（東北東から）



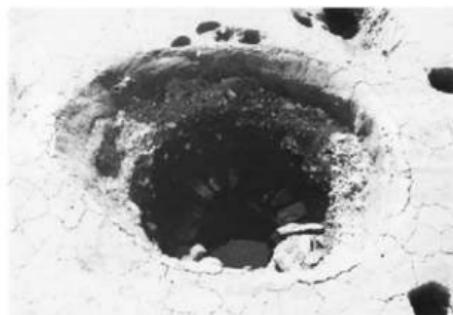
(1) 第三 b 区南側部分完掘状況（東から）



(2) 第三 b 区中央部分完掘状況（東から）



(1) 溝状遺構 (SD19) 完掘状況
(東から)



(2) 井戸 (SE31) 完掘状況
(東から)



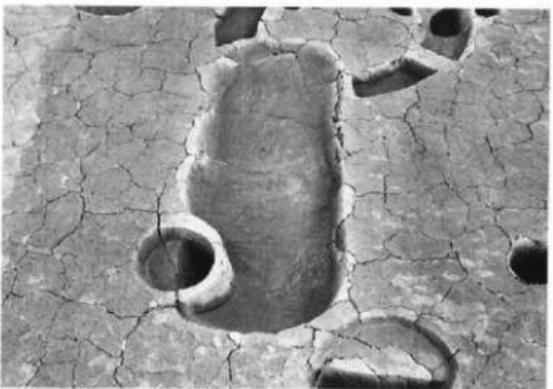
(3) 井戸 (SE31) 石組み状況
(東から)



(1) 土壠 (SK10) 完掘状況
(北から)



(2) 土壠 (SK14) 完掘状況
(東から)



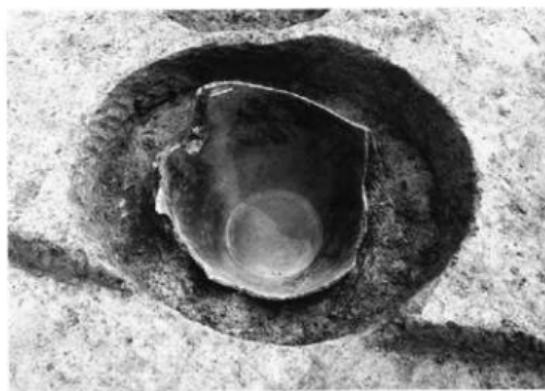
(3) 土壠 (SK45) 完掘状況
(南から)



(1) 穴遺構 (SX102)
完掘状況 (北から)



(2) 穴遺構 (SX104)
完掘状況 (北から)



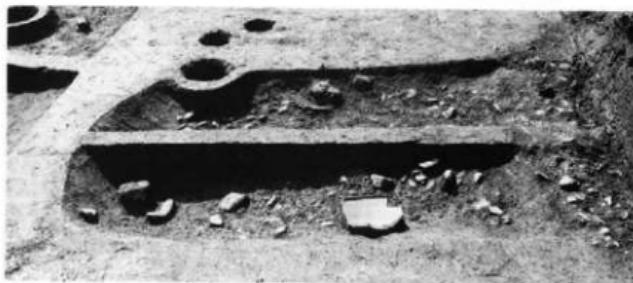
(3) 墓壙 (SX106)
完掘状況 (西から)



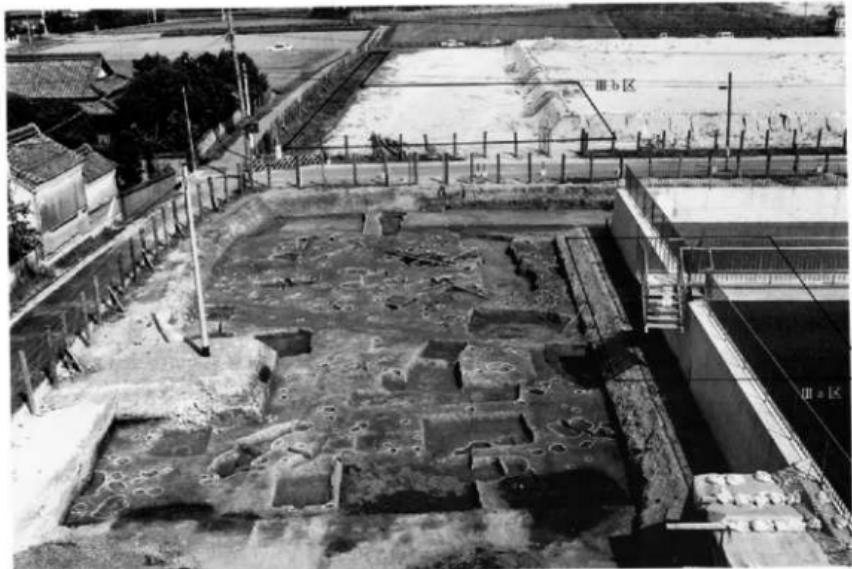
(1) 埋窓 (SX107) 完掘状況
(南から)



(2) 埋窓 (SX111) 遺物出土状況
(北から)



(3) 竪穴遺構 (SX126)
遺物出土状況



(1) 第III c 区発掘状況（南から）



(2) 第III c 区中央部発掘状況（東から）



(1) 溝状造橋 (SD61)
完成状況 (東から)



(2) 溝状造橋 (SD61)
掘り下げ作業風景 (東から)



(3) 溝状造橋 (SD61) 内
土層堆積状況 (東から)



(1) 溝状遺構 (SD61) 内杭列 (SA11)
検出状況 (東から)



(2) 溝状遺構 (SD61) 内杭列 (SA11)
検出状況 (南から)



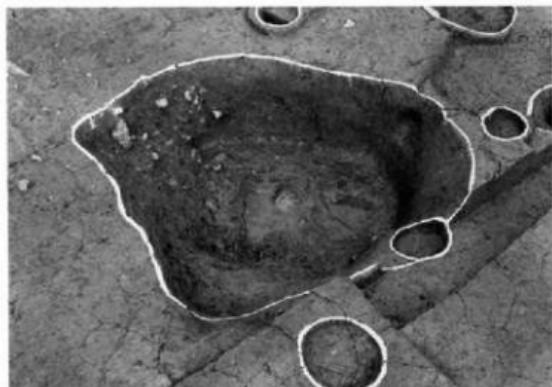
(3) 板検出土状況 (SD61出土)



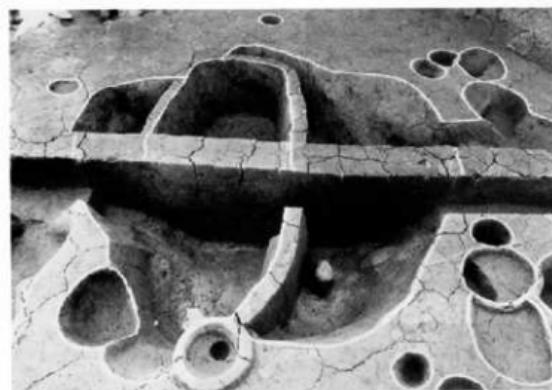
(1) 溝状造構（SD62）完掘状況
(北西から)



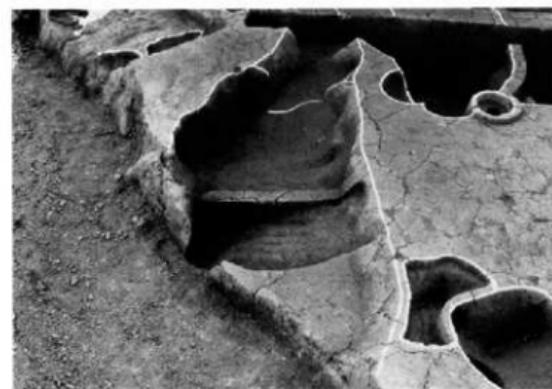
(2) 溝状造構（SD63～65）完掘状況（南東から）



(1) 墓穴遺構 (SX135)
完掘状況 (南から)



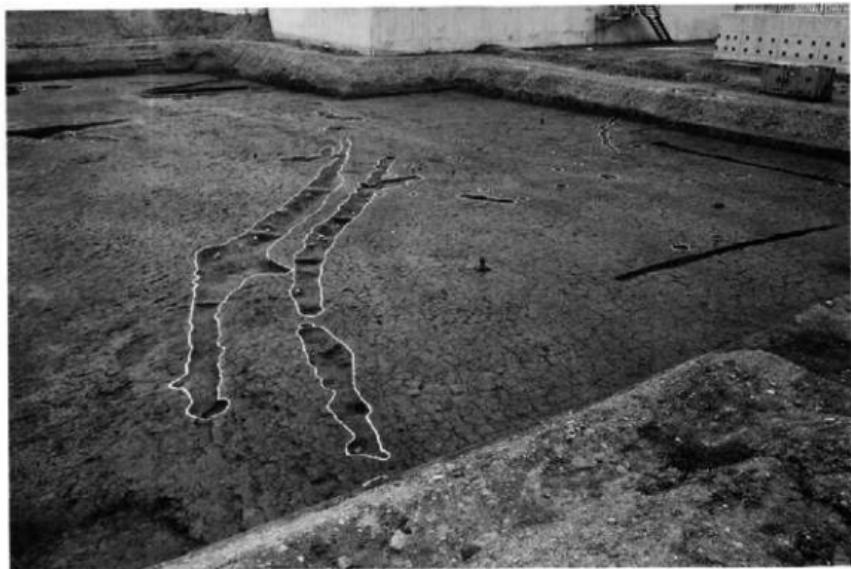
(2) 墓穴遺構 (SX138・153・154)
(北東から)



(3) 墓穴遺構 (SX155)
完掘状況 (北東から)



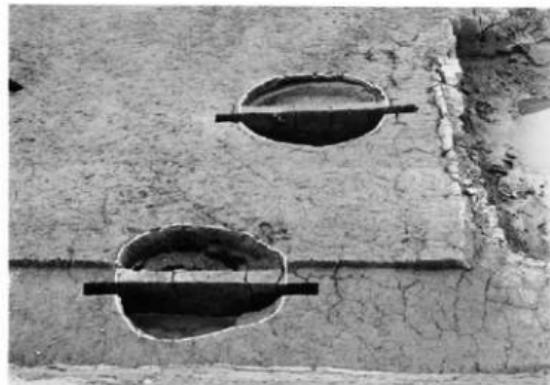
(1) 第IV b 区発掘状況（東から）



(2) 溝状遺構 (SD70-71) 発掘状況（南東から）



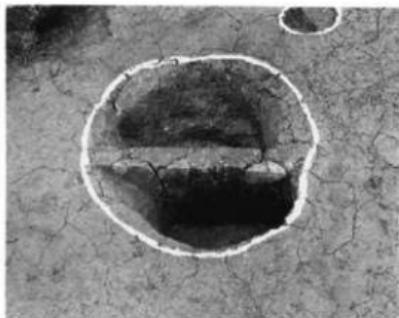
(1) 第IV b 区西南部竪穴遺構
分布状況（西から）



(2) 竪穴遺構 (SX156・157)
検出状況（西から）



(3) 竪穴遺構 (SX157) 遺物出土状況（西から）



(4) 竪穴遺構 (SX158) 土層堆積状況（南東から）



(1) Aトレンチ完掘状況（南から）



(2) Aトレンチ西壁土層断面
(東から)



(3) Dトレンチ完掘状況（南から）



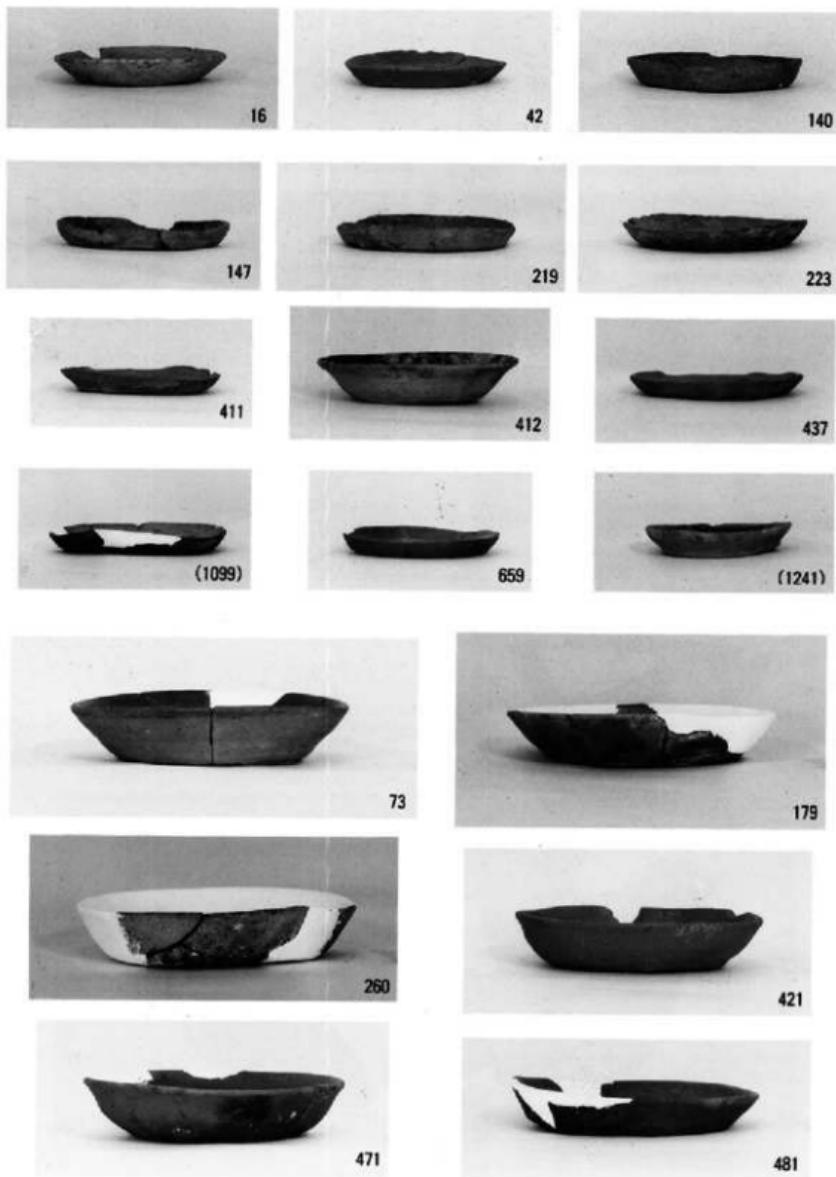
(1) B トレンチ西壁土層断面
(東から)

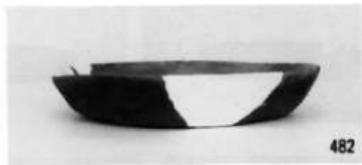
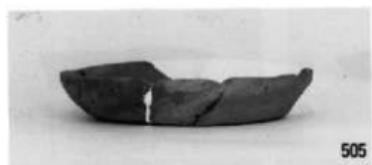


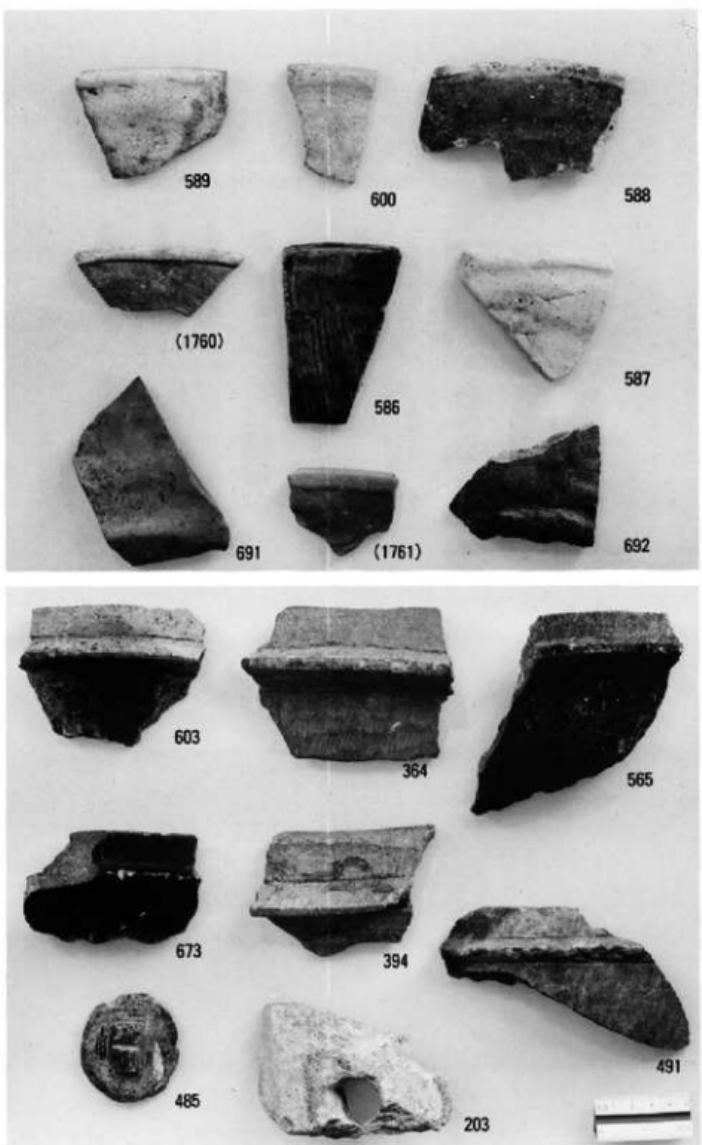
(2) C トレンチ完掘状況 (南から)



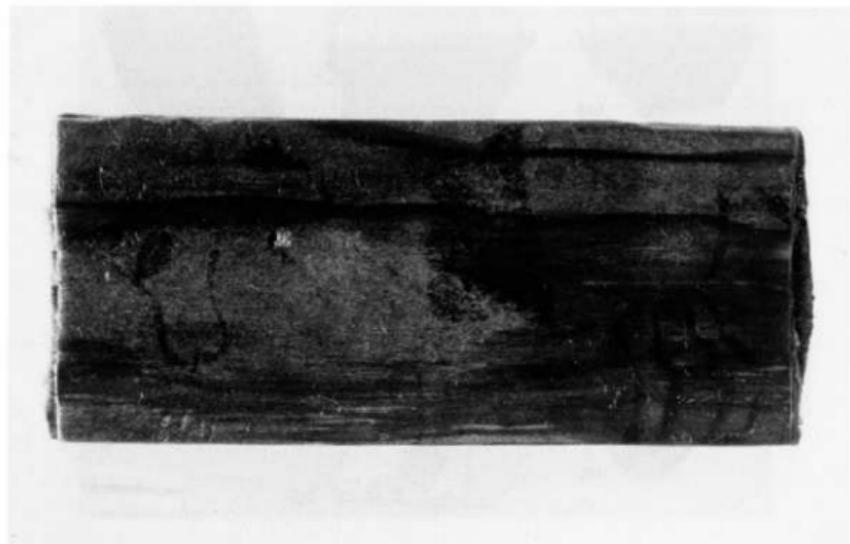
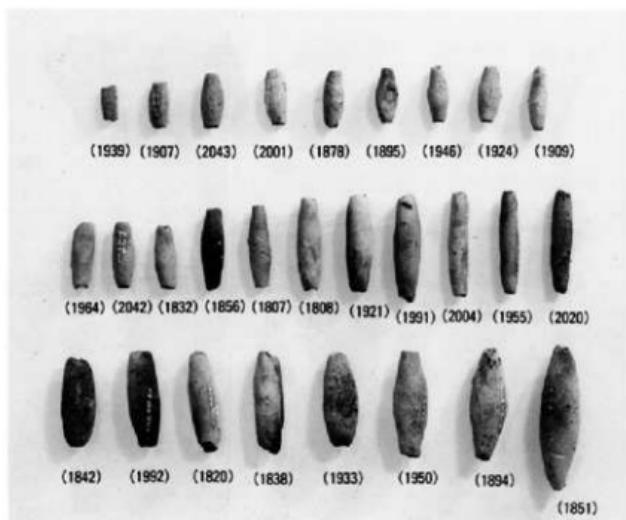
(3) D トレンチ東壁土層断面
(西から)







出 土 遺 物 (その3)



出 土 遺 物 (その4)



(1203)



(1590)



661



(1598)

450

680



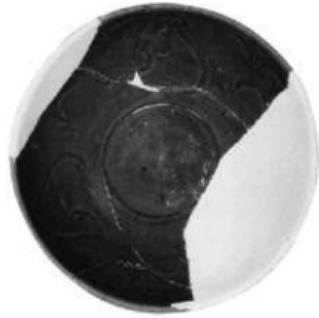
678



307



453

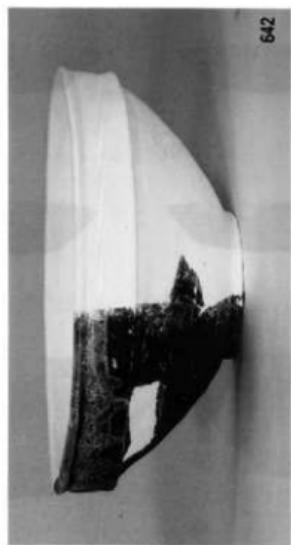


312



308

PL. 62



柏屋郡柏屋町
戸原麦尾遺跡(Ⅲ)

- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第217集 -

1990年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

柏屋郡柏屋町
戸原麦尾遺跡(III)

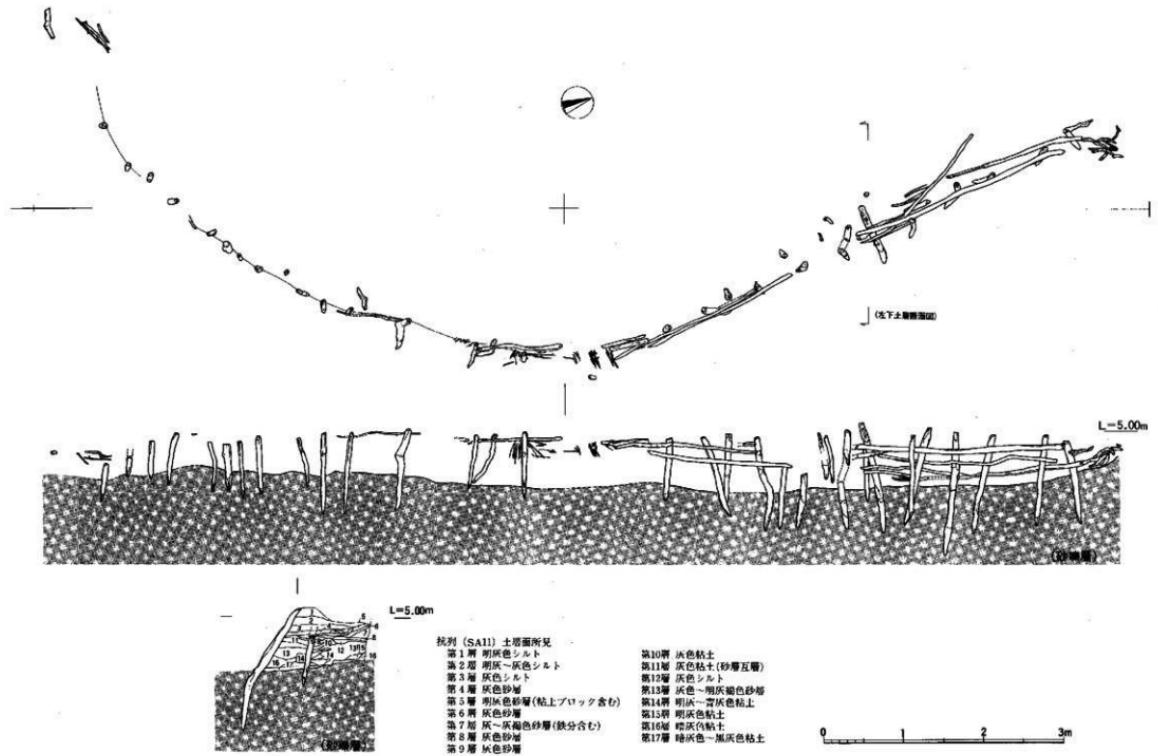
福岡市埋蔵文化財調査報告書第217集

付図

- 付図 1 戸原麦尾遺跡遺構分布全体図(1/500)
- 付図 2 戸原麦尾遺跡第I区b区遺構分布部分図(1/200)
- 付図 3 戸原麦尾遺跡第II区遺構分布全体図(1/200)
- 付図 4 第II区杭列(SA11)平面および見通し図(1/50)
- 付図 5 第III c区溝(SD61)内杭列平面および見通し図(1/50)

1990

福岡市教育委員会



付図4 第1区抗列 (SA11) 平面および見通し図 (1/50)